葵三葉の渡る苦悩

クロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
葵三葉の渡る苦悩

【Ｎコード】
Ｎ６０８１Ｘ

【作者名】
クロ

【あらすじ】
政治に対してトラウマを持っている青年・結城は、世界が末世に近づき有るつつ中、武蔵アリアダスト教導院の臨時相談役として遣る瀬無い日常を送っていた。個性豊かな学級生徒達、暴れまわる周囲とのドンチャン騒ぎ、相談役としての仕事。一見、変わらない平和な日常の中で、しかし彼は満たされていなかった。幼い頃、政治的要因で各国を転々とした結城は、自分自身の居場所を失っていた。望んでも得られないたった一つの感情、親の”愛情”を前に、運命の時が近づいてくる。末世、大罪武装、聖譜連盟、そして己の出自

に関る者との葛藤と、全ての始まりである名・ホライゾン。結城は、伽藍洞の心を持って、葵・トーリや仲間と共に世界に挑む。例えそれが、答えのない孤独の道だとしても。

第一話～能有る鷹は爪を隠す～

何処までも青い空が続く。

そして空には、薄白い二つの月が有る。

未だ明るい青空の中で、月はホログラムのように不透明で何処か幻想的な雰囲気を漂わせている。

青色の下、ときおり斑な雲がゆっくりと通り過ぎてゆく。柱に区切られた空に隔てながらまたゆっくりと進み、その雲の影の下には動きがあった。

船だ。

左右に前後三隻、中央に前後二隻で構築された大型艦船。

大地に跨る多くの山を越え、区分けの柱の間を、波音を立てながら八つの白い船が行く。

その表層部に町や自然公園を乗せた航空都市艦の名は”武蔵”。数キロに亘る山渓を包むそれらは空に波を走らせながら広大な空を悠然と進む。

八艘の艦船は巨大な太縄で連結されており、艦群が進路を変えるのと同時に連結の縄が巻き取られたり引き出されたりしている。

そして、黒く大きい”武蔵”の二文字を持った艦群はそれぞれにまた黒い文字による艦名が書かれてあった。

右舷一番艦”品川”

右舷二番艦”多摩”

右舷三番艦”高尾”

中央前艦”武蔵野”

中央後艦”奥多摩”

左舷一番艦”浅草”

左舷二番艦”村山”

左舷三番艦”青梅”

八艘の艦船は左右三艦を双胴とした中央二艦で空を行く。

そして場所は奥多摩の中央。

建物の屋根に両腕を枕組みで寝転がっている人物がいた。

”臨時相談役　結城（ゆうき）”の名札をつけた青年は、雄大な青空をジッと見詰めている。

その横には、白い布に覆われた二メートル未満の長い棒が横になっている。

彼は時たま、一つに束ねたセミロングの黒髪を揺らしながら、奥多摩艦首にある墓地にチラリと視線を送る。

そして音がした。

それは歌声だ。

ゆっくりとした声の響き、風に乗って墓地のほうから童謡の歌詞が奏でる。

「――――――通りませ――――――」

通りませ　通りませ

行かば　何処が細道なれば

天神元へと　至る細道

御意見御無用　通れぬとても

この子の十の　御祝いに

両のお札を納めに参ず

行きはよいなぎ　帰りはこわき

我が中こわきの

「通しかな――――――――」

気付いたときには、自分も口ずさんでいた。

大気を通り、やがて消え行く歌声。

沸き立つ哀愁を胸の奥に溜め込み、結城が体を起こしたのと同時に新しい声が響いた。

規則ある連続した音。

鐘の音だ。

そしてその時報に覆い被さるように、放送の声が生じた。

『市民の皆様。準バハムート級航空都市艦・武蔵が、武蔵アリアダスト教導院の鐘で朝八時半をお知らせ致します。本艦は現在、サガルマータ回廊を抜けて南西へ航行、午後に主港である極東代表国三河へと入港致します。生活地域上空では情報遮断ステルス航行に入りますので、御協力御願い致します。――――――以上』

中央後艦奥多摩の上、その上にある建物から発する放送。

木造の横に長い三階建ての建物には”武蔵アリアダスト教導院”の表札がある。

教導院は、門と校舎の間に校庭とその上を渡る一本の橋を持っている。

時報のチャイムが終了したのを合図に、橋の上から女性の声がした。

「よぉ――――――――し。三年梅組集合――――――――」

武蔵アリアダスト教導院の正面、声の鳴る橋の上に人影が幾つもあった。

門の側には一人の女性が立っている。黒い軽装甲ジャージを着た、背筋の伸びた女。

白塗りの、金属を柄とした長剣を背負い、彼女が見る正面。校舎側には黒と白の制服を着た若者達がいる。男女はともかく、中には人であれば、人でない者もいる。

彼らを前に、女は笑みを作ってこう言った。

「では、――――――これより体育の授業を始めまーす」

／※／

なにかと賑やかそうな橋の上を置いて、結城は軽い歩調で走る。

背には一本の線があり、近くで見れば、それが布に覆われた長い棒であることが分かる。

建物の屋上を苦も無く踏破し、軽やかなステップで飛ぶ。

奥多摩を抜けて武蔵野の上に登り、そして太縄を通して右へと進む。

目指す先は右舷二番艦多摩。

やや時間をかけ、地面に降りた結城の先にあるのは一軒の軽食屋。

朝の割には周りの店は全て閉店しているのに、この店だけが営業をしている。

”青雷亭（ブルーサンダー）”という看板のついたパン屋と兼業の軽食屋は、開放型の店前に”店主配達中””営業中”という二つの札を掛けている。

店の中に客はおらず、結城は店のドアを軽く押して中へと入る。

そしてそれと同時に声がした。

澄んだ、良く通るいい声だ。

少し前に聞いた憶えのある声。

「いらっしゃいませ、結城様」

「おはよう、ホ……Ｐ－０１ｓ」

互いに挨拶を交わす男女。

道に対して横になったカウンターには、一つの影があった。

人の大きさの、白い長髪の女性型人形だ。

肌の大部分が人と同じ素材の生態パーツを使用した、自律して動く自動人形だ。

／※／

手元のパンを千切りながら、結城はカウンターの向こうにエプロン姿で立っている自動人形であるＰ－０１ｓを無気力な半目で見てめる。

対する彼女は結城の視線を気にせず、ただジッと店の奥にある調理台と、その横にある調理具に視線を向ける。

興味があるのか？――――――と、結城は思った。自動人形に感情はないが、考えないわけではない。人と同じように考えるたびに趣向や好き嫌いがあり、身体構造と感情がない部分を除けば人間とはあまり大差はないのが結城の持論だ。

となると調理具を見ているのは料理がしたいということか。

そんな彼女に口元が少しだけ緩み、言葉を投げかけようとした時、店に誰かが入ってきた。

「おや？朝一番があんたとは珍しいね、結城さん」

「おはようございます」

「お帰りなさいませ、店主様」

入ってきたのは、この店の女店主だ。

この店は子供の頃からの付き合いで、結城は良く顔を出している。故に店主とも顔馴染みであり、今では朝食は殆どこの店で済ましている。

「教導院の方はいいのかい？授業始まっているよ」

「今日は午後に正純と一緒に酒井学長を三河まで送る予定ですから、基本的に自由出席です。それに真喜子はズボラなんで、後から乱入しても全く問題ありません」

結城の応答に女店主はふ～んと相槌を交わし、視線をＰ－０１ｓの方へ向ける。

「Ｐ－０１ｓ。後で表の看板どいて水を撒いておいで。騒ぎが終わって一息ついたら今日はもう帰っていいよ。そこの焼き損ね、好きに持って行っていいから。窯でもうちょっと焼いたりしてく？」

店主の問いにＰ－０１ｓは小さく頷き、そしてその視線が僅かに動

いたのを、店主と結城は見逃さなかった。

「厨房？」

問われ、彼女はややあってから視線を戻し、もう一度頷く。

その頷きに対して、店主は結城に視線を送ってから、確認するように、

「私のレパートリー憶えてから、自分では何作るかと思ったら地味なもんばかりで失敗も多いけど……、まあ基本が大事だわね」

「Ｊｕｄ．」

感情のない声で、自動人形は小さく言う、

「店主様の作業の再現性を高めるには約一年を要しました。現在の状況を申しますと、お客様からは”心が籠もってない？”と問われる以外に問題ありません。現在、Ｐ－０１ｓのオリジナル朝食を研

究中ですが、目標値が不明なため、どのレベルまで突き詰めようかを思案中です」

「だったら気が済むまでやればいいさ。目玉焼きだって奥が深いしね。なんならこっちに毎朝来てくれる常連に試してみたら？料理得意からアドバイスになれるよ」

「店主。それ、本人に確認とってから言ったら？」

「別にいいじゃない、結城さん。あんた、臨時相談役の割には暇そうだし」

「臨時ですから」

店主の物言いに結城は苦笑で返す。

それに対してＰ－０１ｓは首をやや傾げながら結城に問う。

「結城様は料理が得意のですか？毎朝食事に来るので外食系だと推測していましたが」

「こう見えても去年の商店街で開いた料理大会の優勝でね、この子。朝弱いから面倒なんで、ウチで済ませているだけなのさ」

「ということは結城様は隠れ鉄人でクールビューティーなキャラなんですね。見かけによらずオトメン気質とは、恐れ入ります」

「……なんで自動人形がキャラ語ってんの？それにオレは間違っても隠れ鉄人でクールビューティーでもない。――――――まあ、料理のほうは別に構わんが」

二人の遣り取りを店主は笑顔で見詰め。結城の言葉にＰ－０１ｓはＪｕｄ．と頷く。

すると、艦尾のほうから焦りを含んだ声が聞こえた。

「と、とうとう来たぞお――――――――！！」

それに対して、結城は最後のパンを腹に飲み込み、席を立つ。

店主とＰ－０１ｓは視線を外に向けており、その間に結城は背中の長棒を軽く揺らしながらドアのほうへと歩み寄る。

「おやおや、少し遅かったね」

「二年のときと比べて皆腕が上がっていますからね。では、オレもそろそろ出ませんと……」

「おや？やっぱり出るのかい？」

「どうせ午後までに予定はありません。点数稼ぎに損はないですし、正純と合流するまでの暇つぶしですよ」

代金を机に置き、結城は左手を後ろに背負った棒に添えながら店を出る。

ドアを開けたのと同時に地面を強く蹴り、その華奢な体を空中へと投げ出した。

その後ろでは、――――――御利用真に有難う御座いました。またの御来店を御待ちしております。という、Ｐ－０１ｓの声だけが残された。

／※／

「いやあ、全く手が出せないなあ。僕達の出番はここで終わりかな？ネンジ君」

「フフフフ、今からでも間に合うよ、イトケン君。追い掛けるだけなら」

背に黒い蝙蝠翼を持った筋骨たくましい全裸男である伊藤・健児の問いに、その横にある粘質体生物であるネンジが男前の口調で答える。

そしてそんな二人を呼び止めるかのように、忽然として背後から声がした。

「おい、そこの卑猥全裸夢魔と3ポイントスライム。行き先は何処だ？」

「おお、これはこれは結城君じゃないか。相変わらず身内には容赦のない刺々しい挨拶だね。これから僕達、先生の八つ当たり兼報復に品川のヤクザ事務所まで行く途中なんだけど、一緒にどう？」

「品川か……、だとしたらもうすぐ後がないな」

「ああ！？待って、結城君！！」

ドップラー効果によって、イトケンの声が直ぐに掻き消える。

それは神風だ。

僅か二歩の踏み込みによって、結城の体が風と化す。

速度の停滞と障害になる足場を避け、鷹の目によって予め最短ルートを予測している。

先頭集団との距離は約３００。問題ない、余裕で追いつける距離だ。

しかし同時に品川まではそう遠くはない。あそこの上部は貨物区で、木製の大型貨物庫が並ぶだけだ。

話に聞いている品川のヤクザ事務所なら知っている。

先日、教師であるオリオトライ・真喜子に愚痴られて教えてもらった。場所は品川艦首デッキの狭い居住区にある。そこに至る道である貨物庫の屋根は、障害物が一切ない平面地帯だ。

自分はともかく、品川に入られたら、他の面子では追いつく事が難しい。

故に皆の考えは同じはずだ、そろそろ勝負を仕掛けるべきだと。

そしてその考えを証明するかのように、前方で二つの動きがあった。

”第一特務　点蔵・クロスユナイト”という腕章をつけた忍者少年を始とする、近接戦闘系がオリオトライに攻撃を仕掛けた。

そしてもう一つは自分のすぐ前。長身の黒髪、左目に緑の義眼を入れた”浅間・智”という名札の少女が、その背から引き抜いた弓を掲げた。

白砂（しらさご）ブランドの紋章が入った弓”片梅”を三つ折状態から一瞬で展開。同時に弦を自動でチューニング。だがそこで終わらずに、彼女の横側、通りを走る別の集団から声が飛んだ。

「ペルソナ君！足場になって！」

”書記　ネシンバラ・トゥーサン”の腕章をつけた眼鏡の少年の指示に答えたのは、集団の一番後にいた大男だった。

上半身裸、首から上をフルフェイスの西洋ヘルメットに包んだ男は、既に左肩に目を伏せた少女を一人乗せている。

「ん？……鈴？」

結城が鈴とよんだその少女がやや遅れて後ろを振り向く。目は伏せているが、その視線は確かに遅れてきた結城を見ている。浅い笑みを浮かんだ少女を視界に、結城は頷きながら更にギアを上げる。

それと同時に、ペルソナ君は右腕を振って速度を上げ、

「――――――！」

弓を構えた浅間に並び、その右腕を足場として伸ばす。

同じタイミングで、浅間は軽く頷き、その腕に足をかけるなり、身を翻して肩に飛び移る。

そしてそのまま腰を落として足場を確保。

浅間は緑の瞳を細くして、口を開く、

「地脈接続――――――！」

／※／

結城が驚異的なスピードで集団に近づきつつあるなか、状況はクライマックスに突入していた。

忍者である点蔵と航空系半竜”第二特務　キヨナリ・ウリキアガ”、そして制服をラフに着込んだ、ノリキと呼ぶ少年。彼ら三人による連携が一瞬にして崩された。

陽動の点蔵と奇襲のウルキアガ、そして後ろに控えた本命であるノリキ。それをオリオトライは瞬時に、そして的確な判断で捌き、距離を取る。

終わりだ、今の隙は非常に痛い。あのリアルアマゾネス相手にこの距離では先頭集団は先ず追いつけない。

――――――だとしたら。

目の前の少女、浅間の弓が引締められる。

「――――――行きます。うちの神社経由で神奏術の術式を使用します！」

術式。それはこの世界におけるあらゆる矛盾を許容する空間構成因

子”流体”を操る技。

幾つもの流派を持つが、極東でのメジャーは神道、神奏術。

そして武蔵で神社の巫女をやってる浅間ももちろんそれだ。

彼女の声と共に、浅間の制服の襟元、軽装甲の右襟から一つの影が飛び出る。

それは僅かな赤光を帯びた二頭身の少女だ。

少女は浅間の肩に乗って軽く踊るように身を回して右手を振った。

同時に浅間の顔横に鳥居型表示枠（サインフレーム）が出た。

その表示部分である空白部には、契約した神社の名称と霊獣型デバイスである走狗（マウス）の型番が表示され、直ぐに続いて神社との接続が確認される。

これで走狗を介して、術式の発動が可能になる。

そして、

「浅間の神音借（かのんが）りを代演奉納で用います！ハナミ、――――――射撃物の停滞と外逸と障害の三種祓いに照準添付の合計四術式を通神祈願で！社の基本術式だからそのままいけます！」

矢にホーミングと威力低下、そして必中の効果を付与した術だと、結城は即座に判断した。

このペースでは浅間が弓を放つのと同時に浅間を追い越す事になる。それで仕留められなかったら品川は目前だ。

こうやって思考している間にも、走狗であるハナミが仲介に入っている。

今の術は神音術式が四つだから、単純に換算しても代演奉納が四つとなる。

神道の神奏術は、契約時に得られる常時加護の他に、符と言霊による神音借りの術を持つ。

今、浅間が用いる神音借りの場合、起動方法の一つとして、契約した神の喜ぶことを奉納して術式効果を得る事が出来る。

そして四つの術に対して彼女が選んだ奉納は、

「二代演として昼食と夕食に五穀を奉納！一代演として二時間の神楽舞！一代演として二時間ハナミとお散歩＋お話！これで四代演！ハナミ、ＯＫだったら加護頂戴」

的確な判断だ。

弓道において術式添付は基本中の基本。

複数の神音借りとそれに必要な代演は日常生活の中でも遂行可能なものが望ましい。

でなければ咄嗟のときに天罰なんてのは洒落にならない。

そしてその結果に答えるように、ハナミが笑顔で手を打ち、

『うん　許可出たよ　拍手　あとで　現世のこと　神様に　お話して』

ハナミの拍手のタイミングと同時に、浅間の構えていた矢に光が宿る。初めは弱い光だが、

『拍手ー』

ハナミの拍手とともに光量は徐々に増して行き、それが最高度となった時点で、

「――――――！」

浅間の視線の先、オリオトライとの直線上の中点に赤光の縦長鳥居が二重に現れた。

神奏術の弓術系術式照準だ。鳥居の上部開口部を照星とし、矢をオリオトライにロックオンする。

そして緑の義眼が照準と同期した。

瞳の見る方へと追尾指定の照準が自動的に動き、

「義眼”木葉”、――――――会いました！」

その一瞬。緑の瞳から放たれた細い緑光が二重照準を貫く。そして、

「――――――浅間殿！」

点蔵の叫び声が響く。

視界の中、宙でオリオトライが長剣を掴んだ。

点蔵達の連携で弾いた得物を、空中で回収したのだ。しかしそれが同時に双方の距離を大きく開ける。

点蔵たちは失敗した。故に浅間は撃つ。

「行って！」

矢が射られる。

水が飛沫くような音と共に、一条の光線が投げ出された。

一般的な弾丸や直線系の術式とは違い、外逸祓いによる追尾系術式が入ったものだ。神社でも航空系や高速機動型の妖物にしか使われないものだが、今は致し方ない。相手が相手だから。

光の矢は、快音と閃光を持って、殴るような軌道で獲物へと殺到する。

対するオリオトライは今だ宙にいる。剣を回収するための大跳躍は通りを飛び越えるもの。跳躍時間は長く、その間は回避できない。

対して、光の矢は高速化と追尾性能が加護されている。

そしてその先で、皆は見た。

長剣を首元に構え、オリオトライが僅かに刃を鞘から覗かせたのを。

……抜き打ちで矢を切り捨てる！？

無理だ、追尾だけではなく障害祓いの回避性能も添付しているから回り込まれる。

事実、縦に突き出されたオリオトライの長剣を、矢がスライドするかのように滑り込む。

顔面直撃コースだ。

女同士で気まずさはあるが、しかし狙い場所を選ぶ余裕を赦す相手ではない。

ともあれ、浅間は心で声を上げる。やったわ父さん、今日は教師撃沈の祝いでちらし寿司よ。代演加護で日中の食制限しているから食後にアイスつけても大丈夫！！

心の喜嘆に応じるように、次の瞬間、皆が見た。

放たれた矢が、オリオトライの長剣の陰で炸裂したのを。

「……やった！！」

爆ぜる光と共に、仰向けに落下するオリオトライを前に皆が叫ぶ。

しかし、その中で浅間だけが目を見開き、

「手応えが軽すぎます！――――――――――当たってません！」

吠えるように浅間が叫ぶ。矢を放った手指、空を切る感触を確かめながら、

「――――――――食後のアイスが！！」

／※／

皆が何故？と疑問に思っている中、

掲げた長剣を肩に担ぎ直しながら、オリオトライが動く。

その姿は無傷の一語だ。

しかし、その余裕な表情が次の一瞬に崩れる。

「――――――！」

通りの向こう屋根、事務区画を構成する長屋の屋上に足を着けた瞬間、それが来た。

着地時の衝撃を吸収するために身を屈めた隙、視界の左隅、自分の左後ろギリギリの位置から面積の小さい影が勢い良く迫る。

頭をやや振り向き、近くで見えるそれは布に包まれた棒の先端だ。

それが何なのかはオリオトライには分かる。

しかし何故だ？

例え乱入による奇襲を予見しても、それはもっと後のはず。早くても品川に渡る太縄辺りが限界だ。

なのに、それは来る。

三半規管と後頭部を揺らす容赦ない奇襲。

訓練や授業とは違う、実戦用の殺すための角度だ。

コンマの硬直を完璧に見切られた、その上で剣を担ぎなおした際の死角すら利用している。

その一撃に、オリオトライのみならず、皆が息を呑む。

しかし、次の瞬間。オリオトライの判断は早かった。

屈んだ体勢のまま、そのまま座り込んだのだ。

首を縮め、肩を降ろし、膝を地面につき、重心を下に容赦なく向ける。

衝撃を地面に吸収させる筈だった動きを放棄し、そのまま体を屋根の上に沈ませる。

「――――――!」

その動きに、誰もが表情を硬くする。

強引な回避動作で続けたのはクラウチングスタートの体勢だ。

御蔭で棒の先端は直撃することなく、頭上を数ミリギリギリの距離で掠り通る。

そしてその隙を見逃さずに、オリオトライは再び屋上を走り出す。

視線を背後に振り向き、先ほど自分がいた場所には、白布に包まれた長棒を振りかざした結城が其処にいた。

「ひゃあ！！先生、今のは危なかったわ！――――――――結城、後から乱入しておいて容赦ないわね！！」

「真喜子。ボケたんじゃない？――――――――あんた相手に加減できる生徒がいたなんて記憶にないぞ？」

結城の突っ込みにオリオトライは何処吹く風。

屋上を駆け抜ける二人の距離は前後2メートル。

結城を尻目に、しかしオリオトライは一つの疑問を投げかけた。

「しかしよく追いついたわねー。確かにあんたの脚力は武蔵一だけど、浅間が矢を撃つまでは最後尾よ？先頭との距離を一瞬で縮めるのは流石にタネありなんじゃない？」

「乱入自体は最初からバレていたか。――――――――しかしそういう真喜子だって、よくもまあ、術式添付の矢をあんな体勢で捌いたものだ。もう人間やめてるんじゃない？」

双方の問いに、皆が再び疑問する。
しかしその答えを瞬時に出したのは今対峙している本人達だった。

「軌道ね」

「髪か」

二人の同時に出した答えに皆がハッとする。
そして、

「浅間の放った矢の軌道を”踏破”したのね？浅間神社経由で鹿の神様であるアメノカクと契約した貴方の得意な術式は字名（アーバンネーム）そのものである”神風”。早く走る事で貴方は神の使いとして”伝令”の際に障害となる外的な停滞要素を禊ぎ、同時に動いている間だけ知覚・思考・運動速度を常時加速する事が出来る。カザマツリに似た術式だけど、貴方のは空間と時間にも作用するからレベルが高い、上位契約の賜物ね。しかし、その術式はあくまでその驚異的な爆発力を得るだけで、軌道の”踏破”そのものには……その長棒か」

「ご名答。綱渡り程度の軌道だけだから今のコイツの限界でもある

がな。浅間が矢を放ったのと同時に軌道を踏破し、あんたが矢を防いだ瞬間に背後に回りこんだのさ。しかしまあ、近くで見なきゃわかんないけど、まさか髪を切ってチャフ代わりにし、術式添付の矢を無効化するとは馬鹿げた技だ。おまけに剣を振り被ることで矢の軌道を誘導するとは、そのせいでコンマ1秒の差でこちらの奇襲がズレたよ」

二人のその言葉に、皆が息を呑む。

しかし加速し続ける二人を前に、ネシンバラが言う。

「しかし二年の時は髪切らせることも出来なかったよ。――――――浅間君。内燃総拝気量は？」

「あ、年度開けて三十六になりました。だからさっきのと同じのを後九発いけますけど」

うーん、と内心で浅間は唸った。

符などの流体を仕込める媒体術式と違い、神音借りなどの口頭術式は基本的に奉納か、拝気という単位の流体燃料を消費して発動する。

拝気は内燃拝気と外燃拝気に分かれ、内燃は瞑想などで自分の内側

に蓄積するものだが、外燃は神社や教会で献身活動を行い、その教譜の共有流体貯蔵槽に蓄積し、必要あらば引き落として使用するものだ。

拝気を一単位溜めるには数時間を要する。そして教譜の共有流体貯蔵槽に蓄積された外燃拝気は他者も使用できるため、拝気の金銭取引も可能だ。

つまり、内燃拝気を使用して術式を行う事は、拝気の蓄積に掛けた数時間の苦労と、外燃拝気による金銭取引機会を失うこととなる。

浅間は先ほど、神道の代演奉納を行った。神道の在り方を体現し、神の喜ぶことを供物として奉納することで、拝気の代わりにする。

しかし浅間は既に奉納を四つも提示した。追加で奉納を増やすと日常が息苦しくなる。ゆえに次からは己に溜めた内燃拝気を消費しようとかんがえているが、

……神社の仕事があるかもしれませんし――――――。

だけど、とも思う。そんな甘い考えではいけないと。

だから浅間は決断した。

「行きましょう！」

その言葉に皆が頷く。

企業区画を抜け、品川へと向かう太縄を前に激しく交差する二つの影を追って、誰もが速度を上げる。

そして同時に、浅間は視線を先頭の結城に向ける。

正直言って、”踏破”の合図は結城が近づく前に鈴から受けている。

卓越した聴覚に端子型補聴器「音鳴りさん」を持った鈴は、武蔵と協働して半径３０キロを把握する事が出来る。

それを利用して、結城は鈴を目視出来る距離からタイミングを計っていたのだ。

……相変わらず、考えてる事は起きるまで分からない人ですね。

浅間と結城は幼馴染だ。

とは言っても、梅組の大半が小等部からの付き合いで別段珍しくもない。

しかし結城は小等部の後半で転校してきた者で、古参の中では新入りだ。

そんな結城は子供の頃、よく浅間の家である浅間神社に通っていたため、自然と浅間も他の皆と比べて結城とは親しい。

中等部の時に上位契約を仲介してやって以降は家に来る頻度も下がったが、今でもそれなりに交流はある。何せ同じクラスだし。

それでも、１０年もの付き合いの中で、分からないところは多いが。
今も先頭で結城はオリオトライと得物同士を素早く交わしている。
既に太縄の上を渡り、狭い足場の中で両者は一歩も引けを取らない。
ハッキリ言って異常だ。
結城の戦種は近接武術師（ストライクフォーサー）。高速系の術式と卓越した武術と身体能力が売りだが、防衛と警備以外の武装の所持を禁じられた武蔵において、彼の戦闘スタイルは実戦系のそれだ、動きに無駄がなく、そして力強い。戦い慣れしており、一度も実戦を行った事のないこの武蔵では異例の戦技の持ち主だ。
皆、前に疑問に思って聞いたことがあるが、何時もあやふやに避けられている。
チート染みた戦闘能力を持つオリオトライと正面から渡り合えるのも、今の武蔵では彼しかないだろう。
まあ、勝てるかどうかは別として。
そして、響く爆発を伴奏に、先頭集団が品川に突入する。
授業は最終段階に入った。

第一話～能有る鷹は爪を隠す～（後書き）

ども、クロです。

境ホラのアニメ化に伴って、つい書いてしまいました本作。オリジナル主人公を中心に、基本的に原作基準のストーリー展開ですが、後々オリ主のストーリーにしたいとおもいます。

主人公の結城は歴史上に実在している、ある人物をモチーフにしています。まあ、名前伏せてありますが本名同じですし。読んで頂けるのならば、一話で気付く人がいるかもしれません。

では、二話でまたお会いしましょう

第二話～孤独ゆえの渇望はどうしてこうも辛い～

乱入者によって白熱した品川艦上での戦いを、遠くから見る人物があった。

中央前艦武蔵野の艦首付近、展望台となっているデッキの上だ。

そこにあるのは、侍女服姿の黒髪の自動人形。”武蔵”の腕章をつけた彼女は、ただ品川のほうをじっと見ている。

静かに佇む彼女だが、周囲には動くものがあった。甲板掃除用の道具であるデッキやブラシだ。

どれも持つものはいないが、自在に動いては甲板を掃除し、磨いていく。

「”武蔵”さんは午後からお掃除かい。御苦労なことだ。艦橋にいなくていいのかい？」

背後から男の声がした。

その問いかけに自動人形”武蔵”は品川の方を見たまま振り向かず、

「重奏領域の多さで難所のサガルマータ回廊も抜けましたし、既に三河入港の準備は終了しております。三河周辺は重奏領域が無い安定域ですし、そうなると武蔵艦長としての私の為すべきは各所の執行確認だけだとなりますが、武蔵は武装も無いため管理も楽ですので、ぶっちゃけ暇です。

それに掃除は自動人形の基礎業務ですし、基礎機能である重力制御を行うことは苦労に値しません。Ｊｕｄ．？酒井学長。――――――以上」

武蔵の確認に、酒井と呼ばれた中年過ぎの男が並んだ。

「三河かあ。……俺は関所に降りて寄港手続きとらなきゃいけないんだけど、十年ぶりに昔の仲間から顔出せって言われてるんだよね。三河中央部、久しぶりに行って大丈夫かね？今の三河は鎖国に近い状態だからなあ」

「Ｊｕｄ．、十年前、こちらに酒井様が左遷され、結城様が武蔵に乗り込んだ時期にＰ．Ａ．ＯＤＡとの暫定同盟を正式同盟とした三河は、聖連との協議の元、三河当主の武蔵への乗り込みを禁止し、外界との交流許可を郊外までに限定としました。今や中央部はブラックボックス。

極東の支配者として聖譜記述が為されている三河の松平君主は、極東の支配権を持つものとしての地位を成立させるため、三河の特別

自治と、極東と聖連を結ぶ対外窓口としての権利が聖連から認められていますが――――――」

「が？」

武蔵は少し考え、ややあってから、

「松平家の元信公は、聖連から半脱退状態のＰ．Ａ．ＯＤＡと正式同盟してから、いささか独自路線だと判断できます。松平家は側近以外の人材を全て自動人形に置き換えましたし、聖連が禁止する地脈炉を有した大工房である”新名古屋城”を建てたせいで町中に怪異が溢れて、非常に不穏な状況になっております。大事無いよう、適度な範囲で御注意を。――――――以上」

「禁忌の土地だねえ、それ。でもまあ、そのための結城だもんね。十年前にあいつを武蔵に手引きしたのは俺だし、今では実力もつけて護衛としても優秀だ。――――――しかし参ったね。あいつを三河まで同行させるとバレちゃうんじゃない？その手に持つ物、三河に進入禁止だし」

酒井の問いに、武蔵は品川艦首にある爆発を見る。

丁度結城を始とする近接戦闘要員がオリオトライに切り込んだタイミングで、

「中央部に入らなければ問題ないと判断します。あれは神格武装ですが、松平の直系に縁の無い場所では効果を発揮できませんし、なにより結城様御本人が自身のことに自覚を持たなければその役目を果たせません。なにせそのために結城様を武蔵に”軟禁”していましたので。――――――以上」

「嫌な言い回しだねえ、武蔵さん。まあ、連れ込んで面倒見なかった俺が言っていいことじゃないけど、あいつはあいつなりに頑張ったと思うよ。――――――にしてもよお、この十年、なるべく無視してたのに、連中何だって左遷しておいた俺を呼ぶんだか」

「Ｊｕｄ．、つまり同窓会ではないでしょうか。十年前まで、松平を支えていた松平四天王の。――――――ともあれお気をつけ下さい。三河当主の松平・”傀儡男（イエスマン）”元信様は、新名古屋城の地脈炉で織田への献上物を作っておられます。

武蔵は三河君主である元信公の所有物ですが、十年前の武蔵大改修は出雲にて行われていたもので、私どもであっても元信公の意志は測れません。今回も極東側の中立国として物資補給などするわけですが、民側でも予定はありませんし、私どもも武蔵から離れられる距離は関所までが限界です。――――――以上」

酒井は面倒だねえ、と呟きながら白髪の混じった頭かく。

すると遠く、品川の上でまたも白い爆発が鋭く突き立つ。

少し間を置いてから音が届いてきて、酒井が顎に手を回し、

「あれ、どう思う?”武蔵”さんとしては」

「Ｊｕｄ.、昨年度より表現的に言えば派手だと判断できます。結城様の突破力が突出しておりますが、全体の連携から見ればまだ許容範囲内です。浅間様やナイト様、ナルゼ様の援護もありますし、近接系の火力不足がネックでしょうか。そして物質的に言えば破壊量が上がっており、住民的に言えば迷惑度が上がっており――――」

「個人的に言えば?」

「武蔵本体と同一である”武蔵”は複数体からなる統合物であり、また、人間ではありませんので個人という観点の判断が下せません。――――――以上」

武蔵の説明に対し、酒井は甲板の縁、腰壁に肘をついてから言う、

「武蔵全艦としては、どう？」

「Ｊｕｄ．、ここ十年、改修以後の記録で言えば一番かと。聖連の指示に従って戦科が持てず、警護以外の戦闘関与組織も持てない極東の学生としては、他国戦士と比較して――――――」

彼女は少し考え、

「個性が生きれば、相応だと判断します。――――――以上」

と、その時。

品川から下、並ぶ山の中から垂直に赤い線が天へと上がってくる。

これから武蔵が通過する軌道を貫くように、赤い光の線が昇る。

それはマーカーだ。

各国の監視によって、武蔵は各国の境界線上しか移動できない。提示した航行予定表通りにマーカーを通らねば、武蔵は他国へ侵攻す

る意志があると見られて聖連から撃沈の許可がなされる。

今のは三河に最も近いマーカーであり、武蔵野の艦首下部から応答をした後、情報遮断ステルス航行に入って生活地域上空を抜け、三河陸港に降りる予定だ。

「面倒だよなあ。”重奏世界崩壊”で極東に重奏世界側の各国が重なり合ってしまったため、この狭い神州の上では神州の戦国時代と世界の戦乱が教導院の抗争として同時に行われている。

それも歴史の攻略本とも言える前地球時代の歴史を記す聖譜（テスタメント）の導きによって」

一息。

「戦国時代を動かす織田家は、八年前に信長の襲名者を得た後にオスマン中心のP．A．ODAの強化のためにムラサイの反勢力を制圧。そして聖連から半脱退。……信長は聖連による歴史再現としての暗殺を警戒して姿を隠したが、各国への侵攻はやめず、歴史再現の暗殺で止められない魔王として世界から恐れられる存在となった。

百六十年前、各国は居留地と武蔵を作らせて極東の民を押し込めば、極東を間接支配できるとおもってたろうに。今や武蔵を管轄する松平家は聖譜の歴史記述通りに織田家と同盟し、武蔵は各国の支配を

逃れつつある」

「ですが」

武蔵が言う。

「聖譜によれば、そろそろ世界の全てが終わりです。――――――以上。」

／※／

聖譜の何が、世界の終わりを告げるのか。

聖譜は運命と同期することで百年分の未来を自動更新して読ませている。しかし百年前から更新を停止し、来年である１６４９年以降の歴史を記していない。

最後の記述はヴェストファーレン会議。

つまり今年、１６４８年の会議が終了した十月二十四日の記述が、聖譜による最後の記述だ。

ゆえに十月二十四日の会議で”末世による滅びを人々が認め”て、そこから年末の間に世界が終わりに向かうのではないかと言われている。

「各国は現在、何故に運命が今年で停止するのかをそれぞれ真剣に探ってるが結論や対策が出せず、……Ｐ．Ａ．ＯＤＡだけが唯一、末世解決を行う国策を”創世計画”として提示し、人を募っているが、――――――まあ、その計画も、中身をこれから作ろうという張り子の虎のようだが」

酒井の独りごちに、”武蔵”はＪｕｄ．と応じる。

品川上を流れ行く煙と閃光を見て、

「世界は現在、滞りなく動いているように見えますが、聖譜が更新停止しているのは確かで、各地で怪異が多発しております。あのハシャいでいる三年梅組の浅間様、――――――今年に神社と上位契約を結びましたが、上位射撃系加護が必要な航空系や高速機動型の妖物など、十年前ですら滅多に出るものではなかった筈です。

同じように最近流行の百鬼夜行の横行や神隠しの頻発も地脈の乱れによるものですが、地脈とは万物流転を司る流体の経路で運命と繋がるもの。一説によれば、運命がこの先無くなっている事から、地

脈がバランスを崩しているのだと言われております。――――――以上」

「つまり運命が終わる兆候はいろいろなところで出ていると？」

Ｊｕｄ．と”武蔵”は頷く。そして不意に背を向ける。

「各地から怪異の情報が届いております」

彼女は言う。

「各地の要人クラスがある日突然神隠しにあったり、村一つの住人が突然消えたり、六護式仏蘭西（エグザゴン・フランセーズ）では預言者が運命の先を覗こうとして集団で心を失ったそうです。

新大陸では先住民が遺した予言壁画が過去の分まで消えているとか。――――――以上」

「賑やかだねえ」

「Ｊｕｄ.、現在、それらは種類を増やし、更には拡大化の傾向があります。まるで、先の途切れた運命に向かって、怪異達が押し出されているような頻度です。――――――以上」

「成程。しかし詳しいな武蔵さん。――――――マニア？それともオタク？」

「答えを言えば暇潰しです。――――――以上」

”武蔵”は首を向け、軽く会釈する。

そして遠方、品川からまた爆発の音が響いた。

／※／

ことの顛末はいたって簡単なことだった。

品川先端、艦首側甲板にあるヤクザの事務所に辿りついた三年梅組は、ペルソナ君に運んで貰った鈴と途中で乱入してきた結城を除いて、その全員がスタミナ切れで全滅。

そんな皆の前にヤクザの事務所から赤い鱗に覆われた巨体を持つ魔神族が現れる。

魔神族。

体内器官に流体炉に近いものを持っている彼らは内燃拝気の獲得速度が他種族と比べて遥かに優れており。

重装甲な肌に、筋力は軽量級武神と正面から渡り合える程の性能を持つ。

そんな相手をオリオトライは実技も兼ねて、魔神族の弱点である脳震盪で即座に撃沈。

唖然とする梅組の生徒と、倒れ行く魔神族を前に、結城は補足するかのように皆に説明をした。

「実際は硬く見える場所を叩くがポイント。こういう連中の頭部は外骨格ではなく内部骨格が張り出しているだけだから、ちゃんといい方向から打てば振動が直接脳に響くからな。駄目なのは真上や、チャージ正面などの首を埋める方向。魔神族は猫背で、頚骨と背骨が一直線になっているから、真上方向の衝撃は背中から尻へと抜けてしまう。――――――まあ、だから春先や思春期に角のぶつけ合いが出来るんだけどな」

「へえー、よく知ってるわね、結城。――――――もしかしなくても、経験あるの？」

「この前、風紀委員に頼まれて似たような案件処理してたから」

結城の言葉にオリオトライが小さく頷き、その間に事務所が慌てて正面扉を閉じる。

「あ、警戒されたかな」

当然だ、と疲れて地面に倒れていた皆が身体を起こし始める。対するオリオトライは、

「んー、じゃ、どうやって入ろうかな。入り口は待ち構えているから、結城を囮に、――――――でも他の皆を引率するのに屋上からの突入はちょっと難しいか……」

「おい、そこの雌ゴリラ、聞こえているぞ」

「……あの、引率って何ですか先生」

「ん？社会見学で実技。今、手本見せたっしょ？」

「あんな曲芸出来るかあ――――――――！」

「大丈夫大丈夫。――――――これから出来るようになるから」

オリオトライの平然とした口調に、結城以外の皆が青い顔をした。

と、そのとき。いきなり横から若い声がした。

「――――――あれ？おいおいおい、皆、何やってんの？」

声の方向に皆が振り向く。

すると、皆の横手側に、一人の少年が立っていた。

茶色の髪に笑ったような目。

鎖付きの長ラン型制服を崩して着込み、左の小脇には紙袋を二つ抱えている。

紙袋の一つ、軽食屋のものからパンを口に押し込むように食し、装飾の鎖を鳴らして歩いてくる少年の名を、結城が平坦な口調で呼んだ。

「トーリ・〝不可能男（インポッシブル）〟葵」

「――――――んと、うん、俺俺。ってなんだよ皆、俺、葵・トーリはここにいるぜ？」

笑みを崩すことなく、トーリと呼ばれた少年は皆の前に来る。そして、

「しっかし皆、こんなとこで奇遇だな。やっぱ皆も並んだのかよ！？」

言って彼が掲げて見せたもう一つの紙袋に、オリオトライが首を傾げる。

彼女は肩に長剣を担ぎ、トーリの背後に回ると、

「……さて君、話ハショると授業サボって何に並んだって？先生に言ってみなさい」

「ええ？先生マジで俺の収穫物に興味あんのかよ！俺参ったなあ！」

そしてトーリは、肩越しに紙袋から絵の描かれた箱を出した。オリオトライに見せるそれは、

「ほらこれ見えるか先生！今日発売されたＲ－元服のエロゲ”ぬるはちっ！”。これ超泣かせるらしくて初回限定が朝から行列でさあ。俺、今日は帰宅したらこれ伝纂器（ＰＣ）に奏填（インストール）して涙ボロボロこぼしながらエロいことするんだ！」

トーリの言葉に、半目のオリオトライが無言でトーリの肩に手を置いた。

対するトーリは首を傾げながら、笑顔でオリオトライに振り返り、

「あれ？先生、どうしたの？マジ顔して。何かやなことでもあったの？――――――あ、そっか、春休みの打ち上げで焼き肉屋行った

時、先生、人と話さずに牛と結婚する勢いで肉ばっかガツガツ食ってたのを学長か王様(まろ)に教育的指導されたんだろ。先生、あれいけねえよ。焼いてるのを箸で弾いて直接口に叩き込むのはさ、カルタ取りの名人やってんじゃねえんだから。塩くらい振れよ。あと、デザートにケーキ山積みで食ってないで少しは草食えよ」

皆が僅かに腰を引いて退避姿勢を取る。そしてオリオトライは口を開き、

「……あのさ君、先生が今、何言いたいか解る？」

「ああ？あったりまえだろ、先生。先生の言いたい事は俺にしっかり通じてるぜ！？」

「ああ、そう？君、もし先生と通じてるなら今すぐ自殺しないといけないんだけど」

「ええ！？何だよそれ！オッパイ揉ませてくれるんじゃなかったのかよ！」

トーリの言葉にオリオトライが青筋を立てながら身を震わせる。

火山爆発の一歩手前に、しかし、

「……おいこら、君、何か変なもの見えてない？」

「うん、今はこれだな」

と、トーリは、オリオトライの両胸を下側から両の五指で包んで押し上げる。

皆が、あ、という形に口を開けたまま、”会計補佐　ハイディ・オーゲザヴァラー”の腕章をつけた金髪ストレートの少女が首を傾げる。

「あれ？……これって攻撃が当たったことに……」

しかしルールを知らぬトーリは、セクハラ行為を続けながら眉をひそめ、

「あっれ、もっと硬い見立てだったんだけどなあ……、――――――まあいいか」

と、トーリは手を離し、口端を歪めて指の骨を鳴らし始めたオリオトライを無視して皆の方を見ると、

「あのさ、皆、ちょっと聞いてくれ。前々から話してたと思うんだけど」

一息。

「――――――明日、俺、コクろうと思うわ」

／※／

「……え？」

いきなりのトーリの告白予告に、皆が同じ反応をした。

しかしその中で結城だけが、やや目を見開き、ああ、と納得する。

そして皆の中、ウェーブの掛かった茶色い髪が眉をひそめて立ち上がった。

彼女、”葵・喜美”の名札をつけて少女は乱れた髪をかき上げると、首を傾げてトーリを見据え、

「フフフ愚弟、いきなり出てきて乳揉んで説明無しにコクり予告とは、エロゲの包み持っている人間の台詞じゃないわね。コクる相手が画面の向こうにいるんだったらコンセントにチ○コ突っ込んでして痺れ死ぬがいいわ！素敵！」

「おいおいおい姉ちゃん何一人でいい空気吸ってんだよ。あのな？明日コクるから、これはエロゲ卒業のために買ってきたんだぜ？わっかんねえかな、この俺の真面目なメリハリ具合！」

「いい感じで駄目人間やってんな、トーリ。しかし明日フラれたらどうすんの？」

結城の唐突な問いに、トーリは、んー、と考えてから。

「その場合はまず泣きながら全キャラ実名でコンプリートすんじゃねえかな」

そうじゃねえだろ、と皆が突っ込むが、対して喜美は一息ついた。

肩から力を抜きながら、彼女は、

「じゃあ愚弟、賢姉を相手にコクりの練習よ。――――――相手は誰かゲロしなさい、さあ！」

「馬っ鹿、知ってるだろ？皆だって前に、”そうじゃないか”って言ったじゃねえかよ」

トーリは皆に視線を移し、一人一人と視線を合わせた後に、最後に結城を見て、こう言った。

「――――――ホライゾンだよ」

その名前に、結城は一瞬だけ身を硬くした。

予想していたその名前に、しかしそれは、

「馬鹿ね。――――――十年前に、あの子は亡くなったのに。あの、アンタの嫌いな”後悔通り”で。……墓碑だって、父さん達が作ったじゃない」

「解ってるよ。ただ、そのことから、もう逃げねえ」

トーリは笑みのまま、もう一度皆を見渡し、いいか、と前置きして、

「コクった後、きっと皆に迷惑を掛ける。俺、何も出来ねえしな。それに、何しろ、その後にやろうとしていることは、世界に喧嘩売るような話だもんな」

告げた言葉に、しかし誰も表情を硬くして、疑問や異論を挟まなかった。

「明日で十年目なんだ、ホライゾンがいなくなってから」

だから、

「明日、コクって来る。彼女は違うのかもしれねえけど、この一年、いろいろ考えてさ、それとは別で好きだと解ったから、――――――もう逃げねえ」

「じゃあ愚弟、今日はいろいろ準備の日よね。そして、……今日が最後の普通の日？」

そうだな、とトーリが笑顔で言った。

「安心しなよ姉ちゃん。俺は何も出来ねえけど、――――――高望みは忘れねえから！」

と、そのときだった。彼の肩を後ろから叩く手があった。

オリオトライだ。

ん？とトーリが振り向き、そこでオリオトライが据わった目つきで右足を軽くステップさせている。

しかしその挙動に構わず、トーリは右の親指を立て、

「先生！今の聞いてたかよ！？俺の恥ずかしい話！」

「ん？人間って、怒りが頂点に達すると周囲の音が聞こえなくなるんだけどさあ……」

「おいおい先生、生徒の話は真摯に聞こうぜ。仕方ないからもう一度言ってやるよ。――――――いいか？……今日が終わって無事明日になったら、俺、コクりに行くんだ」

「よっしゃあ！！死亡フラグゲットォオオ――――――――！！」

次の瞬間。

強烈な破砕音と共に馬鹿が回転しながら吹っ飛び、事務所の壁に穴が空いた。

／※／

白の空のした、武蔵の町並みは午前半ばの流れを終えつつあった。

生活地域の上空を通り行く武蔵がステルス航行に移行し、情報遮断を始めた。

じきに武蔵は三河に到着する。

そんな中、午前の体育授業を終えた結城は、梅組の面々と別れて、一人奥多摩のほうへと歩いていた。

時間的に酒井学長と合流しようとしたが、それなら皆と教導院に戻ったほうが良かったのだが。

「流石に今は群れる気にはなれないな……」

理由は簡単だ。トーリの告白についてだ。

十年前。

結城は武蔵に左遷された酒井学長の手引きで、この艦に乗り込んできた。

親はおらず、政治的要因によって独り身の結城は本名を名乗ることを許されずに、孤児として武蔵での生活を強いられた。

そんな中、自分の世話をしてくれた人たちがいた。

中等部まで面倒を見てくれた浅間神社と、葵姉弟、そして葵家で居候してた少女、ホライゾンだ。

「向こうは最後まで知らなかったが、それが良かったのかもしれないな……」

誰にも理解できない独り言を呟きながら、結城は昔のことを思い出す。

と、そんな時、

「歌声……」

奥多摩の艦首、墓地の方からだ。

今朝聞いたのと同じそれに、結城は思わず足を速める。

聞こえるのは、極東では誰だって知っているメジャーな童謡だ。

”通し道歌”。

聖譜記述に拠れば通し道歌は１６００年代に歌われ始めた”通りゃンせ”を本歌とし、それが聖譜で告知された百年前に、多くの場所で原盤となるものが試作されていった。

その試作が通し道歌。

これは、百六十年前の”重奏統合争乱”後、各国の暫定支配が確立した当時において、極東の人々を結びつける歌となった。

三十年ほど前から、歌の形がまとまってきており、今は子供の寝かしつけや、子供が歌い、歌に合わせた”通しかな”という遊びを遊ぶためのものとなっている。

しかし結城には、皆と歌ったことがないし、親から聞かされたことすらなかった。

遠くから他の子供達が歌って遊んでるのを聞いた事はあるが、子供の頃から生きる事に必死な結城にとって、そんな青臭い幼年期は無縁で遠い存在だった。

過去を振り返れば、幼馴染の巫女と馬鹿な姉弟が遠くで呼んでいる。

しかし届かない、そして聞こえない。

この身に宿った血と呪詛の枷が、安寧に対する妥協を許さない。

「――――――！」

炎に包まれた屋敷。

遠くから聞こえる呪いの断末魔。

あの日、ドス黒い闇から聞こえたその名前だけが真実で、自分が求めるたった一つの救いだった。

自身のルーツである鮮明な赤色を思い出し、脂汗が滲み出し、息が上がっているのも構わずに結城は走り出す。

清らかな歌声に誘われ、駆け抜ける風を突き進みながら結城は墓地に足を踏み入れる。

そして、

――――――通りませ　通りませ

行かば　何処が細道なれば

天神元へと　至る細道
御意見御無用　通れぬとても
この子の十の　御祝いに
両のお札を納めに参ず
行きはよいなぎ　帰りはこわき
我が中こわきの――――――

「通しか　な――――――」

聞く耳に、結城の胸元に震えに似たものが来た。
その視線の先、墓地の一角に見知った人影が二つあった。
片方は軽食屋”青雷亭”に仕えている白髪の自動人形・Ｐ－０１ｓ。
そしてもう片方は、武蔵アリアダスト教導院の男子制服を着た長い黒髪の少女。
腕章に生徒会副会長と書かれたそれは、

「――――――本多・正純」

「え？――――――結城？」

こちらに振り向いた正純の声に、結城はしばし無言になる。

記憶のフラッシュバックから意識を強引に現実に引き戻し、まだ心の整理がついていないのだ。

それにどうしてか、こちらを見ている正純の目に涙が溜まっている。

その横にいるＰ－０１ｓはというと、通路横の側溝から出てきている黒藻の獣と何か話してる模様。

黒藻の獣は、武蔵や多くの都市で下水処理役として働く意志共通生物だ。彼らは光合成をするように、”汚れ”を食って”汚れない”に浄化する。

ゆえに各国は黒藻の獣の集合意志と契約し、食糧供給と下水処理を行っているが。

「サボり？――――――じゃない、と、ええと」

なんか既に状況がある光景に、結城は言葉が見つからず、

「どうかなさいましたか、結城様」

Ｐ－０１ｓの問いかけに、ようやく結城は我に返った。

「あ、いや。――――――酒井学長を迎えにいこうと思ってな、それで途中に墓地のほうから歌声が聞こえて、気になって見に来たのだが、まさかお前達だったとは……」

言い訳みたいな言葉を搾り出し、結城は二人に歩み寄る。

途中で正純が涙を拭ったのを見たが、それについては触れないでおこう。

「二人こそ、ここで何を？」

「墓で出来る事といえば墓参りだろう。それより結城、大丈夫か？

顔色が悪いぞ？」

「ん？ああ、大丈夫だ。ちょっと昔のことを思い出してな……」

「……そうか」

結城の一言に、正純が俯く。

その反応に、結城は正純も今の自分と同じだと悟る。

臨時相談役は生徒会会長との連携が多く、結城にとって教導院の中で副会長である正純は幼馴染の浅間・智に続いて親しい間柄だ。

去年に武蔵へ転校してきた正純を、当時の結城は色々とフォローしてたし、普段から外道な結城では中々お目にかかれないと、梅組の連中にからかわれていた時もあった。

そして二人の回想を断ち切るように、傍らにいたＰ－０１ｓが話しかける。

「奇遇ですね。丁度今、正純様も御自身の昔話をしていたところです。そして今、私の中で正純様に対する疑問が一つ解けました」

Ｐ－０１ｓの一言に、二人は互いに視合わせた後、首をＰ－０１ｓに振り向き、

「？それは？」

Ｊｕｄ．とＰ－０１ｓが頷く。

「率直に申しますと、男の制服を着ているのは正純様の趣味ではなかったのですね。何と」

その言葉に、正純と結城は一気に現実に戻された。

結城は暫し考え、そして成程と、心の中で呟く。

それは何もかもが始まった十年前。

三河の支配者である松平家が、家臣団の”人払い”を行った。

多くの家臣が左遷や、役の免除を受け。

以降、松平の全家臣、商工団は、相模から大量導入された自動人形

が世襲担当することとなった。

そして正純の実家である本多家も、その人払いの例外ではなかった。

正純のいる本多家は三河の家臣団の末席におり、そして松平には二つの本多が必要とされていた。

一つ目の本多は、松平四天王の一人である本多・忠勝を代表とする武闘系の本多。もう一つは、本多・正信を代表とする内政系の本多。

正純の本多家は武闘系ではなく、彼女の父が正信の襲名を行ったが。

失敗した。

聞いた話に拠れば、他の、本多家ではない人間が、姓を変えてまで本だ・正信を襲名したそうだ。

幼い頃から政治家希望の正純は、本多・正信の子である正純を襲名しようとしたが、それも失敗に終わった。

襲名の権利を争うときに、女子である事で不利にならないよう、彼女は子供の頃に手術を行った。

女だったのを、男に変えようとして。

胸を削って……、そして性別の部分も男にする手術を受けようとしたその時に、突然の”人払い”で全てが無意味となった。

膨大な努力の果てに、自分の為した事が評価されずに、ただ目標だけが消えた。

進路を決め、試験の勉強を頑張ったら、進路そのものが消えたようなものだった。

無意味だけが残った。

その余りにも膨大な喪失感を、結城は知る由もない。

自分も満たされている人間ではないが、ベクトルの違う苦痛は、本人にしか理解できないものだ。

結城にしても、去年の夏休み、道端で餓死寸前の彼女を助けたのが原因で正純の秘密を知ってしまった。

そうでなければ、今でも正純を男だと勘違いしており、一生平行線のままだったろう。

……それにしても。

もう片方はよくもまあ、人の熱を冷めさせることが上手いものだ。

先ほどのＰ－０１ｓの一言を思い出し、またもや結城の意識が現実に戻る。

――――――こんな個性豊かな自動人形が、どうしてオレの……

「……」

思考を区切り、その先を結城は考えないようにした。

その真実もまた、自分が墓に持っていくものだと。

まあ、なんだ、初めに結論を提示すべきで、一言いうなら”そうじゃねえだろ”だこれは。

それに最後の”何と”って取って付けたような感嘆は一体何？

更に追い討ちを掛けるかのように、黒藻の獣が、

『づか？づか？』

「ちょっとまてい！？」

正純のツッコミに結城は無言で頷く。

ていうか何で知ってんだ、この可愛い生き物達は。

というか正純は一つ失念をしていた。

ここが一人になれる場所で、愚痴を聞いてくれる人形がいたとして

も、この人形はツッコミに対して容赦がない事だ。だが、

『まさずみ?』

黒藻の獣が、正純の名をＰ－０１ｓに確認する。それを正純は意外と感じ、そして結城は納得したように無言で頷く。

対するＰ－０１ｓも黒藻の獣をこちらから隠し、草を抜いている振りを始めながら、

「Ｊｕｄ．正純様です。憶えていらっしゃいましたか。以前、正純様が飢えてぶっ倒れたとき、思わず潰されそうになったのを」

これに対して正純は思う。今度から倒れるときは周囲を確認してからにしよう、と。そして、

『まさずみ　せーじか?』

「Ｊｕｄ．そうです、政治家です。市民を助けるために税金搾り取

って働く還元系職業です」

なんか違う気がするが、それもまた嘘のような気もするので結城と正純は黙っていた。

すると、黒藻の獣が言葉を問いかけた。

『ともだち？』

「――――――Ｊｕｄ．お互いが、お互いの存在を認めていることを言うならば」

『ともだち　なれる？』

それは、とＰ－０１ｓが口ごもり、こちらを見る気配がある。

だから正純は彼女達に背を向け、空を見上げるふりをしつつ、

「最近、友人欲しいなあ」

『なれるの？』

「Ｊｕｄ．――――――率直に申しまして正純様は友達が少ないので、今がチャンスです。つまりチョロイです。大丈夫、正純様は政治家ですから下水などの管理も大好きですので」

なんか語弊ありまくりな言い方だが、今は無視しよう。

と、その時、不意にそれが来た。それは、頭上において、

「――――――お」

空が割れた。青の空が、いきなり眼前に広がり、張り裂けるかのように一気に全周を覆った。

青空はステルス航行の解除の証だ。それが示すのは、

「ようやく三河に到着か……」

結城の呟きと共に、風の音が聞こえた。

武蔵の術式風防に当たる風の震えの響きだ。

だが、それだけではない。

正面から頭上。中央前艦武蔵野の上を抜けるように、一つの船が来たのだ。

全長１２０メートルほどの航空客船。

それは武蔵野の上から、ここ奥多摩のほうへと回ろうとしている。

武蔵各艦に比べれば十分の一にも満たない大きさだが、単体で見れば横町一つくらいは飲み込めるだろう。

軌道と速度から判断して、何かの間違いでなければ、それは武蔵の全貌を見たいという操鑑だ。

そして客船の側面。

植樹の葉枝が鳴る向こう。

喫水線から波を立てる客船の側面には家属紋章が有る。

日差しの逆光の中、確認できるのは三つ葉葵の家紋。

それは三河当家である松平の紋章だ。ならばあれは、

「――――――松平の主、元信公の船か！」

元信公は十年前、武蔵が改修される直前に武蔵へ降りた事があるが、それ以来武蔵へ来た事がない。

十年前にP．A．ODAとの暫定同盟を正式同盟とした際に、中立の立場の証として、移動要塞になりうる武蔵に乗り込む事を聖連に禁止されたのだ。

しかし、だからこうやって、元信公は武蔵を出迎えている。

元信公の、そういうサービス重視な傾向は武蔵では別段珍しくない。

そして元信公の顔も声も、皆知っている。なぜなら、

『――――――やあ、久しぶりだ武蔵の諸君。先生の顔を憶えているかい？』

全武蔵の外部拡声器から、男の声が響いた。

それだけではない。各地の社や御堂の上に、鳥居型の巨大な表示枠（サインフレーム）が現れた。そして中に映るのは、どこかの艦橋をバックにした一人の男だ。

眼鏡を掛けた学帽つきの黒長髪。

啓示器であるマイクを、小指立てた右手で握るのは、

『毎度毎度、私が、――――――三河の当主、松平・元信だ。先生と呼んでくれて結構だとも』

／※／

空中に映された松平・元信のパフォーマンスに、正純は肩の力を落とす。

「元信公も好きだな。あれってもしかして意外と寂しがり屋なんじゃないだろうか、なあ、結城……」

未だに演説を続ける元信から視線を外し、正純は気の抜けた言葉を隣にいる結城に投げかけるが、次の瞬間に言葉を失くした。

……へ？

傍に立つ結城。

その気迫が違うのだ。

空に記された表示枠。そこに映る元信公を、結城は言葉に出来ない視線で凝視している。

そこに込められた感情を正純は理解できない。

炎が宿るようなその瞳には雑多なものが宿っている。

羨望、猜疑、憧憬、憎悪、親愛、背信、希望、諦観。

相反するものがごっちゃになってしまい、混沌だけが残ってしまったかのようだ。

そしてそれだけではなく、その背後に背負う長棒が、その感情に呼応するかのように、微かに震えている。

その現象に、正純の脳内で疑問が飛び交う。

なんだ？……どうしたのだ？結城。

元信公の出現と共に、正純は結城の反応に幾つかの仮説を立てるが、

『今度は私の方でも面白いものを用意している。夜に、三河の方を見てみるといい。ちょっとした花火を用意しているからね。では――――――、本日の授業はまずこれにて！！』

言葉と共に通神が消え、社の上の表示枠も閉じて消滅する。

元信公の船が頭上を通り過ぎても、正純は結城を見ていた。

通過する船影を視線で追う結城は奥歯を噛み締め、何かに耐えるように俯いた。

そんな彼に正純は心の中で言葉を選びながら、そしてふと、もう片方にいるＰ－０１ｓの方を見て、

「え……？」

視線は、背後にいたＰ－０１ｓに固定された。

彼女が、こちらに背を向けて空を行き過ぎ船に手を振っていたのだ。

「……お上がりの観光客のようなことをするんだな、お前」

「Ｊｕｄ.、船の下のほう、硝子の向こうから、こちらに手を振っている方がおられましたので」

それが誰だか、正純には解らない。Ｐ－０１ｓにも解らないだろう。

しかし正純は気付いた。

Ｐ－０１ｓの言葉に、傍らの結城が一瞬だけ、悲しそうな目をしたのを。

そして、Ｐ－０１ｓは、こう言った。

「こちらを見て、笑っていました」

言葉と共に、音が響いた。

鐘の響き。

武蔵アリアダスト教導院が、四時限目を終え、昼休みに入る音だ。

第三話～求めるは存在しない感情。その思いの行く先は何処か～

日差しが、昼から午後へと動き始める空の下。

三河北部の山肌、”各務原（かがみはら）”松平家”と植樹で書かれた谷へと、武蔵は降下した。

八艦が沈むように入ってゆく武蔵専用陸港の南西には、山を整地した平地が地続きで広がり、そこには他国の航空艦が降りる平地型の一般用陸港がある。

そして、武蔵の入った陸港の南、一般用陸港の東、そこに郊外集落と田園を周囲に有した広大な都市があった。

三河だ。

武蔵の持ち主、聖連に対する極東の代表。そして同時に欧州に対するオスマンを飲んだ織田家と正式同盟を組む、松平家の土地だ。

そして専用陸港に身を沈めた武蔵が、八艦同時に警笛を鳴らす。

武蔵の停泊を告げる響きだった。

／※／

「ハイ、それではこれから臨時の生徒会兼総長連合会議を行います。司会は臨時相談役である結城君に担当してもらいました。結城君、会議の前に一言どうぞ」

「生首残して即行地獄に堕ちろ、お前ら」

「はい、以上、臨時相談役の有り難い御高説でした」

”書記　ネシンバラ・トゥーサン”の腕章をつけた眼鏡少年の言葉に、結城は嫌味たっぷりな言葉を投げかける。

それに対して皆は顔をやや青褪めながら、気力のない笑みを浮かべる。

松平・元信のパフォーマンスが終わったその後、結城は酒井学長を迎えに行くために一旦、教導院へと戻ったが、そこで運悪く梅組の面々に捕まってしまった。

元信公の登場で機嫌が悪くなった結城だが、この腐れ外道どもに八つ当たりしても周りに被害が及ぶだけで自重する事となった。さっきのは露骨で地味な嫌がらせだ。

ちなみに正純は先に関所へ行かせてある、後で酒井学長と道中で合流する予定だ。

三年梅組が集う場所は武蔵中央後艦・奥多摩にある武蔵アリアダス

ト教導院の正面橋架、正面側に降りてゆく階段の上だ。

トーリや結城を中心とした仲間達に、ネシンバラは宙に表示した鳥居型の鍵盤を叩きながら、

「えー、本日の議題は”葵君の告白を成功させるゾ会議”ということで。書記である僕ネシンバラの提供でお送りいたします。――――皆、適当に弄っちゃっていいよ？では先ずは葵君から、どうぞ」

「んー、いきなり視聴率だけ考えると、俺がフラれた方が面白くね？」

「告白する本人がいきなりそれかよ！！」

皆のツッコミに、トーリは、ああ？と皆を見回し、

「何だよオマエら！俺がフラれちゃ駄目なのかよ！？俺知っているぞ。それ、せ、成果主義の押し付けって奴だな！？そんな風にモテない男を認めない社会に対してワタクシは断固抗議したい。いいですか？――――――誰もが結婚出来ると思うなよ！？お前も！お前も、そしてお前もだ！！」

手当たり次第に周囲の帰宅人を指差し始めたトーリの後頭部を、結城が長棒で容赦なくフルスイングして止める。

五回目くらいで指された隣りクラスの三要先生が泣きながら走っていったが、そこまでは誰もフォロー出来ない。

とりあえず顔面を地面にめり込ませて一息ついたトーリが、頭のダンコブを撫でながら階段に座りなおす。

「いってえ、相変わらず容赦ねえな、ユッキーは。脳天カチ割るなら普通金属バット使うだろ?そんな布切れで包んだモザイク隠蔽物じゃあ、この俺は倒せねえぜ!」

「死んでないだと?――――――ちっ、当たり所が悪かったか」

「いや、普通死んでるって、アレ」

「早く本題に入ってくれないかな?二人とも」

嫌悪そうに舌打ちする結城。

そしてネシンバラの促しに、トーリは傍らに座る忍者帽子の点蔵を見る。そして、

「なあテンゾー、告白って基本的にどうやんの？オマエ、回数だけはこなしてるだろ？」

「い、今自分、いろいろ否定されているで御座るな！？そうで御座るな！？」

「いいから話してみ？」

トーリの問いに、点蔵が腕を組んで頷く。その後で右の人差し指を立てながらこう言った。

「ぶっちゃけ、いきなりコクるのは感心せんで御座るなあ。誰だって心の準備というものがあり申すし、トーリ殿だって、朝、家の前に見知らぬ女の子が立っておって”好きです”とか言われ――――――、いいで御座るなそれ！――――――――いらない！心の準備、いらないで御座るよ！！」

「うん。しかしその子がたとえばテンゾーだったら俺はかなり嫌だなあ。オマエが俺にコクるために家の前で立って期待にくねくねしてたら、正気度下がる前に俺は逃げるね。間違いなく。――――――ユッキーはどう思う？臨時相談役として」

「Ｊｕｄ．、安心しろ。仮にそんな変質者が本当にいたら、間違いなく丸裸で血祭りにしてやるよ。しかし死体はお前の部屋に飾るからな、トーリ」

「さ、最悪で御座るな貴殿ら！！」

「――――――ハイ、書記からの意見です。三人とも真面目にやって下さいー」

鍵盤を叩き続けて議事録とっているネシンバラの声に、点蔵とトーリは腕を組んだ。

対して結城がややあってから、懐から手帳とペンを取り出して言う。

「……駄目下で試してみるが、ここは一つ〝手紙作戦〟で行こうか？」

結城の提案に皆が、へ？という疑問を出すしながら怪訝そうな表情をする。

武蔵で臨時相談役の結城はというと、無愛想な仕事人で有名だ。

普段から無表情で何を考えているのが解らない人物で、話をしなければ近寄り難い印象を周囲に与えている。おまけに機嫌が悪いと他人の首を刎ねたがるし、それが余計に周りと距離を置いている。

まさかそんな結城が他人の恋愛事情にフォローを入れるとは誰も思っていなかっただろう。

「じゃあ、点蔵、代わりに説明してくれるか？――――――こういうの、経験あるだろ（笑）？」

少しの間をおいて、結城は手帳とペンをトーリに渡しながら点蔵に言葉をかける。

「何で御座るか、今の鼻で笑ったような言い回しは？なんか拙者、いいように遊ばれてないで御座るか？そうで御座るな！？」

「……いいから本題続けろ」

結城の半目に、点蔵が仕方ないで御座るなと、腕を組みなおしながら言った、

「まあ、告白って言うのは、人間なら誰もがトチるもので御座る。例えば”君の事が好きだ”と言うつもりが、慌てて”君のおとこが好きだ！”と炸裂し申したり、思い切り噛んで”き、きめぇとこが好きだ！”と暴発し申したり、無理に楽して行こうとして”ミーはユーのことを好ーキデースネ――――――！？”などとハズれぶちかまし申したりするで御座るよ」

「……スマン、点蔵。投げ遣りしたオレがこう言うのも悪いんだが、お前は本当に体験豊富だな。心強いけど少しは忍べよ、忍者なんだから」

「せ、説教された！このタイミングで説教されたで御座るよ自分！」

「気にすんなよテンゾー、つーかこの手帳とペンとオマエの愉快な失敗談の関係は何よ？」

あ、と点蔵は指を鳴らした。

「簡単で御座る。――――――前もって、伝えることを書いておいて、コクる代わりにそれを手紙にして渡すで御座るよ」

うむ、と点蔵は頷き、

「さすれば、絶対にトチることとは無縁で御座るし、恥ずかしくばそのまま帰っても宜しい。更には相手も即答せずに済むし、手紙の返答でもいいので気遣い充分であり――――――」

「おいおいオマエのその方法で断られた失敗談がこれからスタートかよ。いい空気だな今！」

「わ、悪いで御座るよ！今悪くなったで御座るよここの空気！――――って、どうして手帳を出した結城殿の代わりに拙者が弄られているので御座るか！？」

「気のせいだ」

しかしトーリは手帳を片手に、あのな、と前置きし、

「つまりコレに、どうして相手を好きになったかを書けって？」

「まあ、正式には便箋で御座ろうが、ここで一度考えをまとめてみるのもいいかと」

「うーん……、上手く言葉に出来るかなー？こういう好き嫌いな感情って説明し難いものじゃない？」

その言葉に反応したのは、点蔵や結城ではなかった。

橋の欄干に身を寄りかからせていた喜美が、髪を風になびかせながらトーリを見て、

「フフフ愚弟、好きとか嫌いとか、上手く言葉に出来ないですって？可愛い話ね。だったら試しにそこのエロゲ忍者の嫌なとこを書いてみなさい」

「いや姉ちゃん、友人の嫌なとこなんて、上手く言葉に出来るわけねえじゃん」

・いつも顔を隠してるのは人としてどうかと思うが上手く言葉に出来ない

・ゴザル語尾はそれギャグのつもりかと思うが上手く言葉に出来ない

・たまに服から犬のような臭いがするのは本当にどうにかして欲しいが上手く言葉に出来ない

「やっぱ上手く言葉に出来ないもんだなあ、友人の悪いところは」

「ス、スラスラ書きまくっているで御座るよ！しかも箇条書き！！」

「あっれ？おっかしいなあ。俺、オマエのいいところは書けないのにな。Ｓｉｇｈ……」

「何が”Ｓｉｇｈ……”で御座るか！最悪で御座るなこの男！！」

点蔵のクレームに、トーリはヘラヘラ笑ったままだ。

そして喜美が代わりというように、欄干から身を剥してトーリの背

後に立つと、

「フフフ愚弟、とりあえずいい踏み台で練習できたとこだし、今度はアンタの心の中にある彼女のいいところを書いてみなさい」

「ええ？姉ちゃんは難しいこと要求すんなあ。思春期に暴れまわる俺の清純な精神の働きがこれ以上簡単に上手く言葉に出来ると思っているのかよ！？」

・顔がかなり好みで上手く言葉に出来ない

・しゃがむとエプロン裾からインナーがパンツみたいに覗けて上手く言葉に出来ない

・ウエストから尻のあたりのラインが抜群で上手く言葉に出来ない

「うーん。やっぱ上手く出来ないもんだなあ」

「――――――ず、随分と具体的で御座るよこれ！しかも即物的！！」

「騒ぐなよテンゾー。俺が本気で具体的になったらこんなもんじゃ済まないぜ……」

「おい、普通に想像できちまうからその台詞やめろ」

結城の追加のツッコミに皆がうんうんと頷くが、そんな遣り取りに対して、階段の二段下から声が来た。

「待て、待て待て、……その箇条書き、トーリにしては肝心なことが抜けておるぞ」

言葉を放ったのは、白の巨体を持つ半竜のウルキアガだ。

彼は前翼でもある巨大な腕を曲げ、その内側にある小さな手で顎を撫でながら言う。

「拙僧が見る限り、……オッパイ県民であるトーリが、何故か相手に対する胸への言及がないだろう」

ウルキアガの言葉に、皆が、はっとしてトーリを見た。

周囲、下校中の生徒達も今の言葉に対して身動きを僅かに止め、皆ひそひそと、

「オッパイソムリエの総長がオッパイについて何も言わないなんて……」

「……毎日連呼してるのに好きな女相手にはヘタレ……？」

「……というか、どうしてこんなのが本当に総長兼生徒会長に……」

周囲の注視を一身に受けたトーリはというと、

「俺、ひょってしてその道の権威になってね？」

言いつつ、トーリは真面目な顔で頷きながら、ゆっくりとペン先を紙に走らせ、

「出来た。つまり、――――――オッパイは、揉んでみないと、解らない。……季語どうしよ？」

「無差別に上の句読むなよ！！」

皆のツッコミにトーリは眉を顰めた。

それに対して、喜美はトーリの横に座り、組んだ膝に頬杖をつきながら、

「フフフ愚弟。つまり、――――――あんたはオパーイに対していい加減は出来ないのね？なんて誠実な！！」

「ああ！俺、こう見えても真面目だからな！適当な事は言わないぜ！」

握り拳を掲げるアホな姉弟二人を前に、結城は溜息を一つ吐いてから、

「……この姉弟の頭がおかしいのはもはやどうでもいいことだが、ここ数分のオッパイ連呼振りは間違いなく一般人の年間使用量を上回っているな」

「フフフ、其処の隠れオトメンは黙ってなさい。しかし愚弟、アンタの書いた通りだとしても、大体のところは見れば解るんじゃないの？浅間なんか見た目そのままだし」

と、喜美が言った瞬間、背後の校舎三階の窓が開いた。茶道部の活動用に使われている教室だが、そこから顔を出した浅間は赤面全開で、

「こらー！勝手に人のカラダネタをやらない！大体なんですか見た目そのままとか！」

「そうだよな！浅間のは見た目通りじゃないよな！こう、まろやかな中に少しの――――――」

「うわ！ソムリエ語り出した、最悪です――――――！ちょっ、結城君退いて下さい！！そいつ撃てない！！」

「大丈夫だ、智。そんな見晴らしの悪い角度から撃つくらいならオ

レが代わりにこの馬鹿の首刎ねてやる。その方が血が壮大に飛びでて華やかだしな、それに風紀委員にも序でで頼まれてるし」

「おいおい、なんだこの鬼畜幼馴染コンビ、息ピッタリなんじゃね？」

筆を出して隣の点蔵の忍者帽子に”百点”と書き出したトーリに対し、喜美は首を傾げた。

「ともあれ愚弟、相手のオパーイの是非が視覚情報から判断できないとして、もし付き合ってからソムリエ的に”駄目だった”と解ったらどうするの？ここは一つ試してみないと駄目じゃない？」

「試す？何を？」

「――――――近似のオパーイオーナーに頼んで揉ませてもらうに決まっているじゃない」

喜美の爆弾発言と同時に、橋の上から下の校舎においても、半径３０メートル内から人々が迅速に退避した。

女子はもとより、男子も胸を隠していそいそと内股で去っていく。

一瞬で静止した橋の上で、トーリは姉を見て、

「姉ちゃんすげえな！頭いいけど馬鹿じゃねえの！？」

トーリのツッコミに、割り込むように校舎側から声がした。

「――――――？こんなとこに座り込んで何してるんですの？」

振り向くと、校舎の入り口から二つの影がやってくる。一つは猫背で中年過ぎの男性である、

「酒井学長……」

「おお、結城。ここにいたのか、丁度いい。そろそろ出発の時間だ」

「Ｊｕｄ．」

結城の呼び声に酒井は軽く手を挙げる。

そしてもう一人、酒井の横を歩いているのは、背丈ほどある革製バッグを左右の肩に担いだ少女だ。

やや長身のトップに、銀色の大振りな前髪と、黄色の鋭い瞳を持つ娘。

円を巻いた後ろ髪の大きな束を揺らす彼女の名はネイト・ミトツダイラ。

武蔵アリアダスト教導院、総長連合・第五特務である。

／※／

「ネイト。お前も一緒に三河へ降りるのか？」

結城の問いかけに、ミトツダイラは首を横に小さく振った。

「松平分家を預かる騎士の私が、P．A．ODAへの献上物を作る三河に行くわけがないでしょうに。ただ、分家としての権利などの関係で、降りる酒井学長に証書などが必要でしたので」

まあそういうことだね、と言った酒井にトーリが笑みを向ける。

「学長先生、三河の中央まで行くのかよ?よく許可でたな」

「昔の仲間からの呼び出しでね。――――――十年ぶりだし、酒飲んだら帰ってくるよ。あんまり長居してると聖連に睨まれるしねえ」

酒井の発言に、”会計　シロジロ・ベルトーニ”の腕章をつけた生徒が手を挙げた。

「酒井学長、駄賃は払うので三河の流通を見てきてくれませんか。――――――今年の三河ですが、何故かこちらからほとんど物資を買わず、売りに徹しています。入港前に更に大量の売り込み提示がなされたため、現在は輸入業者が倉庫の取り合いをしている案配で」

「さっき、殿先生が”花火”とか言ってたなあ。それと関係あんの

かね」

どうでしょう、と皆が首を傾げて唸った。

対する酒井も追及せずに、

「まあ気をつけておこう。――――――で、話に聞いていたのだが、トーリ、お前さんが告白するとか何とか。……そんな危険な行為の及ぶ相手ってのは一体誰だ?」

「ホライゾンだよ」

その台詞に、酒井がわずかに空を見た。そしてややあってから、

「お前さん、やっぱそう思うのか?」

「学長先生だって、そうだろ?去年、浅間やネシンバラに相談されて、ユッキーと見に行って、そっからコメント避けてんじゃん。……学長先生もユッキーも、昔から大事なことはいつも言わないもんな」

「まあそうだがね」

「……」

酒井は一瞬、視線を結城に預けてから、

「彼女が別人、他人のそら似という可能性だってある。いや、そっちの方が強いだろ？」

「解ってるさ。だから一年見てたんだ、ストーカーのように。何しろ、もしかして俺が、面影だけ追ってたら勘違いストーカーだもんな。それでまあ一年見てたら……」

「それ勘違いじゃなくて正式ストーカーだろ。……でもまあ、一年見てたら？」

対するトーリは、笑みの顔をそのままに、

「今の顔つきや身体は十年前と違う、別人だ。でも一年見てたら、昔がどうのとかは関係なくて、色々頑張ってる部分に惹かれちまってさ。……だから、もし彼女がホライゾンじゃなくても――――――」

「なくても？」

「何も出来ねえ俺だけど、一緒にいてくれねえかなあ、って」

そうか、と酒井は空に、煙草の煙を吐くような息をつき、

「いつからそう思った？」

「一週間前さ。――――――十年前のこの頃に、ホライゾンがいなくなったんだな、と考えたら、自然とそう思えたんだよ。いてくれるだけじゃ、嫌だな、って。だから、コクろうって決めたんだ。

明日で十年、それをケジメとして、俺は、もう、ホライゾンを逃げ場にしねえ」

そうか、と酒井は視線を落とした。苦笑と言えるその顔、顎に手を回しながら、彼は言う、

「ま、頑張れ。……俺、これから三河だから。――――――行こうか、結城」

「ん」

階段を下りる二人を皆が挨拶や一礼し、そしてその際に結城が、

「そうだ。トーリ、正純と合流するけど、何か伝言は？」

「夜八時にここで騒ぐんだけど、来られるかどうか聞いといてくんね？」

「また何か企んでるのか、お前」

「そうじゃねえよ。――――――明日の告白に対する前夜祭で、夜に幽霊払いすんだ。ほら、末世が近いって最近、世界中で怪異とか神隠しとかいっぱいあるだろ？ユッキー、お前も来るか？」

「幽霊払いねえ。ま、時期もそろそろだと真喜子が言ってたようだが、……気が向いたら付き合ってやるよ」

Ｊｕｄ．、と軽く手を挙げ、結城は階段を下りてゆく。

酒井を前に、二人は徐々に橋から遠ざかって行き、

「向こうは一歩踏み出しちまったなあ。お前さんはどうするんだ？」

酒井の問いに、結城はやや間を置き、

「どうもこうも、オレは名古屋に入れないだろ？――――――――真実を確かめようにも、先へは進めない」

「そう落ち込むな。――――――あれから十年、未練はないのだろう？だったら潮時かと、俺は思っている」

「そうなのか？」

「お前さんが、〝それ〟に負けない限りはな」

後ろに背負う長棒を見ながら、酒井が言う。

その言葉に結城は目をやや細め、

「ならば、行って確かめてもいいか？あの男に……」

「お前さんに会ってくれるといいけどね。そうでなくても、今度の三河行きは、何か答えが見つかるかもしれないぞ？」

酒井の、祈願するような言葉に、結城が空を仰ぐ。

ややあって、そして何かを決意したその心に呼応するように、

「全く駄目ですわよこの馬鹿あ――――――――！！」

ミトツダイラの叫び声と同時に、馬鹿が空を飛んだ。

／※／

山道、輸送の中継基地である関所への道上を、酒井と正純、そして結城は歩いていた。

関所は山側から見ると荷物受け取り待機の貨車が並ぶ広い待機場と、倉庫のある広場だ。

谷を自然の障壁として、上下の貨物を遣り取りしている。関所の受付には人が五列に並んでいるが、酒井達が歩いている位置は、まだ彼らの声や遣り取りが聞こえる距離ではない。

三人は、貨車によって固められた山道を歩いていた。左に岩壁を置く山側を行く三人は、ときに笑い、ときに首を傾げつつ言葉を交わす。

「――――――まあ、色々と迷惑な話で、トーリが明日、コクるんだってね。で、正純は今夜、どうする？さっき言った通り、トーリ達は教導院で騒ぐみたいだが、一緒になって消火器煙幕でも？」

「私は副会長だぞ！？結城も冗談言ってないで、臨時相談役として

止めたらどうなんだ?そんなことしてると聖連に知られたら――――」

「大丈夫。連中と同類だって見られるだけだよ」

「酒井学長まで……。――――――じゃあ駄目じゃないですか。大体何ですか、総長兼生徒会長がいきなりコクるとか公言してみたり教導院で騒ぐとか……、先日も実験室のアルコールランプとフラスコで闇鍋大会やったら実験用のマグネシウムに引火して”ボンッ!”ってなったじゃないですか」

「うん、あれ、闇鍋を光鍋にしちゃ駄目だよね。鍋ご光臨っていうかさ」

「「いや、そうじゃねえだろ……」」

糸目でツッコミをする結城と正純に対し、酒井が笑う。

そして、

「まあ、そういう時間の過し方もありってことだよ」

そうですかねえ、と正純は自分を守るように腕を組む。
そして隣りの結城は、それにしても、と前置きし、

「――――――確かに今日、変だな」

「変？というと……」

問い返した正純は、あたりを見回しながら、解らない、というように首を傾げる。
それに対して、酒井は遠くに見える関所を指す。
待機場に並ぶ受け取り待ちの貨車群を示して、

「――――――ほとんど空の貨車ばかり、って、シロジロから聞いたのだけど、意味解る？正純君」

「それは……、武蔵への荷はあっても、武蔵からの荷がないってことですよね。つまり、三河からの買い付け発注が少ないということ

です。……私、三河の関所を武蔵側から見るのは初めてですけど、確かにこの一年、他の関所だと違ったと思います」

「確かに、いつもはもっと、こっちからの荷もあったんだけどなあ。今回は妙に無いな」

眉を顰める酒井に、隣りにいる結城が言う。

「……三河が”人払い”を進めたのか、怪異の人口減少で物資があまり要らなくなったのだろうか。それでいて自分からは物資を武蔵に送るというのは、何だかまるで――――――」

結城の言葉の続きを、正純は即座に理解した。

続けて言うように、

「まるで、――――――三河が、死ぬ前に形見分けして、自らを世間から隔絶しようとしているみたいですね」

「おいおい、二人ともおっかないこと言うねえ。ただでさえ三河は

鎖国状態で、交流不許可とか言って武蔵とも距離を取ってるくらいなんだからさあ。だがまあ……」

よく解らんねえ、と酒井が頷いたときだ。

不意に、頭上から影が来た。

雲のような、大きな船影が空を渡っている。

しかし三人が見上げた影は一つではない。ほぼ直上に数艦が来ており、そして西側、山並の上に、重低音を響かせて行く一際巨大な白い艦は、

「K．P．A．Ｉｔａｌｉａ所属、教皇総長インノケンティウスが所有するヨルムンガンド級ガレー〝栄光丸（レーニヨ・ユニート）〟。護衛は三征西班牙（トレス・エスパニア）の警護隊だね。ムラサイのP．A．ＯＤＡの手が及ぶ土地に、わざわざ旧派（カトリック）の首領が来るとは。教皇総長、武装開発の交渉に来たんだって？」

ええ、と正純が口を開いた。

「P．A．ＯＤＡは浅井攻めに集中してますから。その隙に神格武

装の一種である新型大罪武装（ロイズモイ・オプロ）の開発要求ですね。世界のパワーバランスの一端を担う、この世に八つしかない都市破壊級個人武装。七大罪の原盤とされている人間の八想念をモチーフにした武装で、使用者には暗に”八大竜王”と呼ばれていますよね」

「詳しいね。結城は知ってる？――――――八想念」

Ｊｕｄ．と、結城が答える。

そして小さく頷いてから、こう言った、

「暴食（ガストリマルボルネイア）、淫蕩（フィラルジア）、強欲（リピ）、悲嘆（オルジィ）、憤怒（アーケディア）、嫌気（ケノドクシア）、虚栄（ハイペリファニア）、驕り。――――――――この八想念が、六世紀にグレゴリウス一世によって七つに纏まられた。虚栄は驕りに含まれ、悲嘆と嫌気は怠惰にまとまり、更に嫉妬（フノートス）が追加されて七つ。

故に現在、人間の大罪は七つと言われているが、本来は四世紀にギリシャ出身のエウアグリオスがエジプトにて警告した八つの想念。今、ラテン語で告げられる七大罪は後世のもので、本来は、――――――ギリシャ語の八想念が原盤だ」

結城は言う。

酒井の隣りを歩きながら、土のついた靴を地面に強く踏みつけ、その感触を確かめるように、

「そして十年前」

空を行く船影の中、虚空を見ながら結城は過去を思い出し、

「武蔵の大改修を行う直前、Ｐ．Ａ．ＯＤＡとの暫定同盟を正式同盟にする話をまとめながら、松平・元信は、Ｐ．Ａ．ＯＤＡ以外の聖譜所有国に八つの大罪武装を送った。それは――――――」

・暴食（ガストリマルジ）：Ｍ．Ｈ．Ｒ．Ｒ．神聖ローマ帝国

・淫蕩（ポルネイア）：Ｋ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａ

・強欲（フィラルジア）：英国イギリス

・悲嘆（リピ）：三征西班牙トレス・エスパニア

・憤怒（オルジィ）：上越露西亜スヴィエート・ルーシ

・嫌気（アーケディア）：三征西班牙トレス・エスパニア

・虚栄（ケノドクシア）：六護式仏蘭西（エグザゴン・フランセーズ）
・驕り（ハイペリファニア）：六護式仏蘭西（エグザゴン・フランセーズ）

「三征西班牙と六護式仏蘭西が二つ持っているが、これは八大罪が七大罪になるとき、まとめられた罪に対応している。つまり出力設定が低めだな。――――――が、三征西班牙は、新大陸にそれを持ち込んで南米の野生化した機獣達を全滅状態に追い込んだそうだ。噂によると、数キロ単位で大規模破壊を叩き込めるようで、威力で言えば聖譜を媒介にした神格武装、聖譜顕装と同等だが、聖譜顕装が戒律に縛られるのとは別で、大罪武装は自由に使える。大罪武装は、相手の罪を思い知らせるための説教武装でもあるので」

と、結城は西の空、白い装甲を纏った”栄光丸（レーニヨ・ユニート）”を見て、

「噂によると、今回教皇総長がわざわざ来るのは、七大罪の”嫉妬（フノートス）”を作らせようとしている。何しろ現在、Ｋ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａは改派（プロテスタント）の出現や中東貿易の衰退に焦っているし。

――――――教皇総長も大罪武装の使い手で、八大竜王の一人。しかし旧派総長だからその呼び名は嫌っているらしいがな。……なのにＫ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａはロンバルディアなどの国際金融で儲けていても大変だろう」

「旧派は基本的に金融禁止だから、その金も税金で取れる以外は金融可能な異族や異教譜、そして何より極東の金融業に保持されちゃっているしね。金の直接貸し借りが厳しいから、土地抵当貸し付けとかを仲介してんだよね。大変だなあ、教皇総長」

「酒井学長。感心しているわりに誠意が感じません。学長って昔、今の教皇と敵対した事があった筈ですよね？」

「もう、昔のことだよ」

と言った酒井が、口の端に笑みを浮かべ、

「でも、さ」

「ん？」

急に足を止めた酒井に、結城と正純が振り返る。

そして、

「二人とも、――――――大罪武装につきものの噂って、知ってる？」

「つきもの噂……、ですか？」

「それって、もしかして……」

Ｊｕｄ．、と酒井が頷く。

そして彼は人差し指を立てて、こう言った。

「――――――大罪武装（ロイズモイ・オプロ）は、人間を部品にしてるんだって、そんな噂だよ」

／※／

酒井の言葉に、結城はともかく、正純はわずかに言葉を失った。

今、酒井が言った噂を、正純は耳にしたことがある。

それは、

――――――人間の原罪である大罪の能力を武装化するには、人間を材料にするのが適格というものだ。

「そうそう、名古屋から人が消えたのは、実は大罪武装の材料にされたんじゃないかって」

「そ、そんなことは、無いですよ」

と、正純は昔、三河に住んでいた記憶を思い出す。

「噂でなければ、問題です。大体、私がいたとき、住人はちゃんと転居届など出して行きましたし、そうでなければ最近の怪異などと同じように行方不明として騒ぎになっている筈です」

だよね、と酒井は言った。だが、

「これに関しては噂で済ませるの？正純君」

「――――――え？」

口端に太い笑みを作り、酒井は言った。

「俺さ、――――――正純君もこっち側に来ると、面白いと思ってんだけどなあ」

「こっち側というと……」

「俺や結城の過去とか、平気で語れる側だよ」

その言葉に、正純は結城の方を見る。

しかしその視線を遮るように、酒井が続けて言う。

「例えばさ、俺が武蔵に左遷された理由、――――――殿の嫡子を襲名した人を聖譜記述通りに自害させてしまったこと。そういうのを笑って口に出来る側さ」

「――――――」

酒井の言っている、左遷の理由は知っている。

三河の住人なら誰でも知っている事だ。

かつて三河の主、元信公には妻がおらず、嫡子がいなかった。

……だから元信公は、弟を嫡子として襲名させたが――――――。

松平・信康。

聖譜記述によれば、彼は織田家とのトラブルで自害することになっていた。

十五年ほど前、三河はＰ．Ａ．ＯＤＡにまだ信長の襲名者がいないことから、同盟を拒み、聖譜記述を”拡大解釈”で切り抜けようとしたらしいのだが、

……P．A．ＯＤＡの包囲によって半ば強引に暫定同盟を結ばされた。

その際、恭順の証として、嫡子となった弟公の自害を迫られた。

酒井は弟公の後見人で、自害を止められなかったことを理由に左遷された。

噂によると、信康公が死を望み、酒井が駆けつけたときには何もかも遅かったのだと。

正純の知る酒井左遷の理由とはこれだ。

……しかし。

そんなことを簡単に口には出来ない、と思う自分は甘いのだろうか。

だが、こちらの視界の中、酒井が口端の笑みを消さずに、こう言う。

「でさ、正純君、もしもその話に続きがあったら、どうする？」

「！……酒井学長！」

「……え？」

酒井の言葉に、結城が叫ぶ。

正純は疑問に思い、しかし酒井は続けてこう言った。

「実は元信公には、……内縁の妻がおり、外に子供が居たとしたら？」

「――――――」

正純は一瞬言葉を失い、しかし強引に口を開く。

この瞬間、いきなり聞かされた情報が理解出来るはずもなく、正純は真偽を確かめるように、

「ば、馬鹿な。もし、そんな子がいたとしたら……」

嫡子を襲名した弟公が自害したため、自然とその子が嫡子になるだ

ろう。だが、

「その子は、今、どこにいて、何をしているのです……？どうして表に出ないのです？」

「だからさ、さっき、言ったろ？

――――――それを知りたければ、踏み込んでこっち側に来なよ、正純君」

そう告げた酒井が、不意に再び歩き出した。

風が動き、衣擦れの音が響く。

酒井が隠し持つように腰後ろに身につけている短刀が揺れ、

「――――――ま、この話はそんなとこにしとこうか。んで、……行こうか」

視線を追えば、酒井は上がってくる一台の馬車とすれ違うように、関所の広場へと行く。

追いつくように足を動かした正純は、ふと結城の方を見る。
彼は相変わらずの無表情で酒井の後を追い、しかし先ほどの慌てたような反応が脳にこびり付いて離れない。

……今朝、墓地で会ったときも、何か様子が変だったな。

関所に近づき、正純の思考を断ち切るように酒井が言う。

「さて正純君、とりあえず俺を送った書証を得たら、あとは戻って遊んでいいから。名古屋までは結城が護衛としてついているから安心していいよ」

「あ、はい。あと、酒井学長、松平四天王だったら知っているかと思いますが、もし、忠勝公の息女に会ったらよろしく言っておいてください。私、昔に同級生だったことありますから」

「ああ、いたなあ。……今日来るかなあ？まあ、会ったら言っておくよ」

礼を言いつつ、正純は思った。

今先ほど、酒井に言われた”踏み込む”ということ。それに近いことを、今日、他人にも言われた憶えがある。だから、

「こっちは今日はちょっと、調べようと思っている事があるので、それに専念します」

「へえ、何を？」

「”後悔通り”です。それを調べると、皆のことが解るから、って言われて」

正純は内心で頷く。これも一つの踏み込みだな、と。

しかしその言葉を聞いた結城の目がやや見開いたのを、正純は見逃さなかった。

一瞬の驚きの後に、何処か悲しい目をした結城に、正純は言葉を失った。

……え？

自分が何か変なことを言ったのだろうかと思ったが、しかし酒井が、結城の方をチラッと見ながら言う。

「いいねえ。――――――”後悔通り”を知る事が、正純君の新しい動きになるといいね」

一息。

「俺にもまだまだ解らないことは多いけど、それでもまあ、……正純君が俺や結城、そしてトーリ達の側に来ることを、俺は祈ってるよ」

第三話～求めるは存在しない感情。その思いの行く先は何処か～（後書き）

どうも、クロです。

本題である三河消失と宣戦布告を前に、なかなか結城の活躍が描けない昨今。

――――――――このままでは単に原作の写し書きになっちまうじゃねえか！？

とビクビクしながらも努力してゆこうと思います。

で、まあ。主人公の結城に関しては、一話の後書きで言ってたように、とある歴史人物をモチーフにしてます。

ストーリー上での襲名ではなく、あくまで本名がその歴史人物と同名だけですので。

あれ？これって、もう、答え出してるんじゃ？

まあ、気になる方は、松平家に縁のある人物を調べてみてください。

どうせ三河消失篇で明かす予定なので。

では、また次回お会いしませう。

第四話～語る思いは常に過去形～

それは帝の子である東宮こと東が、車椅子の少女、ミリアム・ポークウと運命的（？）な邂逅を果たした頃。

場所は三河の関所。

武蔵へと先に戻った正純を後に、ここでも状況が進もうとしている。

各務原の麓にある関所は、橋を持っていた。

山之上側にある検疫や貿易用の関所とは別に、山から降りて来たものに対して二次審査を主とする二つ目の関所がある。

関所の証である門は、山を下ってきた川の畔、橋の前に建てられてある。

屋根の無い門は開かれており、その中から幅十メートルほどの橋が見える。

そして橋から南、海側を見れば、広大な田園と森の向こう側に、浅い斜面の裾に町がかすむように敷かれている。

そして町の中央には、茶色い布を被せたように、地脈炉である新名古屋城が佇んでいた。

それらの背景を前に、人影が三つあった。

中年過ぎの男が二人。

片方は線が細く、もう片方は同い年くらいの、体格のいい男だ。

そして二人の背後に控えたのは一人の少女。

三人は、三河を背に立っており、待ち構えるように、彼らの前に二つの影が来た。

同じ中年過ぎの、猫背の男と、セミロングの黒髪を背後で適当に束ねた少年が一人。

先に待っていた三人を前に、猫背は、

「おや、松平四天王の内、榊原・康政と本多・忠勝の二人がお迎えとはね。――――――俺もまんざらじゃないってことか。井伊はどうしたよ？榊原、ダっちゃん」

彼の言葉に、榊原と呼ばれた細い初老が答えようとするが、それをもう片方の、忠勝と呼ぶ体格のいい初老が制止する。

代わりというように、忠勝が半歩前に出て、酒井を見据えながらこう言った。

「――――――見せろ」

瞬間。忠勝の背後にいた少女の姿が消えた。

それに対して酒井が浅く眉を上げ、

「は？おいおいおい、ダっちゃん。お前の言う〝見せろ〟って、大体ろくなことじゃ――――――」

言う台詞が終わるより早く、酒井の背後に二つの円弧を描く影が迫る。

一つは先ほどの少女の結んだ髪が描く軌道。

もう一つは、その手に抜かれた刃を示す軌道だ。

「お？」

相手は動きを止めない。

ゆえに、それに対処するため、結城が酒井の代わりに動いた。

「――――――！」

コンマの世界。

加速する意識の中で、少女は突然、目の前に割り込んだ人影に驚愕した。

それに対して、割り込んだ本人である結城の判断は早かった。

互いの戦種（スタイル）は同じ近接武術師（ストライクフォーサー）。

スピード重視の戦士の共通言語として、相手の死角である背後をとる目的は二つある。

攻撃か確保だ。

相手の動きに合わせるために、結城はあえて術式を使用せずに、震脚を土台にした踏み込みで向こうの奇襲を”カット”した。

そして今、肌に感じる動きは、少女が身を振って起こす大気の揺れだ。

人間は長寿族に比べれば純粋な流体種族ではないが、この世の万物は存在の定着に必要な流体をＡＴＥＬＬ単位で常時消費している。

つまり、生物は無意識に体から微量の流体を発しており、それが空間に作用して一種の”揺れ”を起こしている。

そして奇襲をかけた少女の揺れは大きく、初速が遅い。

ならばそれは攻撃だと、結城は判断する。

確保が目的ならば揺れは小さく初速が早い。

だが攻撃の際に起きる風は、全身の筋力を持って武器を振り抜くため、最初は遅く、しかし大きい。

有効な一撃をいれるためのチャージは時間が長い分、予備動作も大きいからだ。

一撃を入れて相手の動きをディレイさせるのは簡単だが、向こうはどうやら今の初動に術式を組み込んでいる。

ならば状況を見ながら対処するのが正しいと、結城は即座に右手を背中の長棒に添える。

相手の武器は、白砂代座（しらさごだいざ）のブランドが入った標準的な打刀だ。

木柄を黒のマット仕上げにしたものは、白砂の名に反する色である一方で保守的な作りが売りもの。

幼馴染の浅間が使う弓も白砂製であるため、その特性はよく知っている。

柄は真っ直ぐで、軽さによる振れをを長さで補っている。

……オレの得物に近い感じだが――――――

しかしこれには問題が有る。

刀に限らず、刃とは、標的に当て、削ぐように引くことで切るものだ。

だがそれは、当てた刃を、己の胸側に引くことで切るということだ。

それ故に、刀の刃は引くことが可能な距離しか切れない。削ぐ際の力加減によって威力は変わるが、切れる距離は引ける分だけだ。

そして長い柄を持った刀は、引ける距離が短い。

その場合、長く切るために使い手が用いる方法は、

……身を倒して、遠くに刃を振る！

そうすれば、身体の振りの分だけ刃を引く距離を稼げる。

目の前、少女の体勢から見れば、下から上、五体を踏み込むための姿勢だ。

狙いは酒井の右胴だが、結城が割り込んだために刃の切っ先を下に下ろした。

……オレの武器に対する最も遠い角度からの反撃か。

右下からの縦一閃だ。

出来る、と結城の本能が相手を評価する。

下盤を狙えば、あるのは手首と横腹だけだ。

四肢の骨が邪魔をしても、基本的に弾けば済むだけだし、残るのは腹圧で張った横腹の薄い肉のみ。

下からの縦斬りは、やや強引だが、身体を背後に回す事で引けるし、引いた柄尻が自身に当たることも無い。

低い体勢なら腰を軸とした動きだけで次の動きに繋がる事も出来る。

行儀の悪い剣術だ、と結城は思った。

――――――稽古場で習うものではない。これはオレのと同じ、実戦で使う剣術だ。

それに対して、結城の動きは正に一瞬だった。

そして、その一瞬の中で全てが終わった。

「――――――！」

少女が剣を振り上げるより早く。

その剣が先に消えた。

「な――――――――！？」

そして背後に結んでいた少女の髪が解け、艶やかな黒い髪が肩にゆっくりと掛かる。

刹那の出来事に、少女は背後を振り返る。

何時の間にか、結城が三メートル先の後方に背を向けながら立っていたのだ。

初動を感じない、気配もない、手応えも無い。

その上、背後に回れた。

三メートル。

反撃を行うに最適な距離であり、そして得物の無い少女には対抗する術は無い。

そして結城の右手には、さっきまで少女が構えていた刃を握っており、更にその切っ先に、切り裂かれた少女の髪飾りが引っかかっている。

長棒は抜かれていない、背に背負ったままだ。

「ほう……」

空気に、忠勝の感心した声が響く。

それに対して結城は、無言で刃を地面に突き刺し、壊れた髪飾り片手に少女へと歩み寄る。

唖然とする少女の前に立ち、髪飾りをその繊細な手に渡し、

「もし次に同じ方法を使ったら、死ぬかもよ？お前」

耳元に囁くような結城の声によって、勝負はついた。

／※／

「ハイ、そういうわけで今ので大体揃いました？明日の打ち上げ用の御料理の食材は」

という巫女服姿の浅間の言葉に、背後についてきた三つの影は頷いた。

場所は右舷二番艦・多摩の表層部右舷側商店街。

観光客向けの艦という恩恵もあって、かなり栄えた場所だ。

行き交う人々には三河から上がってきた者や、南側の陸港からやってきたＫ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａや三征西班牙の学生達もいる。

そんな中に立つ四人の一人、直政が艦内整備用の大型レンチを右の義腕で担ぎながら、他の三人、アデーレと鈴、そして浅間を見た。

「人数分とはいえ、流石に買いすぎじゃないかねえ」

皆が持つ紙袋の山を見ながら、直政が言う。

何れも腕はおろか、肘や腰のハードポイントにも荷物を釣っている。

「ガ、ガっちゃんや、ゴっちゃんとか、……い、いてくれると、良かった、けど。――――――ゆ、結城君とか、たまにあの長い棒で、て、手伝ってくれるし」

比較的が少なめな鈴が、荷物を抱え直して言う。すると浅間が、

「ナイトもナルゼも、運送の仕事してますからね。今頃は艦の間を飛び回ってると思うんですけど、さっきトーリ君がミトにぶっ飛ばされたとき、頼んでおくべきでした」

浅間の言葉に、眼鏡の従士少女アデーレが、はあ、と吐息した。

「まあ、浅間さんもお疲れ様です。巫女服で、浅間神社の仕事、今は忙しいですよね？」

「はい。春先は契約関係の仕事が多くてカウンター業務が多忙ですね……。術式も、皆最初は過激なの欲しがるから、うちの月間発注量がヤバくなってますよ」

「アンタの神社行くと過激なの貰えるって皆思ってるんじゃないかね」

直政が、レンチを担ぎなおしながら言う。

それに対して浅間はポツリと呟き、

「こんなことになるんだったら、初めから結城君を掴まえておくべきでした。業務が得意くせに、何時もあちこち走り回っているんだから」

「ゆ、ユッキー。去年に、……あ、浅間神社の年明け、手伝いした時、と、とても嫌そうな、顔してたよね？」

「あの時って確か、結城君、臨時相談役の仕事と掛け持ちして、生活委員にも寮の点検を頼まれていましたよね？その後、浅間神社の業務に忙殺されたことでゴッチャになったスケジュールを涙目で見ているのを見かけましたよ？」

鈴とアデーレの補足に、浅間が、アハハ、と視線を逸らす。

「だって、結城君あちこちに顔効くし、ルックスいいから客寄せ良いし、毒舌で容赦ない割りには仕事はちゃんとやるし、なんだかんだ言って他人の頼み事は断らないし……、うう、御免なさい、今度謝って来ます」

涙目で俯く浅間に、直政はレンチを脇下に運びながら言う。

「そう言えばアンタ、昨年の文化祭で弓道部の人間射的にでて射撃場からマジ逃げした部員までブチ抜いたじゃないかね。そんで景品全部かっさらって孤児院に渡して。孤児もプレゼントが犠牲と引き換えに入手されたもんだとは思うめえよなあ、アレ。人の命は景品より軽いよな」

「あの時、通り過ぎた結城君が風紀委員と一緒に浅間さんを抑えていなければ大惨事でしたよね」

「き、弓道部の、弁償も、ゆ、ユッキーが払ったん、だよね？」

「だ、だって、加速系入れてない人間なんて鴨撃つより楽なんだからしょうがないじゃない。悲鳴上げて外に逃げてこようとしたのだって、外に迷惑掛かるからズドンしただけだし……、それにプレゼントはあれ、結城君が世話になった孤児院だから、あれも結城君の提案で送ったんだよ？――――――う、うん！私偉い！」

「……アンタ物騒って言葉を理解しなよ」

「なんだか、ゆ、ユッキーが、浅間さんの、ほ、保護者みたい、だね」

「幼馴染パワー、恐ろしいです」

あれえ？と首を傾げた浅間に対し、直政は脇のレンチを一瞥し、

「まあ、結城がアサマチの保母であることは昔からだけど。アンタはとりあえず、あたしらにこのまま付き合って、今日の”幽霊探し”には来るんだろ？あたしもチーフの泰造爺さんに夜番の休み貰うけど――――――」

と、この時。

空。浅草と品川や、各艦の間に、白い霧の尾をたなびかせて空を突っ走り始めた影が幾つかある。

飛行種族や魔女達（テクノヘクセン）だ。

何れも高速で、競い会うような軌道を取りながら艦の間を行くが、

「賑やかだねえ。――――――三征西班牙の武神が監視止めたから、配達業者の連中がレースと模擬戦やり始めたね。各国のエース級なのに教譜と折り合いつかなくて逃れてきたのが多いから技術や知識交換なんかでは世界有数だってナルゼが言ってたね」

「あ、ナルゼとナイトも今飛んでましたよ？”木葉”でなければ見えないような速度で。……話によると二人一組ユニットだと最強クラスなんだとか」

「まあ、あの二人も、今の内に仕事やそういうのやっておいて、夜には教導院に集まるんだろうしね。ホント、あたしの周囲、ろくなのいないもんだねえ」

「……マサ、最後の台詞は鏡見て言いなさい」

浅間の言葉に、アデーレが小さく笑う。
彼女は手荷物を抱え直しながら、
「でもまあ、三河の花火もありますけど、やっぱ皆さん総長の方に行くんですねー……。自分も模擬用の従士槍に対霊術式着けて参陣しますけど」
「わ、私も、私も行きます」
鈴の頷きに、二色の瞳で見た浅間が眉尻を下げて笑う。
「何だかんだと、皆、トーリ君のことが気になってますね。……それに比べて、うちの結城君は何時まで三河でブラブラしてるんだか」
「へえ、”うちの結城君”ねえ」
「今さり気なく婿宣言したですよ!?」

「へ？わ、わあ！？……違う、違います！！今の無し！！それは、その、幼馴染的な意味で……！！」

浅間の慌てた反応に皆が笑う。

顔を赤くした浅間は早足で前を歩き、顔を俯かせている。

頭から湯気が出ているのは気のせいではないだろう。

そしてやや間を置いて、直政が言った。

「けどまあ、確かに。世間は織田だの大罪武装だと末世だのと煩いけどさあ、まあ、そんな中、一人の馬鹿の告白が通るかどうかはホント、通し道歌じゃないけど――――――」

レンチを首後ろに担いだ直政が、午後半ばの空を仰ぎながら、

「怖いさね。……よくやるきになったもんだ、あの馬鹿」

そして視線を落とした直政が、浅間を見て口を開く。

「アンタ、うちらよりも付き合い古いよな、喜美んとこと」

／※／

直政の問いに、浅間は僅かに考えてから頷いた。

「まあ、古いと言っても、親の関係ですし、子供の頃の記憶なんて結構曖昧ですけどね」

「でも小等部以前の付き合いはアンタくらいだろ。他は皆、小等部以降だし。結城はどうかな？多分あたしらよりは少し早いだろうけど。しかしまあ、基本的に皆、トーリがどういう人間かはしってるわけだが――――――」

「ま、正純さんが、ち、違い、ますっ。あと、あ、東さんも」

鈴の言葉に、浅間は小さく頷く。

「正純は、去年の転入生だから。……今日も教導院に来なくて、学長と結城君と三河の方に出たりで。――――――私たちと違って、教導院の生活を通過点として捉えているみたいですよね

あと、東君も中等部からの編入なので、やっぱり、トーリ君のことを完全に解っていないと思いますよね」

でも、と浅間は直政を見て首を傾げた。

「どうしてそんなことを？」

その問いかけに、直政が苦笑した。

そしてややあってから、

「まあ、ちと歩くか」

と、直政が顎で道路を示す。

しかし、人とすれ違いながら彼女が行くのは、

「あ、あの、この、この道の先って」

解る。鈴が首を横に振る理由は、

「ああ、トーリと結城がいつも朝に寄ってる軽食屋があるんだよな。でも安心しとけ、この時間、鈴が恐れる相手は外に出てるさ。――――彼女、午後の墓参りしてんだ。知ってるだろ」

直政の台詞に、浅間はドキッとする。

歩み出した直政についていくように一歩踏み、

「ちょっと驚きです。マサが、彼女のことに興味を持ってるなんて」

「――――――大した事じゃないさ。大体、早朝や午後の仕事の一

服を外殻の非常階段で入れてると、聞こえてくるんだよ。あの歌が」

「あの歌と言いますとー……」

それも知ってるだろ?と、皆の先頭となった直政が、

「通し道歌。あたし達が、ホライゾンと一緒に遊んだときに唄った歌さ。道に石で陣を描いて、皆でそれぞれの腕の輪くぐって、……歌い終わったときに陣に残ってたら負け」

「ホライゾンは、変に気を遣うところがあって、たまに自分から負けるときがありましたよね。バレないようにしてるつもりがバレバレでしたっけ……」

ここで浅間は、直政の先ほどの発言の意図を理解した。付き合いの古さを問われたのは、

……私に、古い思い出を語れってことですよね。

ホライゾン。

記憶にあるのは、幼馴染の少年と同じ黒の髪と青の目を持った少女だ。線が細く、しかし、今思い返しても、芯が強く、優しすぎると思えるときが幾度かある少女だった。だが、それも、

「生まれが、大変な人でしたからね。……隣りにいたトーリ君が、どんどん馬鹿になっていったわけですよ。結城君も、あの時からだんだん壊れて行って、今の性格になってしまいましたよね。昔はもっと円滑だったのに……。結城君、何故か昔からホライゾンを気にかけていましたから。まるで優しい兄みたいに。しかし、ホライゾンもあれだけシビアな生まれだと。まあ、それを知ったのも――――」

一息。

「彼女が亡くなってからですが」

その言葉に、皆が俯く。しかし浅間は、自分だけ俯かずに、

「トーリ君と結城君はどう思ってるんでしょうね。今回の告白を、

片方は清算の始まりか、それとも継続か、もう片方は……、本人が言うまで分かりませんよね」

「結城さんの方は確かにわかりませんけど、総長の方は少なくとも、……オッパイ揉もうと思ってるは確かじゃないかと」

「ハ、ハイっ、そこしんみりしてるときにシビアな現実言わないっ」

だが、アデーレにそう言いつつも、浅間は肩が落ちるのを否めない。確かにそう思える自分が情けなく思い、そしてアデーレが言葉を続けて、

「そういえば浅間さん、さっき総長が言及してましたけど、総長に揉まれたことあるんですか？自分の知る限りだとそんなこと無かったような気がするんですが」

藪蛇もいいところだと、浅間は慌てて首を横に振り、

「いえ、その、私は……」

「あ？憶えてないかねアデーレは。アサマチったら初めてブラつけたとき、トーリから”反則だ！汚ねえよ！乳カバーかよ！”って後ろからおもむろに」

「ぅわあ――――――！何言ってるんですかマサは――――――！」

ははははは、と直政は笑いながら浅間の肩を平手で叩く。

「いいから笑っとけよ。――――――でな？アデーレ、でコイツったらマジ泣きしちゃって、丁度結城が現場に通りかかって、そのまま無言でトーリを素手で半殺しにしたんだけど、そしたらトーリ、性懲りもなくコイツに対して”ようし、じゃあ俺の乳を揉んでプラマイゼロだ！！”って、泣いてるコイツの手をとって自分の乳揉ませて”ええんか！？これがええんか！？”ってやって、今度は先生と結城に挟み撃ちされたのよ」

「……ああ、私その日は確か朝練引きずって遅く来たんですけどー、あれ、総長の乳揉めた浅間さんが嬉し泣きしてたんじゃないんですかー……」

「す、すいませんっ、私、アデーレの中でどんなキャラだったんですか！？」

「でもあの時の結城さんの無言で怒った顔は印象的でしたよ、滅茶苦茶怖かったです」

「今も昔も、結城が本気でトーリ殴ったのはアレが最初で最後だったな」

「た、大切に、されてるん、ですねっ。あ、浅間さん」

「わあ――――――――！！恥ずかしいからそれ言わないで！？」

またもや赤面する浅間に、いいじゃねえか、と直政が言った。

「――――――ひょっとしたら、明日から、こういう話題もしにくくなるかもしんねえしさ」

／※／

「明日は楽しくなるといいなあ。そう思わない？ガっちゃんの方は」

と、響く声が開放された通路に生まれた。

午後の青空が見える通路を走るのは金の六枚翼。武蔵アリアダスト教導院・総長連合第三特務のマルゴット・ナイトだ。

背中に箒を背負い、スピードメーター型の魔術陣（マギノフイグーア）を顔横に展開しつつ彼女が行くのは、船や、有翼の影が行き交う村山右舷の輸送横町だ。

武蔵中央側、右舷の壁をハッチとして開いた右舷輸送横町は、武蔵停泊時には逆側の陸港から受け取った荷物を武蔵野や奥多摩に送る配送口となる。

この時間、通路は各企業や個人配達業者で賑わったり、

「ガっちゃん、……喜美ちゃん見える？」

『Ｊｕｄ．、――――――武蔵野からはよく見えるわ。喜美が動いてないから』

ナイトの問いに答えたのは魔術陣の向こう、黒の六枚翼であるマルガ・ナルゼ。

彼女は現在、武蔵野上空あたりを飛行しており、

「それって、ソーチョーも動いてないってことだよね？後悔通りの前から」

『そうね。……トーリはもう十年も後悔通りを通ってないから。あの二人に対して、何かコメントある？』

そうだなあ、と、ナイトは小包みのカートから荷物を一つつかみ。

「一個ある急ぎの荷物って生徒会宛でね？配送票に思いっ切り”絶頂！ヴァージンクイーン・エリザベス初回盤”ってプリントあるんだけど、コレ頼んだの、ソーチョーだよね。教育ものみたいに包みをカモフラしてあるけど配送票でしくじったね」

『しんみりしたいのかツッコミたいのかどっちかにしなさいよナイト』

そう?と首を傾げたナイトは、横を見て、そこに見知った制服姿を見て、

「あ、セージュンだ」

ナイトのいきなりの呼び声に、正純は身を震わせた。

そして視線を振り返り、ナイトの姿を確認したあと、正純は彼女の押すカートを見て、

「……バイトか?」

「ううん、ナイちゃん正業、セージュンはどうしたの?ユッキーは一緒じゃない?」

「あ、ああ、三河の帰りなんだ。結城は酒井学長と一緒で、まだ三河にいる。それでまあ、私は学校の方、後悔通りの方に行こうと思って」

「Ｊｕｄ.、成る程ね、今の時間外舷側は混むもんね。――――――

―あ、そうだ。セージュン、ソーチョーが学校で夜に〝幽霊探し〟しようって。夜八時に階段のとこ。来る？」

ナイトの問いに、正純はわずかに安堵を感じた。

付き合いの短い自分を誘ってくれるのか、と。だが、

「あ、いや。さっき下で結城にも言われたんだけど……」

「駄目？」

疑問に対し、正純は視線を逸らしながら、

「うちは村山だから、夜に奥多摩に行こうとしたら夜番の番屋を通る。そうしたら父にも迷惑がかかるしな。それに、生徒会の人間が皆それでは、……示しもつかないだろうし」

「セージュンのお父さんって、暫定議会の偉い人だっけ」

「まあ、……そうだ、な」

どう答えていいものか迷っていると、不意に、ナイトが笑みと共に手の包みを掲げた。

「じゃ、これ、あげる。生徒会宛の荷物だよん」

は？という疑問と共に正純は荷物を受け取り、手にした包みの配送票を見て、

「何故、こんなものが生徒会に……」

「とりあえず持って行ってくんないかなあ。今だとソーチョーが後悔通りの近くにいるかもしれないし。……会っておくといいよ？」

「何故？何故に会っておくといいと？」

正純の疑問にナイトが答えるより早く、背後の吹き抜けの空に大き

な風が来た。

振り向けば、それぞれの服や、各国の古びたフライト仕様の制服を着た男女達が、箒や飛翔用の器具、または自分達の翼で空を舞い、止まっている。

その中の幾人かが、ナイトの方を見て、

「上がって来いよ”双嬢（ツヴァイフローレン）”！今度は負けねえ！年寄りの権威ってもんみせてやらあ！」

「……これは……、一体なんだ？」

通りに立つ正純が、理解できないように佇む。

それに対してナイトが説明する。

「あ、配達業者の皆がやってるレースや模擬戦。監視が無くなると始めるから”隠れ四辻（ゲハイムニス・シャパート）”って言われてるの。技術研究や講習会して、またそれの見物や賭けで収入もあるしね」

「間近で見たことはなかったが……」

「今度皆と来るといいよ?怪しい御菓子とか出るし月一でオールナイトやるし」

ね?と声を掛けると、空の皆も頷いた。

今、集まってる者達の服装や装備は、各国の航空隊のものが殆どだ。年齢層はバラバラだが、主に年上の異族や魔女が多いのは、異端狩りなどの迫害を避けて武蔵に集まった者達だからだ。

各国では教導院の卒業は無制限だが、極東では、十八歳で教導院を卒業する決まりとなっている。だから彼らはもう、武蔵に来た以上、現役ではいられない。だが、

「来いよ現役エース!古いエースどもが鍛えに来てやったぜ!」

「あははガっちゃんいないと全く歯が立たないけどね。――――――じゃ、セージュン。荷物を、ソーチョーに御願いね」

あ、うん、と頷く正純の前で、ナイトは空に身を飛ばす。

支えのなくなる浮遊感と、翼が自然と受ける風に対して、ナイトは

掌にスピードメーター型の魔術陣を出す。

『形式呼出：作品名”寝顔の始まり”：確認』

魔術（マギノマギ）は、消費流体を最小単位であるＡＴＥＬＬ単位で詠唱計算して行う術式だ。だが作った術式は術式媒体である焦点具に保存し、必要ならばその計算を即座に呼び出し詠唱不要だ。今も行うのはそれで、

『”寝顔の始まり”：五回起動：――――――確認』

同時、ナイトの手に持つ箒のブラシ部に三つ。先端に二つのスピードメーターが出た。

そして次の瞬間、箒のブラシ部から大気の爆発が起き、そのままナイトの身と視界が武蔵上空に出た。

高空から見晴らす武蔵に、ナイトは後から追ってくる陽炎と風を見る。

そしてその下、奥多摩の教導院前”後悔通り”の前に見知った人影が二つある。

……ソーチョーに喜美ちゃんか……。

動かぬトーリと、それを見守る喜美を確認し、ナイトは箒の先端を北の空へ向けた。

一周。それをしても、あの二人は動かないだろうなと、そう思いながら。

／※／

頬杖をつき、長い髪を風に靡かせながら、階段の上に座っている人影が一つ。

喜美だ。

彼女の眼下には大きな階段があり、第二校庭があり、その先にまた階段がある。

第二校庭では体育会系の部活が行われており、しかしそれらの動きの向こうに、喜美は視線を向けていた。

見るのは学校敷地の外。

石畳を模した樹脂材で舗装された通りの前に、一人の少年が立っている。

崩れた制服姿の、線の細い人物はトーリだ。

立ったまま動かない彼の後姿をしばらく見ていると、不意にトーリが動き出す。

彼は、くねくねしたり、反復横飛びを始めたり。街灯の柱でポールダンスを始め、

「フフフ愚弟、結構いい雰囲気だと思ったらぶちかましてくれるじゃない」

ポールダンスが行き過ぎて、トーリが街灯の柱を虫のように上りだしたときだ。

背後から声が聞こえた。

「トーリは何やってんの？あれ、叩き落したほうがいい？」

「フフフ先生、学食で酒飲んだって話だけどそっちこそ何しに来たの？」

「まあ先生は涼みに、かな」

と、酒瓶を小脇に抱えたジャージが座る。

わずかに乱れた髪を手で直すオリオトライに、喜美は眉を顰め、

「フフフ先生、手櫛はファッション以外にしちゃ駄目よ。髪が傷むんだからちょっと私に任せなさい」

と、喜美は懐から取り出した櫛で、隣りに座ったオリオトライの髪を梳いていく。

オリオトライはされがままに任せながら、しかし酒で上気した顔を緩め、空いた手で己の首もとに触れた。

そこにある鎖、胸へと落ちる対の鎖を指でもてあそびながら、

「頑張れ頑張れ」

言う視線は、柱の上に立っているトーリに向いている。

喜美は、彼女の後ろ髪を梳きながら、

「フフ、先生は、愚弟の味方になってくれる？」

「愚弟はどうだか知らないけど、葵・トーリの味方にはなるわよー。喜美や、他の誰でもね。――――――あ、でも学生間抗争に教員は関れないから、そこらへんの判断あるときは勘弁してね？」

そう、と喜美は頷いた。

オリオトライの逆側の髪を梳くために立ち上がり、

「先生。一つ聞いてもいい？」

「なーに？」

「結城のことについて、何か知ってる？」

「……何とは？」

オリオトライの問いかけに、喜美は彼女の逆側の髪を梳きながら、

「うちの愚弟が十年ぶりに後悔通りを通れるのかはまた別として、あのオトメンもこの武蔵に来て約十年。彼が酒井学長に連れてこられて間もない間にホライゾンがいなくなった。それ以来、彼は私達と普通に過しているけど、誰もそれ以前の結城を知らない。――――まあ、確かに、昔の事で訳有りなのは彼だけじゃないけど、名前を伏せてまで十年の人生をこの武蔵で過す考え方が理解できないわ。本名を知られたくないのなら、偽名でも使えば良いのに」

喜美の言葉に、オリオトライは空を眺め、少しだけ考えてから、

「んー、どうだろう。結城については、確かに知ってるけどね。――――とは言っても、武蔵で結城の”原点”を知ってる人物は限られているしねえ。私以外に知っている人間と言えば、アイツを連れてきた酒井学長と、武蔵総艦長である”武蔵”さん。そしてヨシナオ王かな？」

「あら？王様も知ってるの？」

「結城が武蔵に来て、丁度ホライゾンがいなくなった後にね。――――しかし、何で急にこんなこと聞くの？」

「あれも……、昔からよくうちで世話をしていたから。武蔵に来て直ぐに孤児院に放り込まれたけれど、聞いた話じゃ、周りと上手くやっていけてないみたいで、あの頃は、よく浅間んとこの神社に通って、トーリや皆とハシャいでいたわ。私にとっても、二人目の弟みたいなものよ。中等部以降は、あんまり家にも顔を出さなくなったけど」

一息。

「愚直なトーリと違って、結城は前に進めない性質でね。崖の底ををジッと見詰めて、しかし下がる事には妥協しない、トーリとは違う方向の馬鹿なの。ホライゾンがいなくなってから更に重症になって、そうやって自分を閉じ込めて、どんどん壊れていった。トーリも、ホライゾンだけじゃなく、結城までも自分のせいで変わってしまったと思ってるのでしょう。結城、何時もホライゾンを妹みたいに可愛がっていたから。あの事件の後、彼は逃げるように術式や武術練習、そして臨時相談役の仕事に没頭していった。傍にいた浅間が頑張って引き摺り出そうにも、本人はそれでも断崖から離れようとしない。本当に困った子」

「浅間の人間射的の騒ぎって、まさかそれが目的？――――――だ

ったらマジ性根腐ってるわね。結城が頭を抱えたがるわけだ」

半目で言うオリオトライの言葉に、喜美は微笑みながら答える。

「でも効果がないわけではないわよ？――――――先生、憶えてる？中等部の時、トーリが浅間の胸を揉んで、それで浅間が泣いたのを、結城が代わりに成敗したときの事」

「ああ、あったねえ、そんなこと。あの時は先生マジでびっくりしたよ。結城、本気で怒ったときって無言で殺気垂れ流すから、本気でトーリ殺そうとかと思ったわ。結局、浅間に泣き顔で止められて半殺しで終わったけど。って、あれ？それって……、止めなかったら、トーリ、今頃墓の中ってこと？」

「さあね。でも、それ以来、トーリは一度も浅間にセクハラをしたことがなかったわ。そして結城も、あれからだんだん肩の力を抜くようになった。でも壊れてしまった心は、結局治らなかったけど……」

「トーリは結城の地雷を知ってしまったからか。そんで結城は、あのときようやくホライゾンが亡くなったという現実を受け入れた。今でも憶えてるわよ、浅間がトーリを殴る結城を止めに入ったとき、言ってた言葉を……」

「”私はもう大丈夫ですから、これ以上自分を傷つかせないで”……か」

哀れむような喜美の口調に、オリオトライは暫し考える。

しかし喜美は続けて言った。

「あの時、結城は拳の皮が剥れるまでトーリを殴ったわ。それで浅間に止められたのよね。……止められるまで、自分が傷をしたことに気付いていなかった」

「今振り返ってみれば、アレがトーリと結城がした最初で最後の喧嘩だったたね。一方的な撲殺だったけど……」

オリオトライの言葉に、喜美は困った笑顔を浮かべる。そして、

「あの馬鹿な結城（おとうと）は、何を思って、この武蔵で過してきたのでしょうね……」

顔を俯かせて呟く喜美に、オリオトライはややあってから立ち上がった。

そして、既に酒の引いた顔で喜美の方に振り返り、こう言った。

「これは先生の独り言よ。誰にも言ってないし、誰にも聞こえていない。喜美が此処にいたなんてしらないし、酒のせいで口が滑っただけ……」

オリオトライの言葉に、喜美は逆光に遮られた彼女の顔を覗き込むように、

「結城は、ホライゾンの……」

「……へ？」

風が吹き抜ける。

空を駆け抜ける配達業者群の起こす風と陽炎の轟きによって、オリ

オトライの声が翳んだ。

しかし喜美は確かに聞こえた、教師の口から紡がれた、語られるべきではない真実に。

第四話～語る思いは常に過去形～（後書き）

どうも、皆さん。クロＤｅａｔｈ。

ようやく本題に入ろうとしたところでナイスなアイキャッチ。

そんな意地悪な俺、只今土下座中です。（全裸待機）

とまあ、ここから結城の過去を明かしつつ、序盤の山場である三河消失篇に入ろうと思います。

そしてクライマックスはホライゾン救出篇。

楽しみにしてください。

あと、結城のステータスは境ホラ風に書くと以下の通り。

名：結城・ＸＸ

属：武蔵アリアダスト教導院

役：臨時相談役

種：近接武術師

特：妖刀　（ネタバレ）

では、また次回。

第五話～崩れた願いの先に続くのものは～

「結城様、こちらです！早くお逃げください！」

それは、余りにも鮮明で、鮮烈な色だった。

赤い、何処までも赤い世界。

炎の赤、鉄の赤、血の赤、憎悪の赤、悲鳴の赤。

今よりもっと昔、馬鹿な梅組と会う前、幼馴染と会う前、武蔵に渡る前、本当に子供だった頃の、オレの原点だったときのことだ。

乳母だった若い女性に手を握られ、オレは豪雨の降る夜道を走っていた。

しかし首は振り返ったままで、今でも心の中で燃え続ける、あの屋敷をジッと見ていた。

そんなオレを支えるように、あのときから決して傍を離れない物があった。

今でもオレの背中にある、白い布で覆われた、長い棒だ。

本来は腰に帯びて携えるものだが、オレは一度も封印である布から抜いた事がないため、そのまま後ろに背負っている。

乳母の教えで、”あの方”と会うまでは決して抜いてはならないと言いつけられた。

あの方とは、オレの実の父親の事だ。

オレは極東人であるが、生まれはそうでもない。

オレは生まれる前に、オレを身篭った母親と共に別の国へと渡った。父は故郷に残り、理由は解らないが、母と共にはいられないのだという。

そしてオレは異国で生まれ、しかし母親ではなく、母に付き添っていた使用人を乳母として育てられた。

オレが異国で三歳を迎えた時、オレは乳母に連れられて、極東へと戻ってきた。

元いた国の領主の意向でそうなったと、後から乳母に聞かされたが、本当は自分が売られたという事実に、幼い自分は最初から気付いていた。

それからオレは、極東の大名の一つである結城家に引き取られた。結城の姓を名乗り始めたのもその時からだ。

結城家は武術の名門であると同時に、刀鍛冶でもある。

領土に武装開発用の工房を持っており、消耗品としての刀や槍、脇差などを主に鍛えていた。

三河当主でもある松平家とも協働しており、暗に松平家の懐刀と呼ばれたこともあった。

結城家は、大量生産品でありながら、白砂代座に引けを取らない、品質の優れた武装を続出していたが、対外的に売り出さない姿勢から神州全体的に知名度が低く、当時に進められていた大罪武装の設計・開発案の陰に隠れてしまい、徐々に没落の一途を辿った。

しかしその原因は貿易能力ではなく、他にあった。

工房の総監督であると同時に、当時の結城家の当主でもある、オレの養父が原因だった。

養父は、いい人だった。

しかし、それだけだ。

記憶では、オレに父親らしいことをしなかったが、虐めてもいなかった。

実の子がある以上、養子であり、乳母のあるオレに構う事もないのだろう。

そして養父は、刀に対して非常に愛着を持っていた。

歴史再現の足枷によって、未だに銃器を持てない極東で、彼は近接兵器の有用性を高めようとした。

他の国に対して、極東の戦力は確かに衰えているが、より優秀な武器を開発することが、極東の国力を高める手段の一つだと、彼は信

じて疑わなかった。

聖譜記述を研究し、歴史の中で記された様々な刀剣を参考し、今の技術で統合、研究した。

熱狂的なその姿は、愛国心から来るものだった。

家臣の誰もがその姿に微笑み、賛同し、協力した。

工房の技術を総動員し、この先、幼いオレも含めて、誰もが上手く行くと思っていた。

始まりのあの日、あの刀が作られるまでは。

数多の失敗と試行錯誤の果て、研究が袋小路に入った時の事だ。

大罪武装の計画が順調に進む中、周りからの期待もあるだろう、養父は焦っていた。

ストレスとプレッシャーに追われ、しかし諦められなかった養父は、聖譜記述に記された一本の刀に縋った。

それは、極東では再現してはいけないものだった。

理由は解る。

歴史再現や聖譜を研究しているものならば、必ず気付く曰く付きのものだ。

それでも、養父はそれを完成させた。

独自の技術と、厳選した素材で鍛え上げた神格武装を、彼は満面の笑みで掲げた。

しかし、同時に怖かったのだろう。

その刀の伝説を知ってるが故に、養父は刀の存在が外に知られるのを酷く恐れていた。

養父はその刀を封印用のベルトである布で包み、それを倉庫に仕舞っておいた。

ここまでは、まだ良かった。

しかし、問題なのは、その刀を再現した事が、協働していた松平家に漏れた事だ。

刀が作られた翌月、あの日の夜、結城家が滅んだ。

松平家の手によって、粛清されたのだ。

屋敷は焼かれ、家臣や使用人達は殺され、工房は破壊された。

理由は当然、その刀のせいだ。

あの時は、本当に理解できなかった。

いや、今でも理解できていなかったのだろう。

養父は国のために努力したのに、それが報われずに国に殺された。

たった一本の刀によって。

あの日。

養父は、崩れ行く屋敷の中で、生き残ったオレにそれを渡した。

そして教えてくれた、オレの実の両親のことを。

淀んだ怨恨と、悲惨な断末魔を持って、養父は松平家に対する呪いの言葉を残して、赤い炎の海に沈んだ。

それからオレは乳母と共に放浪し、偶然の中で酒井学長と出会った。

「この子を、松平の手の届かない場所に送って頂けませんでしょうか」

乳母の、疲れきった声が耳に響く。

松平四天王の一人に、そんなことを頼むのは見当違いだと知りつつも、オレのことを聞いた酒井学長は驚きながらも快諾してくれた。

丁度、彼が左遷されたその時期で、オレは酒井学長と共に武蔵へと渡った。

乳母は、一緒に来てくれなかった。

オレを生かすために、自分の人生を削った彼女は、最後に病に倒れた。

オレは、結城家と乳母の命を犠牲に生き残った人間だ。

武蔵に上がったオレを、酒井学長は孤児院に預けた後、謝りながら去っていった。

あの時の学長の、後悔に似た後姿を、今でも覚えている。

まあ、今の学長からは想像出来ない話だがな。

そしてオレは、武蔵での生活を一人で始めた。

色んなことがあったのだろう。人生の半分を人質に似た中で過したオレは、乳母以外に信じられる人がいなかった。

それが原因で、孤児院でも上手くやって行けず、オレは何時も武蔵内を一人で歩いている事が多かった。

そんな時だ、浅間神社についたのは。

氷点下、雪の降る寒い日のことだ。

あの日の午後。オレは気晴らしとも言えない気分で、そこについた。

理由はいたって単純だ。

歌に惹かれたからだ。

長い階段を登って、大きな鳥居が立った神社の正面を通り、オレは複数の子供が一緒に歌う童謡の声に向かって歩いていた。

そして辿りついた神社の中庭で、オレはあいつ等に出会った。

今では馬鹿に育った、憎めない姉弟。

何時の間にか、色々と世話を焼いて焼かれている、幼馴染の巫女。

そして、妹として可愛がっていた、初めて見た瞬間に気付いた、オレとなんとなく似た、大切な少女。

「ホライゾン……」

それが多分、オレが始めて自分の居場所を見つけた瞬間だった。

渡り鳥みたいな自分の人生の中で、ようやくオレは、自分の羽根を休ませる巣を見つけた。

あいつ等に引っ張られて、オレの周りにも仲間が増えてきた。

騒がしい毎日、しかし何処か一歩踏み出せない自分。だがそれでも、賑やかな毎日が心地よいと感じていた。

しかしそれも、明日で十年目を迎えるあの日に崩れた。

ホライゾンが死んだあの日。

オレは初めて、憎悪を知った。

隠せない膨大な負の感情を前に、オレは自分を閉じ込めた。

それはこの世の理不尽と、あの男に対する憤りだ。

それからオレは壊れていって、しかしそんな自分を見るのが耐えられなくなって、中等部の時には、臨時相談役として仕事漬けになってしまった。

現実逃避なのは解っている。それでも、怖いものは怖いのだ。

葵家には寄らなくなり、通っていた浅間神社も、上位契約を結んで以来、足を運んでない。

授業にも、臨時相談役の仕事を言い訳にして、碌に顔を出していなかった。

周りの声が聞こえずに、差し伸べられた手にも気付かない。

自分が徐々に削られていくのが解っても、しかし止まらない。

この背にある得物を見るたびに、嫌な記憶が蘇る。

結城家に売られたことも、結城家が滅んだ事も、乳母と別れたことや、ホライゾンが死んだ事実が、怨念のように付き纏う。

押しつぶされそうになった。

そして、そんな限界を迎えた時だった。

中等二年の秋頃。図書委員の事務を手伝いに、梅組の教室を通りかかった時だった。

馬鹿姉弟の弟であるトーリが、何時ものように智に意地悪していたのが見えた。

別段、珍しいことではない。昔から見慣れた光景だ。

アイツの悪ふざけに限度はなく、例え生まれ変わっても治れないものだと、この武蔵では既に常識だ。

あの時も、普段のオレだったら、特に意識することなく、そのまま通り過ぎていただろう。

しかし、数年間蓄積したストレスが限界に達し、本当に参っていたのか、智が本気で泣き出したとき、オレの箍が外れた。

無言で教室に踏み込み。

驚いた回りの視線や、真喜子の呼び声にも気付かず、泣いている智の声が心に突き刺さり、笑ったような目をしたトーリの顔が、血まみれになったホライゾンの姿を思い出させ、

「どうしてテメエは、そうやって笑っていられるんだ！！」

その後は、一方的だった。

ただ只管殴り続け、拳が割れて、血が滴り落ちたことにも気付かずに殴った。

どうしてこの男は普通でいられる？

どうして何時ものように笑っていられる？

ホライゾンが死んで、自分も傷を負って、あの時も、誰よりもあの娘の近くにいたくせに……。

――――――どうしてお前だけが生きて帰ってきたのだ！？

八つ当たりなのは解っている。

トーリだって、本当はまだ立ち直っていないというのも知っている。

彼女が死んでから数年。

誰も責任を感じていないわけではない。

なのにオレは、自分の弱さから逃げるために、トーリが彼女を救えなかったのを口実に、彼を殴った。

アイツの身体を殴るたびに、壊れていた心が傷むのが解る。

肉を打つ音が響く度に、今の自分が嫌になる。

それでも、止まれなかった。

周りの皆はオレに怖気づき、真喜子や喜美も止める素振りをしない。

無言で殴り返さないトーリに、更に腹が立ち、そろそろ本気で殺そうかと思ったとき、誰かが振り上げたオレの拳を抱えて止めた。

智だ。

彼女は、震えた体でオレにしがみ付き、泣き崩れた顔で言った。

「わ、私はもう大丈夫ですから、……これ以上自分を傷つかせないで！！」

その言葉に、オレは始めて、拳が怪我をしているのに気付いた。

トーリに対する気遣いが皆無な点は置いといて。

その言葉の意味を、オレは知っている。

――――――自分ばかり、責任を負うな、と。

そう言いたかったのだろう。

懇願するように、自分を抱きしめている智に、オレの熱が冷めた。

周りを見渡せば、誰もが視線をこちらに集中している。

その中で、真喜子の隣に立つ喜美と目が合った。

彼女の瞳に映る自分は、酷く憔悴しおり、目にも力がない。

まるで自分が自分じゃないかのような姿に、オレは力の抜けた拳を下ろした。

その後はややあって、謝罪を込めたトーリの二回目の悪ふざけに真喜子と一緒に成敗した後、オレは走りながら教室を出て行った。

そして、臨時相談役の仕事を放り出し、自己険悪で教導院を離れたオレを、馬鹿姉弟と智が追い駆けてきた。

「なに自棄になってんだよ、結城。オレはこの通り、なんともないぜ？」

本当に平気な顔でヘラヘラ笑うトーリに、今度は素で撲殺しようかとこのとき思ったが、断念した。

しかし無言で視線を逸らすオレを、アイツは、

「すまない、許してくれ」

「へ？」

それは、葵・トーリを知る人間からは想像出来ない、心の篭った、真摯な謝罪だった。

あの時は、本当に理解できなかった。

智のことで謝るなら智に対するべきだし、それに殴ったのはオレだから、謝るのべきはオレの方だ。

しかし、

「俺は、ホライゾンを守れなかった。――――――そのことで、結城が色々と参ってんのに、俺はホライゾンだけじゃなく、結城からも逃げていた。お前がホライゾンを大切にしてたのを解っているのに。俺はお前と目を合わせるのが怖くて、ずっと避けていた。本当に、すまねえ」

このとき気付いた。

コイツも、オレと同じなのだと。

彼女の死を受け入れられずに、どうしたらいいのか分からずに、自分を偽って、何事もないフリをしていた。

なのにオレは、感情に任せて一方的に殴りつけて……、本当に最低だ。

それに、恐らくコイツは、ワザと殴り返さなかったのだろう。

オレに殴られることで、少しでも自分の罪を償おうと。

「……ちっ、ズルイ奴だ」

「え？何？赦してくれんの？」

「煩い！あ・の・な、……お前に先に謝られると、オレが悪役みたいに見えるじゃねえか！？」

「ええ～？でも、先に悪かったのは確かに俺だしー……」

「ちょっとトーリ君。その辺は先に私に謝るべきなんじゃないですか！？」

「フフフ浅間。そのことはもうお相子じゃなくて？」

「そんなの納得できるわけないじゃない！？」

「おい、二人とも。今、すっげえ良い空気してんのに邪魔しないでくれる。これからオレと結城の超泣かせる男の友情シーンが始まるってのによお」

「喧しいわ、このボケ！？」

ホント、悪ふざけが過ぎる男だ。

しかし、そんな何時もの馬鹿に、自分も何時もみたいになれた気がした。

「フフ、もう大丈夫みたいね、負け犬」

「うっせ。――――――喜美、お前ワザと止めなかっただろ？オレが本当にトーリを殺したらどうすんだ？」

「その辺はあんたのラブリーな浅間が止めたから問題ないわよ。――――――にしても浅間、結構大胆ね？その成熟しそうなナイスバディで、猛り狂う結城の情熱を浄化するなんて！流石幼馴染！！素敵！！！」

「ちょっ、喜美、大声で何言い出すんですか！？私は別にそんなんじゃ……！！」

「二人とも素敵だったわよー？――――――男前で教室に入り込んでくる結城も、涙ながら抱きしめて止める浅間も、ベタな昼ドラより絵に写るわ！エクセレント！！」

「なあ、姉ちゃん。自分で良い空気吸ってないで、少しは俺にもフォローしたら？弟が親友に殺されそうになったんだぜ？」

救われたとは言い難いが、肩の力が落ちたのは確かだ。

結局あの後、オレ達は馬鹿な会話を駄弁りながら帰宅した。

そしてその日の夜。

高尾の自宅に帰ったオレは、昼間のことを引き摺ったせいで、寝付けないでいた。

色々あっても、オレの中ではやはり、ホライゾンのことは大きかったのだろう。

気晴らしをしようと、夜中に散歩に出かけたオレは、しかし行く当てもなく、気がついたらそこにいた。

「久しぶり……かな？」

足を運んだのは浅間神社だ。

正面の大鳥居を前に、オレは中庭に入らずに、登ってきた長い階段の一番上に座った。

今から入っても迷惑を掛けるし、気分が晴れたら帰るつもりだ。

静かな秋の夜。

広大な星空の下を渡る武蔵の中で、オレは空の星を眺めながら、今までの過去を振り返った。

決して、幸せといえるばかりじゃなかった。

だからこそ、オレはようやく掴めた安寧を守ろうとした。

しかしそれでも、運命は悪戯にそれらを崩し、オレから大切なものを奪っていった。

神様が普通にいるこの世界で、運命が既に神のルールと違って、乖離して独立することが知られた中で、どうして自分はそれでも抗おうとするのか。

諦めたほうが気軽に生きて行けるのに、なのに自分は、それでも折り合いがつけられずに必死になっている。

「トーリの事を言えないな。オレは……」

自分も馬鹿なんだと、昔ホライゾンに言われた事があった。

あの時は断固として否定したが、今思えば彼女は正しかった。

未だに彼女に未練を残した自分に対し、嘲るように鼻で笑ったとき、

「結城君?」

「ん?」

問いかけの声に、オレはゆっくりと振り返る。

そして其処には、簡素な長着を着た智がいた。

艶やかな黒髪はやや湿っており、頬も少し火照っている。

風呂上りだろう、と判断したオレは、少しだけ開けた智の胸元から見える谷間に気付いた瞬間、光速で視線を逸らす。

「どうしたの？こんな時間に……」

「あ、いや……、なかなか寝付けなくて、気晴らしに散歩してたら、ついここまで来ちゃって……」

慌てて言葉を出すオレに、智は首を傾げながら傍に歩いてくる。

裾を整いながら、隣りに座る智をなるべく意識せずに、オレは視線を虚空へ泳がせる。

やばい、本当にやばい。

昼間のことが記憶に蘇って、心が妙に智を意識している。

風呂上りのせいか、智の熱い吐息が近くで感じるし、顔に張り付い

た髪やうなじ辺りが無駄に色っぽい、て言うか、横から覗き込める胸の谷間がエロイ。

そしてなんでコイツ、こんなにも良い香りしてるんだ?!

て、あれ?そう言えばこの匂い、この間買ったボディーソープに似てるな、余ってたのを智にあげたようなないような。

クソっ。ガキの頃からの付き合いだが、今日ほど智を意識したことなんて記憶にないぞ。

確かに昔と比べて美人になったが、って、いや、そういうことじゃなくてだな!?

と、やや赤面ながら首を横に向いて、あれこれ考えているオレに、智は怪訝そうな目でオレの顔を覗き込むように、

「どうしたんです?結城君。そこに何かあるの?」

「あ、いや。なんでもないぞ、……うん!なんでもない!」

「……そう?」

いきなり声を掛けられた事に少しビックリしたが、ようやく落ち着

きを取り戻した。

そんなオレに、智は考え込むように俯き、ややあってから、

「結城君」

「……なんだ？」

「結城君は、ホライゾンの事が好きなんですか？」

……へ？

突然の問いかけに、オレは疑問を浮かべながら言葉を失くした。

今、この幼馴染はなんて？

オレが、ホライゾンを、好き？

本日何度目か分からない唐突な言葉に、オレは右の人差し指で額を押さえながら考える。そして、

「ええ、と。どうしてそう思うわけ？」

「え？だって、結城君、昔からホライゾンのことばかり見てたし、ホライゾンがいなくなってから、結城君、皆の事避けてましたし、昼間のことだって……」

「いや、それ、妹として大切にしているけど、恋愛感情じゃねえぞ？……うん、これ断じて言える。ホライゾンは好きだけど、それ、家族としてだから……あ」

急に途切れたオレの言葉に、智は首を傾げながらオレを見た。

固まって動かないオレに、智は心配するように、

「どうしたの？……結城君？」

「いや……オレ……」

智の問いに、オレは動けずにいた。

さっき自分が言った言葉、”家族”に対して、オレは身動きが取れずにいた。

オレにとって、家族とはなんだ？

親に棄てられ、乳母と一緒に転々とし、人に売られて買われて、この武蔵に来た。

そんなオレが、果たして本当の意味で、家族という事を理解しているのだろうか？

両親は、オレを必要としなかった。

国は、オレを駒としか見ていなかった。

養父は、オレを悲願達成の手段として逃がした。

幼い頃に分かれた乳母は、今では顔すら思い出せない。

どうしてだ？

あれだけ世話になったのに、どうして思い出せない？

身寄りのないオレにとって、彼女がたった一人の家族だというのに。

オレにとって、家族とは、時間と共に忘れられるものなのか？

嫌だ。

怖い。

忘れるのが、忘れられるのが怖い。

やっと手に入れた安寧も崩れ去った。

大事にしていた少女を失い。

本当に忘れようとしていた忌々しい過去だけが粘りついてくる。

自分の原点である、あの赤い色から逃れられない原初の恐怖に、身が震える。

守るように身体を抱きしめ、しかしそれでも悪夢は離れない。

そして、渦潮のように心を締め付ける悪寒の中で、オレが本当に怖いものは、

――――――こんな風に、いつかホライゾンのことも忘れてしまうのか……？

嫌だ、そんなの。

オレに居場所を与えてくれた、大切な人を忘れる？

想像したくない。

あんなに大事にしていたものが、気付いた頃には初めから無かったみたいに。考えるだけで吐き気がする。

しかしそんな事を後押しするように、実際にオレは、乳母の顔を思

い出せない。

そしてなにより不安なのは、もしかしたら、自分もこんな風に忘れられるのではないのだろうか？

そんな不安が、余計にこの恐怖を増長させている。

震えが止まらない、脂汗が滲み出ているのにも気付かない。

寒い。

季節は秋だが、まだ寒さを感じるには程遠い時期だ。

だというのに、裸で極地に立っているかのように体が凍え死ぬように寒い。

そしてそんな時、急に横から誰かが抱きついてきた。

「大丈夫ですよ。私が、ここにいますから」

優しく、暖かい感触に、震えが止まった。

泣き止まない子供をあやすように、智がそっとオレを抱きしめた。

そして智は、囁くような、ゆったりとした口調で、

「私には、結城君が過去に何があったのかは知りません。結城君が言わない限り、その苦しみを知ってあげる事も出来ません。――――ホライゾンがいなくなって、一人で壊れていく結城君を、私はただ見ていることしか出来なかったから」

智の言葉を、オレは静かに聞いていた。

「私、色々と考えてたんですよ？……結城君って、一度も泣いたこと無いじゃないですか？――――――ホライゾンが亡くなった時も、一人でやせ我慢して、一度も文句を言わなかった」

そう言えば、武蔵に来る以前だって、確かに泣いた記憶はなかったな。

「だから私、アレから決めたんです。絶対に結城君を泣かしてやるって。――――――でも結城君って、意外とガード堅いですから、代わりに私が先に泣いちゃいましたけど」

昼間のアレか、思い返してみれば、智が本気で泣いたのも久しぶりだった気がする。

前は、オレが練習で怪我をしたときか……

「色々考えて、試して、どれも失敗しましたけど。今ようやく、答えが見つかりました……」

智の言葉に、オレは少し顔を上げる。

そして彼女はややあってから、

「決して、忘れません」

一息。

「何があっても、私は結城君を忘れませんし、結城君も、決して私や、皆のこと、そしてホライゾンも忘れたりはしません。――――――仮にもし、結城君が忘れそうになったら、その時は私が思い出させて見せます。狭い武蔵の上です、私達の思い出は色褪せず、私

達がいる限りそこにいます。……ホライゾンが、今でも私達の心の中にいるように、結城君も、ずっと皆の中に居続けます。だから……」

だから……

「もうこれ以上、……ホライゾンのことで自分を責めないで下さい」

最後の言葉に、オレの頬を暖かいものが伝った。

声にならない叫びを、智に聞こえるだけの距離で、オレは彼女の腕の中で泣いた。

あれから幾年。

この時ようやく、オレは少女ホライゾンの死を実感したのだ。

／※／

「――――――というわけだ。悪い記憶しかでないわな、昔のこと

なんざ」

「ええ、全くもって同感です」

「やっぱり結城は分かってくれるな、俺嬉しいよ」

「いえ、同感したのはオレの事なんで、学長に合わせるつもりはサラサラありません」

と、木造の屋内に野太い男と、男の言葉に対して頷く少年の声が聞こえた。

場所は三河郊外、二十畳程度の、厨房とカウンターを持つ空間。

酒や軽食を出す小さな食堂だ。

入り口側は木のテーブルと椅子が並ぶが、奥の半面は畳敷きだ。

声はその畳敷きから、

「とまあ、いいかあ、そういう昔を忘れて心機一転、左遷でいじけたお前に対し、ようやく十年ぶりに我らが会おうと言い、昔馴染みの場所まで予約とって用意したというのに――――――」

と、奥の卓を囲んでいた酒井と忠勝と榊原、そして結城と忠勝についていた少女という皆の内、忠勝が酒を飲み干した中徳利を声と共に卓へ叩きつけた。

「酒井、お前、折角というのに連れを差し出して盾にするのはねえだろ！？」

「あのな、フツーは再会した偉い御友人様に娘つっかけさせないだろ？二代（ふたよ）だっけ？名前。昔に見たことあるが、強くなったもんだ。それをマジにけしかけるなんて十年前と同じでダっちゃん頭おかしいだろ？うちの結城が手加減してなかったら今頃娘の墓参りだよ？ダっちゃんてＲＰＧやると、戦闘ですぐに即死呪文掛けたがるタイプだよね」

「やかましい、貴様はいつもそうやって自分勝手だから武蔵の学長に回されたりするのだぞ！？つまりだなあ――――――」

「おいおいダっちゃん、昼から酔って話を三ループもさせんなよ。つうか学長いいぞ？若い女の子と話がしたいとき、女教師と話をしたいとき、若造全員整列させて朝礼やりつつ心の中では超軍隊指揮官ごっこをやりたいとき、如何だよ学長職。なあ榊原！」

「何故に私に回しますか君は」

言うと、酒井と忠勝は二人揃って榊原を見て、

「――――――――お前、ホントに昔から反応が悪いな！」

と、忠勝の背後の少女、二代が小さく手を挙げた。

「父上、さっきから三ループ分、榊原様が虐げられてる気がするので御座りますが……」

「ああ、二代、お前、十年前の我らのノリとか、憶えとらんか。我も、十年ぶりに会って、まさかこうまでソッコで当時リフレイン状況になるとは思わなかったが……」

Ｊｕｄ．、と二代は頷く。軽く座礼して、

「出来れば、改めてご紹介を――――――」

／※／

剣を学ぶ本多・二代にとって、父である忠勝を含む松平四天王は特別な存在だ。

現在、三河は人払いや新名古屋城の稼動による怪異の多発によって、人が少なくなっている。数少ない人間の重臣として残ってるのは父や榊原だけで、他は自動人形に襲名権を奪われたり、辞退して去っている。

本多家も重要なものを松平別領の江戸に移し、郊外に小さな屋敷を持つ有様だ。

二代も、ここ数年は中央側に足を向けていない。が、今日、”昔馴染みの場所”と言われたここが中央に近いため、内心では怪異の発生などを警戒しっぱなしだ。

……それなのに父上は剛胆で御座る……。

彼ら、松平四天王の人気は、郊外に移り住んだ人々の間において未だに高い。最近、出張とやらで井伊・直政を見ないが、彼や父、榊

原は三河に残った人々の顔役となっている。

そして人々は、酒井のことも口にする。

……実質、松平四天王のリーダーとされる御仁。

昔に会ったことがある。

話もしたことがある。

が、十年以上前のことで、よく憶えていないし、相手の存在価値も意味も解っていなかった。

単なる猫背のオヤジだとばかり。

だから、四天王の内、酒井だけが二代の中から抜けている。

人々の言う評価、政治、武道、人格への称賛はどれほどのものなのか。

そして今、本人が目の前にいるが、二代としては、もう一人気になる人物がいる。

忠勝の後ろに控えた自分と違って、酒井の隣りに堂々と居座っている黒髪の青年。

先ほど、酒井に対して奇襲をかけた自分を一瞬で下した人物だ。

……名は確か、結城、とか言ったな……。

松平四天王と同席しているということは、この男もかなりの大物ということだろう。

食堂に来る前に簡単に自己紹介されたのを思い出しながら、二代は結城を観察する。

年は自分と同じ。

やや女顔で整った顔立ち、肩まで掛かった宵闇の髪を背後に束ね、空色の済んだ瞳は宙に視線を泳がせている。

体格は見た感じでは標準値だが、あの知覚出来ない並外れたスピードは伊達ではない。

筋肉などの身体性能ではなく、技術や経験などの、”内側”を鍛えているタイプだ。

それにその背中に携えた長い得物の正体も掴めていない。

と、二代が考えているうちに、

「どうかしたか？」

結城の方からの問いに、二代は我に返る。

「あ、いえ、失礼しましたで御座る」

「御座る語尾って、点蔵思い出すなあ。あ、点蔵はうちの級友の忍者のこと。――――――っつうか、古風な家系持ってる奴って皆こんな風に話すのか？」

「さあ、どうでしょう。拙者は素で御座いますが」

若者二人の会話に、酒井がゴホン、と咳をして促す。

それに対して、二代は失礼なことをしたとやや頭を下げ、対して結城は不機嫌な半目で酒井を睨み返す。

「……なんです？」

「いや、ここって普通に考えれば俺が先に自己紹介するシーンじゃね？」

「あ、そ、お好きにどうぞ」

結城の素っ気無い態度に、酒井は冷や汗掻きながら二代に振り返る。

「まったく面倒だねえ、結城は。あ、俺、酒井・忠次ね。君のお父さんとかよりマジ偉いから。俺と君のお父さんは地元組で、そっちの榊原と、ここにいない井伊は、小四からの編入組。三十年前だっけ、武蔵アリアダスト教導院が武蔵に来たとき、こいつら余所から入ろうとしたんだけど入れなかったの」

「あの時期は、アリアダストが開放的であることを示すために異国人の編入を第一としてましたからな。私や井伊君は神州のためを思って編入を辞退したまでです」

「うわ言い訳上手いねえ。ともあれ学生時代は殿先生、――――――元信公が学長兼永世生徒会長だったから俺総長で、君のお父さんが特攻隊長」

「副長って言えよ馬鹿野郎。今でも三河の特例として聖連認可の特殊予備役副長だぞ」

「無視するけどいいよね。んで、井伊が副会長で、この榊原がまた口先だけの男でなあ」

「口先……」

酒井の勝手な物言いに、榊原のこめかみに青筋が浮いているが、二代は何も言わない。

大人の話題だ、子供は口出しせぬのが得策。

向こうにいる結城も、黙々と出されたお茶を飲んでいるだけだ。

そして、次の瞬間に、大人の方からこちらに話題を振ってきた。

楽焼の日本酒ピッチャーを掲げた酒井が、笑みでこちらに問うてきた。

「ダ娘君、そろそろ体育会系親父の洗脳解ける年頃でしょ？　反抗期でしょ？　うちの教導院来ない？　君みたいなの、かなり欲しいなあ俺。本多・正純もいるよ？　憶えてる？」

ダ娘……、と、二代は口を歪めて呟く。しかし、今の言葉には見知った名前があった。

「正純とは、中等部以降、あまり顔を合わせておりませぬが、武蔵に行ったと聞いておりました。今は何やら副会長になっているとか……」

「そうそう、だから、うち来ない？　ステレオ本多は面白いと思うんだよなあ。……それに、うち来たらここの結城君、好きに弄っていいよ？」

「おい、糞ジジイ、その前に先ずはテメエから微塵切りにしてやろうか？」

酒井の問いに、結城がキリっ、と険悪な視線を向ける。

それに対して酒井はそっぽを向き、口笛を吹くフリをする。

……結城殿って外見に似合わず、かなり剛胆な人物で御座るなあ。まさか一睨みで酒井殿を黙らせるとは……。

コレが武蔵流のコミニュケーションだと二代は知らない。

すると、酒井とこちらの間にある父が、酒井に聞こえるような声で、

「二代、あんまり気にとめるな。あれ、昔から”自分は他人に好かれている”という勘違いをしてる可哀想な男でな。小等部のとき、卒業文集の先生からの質問で”友達何人出来ました？”って聞かれると”全員！”ってためらいなく答えるタイプ。榊原が”無”って書いてるのと超矛盾するんだが、しょうがないから我らが防波堤になっているのだ」

話の後半あたりから、向こうの榊原が手を小さく左右に振ってみせている。

……大変だったので御座ろうなあ。

と、二代は思うが、しかし今、酒井に問われているのは確かだ。

……武蔵に来い、か。

極東唯一の領土。移動によって極東全域を回る航空艦。

環境のいい武蔵の学長が誘うのだから、フォローも万全だろう。

そしてなにより、

……結城殿のような強者と手合わせ出来るのは魅力的な話で御座る。

だが、答えはすぐには出せない。なぜならば、

「まあ、少し待て、酒井」

と、父がはっきりした口調で言った。

「どっちにしろ、今、三河は武蔵や他国との交流不許可だ。去年なら違ったが、今年は武蔵に行かせようとしても出来ん」

その理由は、

「お前んとこの武蔵、三河からだけは露払いとしての警護隊の先行艦がいつも出るであろう？安芸まで先に行き、回廊の安全とかを調べるための。――――――今回の先行艦は二代が管理する。三河の警護隊は、今は二代が総隊長だからな」

「へえ、極東で防衛的対外闘争が聖連から赦されている三河の警護隊の総隊長か。歴史再現に制限されて銃とかまだほとんど持てないけど、接近戦や遭遇戦なら結構いけそうだね」

「安芸まで行って戻る際だが、そこから先は降りるなり何なり好きにしろと言ってある」

「好きにとは――――――」

酒井の問いに、父が答えた。

それは先日、これから先の己の身の振りとして、父と決めた事だ。

「――――――全部、自分で決めろってことだ。だから、そのときに誘え。二代が武蔵やお前を必要だと思ったら、そっちに加わるだろう。我の名を襲名しようと思うなら、また別のこともするであろうよ。そういうことだ」

父が言った。

「これから先、世が動く。――――――娘くらいは、好きに動かさせてやりてえもんだ」

父の言葉に、何故か向こうにいる結城が眉を深く顰めた。

猜疑とは少々違う、何かが間違っているとでも言いそうな視線だ。

そして、

「いいよなあ」

……え？

酒井の目が、こちらに向いた。酒井は、わずかに眉を立てた笑みで、

「松平家最強、いや、極東の東国側において”東国無双”と言われた本多・忠勝が選んだ逸材だ。――――――育てて面白かったろう？　どれだけ期待してんだホントに」

「お前、我を褒めてるようで二代にしか興味がないな」

「当たり前でしょ。引退決めつつまだ副長やってるジジイより若い子の方が騙しやすいし。しかし”西無双”の立花・宗茂が三征西班牙の大友で襲名されちまったから、こっちはコネで何とかならないかと思ったんだがなあ」

酒井が一息つき、ややあってから隣りにいる結城に振り向く。

そして、

「なあ、結城。なんでお前は臨時相談役みたいな損な役職やってるわけ？副長やった方がいいんじゃね？お前首刎ねるの好きだし、それに強いし。お前が特攻役になってくれれば今頃は”中立無双”なのになあ」

「変な期待を寄せるんじゃねえよ。武蔵は武装解除されて実戦経験ないから、オレが副長になっても状況は変わらないぞ？」

そんなもんかねえ、と酒井が呟いているのを前に、対する二代は、内心の震えをとどめるのに精一杯だ。

松平四天王のリーダー。

十年のブランクをおいた彼を試すため、父の命令で私服の彼に先ほど仕掛けた。それも、加速術式の準備を整え、父から相手の癖を聞いた上で、だ。

だが結果は明白だった。

こちらは、届くところか、手も出せなかった。

酒井の護衛役を務めた結城によって完敗を喫した。

それは、今の二代では、酒井本人が手を煩わせるのに値しないのと同義だ。

そんな相手が、こちらに興味を持っているというのは、有り難い話だ。

何しろ、二代は三河から出たことがほとんど無い。その実力を見せる相手も、基本は父や、指導用の自動人形達だ。修練を抜けてきたという思いがあると共に、

……自分に、確かな力があるのかどうか、不安があり申す。

先ほど名前の出た立花・宗茂は、昔に西無双と呼ばれた西国の強者、立花・道雪の養子であり、既に各地を転戦していると聞く。

そして向こうに座る少年、結城。

酒井が保障するほどの実力者。その力は、直接相対した二代にしては文句はない。

彼を前に、何れ自分も、と思っていることが、とうとう現実になる。

と、その時だ。

酒井が口を開き、辺りを見回した。

「――――――結局、井伊が来ないようだが、どうしたんだ？」

／※／

「井伊君は――――――」

「井伊は、所用で出ていてな」

榊原の言葉を断ち切った忠勝の言葉に、二代が顔を上げたのを、酒井と結城は見た。

彼女の顔は、そうなのかと言いたげな目をしている。

ならば、と酒井が思うのは、

「……極秘か？」

Ｊｕｄ．、と忠勝が言った。その時だ。

店の外から足音が響いてきた。

二代が出口の方を見て、入ってきた人物を、

「――――――鹿角様」

「Ｊｕｄ．」

二代の呼び掛けに答え、座敷の上がり口で足を止めたのは、侍女服姿をした長身の自動人形だ。

耳の位置から上に伸びる黒角型感覚器を見た酒井は、

「げえ、鹿角……！」

「Ｊｕｄ．、――――――下らない。どなたかと思えば酒井様ですか」

彼女、鹿角は半眼の視線を酒井に向け、

「左遷からのこのここんなとこやってきて若い未来ある少女に対してサービスもせずに酒飲みとは、大した大人だと判断出来ます。二代様、早く御屋敷に御戻りを」

「……ダっちゃん、十年前と同じで、相変わらずこの女、ダっちゃんとこ？」

「しょうがねえだろ。コイツが一番うちの女房の料理の再現できるし、女房の剣筋の再現出来るし、礼儀作法とかも、人を教える分はちゃんと出来ててなあ……」

Ｊｕｄ．と、鹿角がこちらに頭を下げた。

「現在は、私が二代様の基本師範を務めております。二代様も年頃の女性ですが、忠勝様ときたら風呂に入ろうとか焼き肉屋行こうとかかなり駄目ですので。――――――情けない」

「ああ、昔からダっちゃんのダは駄目人間のダだからねえ」

酒井が言った間だ。その眼前、右目の正面三センチの位置に、鋭いものが突きつけられた。

竹櫛だ。

焼き鳥を刺していた一本の竹櫛が宙に浮き、酒井の右目に向けられている。

見れば、鹿角が右の手を肩の高さに突き出していた。

「重力制御の有効範囲内として充分です。忠勝様はこんな駄目でも当家の主です、愚弄はおやめ下さい」

「ダっちゃん、この女、相変わらず”自分はいい、他人は駄目”の鬼ルールかよ。主だったら何とかしろよ。十年以上これってのは、

自動人形として人格壊れているだろ」

「我、口喧嘩は弱くてなあ」

「別にこの性格は自動人形としては基本的なものですので問題はありません。神代以降、自動人形は人に尽くす性質を確固としていますが、敬うことは確固としませんでしたので」

「自動人形の存在権ってやつだよな」

Ｊｕｄ，、と鹿角は会釈した。

「尽くすべき人以外にはその人の体を重力制御で左右することは出来ませんが、間接的に咎めることは可能です。以後、お気をつけ下さい。――――――とは言っても、今回は二重の意味で救われましたね、酒井様」

え？という二代の声と共に、それは動いた。

宙に浮いていた竹櫛が、自分から三本に折れたのだ。

まるで刃物に切り裂かれたかのような断面と共に、竹櫛が地面に落ちる。

そして焼き鳥を刺していた部分が落ちる際に、誰かが宙でそれを箸で挟んだ。

皆が視線をその人物に向けるのと同時に、鹿角が口を開く、

「連れが優秀で良かったですね。――――――今のは流石でした」

視線の先、結城が黙々と挟んだ焼き鳥を食している。

周りの視線を気にしない彼に、鹿角は忠勝に一礼して告げた。

「そろそろ二代様の船の準備をお願いします」

Ｊｕｄ．Ｊｕｄ．と、忠勝が立ち上がり、二代もややあって、視線を結城から離してから一礼して身を立たせた。

皆に対して、背を向けた忠勝は、右手を軽く上げてこう言った。

「――――――では、我はここまでだ。この先、しっかりやれよ」

そして女二人と男一人、武者の力を持つ三人が料亭から出て行くのを、酒井と榊原は共に見送った。

そして、酒井は結城の方を見て、

「何時から割ったの？――――――竹櫛」

「――――――あの鹿角って人が手を挙げた瞬間に箸で……」

「……お前、一体どんなスペックしてんの？」

さあ、と嘯く結城を尻目に、酒井は遠くで去っていく三人が姿を消えた後、テーブルに肘をつきながら、

「ていうか榊原……、実はダっちゃん、食い逃げ？」

「私、麦茶だけですので」

「オレも」

「お前は今、焼き鳥食っただろ?!」

「頼んだのはオレじゃないぞ?」

「おいおい俺、金ないよ? ここでツケたら払いは来年の三河来訪のときだぜ?」

「別に私が払えば――――――」

「それじゃ俺の借りになるだろ」

酒井の声が、彼ら以外にいない店内に小さく響いた。

「俺が貸しを作る。そういう話だ。解るだろ?」

「そういう話、とは？」

「お前さんが俺と結城とまだいる理由だよ。そう、結城がお前の分とダっちゃんの分を払って貸しを二つ作るから、……返すためにお前さんは俺達に二つ、話をする」

「おい、なんでオレだけ損なんだ？――――――つか、オレが払うのかよ！？」

結城のツッコミに、まあまあ、と酒井が宥める。

そして先ほどの続きとして、

「先ず一つ、井伊のことだ。さっきからダっちゃん避けてたけど、お前さん、話そうとしてたな？井伊はどうした？――――――末世も近く、怪異も多いこの三河で、何かアイツにあったのか？」

そしてもう一つは、

「――――――武蔵にＰ－０１ｓって自動人形がいる。先年に三河

から来たあの自動人形は、何だ？」

その言葉に、結城が身を固くする。

手に持っている湯飲を下ろし、二人の会話の続きを静かに待つ。

そして二人の視線を受けた榊原が、

「何だと言いますと――――――」

と、そこまで言って、彼は首を横に振った。

彼は二人から視線を外し、おもむろに腰を上げると、

「まあ、外に出ましょうか。……歩いた方が、話しやすいこともありますしね」

その言葉に、二人は頷きながら後を追う。

それは、結城のこの先を運命付ける、決定的な瞬間の始まりだった。

第五話～崩れた願いの先に続くのものは～（後書き）

どうも皆さん。クロです。

自分なりの最速ペースで書いた第五話、如何でしょうか？

今回は主人公の結城の過去の話に宛がって、久しぶりに自分の言葉で書きました。

故にボリュームアップの一万六千文字です。

ちなみに、ここまでの話が原作第一巻〈上〉の半分あたりです（汗

まあ、今回見て、それでもやっぱり結城君の話は謎だらけと思ったそこの貴方、

そう、貴方です。

後ろを見ないで下さい、誰もいませんよ？

まあ、安心して下さい。何れ謎は解けますから……。

では、次回でまた御会いしましょう。

第六話～近いようで遠い、僕らがいる夜空の下～

中央後艦・奥多摩の先端。

午後の日差しによって影を得る森の中、制服姿で歩いている人物がある。

辺りを見回しながら行くそれは、正純だ。

彼女は右の小脇に紙箱を抱えながら、

「”後悔通り”に近道しようとして、横に入ったのが悪かったな……」

今朝の出来事で、軽食屋の女店主の言葉に従い、ちょっと後悔通りに寄ってから教導院に行き、トーリに小包みを渡そうと思っていた。

武蔵アリアダスト教導院の正面。

後悔通りは幾つもの自然区画がならびぶ一角を通る街道だ。

区画を横に渡れば、各区画の縁を回るより早くつく筈だが、

……迷ったわけではないよな？

既に通りを幾つか渡ったが、渡った回数が計算と合わないことに気づいたのは先ほどだ。

「……何だか自分から神隠しになりに行っているみたいだな、これ」

三河にいた頃、市内で起きた怪異の内、同類のものが幾つもあった。そして何よりも、

……”公主隠し”。

母を奪った神隠しの一種だ。

三十年くらい前に話題となったが。ここ最近で、また噂を聞くようになった怪異。

実際は怪異かどうかは判別されてはいないが、母が消えた事件を調査していた奉行係は、神隠しだと判断した。

しかし既に解明されている神隠しと違い、公主隠しはその中でもとりわけ異質なものだと、前に浅間や結城が言っていた。

ただ、母はいきなりいなくなっていて、消えたであろう現場には血

をぶちまけた大きな筆跡で、大きな円に、中央を線で貫いた模様が残された。

当時の検分の話だと、公主隠しを騙った強盗や、失踪も多いため、必ずしも神隠しとは限らないとのことだ。

しかしそれを抜きにしても、三河は色々あって、怪異とか起きやすい場所になっているのは事実だ。

そのせいで、武蔵にある母の墓には、母の遺品を納めているだけになっている。装飾品や手帳とか。

そして今でも、母が消えたときのことは憶えている。

帰宅した自分の目に入ったもの。

それは家の垣根の周囲に群がる近所の人々と、家の中を探る奉行係の自動人形達の姿だ。

あの時の喪失感と、後に染み出てきた後悔は、まだ新しい記憶として胸にある。怪異が身近にあるという事実も、だ。

一年以上が経つ今でも、なるべく一人の時間を作りたくないと思っているし、当時持っていなかった携帯社務は、最も安価なものだが、お守りのように肌身離さず持っている。

「それに関しては、結城に感謝しなければならないな」

武蔵についた頃の自分は、本当に一人だった。

生徒会役員への立候補や推選などもあり、色々と忙しい自分に、あの時、誰かが薦めてきた。

……武蔵で解らないことや、困った事があれば、臨時相談役の結城に会って見ると良いと……。

臨時相談役は、総長連合と生徒会、そして各委員会と国の各部門や機関との架け橋を演じる役職だ。

一般的には各委員会や部門より上で、総長連合と生徒会より下の位置づけとなっている。

他の国では臨時相談役委員会として複数人が運営しているが、武蔵は狭いため、結城一人がその役職を担っている。

一般的に、臨時相談役は複数の部門が協働して何かをする際、よりスムーズに活動を推進させる潤滑油的な働きをする。

ゆえに、臨時相談役には優れた交渉能力と、様々な分野の専門知識を要求されており、同時に”お助けキャラ”や”国のパシリ”などの呼び名が付き纏っている。

臨時相談役の収入は、交渉時における仲介料金を主としているが、財政バランスを保つために最大１０％の仲介費が限界だ。

全体的な労働力と必要とされる高度な専門能力に比べて収入は低めであり、これが臨時相談役が損な役回りと呼ばれている所以でもある。

しかし武蔵での臨時相談役は一人しかいないため、結城はかなりの収入を稼いでいると聞く。

しかしそれは同時に、本人の休める時間も少ないというのだが、

「そんな素振りは全く見れないな」

色々と世話になった、常に堂々としている友人の姿を思いながら、正純は辺りを見回しながら、

「にしても、既に後悔通り横の森の中だと思うんだけれど」

と、正純は枝葉の壁と木々の隙間に視線を走らせた、そのときだ。

正純の身は、森の中に作られた小さな公園に出た。

「お」

と声を上げてみた空間は十数メートル四方の広場だ。

一件の休憩所の小屋があり、広場には遊ぶ子供の姿があり、傍らには木のベンチにも親子連れの姿が幾つかある。

見れば艦尾側に小道があるが、そちらが正式な出入り口のようだ。

……これは――――――。

来るのは初めてだが、この休憩所の屋根は教導院の窓から見えていた憶えがある。

「道は、間違っていなかったか」

一息をつき、正純は離れた位置から休憩所の建物を見る。

内部に広いスペースがとられた建物は、入り口から一部屋の間を持ち、奥には大窓を有した床付きの部屋があり、その雰囲気は、

……会議室みたいだな。

そう思う正純は、休憩所の壁に貼られたプレートに目をとめた。金属の刻印が示すのは、

「”御霊平庵”１６１８年……」

鎮魂のためのものか、と正純は判断する。

三十年前というと、三河周辺がまだ騒がしく、極東各地で起きていた戦争や政治の圧迫に対して、旧派（カトリック）の術式を使用した反乱があった筈だ。

元信公は、若くしてそれらの反乱を鎮めたことで、当主の地位を確保したと聞く。

「そのときのものか。……武蔵の改修後も残したのだろうな」

一息。休憩所の横に”正面通り”と書かれた矢印看板が森を示しているのを見て、

「この辺りは、鎮魂のものが多いのかな」

正純は、木々の向こうに後悔通りの光を見つつ、また森に踏み込む。

そして思う。

どうしてあの場所が、後悔通りと呼ばれているのか、薄々だが、見当はついている。

「教導院から降りてきて、通りをしばらく行くと、傍らに石碑があるよな。彫られている文字は――――――、”一六三八年　少女ホライゾン・Aの冥福を祈って　武蔵住人一同”だったか」

今思えば、それが後悔通りという名前に関っているのではないかと思えてくる。

人の喪失は、常に後悔が付き纏うものだ。

自分の場合もそうだ、母が消えたあの日、教導院に行くとき、行って来ますと言ったが、返事をもらった覚えが無い。

聞こえなかったのか、それとも自分に母の返答が聞こえなかったのか、解らない。

ひょっとしたら、あのわずかな時間の間に、母は消えてしまっていたのかもしれない。

正純は思う。

自分の後悔と同じものが、あの石碑や、鎮魂の名を持つ休憩所を作らせ、残されているのかもしれない、と。

だとすれば、あの石碑の少女が、後悔通りの後悔の正体なのだろうか。

どうだろうと思い、一息をつき、森の空気を吸うように足を止めた。

そして、

「――――――」

不意に、外から歌声が響いた。

それは、通し道歌を朗じる声だ。

「Ｐ－０１ｓか」

通し道歌を聞きながら、正純は呟く。

朝と昼前、そして午後。

ちょっと時間がずれるときがあるが、定期的に彼女は歌う。

今のは午後の歌いどきだ。

その声に、正純は歌の聞こえる艦首側に視線を向けた。

……今日は、随分と彼女の声を聞いている気がするな。

自分もＰ－０１ｓも、この武蔵に来たのは一年前だ。

前に軽食屋の女店主から聞いた話だと、Ｐ－０１ｓは、三河から武蔵に乗り込んだらしい。

市民登録は誰かによってなされた。携帯していた市民証は本物で、本籍は武蔵となっていた。

だが、本籍地に行ってみれば、そのは道路となっていたそうだ。

不明な点が多かったが、市民証が本物であるということと、最初に声を掛けたの軽食屋の店長が保護者になったことで生活が赦された。

しかし疑問に思うのは、Ｐ－０１ｓはどこの製品なのだろうか。

役所や企業に掛け合っても、該当製品がなく、自動人形の紛失届けや捜索願も出てない。

検分してくれた技師によれば、

「ＩＺＵＭＯや英国（イギリス）式の流れが見えるが、……どうにも不明瞭なもんが多い」

とのことだった。

不明瞭なもん、に首を傾げるが、技師が言うには、自動人形は術式や機構の固まりであり、企業品であっても機密が多く、いわば不明瞭の固まりなのだと。更に技師が言うには、

「魂が喉にあるな」

自動人形は、人形の本体に魂が宿ったものだと聞いた。

人形はそのままでは動かないが、地脈の力、流体を吸収利用出来る

性質の魂が人形に宿ることで、駆動系などを動かしているのだと。

Ｐ－０１ｓの場合、喉部、声帯の基部に、魂と思われる装飾品のような部分が存在していた。

……彼女も、この武蔵と同じ、解らない事ばかりだな……

そう考えているうちに、正純は草を踏み、正面の木々からの間から指す光と風景を目指し、

「――――――」

通りに出た。

振り返ってみれば、自分の歩いてきた影落ちる森と、先ほどの休憩所の影が枝葉の向こうに無言で存在している。

時刻は既に夕刻、遊んでいた子供達も、もうじき帰るのだろうと、正純が思ったとき。

不意に、背後の街道から声が掛けられた。

それはやや高い位置、街道に停まった馬車の窓から響く男の声だ。

「こんなところで何をしている、正純」

それは、自分がよく知っている声だ。

期待に応えることが出来ず、自分と母の元から去り、母を失った自分を武蔵に呼びながらも、

……ろくに、顔を合わすことすらしない人。

父親の声だった。

／※／

「こんなところでどうした」

正純が振り向いた背後。

六人乗りの馬車の窓、後部座席中央に座る男が、こちらを見ぬまま

に短い言葉で問う。

その声に、正純は身が縮まるのを感じる。

萎縮だ、というのは解っている。

しかし、今はそうしている場合ではない。

窓から覗ける内部、父の対面にいるのは、武蔵の暫定議会の議員と、商工会の役員だろう。

奥多摩には学生が部活や個人で起業した企業体が多くあり、組合もある。

今、彼らはその組合所への向かうつもりなのだと推測は出来た。

ゆえに、

「――――――まだ武蔵のことで、解らない事が多いので、実地で調査をしておりました」

点数稼ぎのような物言いだな、と自分でもそう思う。そしていつもなら、

……そうか、とか、無言で立ち去られるのだが、今回は違うものが

来た。

「お前が出てきた森、その中にあった休憩所について、何か解ったことはあるか？」

「え……？」

言葉が来た事もだが、その内容に正純は反応した。

父がこちたに言葉を送ってきたのは、要人の手前における体裁とも思えるが、そこで告げられたことは、

「――――――あの休憩所が、何か？」

父が何か知ってるなら聞きたいが、

「勉強不足だな、何一つ理解がないとは」

その言葉に、正純は眉根に力が宿るのを感じる。

自分と父の間にある親子仲は”解らない”というのが実情だ。

悪いと言ってもいいが、それが明確になるほど衝突したこともないし、言葉を交わすこともない。

……ただ、母がいなくなったとき、この人は――――――。

母の仮葬儀にも出なかった。

代わりに使いがきて、武蔵への転居を勧められた。

そのときの自分は、武蔵における政治家志望者として、父に教導院に通いたい旨を告げた。

しかし返されたのは、

「何を言っている。――――――武蔵の政治家ではなく、もっと別のことに目を向けろ」

あのとき、生まれて初めてこう思った。

……もう、私のことは、どうでもいいのか。

あれから一年だ。

視線を合わさず、言葉もろくに交わさない。

しかし今ならどうだ。

客の前なら、無視はされないだろう。

だから今、正純は何かを言おうとした。

……勉強不足か。

今日、色んな人に似たことを言われた。

それは解っている。

武蔵のことを知らず、同級生のことを知らず、既に現場にいる父には敵わない事も。

前に何度か、自分もあの物知りな友人のようになれれば良いと思っていた。

だが、

……学ぶことを忘れてはいないよ。

そのことを伝えたい。

しかしどう言えばいいのか。

解らず、燻りの熱が腹に生まれたのと同時に、馬車の中から声がした。

「――――――しかし、御子息、変わったものを持たれてますな」

え？　と正純が見た左の小脇、そこにある小包は、

……何でこんな爆弾みたいなアイテムに興味を持つかあ――――――!?

「私の取引では、そういうものも扱っておりましてな。――――――しかし、初回盤とはまたレアな」

「あ、いえ、これは、その、友人の――――――」

と言う正純のフォローを、遮断するように父の声が来た。

「よく解らんが、――――――差し上げろ」

正純は息をのんだ。

……無理だ。

出来ない。

これは私のものではない。

腹が立つもので、持っていたくもないが、駄目だ。

だが、同時にこうも思う。

これは取引だと。

忠誠を示せば、彼らの覚えも良くなり、将来に繋がる一方で、逆らえばまだまだ子供だという扱いを受ける。

政治家志望ならば、どうするかは解り切ったことだ。

しかし、守らねばならないものが、あるとも思う。

それは、父と同様の政治家になろうとしつつも、

……同じようになりたくないと――――――。

しかし、

「正純」

父の声が聞こえた。

武蔵の有力者を前にして、ここでの選択を、父が迫ってきた。

対する自分は、どうしていいのか解らない。

解らないままに、正純は心に従おうと思った。

口から出任せを言うように、自分の判断を行ってしまおうと。

それが、本心の決断なのだと。

そのときだった。

いきなり右手側から、風と共に少年の声が飛んできた。

「おっしゃセージュンいい仕事だあ――――――――!!それ、俺に持ってきてくれたんだよな!!」

茶色の髪を揺らした少年、葵・トーリ。

彼は馬車と自分の間に軽く飛び込み、小脇に抱えていた紙包みを剥ぎ取るように奪った。

「ありがとよ。今夜中に積みエロゲと一緒にプレイしなきゃいけなかったんだけど、ナイトとナルゼが運んでこなくて空飛んでるから思わず徘徊してたんだ!」

「葵……?」

呼びかけた言葉が疑問になった理由は単純だ。

正純は、彼の顔を見て、

「お前、顔色悪いぞ……？　大丈夫か？」

青褪めた顔に汗を滲ませたトーリは、笑みを崩さないまま、ややあってから、

「き、気にすんな！　ちょっと走ったからな！」

言葉と共に、彼は教導院の方に身を傾け、

「結城から聞いたろうけど、今夜、教導院に来るか？　俺、明日惚れた女にコクりに行くから、前夜祭やるんだけどさ」

「ば、馬鹿、何だいきなり……」

話題の転換にも程がある。

父の客の手前という事もあり、自分の顔に何故か熱が来ていることに煩わしさを感じつつ、

「行くわけないだろ、校則違反だ。大体――――――」

正純は、昼間の元信公の挨拶を思い出し、

「今夜は三河で花火を上げるそうじゃないか。……行くならそっちに行くさ」

「そっか、出来れば来て欲しかったけどな。――――――俺のコクる人、セージュンもよく知ってる人だから」

「はあ？　ちょ、ちょっと待て！……私に迷惑及ばないよな！？」

正純の問いに、トーリがくねくねしながら走っていった。

どーだろうなあ～、と言葉を残して。

その後姿に正純は、全く、と呟く。

しかし、はっと現状に気付き、慌てて馬車の方に頭を下げ、

「も、申し訳ありません……」

「いやいや」

答えたのは、父の取引相手だ。

彼は去ったトーリを見て、深く頷き、

「まさk、ここで”後悔通り”の主が来るとは。――――――十年ぶりですがな」

「後悔通りの、……主？」

正純の疑問に、取引相手は頷きながら、わずかに顔を伏せ、

「向かい側、御覧になれると宜しい」

言われ、対面となる歩道を正純は見た。

午後の光によって生まれる木陰の下、一つの石碑を前に、

「昔、ここで、一人、女の子が事故で亡くなりましてな。公になっておらぬのですが」

「あの石碑は……、ホライゾン・Aという女の子のものでしたよね」

「Ｊｕｄ.、そうです。ホライゾン・Ａ。つまり、――――――ホライゾン・アリアダスト」

下向きに告げられた声。

その最後の言葉に、正純は息を詰めた。

視線の先、姉達と合流するトーリが見えた。

力なくうなだれた彼を、姉が抱くのが見え、

「アリアダストって、教導院の名じゃ……」

「もともと三十年前、元信公が三河の主となった際、松平家の名を逆読みし、更に頭の一字である”ま”を削ることによって、聖連への恭順の証を示そうとしたのですな。ＭＡＴＳＵＤＡＩＲＡからＡＲＩＡＤＵＳＴとし、もはや松平の姓の加護は要らぬと。

無論、聖連は元信公の意志を認めて、姓を戻させましたが、その姓は幾つかのものに残りました。その真相を隠すために色んな者に受け継がれ、教導院も然り、そして、その姓を用いる子というのは――――――」

父が、取引相手の言葉に続くように、こう言った。

「聞いたことがないか？――――――三河の元信公には、内縁の妻と子がいたと」

それは、

「子の名は、ホライゾン・アリアダストだ。……勉強不足にならぬよう、憶えておけ」

正純は、突然の事に言葉を失った。

だが、父はまた言葉を続けた。

それは、

「ホライゾン嬢を事故に遭わせた馬車は、元信公の馬車でな。武蔵の改修を決めた際の式典に向かう途中だった。遺体は松平家に引取りで、遺品も何もこちらには来なかった。これは公に出来ぬ話でな。――――――丁度、明日で十年になる」

「十年って……」

昔の事です、と取引相手が目を伏せてつぶやいた。

「ですが、後悔通りの主にとっては、後悔のリアルタイムなんでしょうな。――――――結論だけ言えば、彼がホライゾン嬢を殺したのですから」

「は……？　それは、どういうことですか？　彼が殺した、って」

眉を歪めた正純に対し、取引相手は首を横に振った。

自分には言えるものではないというジェスチャーだ。

だから、正純は言った。

本人である葵に、直接聞けないのなら、

「ならば、まさか、後悔通りの主って……」

言葉が、呟きとなって出る。

皆が言っていた、踏み込み、知れといった、武蔵の人々が持つ秘密とは、

「葵・〝トーリ〟の後悔、ですよね？　〝後悔トーリ〟との言葉遊びの二重意で……」

Ｊｕｄ．、という父の短い答えが全てだった。

取引相手が、手指を合わせるように組み、

「彼も負傷して、すぐにホライゾン嬢と一緒に馬車に運ばれました。――――――でも、三河から戻ってきたのは治療を受けて麻酔で眠った彼だけ。あとは、……ずっと、後悔です」

ああ、と正純は思った。

自分もそういう後悔をしたことがある。

十年前に襲名が出来ないと知った時、そして一年前に母を失ったと理解したときもだ。

……後悔を身に刻んだよな。

そして、同時に正純は思う。

十年前に少女を失った葵と、今の葵が、繋がらない気がする、と。

同じ後悔の経験は、自分にもあるから解る。

だが、葵には自分との違いがある。

それは、

……どうして、笑っていられる？　どうして、告白や、夜遊びをしていられる？

芸能神を信奉しているから、で済む事ではない。

単純に考えるなら、いい加減な奴だからだ、と結論できるが、そうだとしたら、

……それを他の人は皆知っているのに、何故、皆は彼を支持する？

”不可能男（インポッシブル）”と呼ばれ、負傷によって身体能力は低く、無能だが、それでも総長兼生徒会長に選出された男だ。

聖連の支持があっても、地位を保つには大勢の人々の支援がいる。

そして人々は、誰も彼も、馬鹿をやっている葵を嫌ってはいない。

それは、

……どういうことだ？

過去の後悔を忘れたように、笑って、いい加減に見える彼を、

「どうして、皆は支持するのでしょう……？」

解らない。

後悔通りを調べてみたが、また次の謎が出てきた。

そして答えを知る方法は、一つしかない。

「――――――踏み込むか、正純。彼の後悔の行き場に」

父の言葉に、正純が振り向く、だが、

「会合の時間に遅れる。――――――ここまでだ」

言葉と共に、馬車が教導院に向かって走りだした。

視線を追えば、既に教導院前の階段の下に葵姉弟の姿はない。

置いていかれた、という思いだけが、何故か心に生まれた。

そしてただ解るのは、

……まだ、私は、何も解っていないと言うことか。

／※／

夕方近く、徐々にオレンジ色に変化し始めた空の下。広大な平面を中央に抱えた町がある。

町の中、叩き伏せられたように広がる木造の平面は、四方の壁や周囲に、”ＮＥＷ　ＣＡＳＴＬＥ　ｏｆ　ＮＡＧＯＹＡ　ＡＴＥＬＩＥＲ　ｏｎ　ＭＡＴＳＵＤＡＩＲＡ.”という表示を見せている。

新名古屋城。

三河の市街の大部分を占める巨大な工房だ。

しかし、各地にある工房の出入り口や、貨物の搬入門には警備用の自動人形が武装して立ち、動かない。

周囲はどこもかしこも機械ばかりだ。

逆に、人の姿はどこにもない。

濠を挟んで存在する町側も、通りを警備や掃除する自動人形の姿はあるが、町の大部分に人の姿は無い。

家屋の多くも、雨戸や入り口を閉じている。

そして、家屋の影の長く落ちる通りを、三つの人影が歩いていた。

榊原と、彼の後ろについている酒井と結城だ。

先を行くのは榊原だが、主に喋っているのは酒井だ。

「――――――で、うちの教導院にも名前にあやかるのか、直政とか、お前さんの姓から木の字抜いてネシンバラってのがいてさ。

……と、この先がお前さんの新居か？　いつもこんなとこまで来ないで、関所側で仕事済ませてたからなあ。随分と変わったねこちらも。ほら、夏休みに暑い暑い言ってるお前さんを皆で投げ込んだ濠、っこらだっけ」

「あの濠は新名古屋城の建設のために埋められました、ええ、率先

して指揮を執りました」

「じゃあここらがそこか。お前さん、思いで踏むなよ。酷い男だね」

二人の会話を余所に、酒井の隣りを歩く結城は周囲を見渡す。

視線の先では、自動人形が通りの壁や、地面の整備をしているが、そのどれもが、

「……あれ、怪異による血文字ですよね？　向こうの地面に空いてる穴、爪痕ですか？」

「よく気付きましたね。――――――ええ、過去の記録にあったようなものだけではなく、多くのものが出ますよ、ここには。今年に入ってから一気に量と種類が増えました。夜には百鬼夜行の一種か、黒い人影が列になって町中を練り歩いたり、首の無い馬車や、足音だけのものとかが、ね。……血文字が壁や地面に浮くなど、今年は毎日です。だから私も夜には外に出ない。本多君は違うようですが」

「ダっちゃん相変わらずそういうの好きか。――――――でも、町の防護は？」

「熱田神社の結界は、家屋程度なら今でも有効です。要級のものが必要ですがね」

城用じゃないか、と酒井と結城が肩をすくめながら思う。

対する榊原も同じ動きを見せ、

「まあ、熱田系は戦闘が専門ですからな」

彼はそう言って、不意に空を見上げた。

夕刻の空、西の方角に船影がある。

長方の形をした黒の船に対し、榊原は、

「……先に来た教皇総長の船に続き、三征西班牙の船が来ましたな。本多君の娘の先行艦と入れ替わりで港に降りるつもりでしょう。あれは――――――」

「三征西班牙のクラーケン級審問艦。実質は対妖物などもこなす三征西班牙の特殊部隊だ。地竜クラスを流体分解出来る”刑場（アンダミオ・デラ・エジェクシオン）”を輸

送し、見せつけることで、力を誇示しているのでしょう。Ｐ・Ａ・ＯＤＡの力の及ぶ範囲であろうと、有事あれば容赦はしないと」

逆光に黒く映えた艦影は、その艦首下部に巨大な懸架台を持っている。

視線をそれに向けた結城は、

「聞いた話だと、あれには大罪武装の使い手も乗っている筈ですね。三征西班牙の大罪武装の使い手である八大竜王が一人、立花・宗茂は異端審問団の副団長だったそうですし、教皇総長の護衛のつもりでしょう。――――――竜王が二人も来るとは、まるで紛争地域みたいですね」

「まあ、郊外の一般用陸港しか今は動いておりませんから、彼らはこちらには来ませんよ。おそらく、教皇総長に押し付けの忠誠を示しつつ、牽制に来たのでしょう。強国である三征西班牙が、没落復帰を狙うＫ・Ｐ・Ａ・Ｉｔａｌｉａに新しい大罪武装を与える気はないでしょうし」

榊原の言葉に、結城は小さく頷く。

そして傍にいる酒井は、遠くにある新名古屋城の平たい影を見ると、

「これだけ各国にモテる三河は、しかし各国はおろか武蔵に対しても交流不許可、か。怪異も多く人払いで人もいない。――――――大丈夫なのな？」

「大丈夫、と言いますと？」

「――――――隠れて怪しいことやってんじゃないか、って言ってんだよ」

一息。

「うちの生徒が言ってたが、確かに、三河からの貨物の流れが変だ。〝形見分けでもしてるようだ〟って、な。――――――一体、今の三河はどうなっちまってんだと？　何考えてる」

酒井が、何時の間にか止まっていた足を動かし、問いかけた。

先頭にいる榊原の肩を叩き、先を促すと、

「井伊はどうした？　あいつ、国政や開発担当だったろ？　あいつの答えを聞きたいが――――――」

「神隠し、ですね？――――――怪異の多い最近の三河では、それかと」

唐突に紡がれた答えは、結城からだった。

彼の言葉に、酒井と榊原は目を見開いた。

そして榊原は観念したように、二人を見ながら静かにこう言った。

「よく、解りましまね。ええ、そうです。井伊君はもうここにはいません。その神隠しを起こしたとされる者、――――――”公主”というのを、知ってますかね？」

日の傾き始めた空の下、榊原の言葉に、酒井は問い返した。

「井伊の神隠しに、……公主だと？」

「聞いたことがありますか？　三十年くらい前から言われるようになった存在。当時、子供達の間でも都市伝説として広まって、また最近、少し広まっているようですが」

「当時も今も、子供の世代じゃ管轄外なんだがね」

言いつつ、酒井は苦笑した。

「公主とは、中国における王家の娘のことだよな。……そして、公主隠しってんなら知ってるよ。最近でも、うちの正純や浅間ってのが関ってるからね。こっちの結城も、仕事の関係で神社のほうから色々と頼まれているし。正純が武蔵に転入してくるとき、母が公主隠しにあって、浅間がたまに話してくれる怪異にも、それはあるさ」

「Ｊｕｄ．、成程、それなら話は早いです」

榊原は、少し咳払いしてから言った。

「でもその前に、先に一つ確認してもいいでしょうか？」

「何を？」

酒井の問いに、榊原は結城に振り向き、

「貴方の背中にあるその包み、見せて貰いないでしょうか」

榊原の問いに、酒井は、げげっ、という声を出し、しかし結城は、ややあってから背中の長棒を引き抜き、両手でゆっくりと榊原の前に差し出す。

それを榊原が同じく両手で受け取り、そして、

「成程、やはりそうでしたか。と言う事は、貴方が、あの時の……」

「榊原……！」

酒井の呼び掛けに、榊原は無言のまま頷く。

その先のことは、ここでは語られるべきではないと。

その反応に、結城は目を瞑らせ、榊原は、そのまま長棒を結城に還す。

そして、

「これもまた、殿や私達の過ちでしょう。ならば、この先の事も、貴方には知る権利があります」

一息。

「先に一つ言いましょう。三河は現在、――――――酒井君がいた頃と大きく違っています」

そして、

「二人とも、公主を追ってみてください。全てを知るために」

「公主を……？」

「Ｊｕｄ．、それは、このところの怪異で神隠しや血文字のメッセージなどを残している者のことです。誰が名付けたか知りませんが、それを”公主”または”公主達”と呼ぶのです。まあ、噂に寄れば、正体は王侯の隠し子だとか、公主・達という本名なのだとか、いろいろで」

「――――――待てよ」

町の中に吹く風に当たれながら、酒井は問う。

先を歩き始めた榊原に向かって、

「何でそんなのがいるって知ってる？　公主隠しは神隠しの一種じゃないのか？」

「井伊君が行方不明になったとき、彼がいたはずの書斎に、あったのですよ」

言葉と共に、榊原が振り向いた。
しかし山側の、陽の逆光で表情は見えない。

「井伊君が消えた書斎の襖に”もう遊べない”――――――、という意味の血文字がありました。彼が先ほどまで使っていたであろう硯も筆もそのままで。開いた便箋は無地のままで」

「……犯人は？　犯人がいたなら、衛士の自動人形が見ていた筈です」

「君達や私にとって、自動人形の警備を抜けることなど苦労ないことでしょう？　それに井伊君の書斎は邸宅敷地内にある離れでして。――――――庭を巡回する自動人形にも死角は存在します」

一見。

「殿は言ってましたよ。”井伊は甘いところがあったからなあ”と。今になってみれば、私も確かにそう思います」

と、不意に榊原が足を止めた。

そして音がした。

それは足下。榊原が草履靴の爪先で、砂に模様を描く音だ。

書かれたのは、円と、それを横断する一直線の横棒。

「――――――二境紋と名付けられたものです。円に拠る境界線と、それを貫く境界線の二重境界線。公主達が現れたとき。必ず残す印です。井伊君の書斎にもありましてね」

言葉と共に、榊原はまた前に歩き出す。

その背後を見る酒井と結城に対し、

「公主達は実在します。正直、私も信じていなかったのですが、……神隠しや怪異を追っている人々ならば、その存在に気付いている筈です。怪異の際に、必ず残される印に」

知ってますか？　と榊原が続けた。

「井伊君が教えてくれたんですよ。公主達は、人を攫うことで世を救おうとし、世に対し警告を行う、と。そしてその際、――――――印を好んで落とす」

言われ、酒井と結城は気付いた。

先ほど、町のそこかしこで自動人形達が拭き落としていた血文字の群を。

……あの中にも、公主って奴らが書いたものがあったのか？

普通、怪異は明確な意志を持たないし、連続性を持つことが少ない。

だが、公主隠しにその性質があり、更には榊原の言う”公主達”が関与しているならば、

……組織？

現在の世界における組織とは、教譜か、教導院だ。

公主という名前からするに、中国、または極東の関係だろうけど、

欧州には公国というものも存在するため、そこの主を公主とすると、

幅は一気に広がる。

ゆえに問うべきは国ではなく、

「一体、……誰なんだそいつらは。どこの教導院や、教譜の連中だ？　そしてそいつらと、三河の現状の、何が関係ある！？」

「その資料を、お渡ししようと」

榊原が足を止める。

その正面には、竹で作った垣根に囲まれた邸宅が一軒ある。

彼は、小さな門の前で、

「そちら、茶屋があります。私の地区の管轄の自動人形がやっている店でしてね。そちらに八時半までには資料を持って行かせますので。少し待っていてください」

「おいおいお前の家で待たせろよ」

「――――――私の家、本多君の家の近所ですよ？　本多君は井伊君の件について、君に話したくないようですけどね。……彼、君に心配掛けたくないんでしょう」

「じゃあ、お前は、俺に心配を掛けさせたいわけか……。気持ち悪い男だな」

その言葉に、榊原はややあってから、小さく笑って顔を上げ、

「四天王で仲間外れは、無しにしたいもので」

そうそう、と彼は言った。話を変えるように、口調も明るくして、

「少し話はずれますが、先ほど質問にあったＰ－０１ｓ、――――――あれ、御二人の思う通りですよ」

「じゃあ――――――」

その言葉に、身を堅くした結城に、榊原が軽く手を振る。

気が早い、と前置きし、

「理由は今夜、殿が話すでしょう。貴方の望む答えになるかは知りませんが、それを待ってください」

「今夜って確か、三河は花火と祭りでは？」

Ｊｕｄ．、と榊原が頷く。

「面白い祭りになりますよ。――――――それが始まるまでには帰れるようにしますから、向こうの茶屋で待っていて下さい。資料も、自動人形に持たせましょう」

「じゃあ、……ここでお別れだな」

酒井の問いに、榊原が笑った。

そんな気がした。

逆光の中、肩を奮わせた彼は挙げていた右手を降ろし、

「お別れも何も。――――――私達松平四天王は、井伊君も含め、皆、共にいると信じていますよ」

第六話～近いようで遠い、僕らがいる夜空の下～（後書き）

前回のボリュームアップで、少しペースが乱れたクロです。

後悔通りと公主隠しについての説明で、ようやく三河消失篇も半ばまで近づいてきました。

ストーリー的に飛ばせない部分なので、殆ど原作と一緒です。

もっと結城に喋って欲しかったのが本心ですが、今回はそうも行きませんでした……Ｏｒｚ

これからもっと結城に活躍してもらうよう、精進したいと思います。

後、今回から更新が遅くになるかもしれませんので、作品を読む時間帯が早めな方は少しだけ注意して下さい。少しだけでいいですから……

では、また次回。

Ｐ．Ｓ：境ホラの主人公って、ホントは正純じゃね？

第七話～始まる鼓動、その意味は～

空を行く船がある。

対するように、別の船が来る。

場所は三河の西南、一般用の露天陸港に近い空。

武蔵アリアダスト教導院の校章を側面に記した警護艦に対して、代わりに三征西班牙のアルカラ・デ・エナレスの校章を国章として記した黒の長方艦が擦れ違うように来る。

両艦はそれぞれ右側通行のラインをとり、大きく回りながらそれぞれの目的地へと行く。

警護艦は西へ上昇し、黒の艦は三河の陸港へと降下する。

高度を落としてゆく黒の長方は、処刑台を前後に折り畳んだような”刑場”を舳先下につけていた。

船の甲板には人影が幾つも乗っているが、影の大半は着港のための信号や確認を行う航海士達だ。

そんな彼らが動く場所。

前部甲板の先端に、一組の少年と少女がいた。

少年は金髪で背が高く、少女は黒髪で背が低い。

どちらも三征西班牙の制服と、三年次であることを示す学章を身につけている。

そして少女は両の義腕で持った双眼鏡で陸港の方を覗いており、傍にいる少年も同じ方向を見ていた。

ややあってから、黒髪の少女立花・?は双眼鏡を顔から離し、西の空、去っていく武蔵先行艦を見て、

「先ほどの先行艦、”東国無双”の本多・忠勝の娘、本多・二代が乗っていたそうですね」

「どちらにも会ったことないけど、本多様は御息女への襲名を考えてるのかな」

?の言葉に、彼女の傍にいる金髪の少年立花・宗茂が好青年的な、さっぱりとした表情で答える。

それに対して、?は淡々とした口調で、

「どうでしょう。考えたところで、無駄になることもありますし」

と、？はそこで目を細めると、両の義腕で身体を浅く抱いた。

そして視線を宗茂に向き、

「もっと前に、下の船からも見える位置にどうぞ。――――――大罪武装の使い手が来たと知れば、教皇総長（パパ・スコウラ）も三河に新たな大罪武装の無心をする際、ゴリ押し出来ないと解るでしょうし」

「戦うことしか出来ないのに、随分と私は政治的に扱われるものです」

宗茂の苦笑に、？は、まあまあと、彼の背中を舳先へと押す。

その光景に、甲板にいる皆が小さく笑うのに対し、宗茂は頭を掻きつつ会釈し、

「しかし、戒律重視のＴｓｉｒｈｃ（ツァーク）教譜、その旧派（カトリック）の首長たる教皇総長が、大罪をモチーフとした大罪武装を無心に来るとは」

「男の人なんて、”俺超強い”がやりたいだけの馬鹿ばかりですから」

「……？さん、たまにすっごいこと言いますよね」

そうですね、と？は否定せず、

「まあ、戒律や土地に縛られる聖譜顕装と違い、大罪武装は反面教師としての武装ですから。使うことで”人間の大罪はこれほど恐ろしい”と示す武装、……謎の多い武装です」

？の、わずかに沈むような声に、宗茂は肩越しに？に振り向き、

「？さんは、やっぱり大罪武装につきまとう噂を信じてます？」

「Ｔｅｓ．。疑念の噂があります。大罪武装の能力は、人間の大罪をモチーフとしたものですが、その製作素材となっているのは人間そのものだとか……」

？は、少しだけ疲れたような息をつき、

「出来れば、それは嘘であって欲しいと思います。立花の姓の強さが、人の犠牲の上に成り立っているとは考えたくないので……」

「そうですね。……ただまあ、そういう噂がとぶのも解ります」

宗茂の言葉に、？が首を傾げる。そして、

「大罪というものが、人間が必ず持っている、切り離せないもの。……ある意味、それがあるからこそ人間だと言えるものだからです。だからそれをモチーフとした武装を作るには、人間を素材とする必要があると邪念されて当然。それに、もしそうだとしても……」

一息。

「世界のバランスをとるため、また、世に大罪を知らしめるための殉教になるので構わないと、以前の会議で結論されています。……まあ、私も、そうだとしたら苦手な部類ですけどね」

「Ｔｅｓ．、最後の一言だけ聞きたかったです。そして宗茂様」

潮の匂いが含んだ風の中、？は押した手を支えるように当て、

「――――――負けないで下さい。全ての言い訳や邪推は、それによって無視出来ますから」

「虚栄や驕りは私の持つ”悲嘆の怠惰（ケノドクシアハイペリファニア）（リピ・カタスリプシ）”の短刀じゃないですけどね」

「大丈夫です。怠けずしっかりやらないと負けますし、そうしたら私は悲しみますから。私をそうさせないために、虚栄や驕りも、何でもありでいてください」

Ｔｅｓ．、と宗茂は頷いた。

そして彼は前を、高度が下がって見えた広い陸港と、停泊している幾つもの艦を見る。

その中央、白い巨大艦を見て、

「いますね。”栄光丸（レーニヨ・ユニート）”の上、白服、教皇総長インノケンティウスが。それに……」

上から見える、甲板に立つ白の長衣の横、赤い巨躯がある。

羊角の生えた異族は、

「……魔神族のガリレオ元教授ですね。末世に備えるために学生に身分を戻したとか。今はＫ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａの第二特務ですか。……誰も彼も”俺超強い”を見せびらかしたいようで」

「私、どう考えても?さんに押されて出て来たに違いないんですが」

「誤差範囲でしょう。大丈夫です。Ｔｅｓ．、宗茂様が一番お強いですから」

言って、二人は見た。

栄光丸に立つ、中年を越えた白僧服の男が、片頬だけの笑みをこちらに向けた。

そして黒の艦が、軌道を大きく西に振り始める。

「Ｔｓｉｒｈｃ教譜国の船が、教皇総長を見下ろして着港することは出来ませんからね。……空いているのは南側、名古屋からかなり離れますね」

「有事の際が面倒です。――――――元信公は今夜、花火やら祭の用意をするとか」

？が、一息と共に空を見上げた。

天に浮かぶ二つの月を見据えながら、

「――――――誰のための、何のための祝いなんでしょうか」

／※／

「では、皆様、これより祭りの準備を始めます」

と、人気の無い町に声が響いた。

夕日の朱光だけが残った町中に、人はいない。

いるのは、

「三河所属自動人形。――――――総員、それぞれの状況を開始しなさい」

告げる人形は鹿角だ。

そして彼女の周囲で影が動く。

風を巻いた幾つもの動きが、家屋の向こうや陰の中で散ってゆく。

同時。鹿角の眼前に鳥居型の表示枠（サインフレーム）が展開した。

写っているのは、

「元信公。――――――予定通り開始しました。そちら、新名古屋城地脈炉の方は――――――」

ああ、と表示枠の中の元信は笑みを返す。
眼鏡を整えるように鼻の上に持ち上げ、

『予定通り。祭りがバレるのは八時過ぎになるだろう。それまで頼むよ。忠勝も装備を持って最初の現場に向かったからさ。……でも彼、これでいいのかい？　鹿角としては』

「Ｊｕｄ．。――――――楽しんでおられましたから。十年前と同じように。充分な別れの挨拶かと。……それと元信公、報告が遅れて申し訳ありませんが、例の物が、あの御方と共に、この三河に戻って参られました」

鹿角の、追伸するかのような言葉に、元信は少し考えてから、

『……そうか。鹿角から見れば、どんな感じ？』

「強い御仁だと、断言できます」

『ならば、もう必要は無いな』

「……はい」

言って、鹿角は頭を下げた。

「元信公が何を考えているかは私どもには解りませんが、仕える身として、忠勝様共々、守り抜き、最後までお付き合い致します。存分に始め――――――」

一息。

彼女は、無表情の顔を上げ、新名古屋城、四つの地脈炉と一つの統括炉を持つ四角の建造物に視線を向けた。

鹿角はそちらに会釈して、

「主催としてお楽しみ下さい。これから始まる。……世界を相手にした三河最後の祭を」

／※／

それは、武蔵アリアダスト教導院で、トーリの明日の告白に対する前夜祭が賑やかに進行している中。

夜の下、暗がりを背後から光り指す軒先のベンチに、一つの人影がある。

酒井だ。

彼が座るのは夜も開いている小料理屋の前、一服用の竹ベンチだ。

横には中身を飲み干した茶碗が置かれており、しかし煙管をくわえた彼の傍に結城の姿はない。

夕方の頃、榊原と別れた後に、結城は酒井と別行動を取った。

「折角だから、オレは神社とシロジロの依頼で、怪異の残した痕跡と物資の方を調べてくる。――――――大丈夫だ、中央には近づかないよ」

と、そう言いながら、彼は郊外の方へと行った。

やや名古屋寄りなのが気に掛かるが、結城は自重できる奴なので放っておいてやった。

榊原の資料を待つのには二人もいらないし、祭が始まるまでに合流出来ると約束したため、酒井もなるべく気に留めていなかった。

煙管を深く吸って、煙を空にくゆらせながら、

「第二の月も、今日は綺麗に見えるな。殿先生は花火を用意すると言ったが、昔のように月見酒に色を添える気でもないだろうし、……折角の三河で、結城のこともあるしなあ。全く、悪い予感ばかりが働くねえ」

と、酒井は時計を確認しようと店の中を覗いた。

奥壁の時計となっている神棚をちらりと見て、壁に掛けられた神棚の前では、時間系の神の使いである鶏の走徒が、雛鳥達とうろうろしている。

ヒヨコが四羽だから、

「……八時か」

資料が届けさせると言ったのは、八時半だ。

十時には関所が閉じるため、九時には結城と合流して山道の入り口に行きたい。

資料は持ち帰ってから読んでもいいだろう。

と、酒井は壁に掛けられたメニューを見て、

「……ここ、カレーが多いね。うちにもハッサンってのが好きなんだけど、喜びそうだ」

言うと、厨房にいる自動人形がこちらを見て頷いた。

「Ｊｕｄ.、私ども、北条製ですので」

「へぇー、印度の連合向きに出来てんだ。――――――で、酒に合うオススメは？」

「では、こちらの、アジのタタキカレーは。駿河でとれたばかりの

新鮮素材です」

「いや、別にカレーにしなくても……」

とこの時、酒井の肩を後ろから叩くものがあった。

ん？　と酒井が振り向くと、紙束を抱いた女中姿の自動人形が夜道に立っている。

彼女は無表情に紙束を酒井に差し出し、

「酒井様、お届け物です」

「ああ、ありがと。榊原は？」

と、酒井は資料を受け取る。

すると自動人形は頷き、

「Ｊｕｄ．、机のものを後で持っていくようにと、作業前にそう指

示を受けておりましたので遂行致しました」

「つまり、新規で書き起こしたってことか、アイツらしいなあ……」

「そうなのですか？」

自動人形の問いに、酒井は会釈する。

昔のことを、少し思い出して、

「字名（アーバンネーム）、〝檄文〟っていうんだ、アイツ。奉じるのは文章系の神でさ、もの凄い勢いで文を書けるんだよ。情報整理も出来たから、多分、今回の件も頭の中に全部しまっていて、それを俺用に書いたってことなんだろうなあ……」

忠勝が井伊のことを口外禁止にしているならば、〝公主〟についての資料は表に出せず、屋敷に溜め込むしかない。

つまり、榊原は、それをまとめたものを紙に吐き出し、こちらに渡したと言うことだ。

「アイツはもう、自分はそれに関らないとしたのか、それとも」

酒井は、腕に抱えた紙を捲って見る。

武蔵に帰ってからと思っていたが、やはり好奇心が動いた。

……俺を巻き込んでいく覚悟をしたのか――――――。

と、紙をめくった酒井の思考が止まった。

何故ならば、

「――――――白紙！？」

何も書いていない白紙の束に対し、酒井は紙を数枚めくり、全て白であることを確認した。そして、

「――――――まさか」

「……酒井様？」

自動人形の問いかけに、酒井は動いた、渡された資料を脇に抱え、

「どうなっている！？　否、まさか――――――」

走り出す。

行き先は自動人形が来た方向。榊原の家だ。

夜風の中、酒井は店前から、明かりのない町中に身を飛び込ませ、闇の中を加速した。

「榊原……！」

声を上げ、息を吸い、人気のない夜道を駆け走り、

「お前、どこまでたどり着いていた！」

／※／

湾に面接した都市、民家や建物の明かりで構成されたそれを一望出来る、北西部の山肌に、人がいた。

峰の上。

設けられた見張り所の屋上に若者がいる。

三征西班牙の制服を山岳用に改造し、防寒用のツェルトを被ったその者は、三河と、そこに至る各山岳を見渡していた。

ツェルトから突き出した手は狙撃銃を持ち、ときたまスコープで各所に視線を送っている。

と、小さな音が、彼の制服の襟の内側から響いた。

彼は襟元に視線を落とさず、町からこちらに至る峰を見て、

「――――――いいぞガブリエル」

言うと、襟の装甲を開けて一人の少女が現れた。三頭身二枚翼の彼女は、若者の肩で、

『おはなし　きました』

言うなり、走徒であるガブリエルは背の翼の中からラッパを取り出す。

ラッパは震えて、

『――――――Ｂ１Ｔ３からＢ２Ｔ３へ、様子はどうだ?』

「Ｂ２Ｔ３からＢ１Ｔ３、Ｔｅｓ．、現状に変化なし。――――――愚痴が出るだけだ」

と、不意に音が聞こえた。

高い音。

ノイズとも、ざわめきともとれる音だ。

それは、

「地脈の乱れか。新名古屋城の地脈炉（レイライン・リアクター）が仕事用に稼動し始めたのか？」

『下の方ではさっきから拾えてる。何だか提出されてるスケジュール外のことらしく、上の連中が本部に報告する前に新名古屋城に問うてみるって通信文出してたよ』

それより、と通神の向こうでＢ１Ｔ３が言った。

『さっき、上で通りかかった先行艦を見たか？　あれ、本多の次期襲名者って噂の女が乗ってたそうだが？』

「――――――人を斬ったことが無いって話だな？」

『お前は？』

B1T3の問いに、ややあってB2T3が答えた。

「撃ったことはある。六護式仏蘭西との小競り合いでな。殺しは、――――――動物相手だと、三征西班牙の男子生徒なら闘牛（トレオ）の授業で必ずやってるよな」

と、ガブリエルが眉尻を下げてこちらの顔を覗き込んできた。

『……かなしい？』

「お前がそう言ってくれると嬉しいよ」

『え？　俺!?　やべえ、俺、人生どこまでロードしなけりゃいけねえんだ』

「うるせえてめえ、俺とガブリエルの仲を邪魔したな。ちょっと番屋から顔出せ、へへ、初めて人を殺しちまうかもしれねえな……」

『おいおい、立ち上がるなよ。こっちから見えるぞ』

言われた台詞に、Ｂ２Ｔ３は硬直した。

……え？

『どうした？』

「いや」

……俺、座ったままだぞ？

思った瞬間だ。

ガブリエルの持つラッパが震え、

『Ｂ１Ｔ１からＢ２Ｔ３』

女の声が響いた。

Ｂ１Ｔ１は、Ｂ１Ｔ３のいる麓のメインベースにおける内部統括役だ。

今回の夜番は選択課外授業であるため、同クラスのものではないが、しかし顔は覚えている。

女ではなかった筈だ。だが、

『Ｂ１Ｔ１からＢ２Ｔ３』

呼びかけは続き、

『――――――宜しいですか？』

聞こえた声に、Ｂ２Ｔ３の判断は早かった。

狙撃銃を屋上の床に捨て、ツェルトの下、肩ベルトに挟んだナイフホルダーからナイフを引き抜く。

そして彼は同時に身を低くして、左へステップしながら背後へと振り返った。

……何がいる？

Ｂ１Ｔ３は、立ち上がるな、と言った。

ならば、何者かが自分の背後に立っていたのだ。

更に、Ｂ１Ｔ３は、いきなりＢ１Ｔ１に変わった。それも女の声に。

……何があった？

おかしいと思う。

こちらは麓からの道を監視していた。

麓のベースでは術式ステルスの検知も行っており、微細な反応でもチェックしている筈だ。

どうすれば、監視を無視してここまで来られるのか。

原因を知るためにも、情報が欲しい。

そして現状起きていることを他の仲間に知らせるため、

「ガブリエル、別通神、非常――――――」

『だめ』

ガブリエルが、泣き出しそうな顔で首を横に振った。

『つうじない』

その言葉に、Ｂ２Ｔ３は息をのむ。

それは、短距離用の走徒間通神と、遠距離の拠点通神が通じないということだ。

この不通は、二つの事実を示す。

一つは、メインベースの番屋が制圧され、ベースを要する拠点通神が封じられたということ。

もう一つは、走徒通神を用いられる者達。

つまり自分の仲間達が、全員通神不能状態になったということ。

……ならば――――――。

先ほど、Ｂ１Ｔ３は立ち上がっていた影をこの屋上に見た。

だとすると、この屋上の下にある番屋も制圧されてる可能性が高い。

危険だと思いながら、Ｂ２Ｔ３は周囲を確認する。

しかし、

……いない？

屋上には、誰もいなかった。

……どういうことだ？

疑問はある、勘違いなのかもしれない。視界の中には誰もいないが、しかし肩の上のガブリエルは今でも震えている。

自分の通神能力が途絶され、何も出来なくなったことを表現しているのだ。

……これはこれで……！

そんなガブリエルを見るＢ２Ｔ３は、次の動きを迷わなかった。

ガブリエルを抱きかかえ、屋上に一度伏せる。

そしてそのまま懐からあるものを取り出す。

円筒状のそれは手投げ式の信号弾だ。

これを使えば、陸港の方にいる仲間たちも気付くはずだ。

ゆえに、Ｂ２Ｔ３はガブリエルを抱えたまま、素早く身を起こした。

屋上の縁に立ち、信号弾を頭上に投げるために腕を挙げたとき、

「――――――!?」

Ｂ２Ｔ３は見た。

眼下。番屋の壁の表面、屋上の縁近くに、水平に立っている姿がある。

……女!?

瞬間、女はバネ仕掛けの人形のような動きで身を起こした。

こちらが動くより早く、黒と白の侍女服をした女が腕をするりと伸ばし、こちらの首に絡みついた。

「……！！」

前から抱き寄せられる形で、身が屋上の縁から外へと引かれてゆく。

対して女は壁に立ったまま。

虚空へと放り投げられる瞬間、束縛を断ち切るために、Ｂ２Ｔ３は手にしたナイフを振りぬいた。

だが、手応えは鉄の響きだった。

硬い感触と共に、ナイフが弾かれる。

……何!?

防具などつけてないのに、しかしナイフは効かない。

どうしてだ、と思った瞬間。

投げ出されるように落ちていく中、Ｂ２Ｔ３は音を聞いた。

それは、

「こちらＢ２Ｔ３担当。――――――宜しい結果と判断できます」

聞こえた声の持ち主を彼は見た。

壁に水平で立つそれは、

「三河の自動人形……！？」

確認した事実に、彼は疑問を叫んだ。

思った疑問は二つ。

一つ目の疑問は、自動人形が、何故に三河の監視を制圧するかということ。

もう一つは、流体を消費して動作する自動人形が、どうやって下のメインベースの検知に引っかからずに、ここまで来たのかということだ。

だが、前者の”何故”には考える意味が無い。

自動人形は主の命令を聞くもの。

ゆえに、自動人形が監視を制圧しに来たというのは、

……三河の君主が、聖連に対して反抗を開始した――――――。

残る謎、彼女達がどうやって監視を抜けたのは解らないが、

「ガブリエル！　情報を持って行け！！」

叫びに、首の後ろにいた天使がカメラを構えた。

撮影の音と共に、しかしＢ２Ｔ３は新しい音を聞く。

それは、壁に立っていた自動人形が、

「失礼。頭部から落ちれば、怪我をしてしまいます」

落下するこちらに対し、向こうは壁から悠然と飛び降りる。
身を翻しながら、自動人形は空中でこちらの右前に来て、

「――――――これで身が横に回るので、大丈夫かと」

自動人形が壁を蹴った。
その反動で速度を上げた人形は、キックを放ち、

「不作法。御容赦御願い致します」

次に彼が聞いたのは、自分の骨に響く蹴撃音だった。

／※／

淡い光の中で、酒井は佇んでいた。

息を切らし、腕に書類を抱えた彼が居る場所は、同僚の邸宅内だ。

「榊原……」

背後には、追いついてきた女中型の自動人形がおり、

「Ｊｕｄ．、そこが、旦那様の書斎となります」

目の前にあるのは、六畳ほどの畳間だ。

庭を見るために、奥の障子窓が半分ほど開けられており、手前側の左右には書物の入った棚がある。

そして部屋の中央には、文机がある。

机のこちら側には、座布団がある。

座布団に座れば、灯篭の明かりに照らされた庭を見つつ、作業が出来る。そんな書斎だ。

だが、そこに主人の姿はいなかった。

代わりにあるのは、

「二境紋……」

文机から床に渡って、赤黒い文様が大きく描かれている。

それは窓の方に向かい、障子に浅く届き、壁の漆喰に文字を残した。

記された字は、酒井の言葉で読むならば、

「〝なにをしてるの〟……」

文字はあるが、榊原はいない、否、

……どこへ消えた。

ことに気付いたのは、自動人形から書類を受け取ったときだ。

作業前にそう指示を受けておりましたので遂行致しました、と。自動人形は言った。

それは、作業後の指示ではなかったことを示す。

更には、文机に置かれていた紙束は、今手元にあるのだが、その全てが白紙だ。

榊原が、白紙を渡すとは思えない。

だが、自動人形がこれを持ってきたと言うことは、作業が終わったという事だ。

それについて、背後の自動人形は、

「――――――旦那様がいらっしゃいませんでしたので、作業終了と判断しました。部屋の掃除については、これから行おうかと――――――」

榊原はどこにもいない。

文机の上には、黒布に置かれた和紙と、水を注いだだけの硯がある。

まるで、墨を擦ろうとした矢先に、席を立ったようだ。

酒井は部屋に入り、榊原の痕跡を確かめる。

すると、妙なことに気付いた。

硯の上を、水が跳ねているのだ。

……これは――――――。

墨で水を弾いたのか。

否、榊原は文にうるさいタイプだ。道具の使い方はしっかりしている。

乱れるような使い方をしないはずだ。

ならば、と更に踏み込んだ酒井は、それを見た。

文机の上、文鎮で押さえられ、黒い布の上に敷かれた和紙に、皺が寄っている。

水を付け、乾かした跡だ。

跡は引き摺ったような筆跡で、あるものを書いていた。

二つ。

その内一つは、

「二境紋……」

もう一つは、文字だ。

それは酒井も知っている、

「――――――追え」

呟いた文字は、そこで終わっている。

だから、というように、酒井は抱えている紙の束を見た。

何も書いてない白紙だが、一番上の紙に、細い皺が寄っている。

水の筆跡だ。

榊原が、今文鎮で押されている一枚を書く前に記し、積んだ紙束に載せたものだろう。

そこに書かれたのは、

「〝創世計画〟……！？」

今までのヒント、印の意味を、酒井は並べて呟いた。

「創世計画、公主、――――――追え」

公主を追えと言うは解る。

だが、

……創世計画は、……Ｐ．Ａ．ＯＤＡの末世対策だろ？　それを何故――――――。

解らない。

目の前にあるもの、榊原が、自分がいなくなると悟ったのか、急ぎで記した水の筆跡の内容や、彼がいなくなったこと自体も、何も解らず、

……どういうことだ！？

神隠しの怪異は、方々で聞いていた。だが、同僚が、わずかな時間の間にそれを受けたとなると、話は別だ。事実を前にしても、信じられないという思いがある。

ああ、と酒井は思う。

今の自分は、背後から榊原がやってきて、冗談ですよと言ってくれる事を望んでいる、と。

「だが、……井伊が消えたとき、お前もそう考えていたのか？」

問いかけの声は、乾いてゆく水の筆跡と共に消えてゆく。

消えていく。という事実に、酒井がこれ以上の滞在の無用を感じ、一歩を後に下がろうとしたときだ。

音が聞こえた。

正面、開け放たれた窓の向こうから。

低い、何かが爆発したことを知らせる、遠雷のような響きが。

「――――――――！？」

聞き慣れた音だ。

腹に響く、落ちる音。

それが爆発というのは解る。

しかし、

……何故だ？　何故、爆発が生じる？

解らない。

解る筈がない。

そして解らないことばかりだ。

井伊が消え、そして榊原も消えた。

公主達と創世計画を追えといわれた。

更には、

……爆発だと？

「くそ……」

呟きと共に、酒井は動いた。

廊下に出て、玄関へ走る。

背後で、自動人形が何処へ行くのかと問いかけるが、答えたところで意味は無い。

ただ外へ出るだけだ。

何も解らないという事実を再確認するために、ただなにが起きているのかを見るために。

外へ行く。

酒井は、玄関の遣戸を体当たりするように開け、同時に身を前に投げ出す。

石と松の木で構成された庭。

くの字を描くように並べられた飛び石を、最初と最後だけ踏む勢いで飛び越える。

門は開いている。

向こうに、街道が見えた。

門を抜けるために酒井は跳躍し、空中で腰を低くしながら着地姿勢を取った。

そしてその瞬間。

酒井は二つの色を見た。

一つは、各務原方面の山中、三河に対する聖連の監視所が炎を吹き上げている色。

もう一つは、前に踏もうとしていた右足をすくうように来る、

……石突き!?

右足を縮めたが、遅かった。

外から内に、足を引っかけるように払われ、酒井は宙でバランスを失う。

「――――――!?」

右肩から下に落ちる動きに対して、酒井は左腰を強引に跳ね上げる

事で、半回転の動きを追加した。

バランスの失った身体を一回転させ、伏せるような動きで着地する。

足がつき、砂を踏んだ。

同時に、右手は腰後ろの短刀を半抜きにしており、上方向からの攻撃に備える。

そして同時に左手を内に振り、左方向からの攻撃を牽制しつつ、その腕に引っ張られるようにして立つ。

腰を落として身構えれば、左肩を前に出した右逆手抜きの姿勢だ。

酒井は周囲に視線と聴覚を働かせながら、

「――――――誰だよ？」

問いかけに、二つの影が、暗い街道を更に黒く染める建物の陰からゆっくりと現れた。

それは、

「ダっちゃんに……」

「Ｊｕｄ.、本多家付き自動人形統括、鹿角です」

酒井の視界の中、鹿角が、無手の手指を身体の前で重ねて一礼した。

彼女の横に立つ忠勝は、手に一本の槍を持ち、こちらを見ていた。

酒井は、忠勝と、その手に持つ槍に目をとめる。

笹穂型の穂先を持つ槍は、

「……蜻蛉切か。一応、クラスとしては神格武装の業物だったな。事象すら割断するっていう能力の……」

「ん？一人だけだと？……ま、いっか――――――つかお前、老けたな。避けられねえんだからよ」

言った忠勝は、長く伸ばしていた蜻蛉切を、持ち上げて縮めた。

彼は、蜻蛉切の伸縮機構のソケットを締めなおすと、懐から直型の煙管を出して口にくわえる。

瞬間。

横の鹿角が左手首を跳ね上げ、煙管を跳ね飛ばす勢いでその先端を弾いた。

篭る音と共に煙管の先端に仕込まれた圧縮葉に火が付き、

「――――――不作法、失礼致しました」

「気にするな。――――――で、酒井、お前さ」

忠勝の台詞が進む間に、三つの音が響き出す。

一つは、上空を西から東へと、聖連の航空型武神が制空権確保のために飛翔して行く音。

もう一つは、西の陸港から聖連の警護艦が浮上し、各務原の火災の方へと向かう音。

そして最後の一つは、

「おい、ダっちゃん、……この音」

最後の音は、空から響いていなかった。

微かな、しかし厚みのある染みとおるようなそれは、

「地面、否、……もっと底から来てるぞ、これ」

酒井は、地の底から届くそれが何であるかを知っている、しかし、

……無茶だろ……。

あってはならない、という、事実を無視するための思考が、それを認めない。

だが、音はゆっくりと、そして確実に来た。

お、とも、ど、とこ聞こえる音。

それが、地面を震わせるのではなく、地殻と、その上の大地と空気を共に揺らすようにして、浮き上がり、

「――――――」

長い長い、鼓動を打った。

脈だ。

血管を押さえたときに指に感じる圧の定期を、数倍にも延ばしたもの。

それは、大地が鼓動する音だ。

……これは――――――。

息をのみ、視線を前に送ると、そこにいる忠勝の口端が、上になっていた。

その上がりが、ゆっくりと開き、

「地脈だ。酒井。憶えているだろ？　我達が現役時代に旧那古野城を造るとき、地脈から流体を分解する地脈炉の出来が悪くてな、幾度も暴走しそうになって、こんな音を空間にたてた」

憶えている。確かにそうだ。

十数年前、まだ松平四天王として浮かれていた時期だ。

地脈炉はＴｓｉｒｈｃ教譜国では廃止されていたが、三河はその範疇に含まれず、まだ稼動していた。

ゆえにＴｓｉｒｈｃ教譜国からの依頼で武装や航空船舶の製作を受注していた三河は、旧式となった地脈炉を何とか保たせて業務をこなしていた。

地脈炉は、地脈から流体を分解し、流体燃料を精製する設備だ。

運用には莫大な費用を掛ける一方で、それ以上の流体燃料を獲得出来る。

しかし、それは地脈を吸い上げる事で、周囲の地脈を細くし、不安定にするものだ。

故に、地脈炉の不安定を示す地脈の鼓動音の表出は、妖物や怪異を呼ぶものとして恐れられていた。

しかしかつての自分達は、

「この音がする中、平気でメシ食ったりヤニ吹かしてたのが俺らだったな、ダっちゃん」

「ああ。だがよ酒井、――――――”大総長（グランヘッド）”と呼ばれていたお前はもう老けたな」

忠勝が言う頭上、鼓動の中を轟音が抜けていく。

十字型四枚翼を持った、聖連の武神だ。

元々は武蔵の監視としてついていたものだが、番屋の火災で緊急発進したのだろう。

数は三機。

三河の上空を、時計回りに行き、制空権の維持に務めている。

何かがあれば、三河を監視し、教皇の”警護”に乗り込んできた三征西班牙が責任を追及されることになる。

今、空を行く武神も、たかが番屋の制圧に航空艦が出るのも、三征西班牙の示威と焦りの表れだ。

そして、聖連勢の中で、まだこの鼓動に気付いている者はいないだろう。

山岳側にある番屋の騒ぎは陽動だ。

それに釣られた状態で、真の危険が地上側、新名古屋城の地脈炉にあると解ってない筈だ。

しかも、上空の武神は対空装備で上がっている。

航空艦も、番屋の鎮圧用に山岳装備の歩兵が殆どだ。

つまり、三河市街に乗り込むには不向きだ。

最悪出直し、もしくはやや不利な状態で三河に乗り込むこととなる。

「聖連は、まだまだ事態を飲み込めていない。陸港の方では、新名古屋城に事態の詳細を知らせるよう連絡が行ってるだろう。そして受付の自動人形が、それを引き延ばしているだろうよ」

「何故だ？」

「簡単に乗り込まれたら上手くいかんからに決まってんだろ」

酒井の問いに、忠勝が口から煙を吐いた。

「三つイったから、バランスが傾いてとうとう鼓動が始まった。もう気付かれたろうから、陽動はもう終わりだな。あと、中央入れて二つがイくまで耐えどころ、か」

「待て」

酒井は言った。

今の忠勝の台詞の中にある数字に対し、

「三つとか二つとか、それは……」

「新名古屋城の地脈炉に決まってるだろ？　四方の四つと、中央統轄の一つ。今、それらを丁寧に暴走させてんだよ」

忠勝の言葉に、酒井は一瞬、思考を停めた。

……地脈炉を、暴走させている？

方法は簡単だ。

地脈から流体を抽出する機構部分を、規定よりも強く稼動させればいい。

そうすれば抽出された流体が貯蓄槽や予備槽に行く前に、炉の中で多量獲得され、炉を内側から浸食する。

素の流体は、空間を自由に変異させることが出来るものだ。

方向性が無い故に、蓄積を続ければ干渉を始めて周囲を浸食し、やがて互いに”変換”を開始してしまう。

そうなったら最後だ。

炉を食い、地脈に逆流した”変換”は高速に広がり、他の空間と混じってその個性を薄められるまで、浸食の作用を広げる。

かつて、神州が制圧される前、重奏神州の露西亜（ルーシ）にて地脈炉が暴走自壊したことがある。

同じように、八年前、Ｐ．Ａ．ＯＤＡの信長は襲名直後に地脈炉の暴走自壊で領内に残るムラサイ反勢力を滅ぼした。

彼らが神殿を造った比叡山に追い込め、それを消滅させたのだ。

そのどちらも、

「半径数キロが消滅したんだぞ……。それを五つも行ったら名古屋どころか三河が消えるぞ！？」

「だからお前は老けたって言うんだよ」

忠勝が笑って告げる。

「今、三河には人はいない。自動人形と我達だけだ。だったら、――――――見てえよな、我達が現役のときのポンコツ」とは違う、新型地脈炉暴走の地脈崩壊による三河消滅」

「――――――」

「榊原の邸宅から出てきたってことは、話し聞いてんだろ？　これが、何のためか？」

「榊原は消えたよ。……公主達によって、神隠しにあってな」

ほう、と忠勝が空を回航する武神を見ながら言った。

「じゃあ何のためか聞いてないのか。惜しいコトしたな……」

「惜しい……？」

「我はな？　ただ、殿の命令動いているだけだ。井伊や榊原は何か知ってるようだが、我は真相も何も、ほとんど知らん。ただ殿から聞いているのは、これが――――――」

一息。

「これが、創世計画の始まりってことだ」

気付かなかったか？　と忠勝が言った。

「創世計画じゃ、Ｐ．Ａ．ＯＤＡが打ち出したもんだ。だけどな？　三河はＰ．Ａ．ＯＤＡと同盟してんだぜ？　そしてＰ．Ａ．ＯＤＡは創世計画の詳細を表に出さない。どうしてか？　答えは簡単だろ？」

「――――――創世計画は、三河がＰ．Ａ．ＯＤＡに持ちかけた計画だというのか！」

「ようやく、一つ解ったか。まあ、我も知ってるくらいのネタだがな」

一息。

「殿はまだ、P．A．ODAにも全容を明かしていない。我達にも。ただ我が聞いているのは、――――――それによって、全てが救えるかもしれない、というわけだ」

忠勝の言葉に、酒井は動いた。

前に踏み込むのと同時に、腰の短刀を抜き、

「やめとけ。――――――結ぶぞ」

眼前に、蜻蛉切の先端が突きつけられた。

否、穂先とこちらまで、まだ三メートルの距離がある。
ただ、狙いがこちらへの最短距離えお通る線に乗っているため、穂先を近く感じてしまう。

「……解るくらいには、勘が無くなっていないか」

「無くなってたらどうする気だよ」

「突くしかねえだろ。それが我の仕事だ。忠、勝つ、それゆえの忠勝だ」

その言葉に、両者は不動のまま。

不動のまま、鼓動が響き、空を行く武神と船の音が響く。

そして音を重ねるように、忠勝が言った。

「行け、酒井。――――――我はお前に構ってる暇がねえんだよ。これからK・P・A・Ｉｔａｌｉａや三征西班牙の陸上部隊が事態をよく把握せずにやってくるのを、鹿角と迎撃しなきゃならん」

「馬鹿、そんなコトしてる間に、地脈炉が暴走したら――――――」

「殿が望んだことを成し遂げるのを、理由も聞かず、ただ守り、そのために勝つのが我の忠義だ。ならば忠次、お前の忠義はどんな形だ。忠、次へと繋げることじゃねえのか？」

行け、と忠勝が告げた。

「お前の連れ、……あの御方と同じように、お前の居場所はもうここにはない。我達の居場所が、お前達の行くところにないように」

「知っていたのか……結城の正体に」

「十年前に、お前が武蔵に連れて行った坊主だろ？――――――噂の刀を持って逃げた結城家の生き残りが、まさか死んでいたと思われていた人物だなんて、笑えねえ冗談だ」

苦笑した忠勝の言葉に、酒井は目を細めて、

「あのとき、殿がああしてなかったら、今頃三河はどうなっていただろうか」

「さあな。――――――ま、今とはだいぶ違ってるとは思うぜ」

「お前は、本当に行くのか？――――――榊原は、俺達四天王は常に共にあるって言ってたぜ？」

「ああ」

忠勝が、蜻蛉切を引いた。

「我達は、常に、過去の中で共にあり、そして常に、共に過去の中へと向かっている」

言いながら、彼は指を鳴らし、鹿角に背を向けさせる。

と、鹿角が肩越しに一礼して、忠勝と共に名古屋の町へと歩き出す。

そして忠勝も肩をそちらに向けた。

だが彼は、首だけで振り向き、

「我はこれから、殿と共に過去へとなりにいく。お前もいずれ来い。そして我に教えてくれ、創世計画ってのが、一体、何だったのかを。そして――――――」

笑った。

「我が為す事が、末世を救う一歩目をちゃんと果たしていたならば、そのとき褒めてくれ」

「……ダっちゃん」

既に背を向けた忠勝に、酒井は声を掛けた。

「娘、どーすんだよ!?　他にもいろいろ、あるだろうよ!?　それを――――――」

言葉がそこで止まった。

……揺れが……。

鼓動が、震えに変わったのだ。

同時に、それはまるで、空が支えを失ったかのように、何もかもが一度下に押され、

「……！？」

直後。

三河が割れた。

地脈炉の暴走が地殻と空間を走る地脈に干渉し、血管が破裂するように空間が弾けたのだ。

音が砕け、大気が落ち、大地がもげて、

「――――――――！？」

三河の崩壊が始まる。

第七話～始まる鼓動、その意味は～（後書き）

始まったな。

そして主人公未登場の回……Ｏｒｚ

そしてまた少し待て、チート回。

もう直ぐだから……多分。

と、まあ、色々あって三河篇も最終段階に入ったことですし、アニメ的にもそろそろこんな処だなあ、と思って書いた七話です。

三河崩壊を前に、結城がどのような行動を取るのかは、次回、或いは次々回をお楽しみ下さい。

第八話～嵐の前は、静けさに限るのか～

それは崩壊の始まりが訪れる少し前のこと。

三河の北側にある陸港。

停泊されている武蔵の上。

武蔵アリアダスト教導院では、三年梅組が明日のトーリの告白に対する前夜祭として、幽霊探しの準備をしていた。

「――――――というわけで」

その中、若い声が二つの月を見上げる橋の上で響いた。

夜で、明かりは橋や校庭上の灯篭という中、一人立っているシロジロは、周りを囲むように座っている皆に対し、

「まだトーリは来てないが、間違いなく無駄金使って仕込んでる。だからまあ、こちらとしてはその意を汲んで、”幽霊探し”に行く前に怪談をしておこう。――――――無料で」

「シロ君、何だか場を盛り上げるのか事務的なのか解らないんだけど……」

ハイディが眉尻下げて言う横、浅間が手を挙げた。

シロジロが会釈して促すと、浅間は頷き、

「ええとね？　皆、怪談じゃなくて最近多発している怪異におけるここだけの話なんだけど――――――」

直後、浅間の後にいた葵姉が、両手を振り上げた。

「ここから浅間によるスーパーエロ話タ――――イム！！」

「えええ？　ちょ、喜美ってば勝手に何を――――――、というか男衆も正座しないっ。あのですね、喜美はどうしていつもいつもそういうことを――――――」

「だって私、エロの神様を奉じてるもの。正確には芸能ウズメ系のサダ派ね。――――――それより何？　そっちが言えないなら、”

浅間のスーパーエロ話”にでもする」

「ちょっ！？　急に何を！？　私にそんな話なんかありません！！」

「あれ？　おかしいなあ……、前に結城から聞いたんだけど……」

「――――――――！！？」

急に頬を赤く染めた浅間に、喜美が意地悪な笑みを浮かべる。

そして両手を浅間の肩に乗せ、

「まあ、そのことは置いといて、さっき言ってたように私の契約先は芸能神よ？　神が命じていることを否定する巫女が、ひょっとしてここにいるの？」

「え？　いや、別にそういうわけじゃあ……。だってうちの祭神の一柱ですし」

「フフフ馬鹿ねグレイト、アンタんとこで代理契約したもんね、私のときは。あのとき、女しか儀式関れないからアンタが手伝いで来

て、裏の滝で二人で脱いで――――――」

「おぅわあ――――――――！！」

浅間が大声で葵姉の発言をぶった切った。そのあとで皆に振り向き、あたふたと、

「へ、変なことあったわけじゃないですよ！？　ですよ！？　ぎ、儀式は基本的に機密なので、口外は神の個人情報をバラすというか――――――」

「解らないことが多いから、マニュアル片手に、器具使って三度もしたのよねえ

「た、玉串を器具とは言わないっ、あと片手で握って上下にも振ったりもしないっ、二度ミスったのは喜美が変な偽名を書類に書いてたせいでしょっ！！」

「そう焦らなくてもいいじゃない。結城の上位契約のときは密室で二人きりで色々やってたくせに。浅間の反応が初夜迎えたみたいに初々しかったから、つい乱入しそうになったわ。――――――やあねえ、幼馴染ばかり楽しんじゃって♪」

「密室じゃなくて本殿と言いなさい。あと初夜とかも言わない！？あれは他の神社との提携で緊張してただけよっ！それに結城君とは何も無かったからっ。――――――ってかそこ、皆も録音とかしないっ！！」

からかわれてるって気付けよ、と皆がつぶやく先、シロジロが、

「葵姉、単に怖い話が苦手なだけで浅間をからかうな」

「そ、そうですよねっ、駄目ですよね！喜美ったらホラー能楽観ると椅子に座った時点で気絶してるようなヘタレなのに、そういうのエロ話で誤魔化そうとして！」

「ああ。――――――だからそういうエロ話はちゃんと私に売れ。五倍にするから。――――――あと、十倍出すから結城の方も詳しく。浅間の話と一緒にアイツに売って、今度の商工会との取引に強引にこちら側に引き込めるからな、奴の手助けがあれば次の商売は高く儲かるぞ」

「さ、最悪――――――！」

まあまあ、とハイディが仲裁に入る。
その上で彼女は、
「はいはいアサマチー、さっきの話の続きしよっか。一体、ここだけの話って何なの？」
「う、うん、それはね……」
というタイミングで葵姉がまた何か言おうとするのを、ハイディが笑顔で睨んで止めた。
そして、周囲の沈黙を確認した後で、浅間がゆっくりと告げる。
「実は……、ちょっと皆に気をつけて欲しいんです」
「何を？」
うん、と浅間が頷いた。

「怪異で、最近、”公主隠し”の神隠しが神社の上の方で危険視されてるの」

その言葉に、皆が沈黙した。

だが、ややあってから声を発した者がいる。

ネシンバラだ。

「――――――まあ、基本的には、昔の都市伝説だよね。最近になってまた、復活してるみたいだけど。僕達が小さい頃から三河や武蔵でも幾度かあった、もしくはあったという噂が都市伝説として飛んだものだから、作者志望としてはネタ用に個人的に調べてきたんだけど」

そう言いつつ、ネシンバラは幾つもの表示枠を宙に作りながら、

「調べてみると意外と昔のメジャーでさ、図書館だと昔の子供向けの本にもあったよ。”公主隠し”じゃないけど、”公主様”っての

が出てくるのが、三十年くらい前から幾つかあった」

「ネシンバラ、無料で説明出来るか」

シロジロの促しに、ネシンバラはややあってから頷く。

彼は幾つかの表示枠を反転表示にし、皆に見せるようにして、

「こういうことは結城君の得意分野なんだけど、これだと解りやすいかな。――――――公主様という人影が、子供を攫ったり、町に落書きを残すんだって。そして日刊瓦版なんかの方だと、実例としてあるのは――――――」

ネシンバラは、皆を見渡し、一つの表示枠をそちらに向けた。

「極東では、最近だと去年に一件起きてる。……皆は知ってるよね？　本多君が言ってたこと。本多君が武蔵に来たのは、母親が”公主隠し”に遭ったからだって」

皆が静まる中、浅間がネシンバラの方を見て深く頷いた。

彼女はハナミを呼び出し、表示枠を宙に浮かべると、

「”公主隠し”は、普通の神隠しとは違います。普通の神隠しは空間を創る流体が乱れ、その裏側に入ってしまうだけだから、消えた人間の存在は消えないんです。術式を使えば、御霊や身体、身につけていたものの存在から位置を追えます」

「でも、”公主隠し”は、――――――全部消えてしまい、戻ってこない。魂も身体も、持ち物も、完全に消えてしまう。聖術（テスタメント）や魔術（サタンマギ）にもある消滅系の術式をぶつけたときに似てるよね」

ネシンバラの補足に、ええ、と浅間が言った。

「そして、”公主隠し”が起き始めたのは三十年くらい前から。そして年に数件起きているようです。だから今は、社の一部ではこう言われているんです。”公主隠し”は、神隠しに見せかけた、組織的な連続殺人じゃないかって」

一息。

浅間は俯き、親指の爪先を唇に当てながら、

「”公主隠し”とは、怪異ではなく、何かの組織が、情報が漏れることを恐れ、対象の命も身体も残らない殺し方をしているのが本当じゃないかって……」

そして浅間は、指で橋の路面に図を書いた。

円と、それを横に貫く線だ。

「これ、”公主隠し”の現場に必ずある印で、私も何度か見たことがあります、神隠しらしい現場で。上の方が封鎖して、いつも捜査が断ち切られちゃうんですけど」

浅間の言葉に、皆が何度目か知らない沈黙を迎える。

だがそんな静けさの中、浅間の横で耳を塞いでいた喜美が震えを隠しながらの強がり口調で、

「……フ、フフフ、べ、別に、そんなの犯行の印としてエロいマーク描こうとしてたら人が駆けつけてきてし損じただけでしょう？　そうよね！？　皆エロマーク大好き！　大好き！」

「そんなマークを仕上げに描こうとする犯罪組織ねえよ！！」

皆のツッコミに葵姉が改めて耳を塞ぐ。

丁度いい、という風に浅間が口を開き、

「それでまあ、そういうのが多発してます。他にも色々あって、それで神社の上の方が最近出してきてるのが、”他言無用”。それも世の不安を煽るタイプのものに対してなんですが、さっきの公主達の印がついた”公主隠し”は、必ず含まれます」

浅間の言葉に、皆の中から手が上がる、

浅間のすぐ近くにいた直政だ。

彼女は膝に乗せた義腕に頬杖をつき、猫のように身を曲げると、

「あたしゃ元々中国の出でさ。公主って言えば、中国王家に生まれた娘のことじゃないかね」

「じゃあ、”公主隠し”について聞いたことある？」

「関東だと、たまに噂でね。清が中国を制圧していく中で、落ち延びた、明の公主が恨みのある相手を術式で殺してるんじゃないかって。まあ、噂だろうと思ってたけど……」

一息。

「腑に落ちないのは、公主って言う割りに、清圏以外でも発生してんだろ？　アサマチ」

「一番多いのは、多分、三河と京の周辺じゃないかな」

「……うわ、モロに直撃圏内ですねー、今。でも、気をつけようにも、どうしようもないですというか。……だって組織か何かの犯行の線があるなら、おそらく奉行係や夜警団が追っていると思いますし、怪異なら大体無差別ですしー……」

「フフフそうよ無駄よ！どうしようもないのよ！いいこと言ったわねアデーレ！」

と、いきなり喜美が立ち上がった。

アハ、と彼女は笑い、

「無駄！モテない男が何やっても駄目なように都市伝説なんて対処考えても無駄よ無駄！フフフこのモテない男どもめ！！お前だ！そこのお前も！！」

「こ、こら喜美！テンゾーとウルキアガを指すのはやめなさいっ！大体指差すのは縁起悪いんだから口で言いなさいっ。あと、二人とも好きでモテないわけじゃないわ！努力したところで見た感じ素質なんだから仕方ないじゃない！追い打ちするのはやめなさい！」

「フフフ浅間。アンタは無駄にオトメンな結城がいるからそんな陳腐な言葉が言えるのよ。良かったわね？　何でもできるナイスガイが未来の夫で。アンタとこのお父さん、今頃、式の日を選びながら嬉し泣きしてるわ！ビューティフォー！！」

「なっ！？　ちょっ、馬鹿なこと言わないで！！私と結城君はそんな関係じゃないわよっ！！」

「あらそう？　じゃあ、中等二年の秋の夜、アンタの家の前で抱き合ってた若い男女は一体誰でしょう？」

「のっわあ――――――――――！！！？」

点蔵とウルキアガが横に倒れながら泣き始めたのをよそに、葵姉と浅間が言い合いをヒートアップさせていくが、それとは別で御広敷が手を挙げる。

「小生思いますに都市伝説はゆっくり考えていけばいいとして、……とりあえず怪談としてはいくらか効いたと思うので、ええと、今夜、他の皆は？――――――――地元の小等部の子達とか！」

「金にならん欲望は捨てろ。あと葵姉、さっきの話の続き、後で詳しく聞かせてくれ。十倍出すから。――――――まあ、ともあれ他の連中はと言うと、正純は住んでる多摩の艦首側に三河の花火とやらを見に。東は引越しで遅れて、ミリアム・ポークウは無理、そしてミトツダイラは家が夜間外出禁止だな。となると……、あとは仕込み中のトーリと、さっきから話に出て来ている結城がまだ見当たらんな……」

言った瞬間だ。

「オッケー！遅れた！悪い悪い！」

いきなり校舎の正面玄関が開き、トーリが校舎の中から顔を出した。

そっちかよ、という皆の顔を前に、彼は笑みの顔で校舎内の闇を示し、

「早く来いよ！――――――暗くて面白いぜ！！」

／※／

夜の町中。

結城は、戸惑いながらも先を進んでいた。

場所は三河中央地区である名古屋と、郊外に続く大通りの前。

夕方頃、松平四天王の一人である榊原との会話を終えた後、”公主隠し”に関る資料の受け取りを酒井学長に任せ、自分は教導院と神社の頼まれごとで三河周辺を調べていた。

内容は二つ。

一つはシロジロと商工会の依頼で、次の商談会議の前に、今回の三河の物資の流れを探って欲しいということ。

臨時相談役の仕事ではないが、どうせ序でだからということで引き受けた。

もう一つは、神社の上の方から、最近三河で多発している怪異についての調査だ。

結城は、浅間神社経由で鹿島神社の鹿神であるアメノカクと上位契約を結んでいるが、アメノカクの上司でもある軍神・鹿島神タケミカヅチとも間接的だが、契約を結んでいる。

使っている術式の練度が非常にハイレベルなため、結城は浅間神社に仲介を頼んで、戦闘系である熱田神社、鹿島神社、春日大社の三つの神社から指導を受けた経験がある。

ゆえに結城は各地の神社にも顔が知れており、武蔵の臨時相談役として極東での怪異調査に協力している。

そして今、酒井学長との事前の約束で、名古屋に入らず、郊外辺りを散策する予定だったのだが、それを気にしていられる状況でもない。

理由は簡単。

結城の目の前、遠くにある新名古屋城の一角に光が見えた。

身を打つ微かな震動と共に、光は急に視界に現れ、今は陽炎のようにゆらゆらと揺れている。

数は二つあり、その内一つは、丁度今ついたばかりだ。

それが何なのかを、結城は知っている。

十年くらい前に、あの忌まわしい己の原点でもある炎と同じものだ。

結城家を焼き払った爆発と似たものが、目の前の、三河の中央で起きている。

「どうなっている……！？」

新名古屋城は地脈炉四基と、中央統轄炉一基で構成された巨大な工房だ。

昔、結城家の工房を運営するために、一部の流体燃料を名古屋から運送して来たのを、結城は見たことがある。

ゆえに、完全ではないが、地脈炉の設計やその稼動方式の大まかを理解しているつもりだ。

だから、

「地脈炉が爆発……、襲撃や爆撃を受けた痕跡はない、外からの影響じゃないとすれば……」

それは内部からということ。

テロか、否、もしや……

「まさか……、暴走させているのか……？」

最悪の予想に、結城は真実を確かめようと一歩踏み出す。

しかし、

「ん？」

名古屋に向かうその歩みを遮るように、回りの建物の陰から幾つもの人影が現れた。

数は軽く見積もって三十程度。

白と黒の侍女服姿をしたそれらは、

「三河の自動人形？　何のつもりだ？」

結城の問いに、正面に立つ自動人形の一人が一礼をし、

「三河当主、松平元信公と、本多家付き三河所属自動人形統括、鹿角様の御命令です。――――――結城様がこの先に行かれることは堅く禁じられていますので、どうぞ、御引取り願います」

壁を作るように並んだ自動人形達の前、松平元信の名前が出たことに、結城は目を細め、

「……あの爆発は、元信公の仕業か？」

「祭の準備です。御気になさらずに――――――」

気にしないわけが無いが、どうやら説明する気は無いのだと、結城は判断する。

自動人形は、結城を通しては為らないと言った。

つまり、松平元信は、自分がこの三河にいることを知っている。

……何を考えているのかがバレバレなんだよ……！

腹の奥で燻る激情を押さえ込み、結城は更に一歩前へ踏み出す。

心の中で酒井に謝りながら、結城は背中にある長棒を右手でゆっくりと引き抜き、腰に携えるように回し込んで左手で持ち直す。

そして鋭い青の視線を自動人形達に向け、

「駄目元で聞いてみるが、通ろうとしたらどうする？」

その言葉に、全ての自動人形が一斉に片手を水平に挙げる。

そして重力制御機能の同時作動によって、地面にある石や軽いものが浮かび上がる。

結城は、無数の銃口が構えられたかのような光景に、

「決して通しては為りませんと、そう申され……」

自動人形の言葉が終わるより早く、結城は自動人形達の後に立った。

「――――――？」

突然と目の前から消えた結城に、疑問を示すかのように自動人形達は振り返る。

あるものは視線を、あるものは首だけを、あるものは身体ごと振り返り、そしてその誰もが見た。

背中だけを見せ、しかし既に右手で長棒を振り翳した結城が、静かに名古屋の方へと歩んで行くのを。

その歩調は軽く厳かで。

一歩、

二歩、

三歩と、

四歩目を踏みしめたとき、

「――――――！」

全ての自動人形が、地面に倒れた。

「アメノカク、”四歩（しほ）の手便（てびん）当て”だ。止めるだけ時間の無駄だったな……」

その台詞と共に、結城が地面を蹴る。

一瞬のチャージと共に、神風が舞った。

新名古屋城に向かって吹き荒び、そして三度目の地脈炉爆発を迎えようとしていた。

／※／

夜の八時近く。

武蔵アリアダスト教導院の中庭では、校舎の震動を目で見ることが出来た。

トーリの仕込んだ騒ぎに、幽霊探しのイベントは何時の間にか、学生側と傭兵団との戦闘になっいる。

ときたま一階端の非常口や窓から、白いコスプレ集団に見えたなにかがこそこそと脱出していく。

浅間やナイト達を始とし、術式主体の生徒が絶え間ない爆発で夜の校舎を彩っている。

その騒ぎは既に他の人々にも感づかれており、教導院の外枠には観客が大勢いる。

が、誰も彼も、

「ああ、またか……」

という声と共に、敷地内に入ってくるものはいない。

そして未だに震える校舎を前に、送れてイベントに参加した帝の子。

東宮の東（あずま）は、各地での騒ぎを逃れた皆を集め、芝生の上で一息をついていた。

後では御広敷とハッサンが持参した握り飯とカレーを口に入れており。

アデーレは、ズドンのし過ぎで息を切らした浅間をハンカチで扇いでいる。

今日の宿直はオリオトライと聞いたが、さっき見に行ったら酒瓶抱えてゲーゲー寝ていた。

これでは駄目だなあ、と思いながらも、目の前では妙な黒タイツが棟の壁を伝って地面に逃げてきた。

それはこちらを見ると、”愛”と赤で書かれた胸を張ってから右舷方角へ消えた。

……濃いなあ。

と考えつつ、横にいたノリキが言う。

「……誰かの顔見知りか？」

その言葉に、直政が腕を組んで首を傾げる。

「さっき去っていったのは、多分品川商工会の小出翁じゃないかね。その前はしらんが、アサマチの方に手を振っていたから、――――――アサマチ、親父今夜、行き先告げずに外出してたりしないかね？　……ってアンタ何こっち睨んでるのさ。親父のトゥルーエンドを受け入れなよ」

「ま、まだ終わってませんし決まってませんっ」

と言った浅間が、また伏せる。

顔下にハンカチを敷き直すのは鈴の役目だ。

そしてそんな皆を見つつ、東は思う。

……いつも通りだなあ。

内心で頷き、しかし、こうも感じる。

……皆、機嫌がいい？

トーリが明日に好きな娘への告白をする。

皆の機嫌は、それによるものだろうか。

自分は中等部から武蔵に来たため、それ以前の皆を知らない。

しかし皆の多くは葵とは小等部からのつきあいらしい。

それによって仲間外れにされたことはないが、こういうときの感覚は違うのだろうな、と思いもする。

ここ最近は、東にとっても色々と大変だった。

この一ヶ月ほど、二年の春休みから聖連に召喚されて、権限の奉還と自分の力の封印の仕上げをやってきた。

聖連が、神格者である帝の息子である自分の還俗を望み、帝の内裏からもその許可が出た。

自分に世間知らずな処があるというのは自覚している。

同世代の者と顔を合わせず、理解しなければならない話ばかり聞いた。

それに比べれば、目の前の光景や、今までの武蔵での生活は色々と雑多だ。

同時に、このような雰囲気を居心地いいと思うくらいには、自分はここに馴染んでいると思う。

自分も、輪の中に入れば、きっと、雑多な一人なんだろうあ、と。

「そう言えば、どうしてるんだろうな……」

呟きに似た言葉に、東はふと、二人の人物を考える。

一人目は、今日当てられた寮部屋で同室することとなった少女のこと。

ミリアム・ポークウ。

亜麻色の髪をした車椅子の少女は、皆で一緒に集まって騒ぐこのイベントをどう思っているのだろうか。

単に騒がしいと思うか、それとも、

……一緒に遊びたいのかな……。

健全な自分には、果たして不自由な人間の思いを理解出来るのだろうか。

男女同室は流石に問題だとは思ったが、この武蔵でやって行くためには、色々と慣れていかなければいけない事もあるだろう。

そのことについて、今日は各所に鼻歌交じりでタライ回しにされたし。

しかし当のミリアム本人は、互いに自重してやっていこうと言う。

だとしたら、自分も努力するしかない。

色々と馴染めるように、自分は此処にいるのだから。

「不自由と言えば……」

もう一人、何時もならこの騒ぎの場にいる皆の監督役。

……結城さんは、別件で武蔵にいないと聞いてたけど。

確かに今日一日、彼の姿を見ていない。

背中に白布で包まれた長棒を背負い、黒い長髪を靡かせた蒼瞳の少

年。

皆同い年だが、彼だけどうしてか、少し年上に感じてしまう。

心が不自由なせいか、彼の身に漂う哀愁が、そんな雰囲気を思わせてくれる。

……初めての印象は、怖いけど、悲しい人だったな……。

それは自分が武蔵に来て間もない頃。

臨時相談役として余り授業に顔を出してない彼を、当時の東はよく知らなかった。

そしてある日。

教室でトーリが浅間に悪戯をした事件で、東は初めて結城に出会った。

あの時の結城は殺気立っていて、とても近寄り難い人だったが、

……今思えば、とても儚い人でもあった……。

何かを深く抱え込んで、壊れてしまったと、梅組の皆が言ってた。

だから皆彼に気遣って、彼が望まない限り、踏み込まないようにし

ていた。

今では、結城も普通に梅組と騒ぐことはあるが、果たして過去の蟠りは消えたのだろうか。

――――――まあ、今では、外道過ぎて、逆に騒ぎの一部になって、そんな風に見えないけど……。

この場にいない人たちを考えつつ、東は思う。

本気でいつも通りな騒ぎだが、オリオトライや結城がいれば完璧だろう。

そうなると騒ぎが圧倒的な暴力を持って二人に鎮圧されるのだろうなあ。

しかしその際は、きっと今より大きい騒ぎになるのだが、それはつまり質と時間のどちらをとるかということなのだろう。

ふとここで、横手で動きがあった。

鈴が立ち上がり、

「あ、あの、水を、浅間さ、ん……、っ、息、切れ、切れ、切れててっ」

汲みに行こうとする。

水道は校庭に水を撒くための栓が教導院横の昇降口近くにあるが、飲料用ではない艦内循環水だ。

飲料用は校舎内になるが、

「ベルさん、あのー、ちょっと今あの中に行くのはー、巻き込まれるというかー」

アデーレがどうしたものかという口調で止めようとする。

そのときだった。

鈴の行こうとした方角、すぐ近くから、大きな声が響いた。

「――――――一体何の騒ぎだこれはあ――――――――！　麻呂の町でこの狼藉とは！！」

皆が振り仰ぐのは、いつの間にか鈴の前に立っていた王様、ヨシナオだ。

白タイツに、金の装飾とともに肩の大きく膨らんだ上着と、王冠。

右腕の腕章には聖連の紋章と、”教頭兼武蔵王”という文字がある。

トランプのキングがそのまま飛び出てきたかのような風貌だ。

彼、ヨシナオは、今の大声に皆が静まったことを悟ったのか、そのまま四方を見渡し、

「全くもってけしからん！　誰だこんなことを始めたのは！　出てき賜え！！」

全く正論だな、と皆が頷くが、しかし、ヨシナオに対し、一つの反応があった。

「――――――ひぁっ、あ、あっ」

吸気とも、怯えとも聞こえる音は、ヨシナオの正面にあった。

両腕を胸の前に合わせ、震えを押し殺す鈴だ。

あ、と東は思う。

これはマズイ、と。

……焦ってるところに、いきなり大きな声が来たから――――――。

目が見えない鈴は、無防備に殴られたのと同じ状態だ。

だが、息を詰め、しかし吐こうとして薄くえずく彼女に、ヨシナオは初めて気付いたのか、

「――――――？　どうしたのかね。言いたいことがあるなら言ってみ賜え、さあ！！」

その促しに、鈴が大きな口を空に開けて叫んだ。

「うわあ――――――ん！！」

鈴が泣いた。

それまであった音を吹き飛ばすような音に、皆が引き、ヨシナオが慌てて、

「こ、こら君、い、一体――――――」

「この、こ、この、おじ、ちゃん、き、嫌い――――――!!!」

すげえ鈴さん、超正論だ、と皆が深く頷いた。

しかしそれを聞いたヨシナオが、

「き、君らは！　こんな騒ぎをしておいて――――――」

「ひあ――――――ん!!」

声が響く。

そしてヨシナオが慌てて何かを言おうとしたときだ。

不意に両の校舎の窓が一斉に開き、中にいた連中が顔を出した。

皆は、一瞬左右を見て、しかしすぐに泣いている鈴に気付くと、

「ぬあ――――――!!　非常事態(WARNING)!　非常事態!　我が武蔵の貴重な前髪枠が泣かされてるぞ!!」

「くそう何てことだ!　ともあれ下手人の処罰について、皆の意見を求む!」

窓から顔を出している全員が、握った拳の親指を下に向けて突き出した。

一同が力強く頷き、

「よっし!　総意で死刑、問題なーし疑問なーし容赦なーし!　下手人は――――――」

と、最上階から顔を出したトーリが、ヨシナオを見つけた。

ヨシナオも視線を合わせ、

「こ、こら！　総長兼生徒会長！　今回の騒動は――――――！」

「おいおい皆見ろよ！　あんなところに王様のコスプレしてる馬鹿がいるぜ！　ヤツが犯人だな！　全く、麻呂のコスプレして皆の正気度をもりもり下げようとは最悪の下衆だぜ……！　先生と結城がいたら、アイツ今頃最下層のゴミ処理施設に全裸で頭逆さでぶち込まれるぞ！！」

「な、何を言っておる！？　麻呂は本物であるぞ！　本物の武蔵王ヨシナオであるぞ！！　それに麻呂のことを麻呂って呼んでいいのは麻呂だけじゃ！！」

「はあ？　何言ってんの？　麻呂、友達いねえからここには来ねえよ。やっぱ偽者は麻呂のこと解ってねえなあ。本物は今、伝纂器（PC）でマインスイーパーやってんだぜ？　知らねえの？」

「貴様――――――――！！」

「うわあ――――――――ん！！」

と鈴の声が響き、しかし、次の瞬間。

「――――――」

不意に、鈴がその泣き声を止めた。

沈黙する。

それも、まるで、声そのものを止められたかのように、だ。

突然のことに、誰もが視線を向ける中央、鈴が開いていた口を緩やかに閉じ、

「……？」

代わりというように、彼女は顔を前に向け、両の耳に手を当てた。

そして、

「え……？」

皆が思っている疑問を、彼女も作った。
そして眉をひそめた彼女の頭上から、トーリが叫ぶ。

「おい、麻呂どけよ！　あと、伏せろ！　ベルさんの邪魔だろ！！」

指示に、ヨシナオは戸惑ったが、しかし皆の動きに合わせて身を低くする。
誰も彼もが膝をついた中央で、鈴は頬の涙を拭いもせず、左右に耳を傾けた。
ややあってから、

「――――――あ、あっち」

と、左舷の方角を指した。
そちらは東側。

そこにあるのは各務原の山渓だ。

しかし、夜の今、あるのは黒く深い、底の無い闇だ。

その向こうには三河の町があるはずだが、武蔵からは山が陰になって町の光を見ることが出来ない。

だが、不意に闇が壊れた。

暗がりの中に、照らす光が生まれたのだ。

発火の光。

それは炎だ。

各務原の山、峰の上に、焔の形が出た。

「あれ……」

鈴が言うと同時に、遠雷に似た音が聞こえてきた。

その音に、身を低くしていた直政が呟く。

「爆発じゃないかね」

その言葉に、校舎の窓から顔を出していたネシンバラが、眉を顰めて言った。

「あのあたり……、三河を監視する聖連の番屋の内、一番高いとこのがある筈だよ。確か今期は三征西班牙の生徒が詰めていた筈だけど、何だろう、事故かな、火災とかの。……下の番屋、こっから見えないけど、気付いてないのかな」

遠くに見える炎が強まるように、皆の間から小さな声が生まれて波となる。

どうした、とか、何だ、とか、中には、携帯で連絡を取り始める者も出始め、

「おーし！　続きは今度だ！！」

トーリの言葉に、ヨシナオ以外の皆が頷いた。

皆窓から離れ、昇降口から出て、立ち上がり、歩き出し、動き出す。

皆がそれぞれの家や行くべき場所に向かって行く中、ヨシナオも、一度だけ動き出した皆を一瞥し、鈴に対して軽く頭を下げた。

「驚かすつもりはなかった。赦されよ。あと――――――」

身を整え、上にいるトーリを指さし、

「マインスイーパーではなくソリティアである。宜しいな？」

訂正して、背を向けた。

去っていく。

その後姿が歩き出すのを見て、クラスの皆は一息つく。

そして同時に、昇降口から出てきたシロジロが、ハイディと共に、

「三河の商工会と連絡が取れん。自動人形がいない筈無いんだが」

「今見ていても、三河の方、灯りが増えないの。――――――町が動いてないのかな」

周囲には、既に梅組の面々しか残っていない。

シロジロが、皆を見渡してから腕を組む。

首元の装甲から白狐の走狗を出し、

「……おそらく、携帯の回線が混むだろう。走狗の直接通神か、文字通神にすれば軽減される筈だ。急ぎの場合、各自そのようにすること。いいな？　こちらは忙しくなる。ハイディ、エリマキを使って各国の極東居留地との通神をすぐに開けるようにしておいてくれ、武蔵商人団の他の連中を出し抜くからな。武蔵内の私の金融に、共通貨幣の円だけでなく、各国の固有貨幣を準備しておいてくれ」

「Ｊｕｄ．、はは、後で睨まれると思うけど、毎度のことかな。……では、皆、今日は解さ――――――」

「ま、待っ、て……」

声を作ったのは、鈴だ。

先ほど炎に気付いた彼女の言葉に、皆が目を見開いて動きを止める。

鈴は僅かに身をすくめていたが、しかし右の手を何か引っ掻くように前に伸ばし、

「あ、あれ……、その」

皆は、鈴の指さす方向を見た。

そこにいる、一人の少年を。

それは、

「――――――余？」

東は、自分が指されたことに首を傾げる。

……何？

何があったというのだろうか。

鈴が気付くのは音だ。

だから何かあったとしたら、

「ええと」

服は制服のままだ、特に異常は無い。

しかし気付くと、皆がこちらを見ていた。

振り仰げば、最上階のトーリもだ。

しかし東は、首を傾げ、足下を見てみるが、やはり何も無い。

どういうことだろう？　とまた首を傾げる東に、皆が、

「余！　後ろ！　後ろ！」

「後ろ？」

言われ、後ろに振り返った東は、それを見た。

それは、こちらの制服の後ろ裾を握った小さい手だった。

視線をその先に向けると、少女がいた。

白くて長い髪を乱した、白い肌の少女。

東の知らぬ子だ。

少女は泣き出しそうで、

「――――――」

無言の足は、芝生を踏んでいる。

鈴が気付いたのはその足音だろう。

しかし、

「透けてる……？」

身長一メートルに満たない子供の身体は、半ばが透けていた。
地面も、芝も、わずかな揺らめきと共に透けて見える。
こちらの服裾を握る手も同じだ。
その事実に皆が息を詰めたとき、少女が黒い瞳で東を見詰め、口を開いた。

「パパ、いないの……」

そしてうつむき、

「ママ、見つからないの……」

迷子か、と思ったが、それより先に言うことがある。
その一言を、皆が東の代わりに叫んだ。

「で」

息を吸い。

「出たあ――――――――――！！！」

第八話～嵐の前は、静けさに限るのか～（後書き）

フフフフフ、ようやくここまで来ましたクロです。

一週間という長くも短い中、ついに祭の直前まで辿りつきました。

此処から先は、原作一巻≪上≫の最後の段取りです。

次回に備えてエネルギー補充して来ますので、またお会いしましょう。

第九話～昇る日に注ぐ情熱～

武蔵の右舷二番艦、多摩の艦首では、騒ぎの前段階としてざわめきが起きていた。

東側で起きている山の火災。

武蔵からは見えない三河のある方角。

山陰の向こうの空が、地面から空に向かって光を放っている。

それに伴いように、鼓動に似た音と響きが伝わってくるのを感じる。

そして空気が揺れていた。

風とは違う、来ては戻る揺れ。

一定の圧力を持った空気の流れが、三河から伝ってくる。

まるで巨大な生き物の心拍を聞いているかのような揺れだ。

花火という噂に従って、武蔵の住民は表層の甲板に多く群れていた。

至る所で屋台が出て、照明もついているが、それでもまだ薄暗い中、人々は火災と三河の光を見ていた。

そんな中、武蔵アリアダスト教導院の男子制服を着た正純がいた。

彼女は、三河の方を見つつ、

「これは……」

空を照らす光に不穏な空気を感じながら、正純は懸念を隠せない。

結城と酒井学長は戻ってきているのだろうかと、そう思ったときだった。

「――――――正純様」

背後から掛けられた女性の声に、正純は振り返った。

視線の先には白髪の自動人形、Ｐ－０１ｓがいた。

彼女は小脇に自分が貸した分厚い本を抱え、足の後ろに黒藻の獣を隠し、

「お久しぶりです。花火というものがよく解らなかったで、正純様から借りた本を読んでおりましたところ、遂に完読いたしました。率直に申しまして、Ｐ－０１ｓ、よくやりました」

「あ、ああ、よくやったな」

「Ｊｕｄ．、お褒めに預かり光栄です。この本ですが、政治家、指導者などの位置にいる人々の反応パターンとして、なかなか勉強になりました。偉い人間ほど唐突に悶死したり溢死したり憤死したりするようですが、昨今の流行は引責としてのハラキリのようですね」

一体何に興味を持って読んでいたんだろうか、と正純は思うが、触れないでおいた。

……人間の行動パターンを知りたいと思うのは、やはり、アレかな。

自分の出自が解らない自動人形としては、己が何かを考えたいのだろうか。

そのための手本として、人々の判断を本から見ているのではないかと、正純は思う。

そして今、Ｐ－０１ｓは、闇によって目立たない黒藻の獣を数匹連れ、

『がんばった　よくやったの』

などと言ってる黒藻の獣に対してしゃがみ込み、軽く握った拳を見せている。

「Ｊｕｄ．、諺にも言います。継続は力なり。如何なる困難もクリア出来ます」

そんなに読み難かった本ではないと思うが、とりあえず判断がつくことが一つある。

……今、空に上がっている光は、花火ではないな。

何かが起きているのは確かだ。

ここでは見物できるかもしれないが、下階から上がってくる人の密度が増え始めている。

いずれ身動きがとれなくなるだろう。

だから、

「私はちょっとここから動こうと思うが、Ｐ－０１ｓはどうする？」

「花火は無いのですか？」

「おそらく」

『ざんねん　むねん』

「そうですか。――――――ところで、結城様は一緒ではないのですか？」

「え？」

Ｐ－０１ｓの質問に、正純は迷った。

結城は酒井学長の護衛を務めて、共に三河へと行ったが。

……この時間なら帰っていてもおかしくないのだが……。

そう断言できない自分がいる。

もし二人がまだ三河にいるのだとしたら、上手く逃げ出しているのだろうか。

今の三河は、どう見ても近づいていい状況ではない。

悩みこむ正純の反応に、Ｐ－０１ｓはややあってから、

「今朝、結城様と、今度一緒に料理の練習をするという約束しようとしたので、お話を窺いたかったのですが。――――――なかなか見つかりませんでした」

「ああ、アイツは、何時も臨時相談役の仕事であちこち走り回っているからな。多分、今もそこら辺でうろうろしているだろう。――――まあ、どうせ明日には店で朝食を済ませるのだろう？そのときに聞けばいいじゃないか」

本当にそうであればいいのだが、と正純は思う。

それに対して、Ｊｕｄ．、とＰ－０１ｓは頷いた。

そして、

「では、これからどちらへ？」

『どちら？』

「ああ、とりあえずここから離れよう。……青雷亭に神肖筐体（モニタ）があったよな。店主がいるかどうかは解らないが、いるなら、そちらの方がいろいろと解ると思う」

Ｊｕｄ．、と頷いたＰ－０１ｓの背を一度押し、正純は歩き出した。

足急ぐ自分に対して、自動人形はマイペースだ。

だからわずかに身を前に出して、まだ隙間の残っている人々の間を先に抜け、Ｐ－０１ｓに道を造って行く。

今、周囲のペースは、彼女達も含めて、戸惑いつつもゆっくりしている。

しかし、正純には焦りにも似た疑念がある。

それは、つい少し前に、この場にいない友人と考えていたことと同じものだ、

……これは、新名古屋城の地脈炉が暴走しているのではないだろう

な……？

数は全部で五基。

それらが暴走によって地脈を巻き込み爆発すれば、

……以前露西亜で起きた炉心爆発は、たった一基で十数キロ圏内を消滅させた。

露西亜での暴走の真相は不明だ。

何しろ証拠も何も全て消えたのだから。

だが、その事件が基となって、Ｔｓｉｒｈｃ教譜国では地脈炉の建造を禁止している。

三河が例外なのは、Ｔｓｉｒｈｃ教譜国にとっては禁忌の力を三河で借りることで、その出力による流体加工の大量生産を得るという恩恵があったからだ。

現在の地脈炉は出力も強化されており、地脈への影響範囲も大きい。

それが幾つも暴走したなんてことは、想像したくない。

そのことを正純は口に出さず、しかしこう言った。

「……急ごう、事実が確認できる場所へ」

と、言ったときだった。

背後からいきなり、光が来た。

「!?」

おお、という人々の驚きの声に浅く振り返れば、三河の大地が光を強くしていた。

月光にも見えるそれは、しかし明らかな発光現象だ。

「あれが、花火ですか?」

違う。

しかし言葉が出ない。

何故なら音が来たのだ。

大気の全てが口を持ったかのように、宙の全てが轟くような音。

次の瞬間。

三河の裂ける轟音が、ありとあらゆるものを震えさせた。

／※／

罅割れる大地の中、結城は前に駆け抜ける。

目指すは三河の中枢である新名古屋城。

鼓動が震動に変わり、震動が轟きに増大した中、結城は術式に頼らずに己の脚力で街道を突っ走る。

それは、誰が見ても驚異的なスピードだ。

身を低くし、空気抵抗を抑え、重心を前に傾けた走りは、急な停止と小回りが利かない。

しかし結城はそれに構うことなく、足裏と地面の摩擦を最大限に利用し、光に包まれた三河を踏破した。

左手には白布で包んだ長棒を腰に帯びるように握っており、身に着

る制服は所々がボロついている。

「ちっ……、ハエどもが煩いっ……！」

衣服の損傷は、自動人形によるものだ。

これまでの道程で、いろいろと邪魔してきている。

その数は数えるのも面倒なほどで、結城も途中からは、人影が視界に入れば問答無用で張り倒している。

……しかし、面倒なのはそれじゃねえんだよなあ……。

考えている中、左側の空から轟音が響いた。

顔を向けると、空を飛ぶ影がある。

武神だ。

武蔵の監視に回っていた三征西班牙の武神三機が、高度を下げた。

戦闘機動とは違う不自然なその下がり方に、結城は眉を顰めながら更に加速する。

……出力を喰われたのか……。

武神は、人工の関節や駆動系によって動く巨大な鎧武者だ。

有人で、搭乗の際には搭乗者を情報に分解し、機体の神経系や駆動管理系に流し込むことで機動する。

そうすることによって搭乗者は機械の身体を己のものとして扱うことが可能になるのだ。

今、空中に飛ぶ武神が制御を一瞬奪われたのは、地脈炉の暴走に伴う流体の収束にそれを奪われたからだ。

今三河を包むこの光も、地脈炉から発せられたのではなく、地脈炉に吸われて、地脈が新名古屋城に向かっている際に発光にしているものだ。

なんてことはない、地脈炉暴走による崩壊の典型的なパターンだ。

武神もそれに気付いたのか、高度を下げた内二機が、その軌道を変えて遠ざかっていく。

方角は西。

斥候役の一機を残して、残りの二機は本部に戻って航空装備を取り替えるつもりか。

……いい判断だ。――――――どちらにしろ、地脈炉の暴走は阻止しなければならない。

と結城が判断したときだ。

武神が去っていった西の空に動きがあった。

走る速度を更に上げながら、青い瞳で見た空の向こうに、二つの船影が上がってきている。

「三征西班牙の警護艦……、思ったより早いな」

アルカラ・デ・エナレスの校章が記された船に、結城は呟く。

しかし言葉が口から出たのと同時に、それが起こった。

自分の手前、前方三十メートル先の建物の屋上で轟音が鳴り響いた。

「――――――！」

方向性を持ったそれは、火花に似たマズルフラッシュを大きく開け

た後、橙色に輝く灼熱の砲弾を警護艦に吹かせた。

殴るような放物線軌道を描いたそれは、先行する一艦の左舷に直撃し、その機能を一瞬で壊す。

轟沈した警護艦は焦煙を吹き上げて、その高度を大きく下げた。

大地に向かって沈み行く船影を視界に納めつつ、結城は見た。

船殻を貫通した砲撃を行った人物を。

遠くからでも見える、あの特徴的な黒い角を確認した瞬間、

「鹿角……！？」

言葉と同時にこちらの存在に気付いた自動人形が、あるものを飛ばしてきた。

「……！」

同じタイミングで、結城はそれを長棒で弾いた。

鼻の先、バントの構えで防いだそれは、先端の尖った一本の竹櫛だ。

急所である眉間を狙って放った鹿角の攻撃に、結城は強引に上半身を起こしてブレーキを掛ける。

砂の被った地面を削りながら止まった結城に、建物の上にいる鹿角は首だけ振り向く。

そして、ややあってから、

「やはり来ましたか、……他の自動人形では止めようにも止められませんね」

淡々とした鹿角の口調に、結城は睨むような視線で、

「何を考えている？　どうして地脈炉を暴走させた？」

「その質問にはお答えできません。私達はただ、命令通りに動いているだけですので――――――」

「命令だと……？」

「Ｊｕｄ．、三河当主、松平元信公の命令です。祭と花火の準備に必要な処置ですので、そうさせて頂きました。それ以外のことは、私の主である忠勝様含めて、何も知らされておりません」

鹿角の言葉に、結城は空に浮かぶもう一隻の警護艦を一瞥し、

「ならば、直接元信公に会わせて貰う」

「会って、どうするおつもりで？」

「決まっているだろう――――――」

一息。左手に持った長棒を新名古屋城の方へ指し、

「話を聞いた上で、あれを止めさせてもらう」

ゆっくりとした、しかし覇気の篭った結城のその言葉に、鹿角の動

きは速かった。

重力制御によって身体を加速し、建物の屋上から一瞬で地面へと飛び降りた。

「……！」

砲弾のような勢いで飛び込んで来た鹿角に対し、結城は長棒を逆手に構える。

そして西の空。

先ほど引いていった武神が再び舞い戻ってくる。

三征西班牙の進攻を背後に控え、新名古屋城を目前に、二人の武者が激突した。

／※／

月が二つ浮かぶ夜空の下で、武蔵アリアダスト教導院の紋をつけた航空艦が空に浮いている。

それは夕刻のとき、西へ向かっていた先行艦だ。

艦首に一門の大砲を得ただけの艦は、停止信号の術式照明を艦の両舷に置き、空に停まっている。

そして艦尾側に存在する艦橋では、艦長を含めた数人が話し合っている。

その中に、一人の少女がいた。

髪を頭の後ろで結んでいる少女、本多・二代に対し、艦長が、

「二代様、――――――どうなさいますか？　先行して堺まで行くか、それとも戻るか。三河は現在、聖連からの通神に拠れば非常事態かと。地脈炉が暴走を開始し、その原因を突き止めようとした聖連に対し、自動人形が反抗を行っているのだと」

成程、と二代は腕を組みながら頷いた。

今、自分達がどうすべきか、判断を下したいが、聖連が関ると簡単に動けない。

政治的知識に優れ、判断力のある者が欲しいと、そう思い、

……正純がいればな……。

叶わぬ話だと、二代はかつての級友を思う。

武蔵で副会長をやっているのであれば、相変わらずの知識と判断力で頑張って御座ろうな、と。

父と鹿角のことも気になるが、今はそれどころでもないだろう。

「大事なのは、拙者達がどう動くのが極東にとって良いのか、で御座ろう。しかし拙者はそのあたりに疎い。誰か言える者はおられるか？」

二代の問いに、警護隊の副隊長が前に出る。

「地脈炉の暴走というものが三河の意図に拠るものであれば、三河が消えずとも、三河は聖連から極東代表の地位を奪われることになるかと」

「だとすれば――――――」

「Ｊｕｄ．、三河は極東から失われた聖連の支配下となり、いずれ

武蔵までもが支配され、極東が実質として無くなってしまう可能性があるかと……」

その言葉に、皆が顔を合わせた。

二代は視界に入る全ての表情を見て、誰もが同じ考えをしていると悟る。

だから彼女は確認を取るように、

「……今の情勢で、聖連が極東や武蔵の支配を行う利点は？」

「多くあります」

副隊長は、まずそう前置きした。

「重奏領域とそうでない場所における極東と各国の人々の棲み分けの解決。他に、金融や、完全支配による極東の人々の農奴化。または武蔵の貿易能力やその技術力の奪取など、……支配レベルにも拠りますが、私達にとって最悪のケースが向こうにとっては最良となります」

だとすれば、と二代は言った。

「ならば今、武蔵と聖連の間に入れるのが拙者達か。――――――――三河者ではあるが、ゆえに武蔵と馴れ合ってはおらず、意見の後ろ盾としての武力も持っている」

「では」

と艦長が言った。

通神長に目配せして、

「聖連に打診しておけ、有事の際には我々を使用して欲しいと。聖連も、もし武蔵に何かをするとしても、他国の人間をいきなり乗り込ませる愚は犯したくないだろう」

「――――――――Ｊｕｄ．」

と、通神長が通神器の方へと向かう。

そして艦長が、

「では本艦は待機。聖連の応答を待ちましょう。が、二代様、場合によっては、本心に背くことになるかと思われますが――――――」

Ｊｕｄ．、と二代は頷き、自分でも無理を感じる笑みを作った。

その上で、

「忠義とは、――――――その行為にこそ意味があるもので御座るよ」

言った台詞に、ややあってから艦長が頷いた。

他、航海士や、警護隊の副隊長も会釈や礼をし、

……良かった。

少なくとも、間違ったことを言わなかったということに、二代は安堵する。

そのときだった。

通神長が、傍受した通神の内容を、こちらへと叫んだ。

「――――――三征西班牙の先陣が三河に入りました！　武神と共に新名古屋城に向かいます！！」

一息。

「向こうの予測に拠れば、……地脈炉の暴走確定まであと十五分！」

／※／

夜の町は、光と闇に彩られていた。

闇は、夜が有する夜闇と、大地の裂け目や建物の家屋の影の、二種

類がある。

そして光は三種類あった。

一つは幾つかの家屋が生む明かり。

もう一つは道路や水路、家屋を載せた地殻が割れ動いた長大な裂け目の底から生まれる地脈の光だ。

最後の一つは、地表域で連続する破壊の光だ。

射撃と爆発、そして衝突する光。

光弾の連射には、当然の音がある。

それは、砲音と銃撃音の重なりだ。

闇と光は町を彩り、その中を轟音が行く。

そして鼓動する裂けた大地の上を行くのは、

『ａ１、先行を開始する！！』

叫びと共に街道を加速した武神は、白と赤の装甲服姿だ。

背に十字型四枚翼を持ち、右脇に砲サイズの長銃を構えている。

武神隊の隊長であるａ１は前を見た。

視界の先にあるのは、街道の一直線と、その向こう、町並みの奥にある巨大な新名古屋城だ。

地面を進む紅白の武神は、元々航空用であるため足首が無い。

しかしその代わりに武神は足先から重力素子による仮想足部を展開して道を走る。

進む街道は最短距離、しかし敵に狙われている道だ。

だが、ａ１の背後では戦士団の突撃隊がａ２と共に進行を開始している。

斥候役の自分の役目は、先に行き、敵を払うことだ。

翼の中に限界まで溜めた空気を、ａ１は背後へとぶちまけた。

『――――――!』

生んだ大気の爆発に押され、初速で数百メートルの距離を先行した。

ここまでは仲間の援護も届くところで、陸上部隊も前進出来る範囲だろう。

背後のａ２が、陸上部隊の護衛役としてすぐにスタートしている筈だ。

だから、此処から先は、上空からのａ３の支援と、自分だけが頼りになる。

行く。

新名古屋城めでは約三キロ。

現在は新名古屋城のほぼ真西、国道七十九号の上だ。

自分の役目は囮に近いものだ。

人間よりも優れた速度と防御力、そして火力を持って、待ち構えている敵を誘い出し、撃破する。

対する敵の武器は単純。

……圧縮した鉄塊だ。

自動人形の重力制御能力で、鉄屑を固め、撃ち出す。

子供が土の礫を投げるのと似ている。但し弾丸は土の代わりに刃物や釘、鏃（かすがい）などを捻って握り固めたもので、射速は亜音速に近い。

無論、自動人形側の負担も高い作業だ。

既に撃破した数十の自動人形は皆、肩や手首から陽炎や煙を噴いている。

場合によっては、既に動けなくなり、腕部や胸部から煙を上げて倒れている者もいる。

……何故だ？

何故、そうまでして戦う？

それも、地脈炉の暴走という危険があるというのに。

……何故――――――。

思いつつ、ａ１は行く。

奥に進み、数が増えた敵を撃ち、周り、加速を回避としてまた前に出る。

時折、こちらの照準が間に合わないことがあるが、それを上空にいるａ３が援護してくれる。

ａ３がこちらの道行きの先にいる敵を払い、こちらはその中央を抜けつつ道を開けてゆく。

行く。

ただただ行くのみ。

援護や射撃を経つつ、ａ１は前を選択し、

『――――――！』

視界の中で、高架道路が見えた。

ａ１は左右の建物から来る砲撃を前方への加速でかわし、銃撃を返す。

構える長銃は三征西班牙の国営企業”清らか大市（サン・メルカド）”の短筒式だ。

聖譜記述による技術制限を守るための先込め式。

装填を短縮するために銃身を極端に切りつめ、銃身の代わりに旧派（クラシッ）聖術（カフィルマ）による十字型の仮想銃身を展開するのが特徴だ。

装弾は弾倉に鉄弾が三十二発。

射撃加速用の大型聖術契約書と自動装弾機構によって一秒間に六発の連射が可能だ。

連射する。

撃ちながら、ａ1は翼に二度目の羽ばたきを入れる。

直後に、聴覚素子へ警告音が来た。

どういう意味かは明確だ。

背後、左右の家屋に隠れていた自動人形が姿を現したのだ。

背後からの不意打ちを狙おうという考えだろう。

だが甘い。

上空にはａ3がいる。

上空からの情報はほぼリアルタイムでこちらに送られている。

背後にいる敵の情報も、得ることが出来れば自動射撃機構が捕捉する。

システムに従い、背後に振り回した長銃を掴む右手が、機械任せにトリガーを絞る。

三度の直撃が響き、警告が消えた。

視界の隅に、聖術契約書の符の紙片が飛び散るのが見える。

そのときだった。

通神が来た。

『ａ１！――――――敵が行った！　角付きだ！』

敵とは既に戦闘状況を開始している。

それを無視して”敵”とするべきは、

……まさか――――――！？

視覚の右側に警告表示が来た。

表示が伝える敵機名がある。

『――――――鹿角か！！』

しかしａ１の叫びと共に、更に通神が来た。

通神先は上空にいるａ３。

彼は、焦りを込めた口調で、

『待て！　その後ろにもう一人いる！　――――――なんだ、こいつは！？』

ａ３の言葉の間に、ａ１は視界の中で見た。

手前の道路から飛び出てきたのは白黒の侍女服姿。

特徴である黒角の感覚器は確かに鹿角だが、

……こちらを、見ていないだと……？

そしてそれは来た。

後ろに引くように飛んだ鹿角に続くように、もう一つの影が視界に出てきた。

無造作に結んだ黒髪をなびかせ、白い布に包まれた長棒を両手で構えているのは、白黒の制服を纏った少年。

その姿を前に、ａ１は長銃を構えながら言った。

『どう……なっていやがる……？』

／※／

神々の時代から環境神群によって守られてきた名古屋の街道上で、三つの影が激突した。

一体の自動人形と、一体の武神。

そして両者を同時に捌いている、一人の少年だ。

三人の構図は、先行して相対している結城と鹿角が退く形で、武神が加速して追う形だ。

自動人形は運動能力が高いが、武神に敵うものではない。

武神が、全力を出せば、目標地点の新名古屋までは一分も掛からないだろう。

しかし、上空は流体の乱れが嵐のように渦巻いてて、武神は満足に飛ぶことが出来ない。

そしてそれを見越したように、自動人形と、それに相対している少年が武神に地上戦を挑み、その速度を抑えきっていた。

否。

二人はこちらを見ていない。

突っ込まれたら勝負の邪魔になるから、相対の隙間を狙って、交互に武神を抑えているのだ。

少年の得物は両手に握る長棒。

対する鹿角は、重力制御と、そこから作れる戦術や武器類で応戦している。

自在に変化する鹿角の兵器群に対して、少年は目が翳むほどの速さでその隙を突いていく。

無駄のない動きの上に、術式の発動も見当たらない。

だとすれば、この少年は素の身体能力で鹿角を追い込んでいるということだ。

……馬鹿げている。そんな人間が、本当にいていいのか……!?

信じられないものを見ているかのよう、武神は視覚情報を撮影モードに移し、少年の方を見る。

端麗な容姿を持つ少年の着る制服は、武蔵アリアダスト教導院のものだ。

胸の右側には、総長連合または生徒会役員であることを示す銀の名

札をつけている。

武蔵の監視任務で見たことがある。

あの不真面目な生徒の騒ぎの中で、時々顔を出しては仲裁に入っているのを憶えている。

それ以外にも、ときたま武蔵の各地で見かけることがある。

確か……、

――――――武蔵の臨時相談役だったか、しかしどうしてこんな場所に……？

武蔵は聖連が極東で唯一認めた直轄の領地だ。

政治的に考えても、武蔵は三河の傘下で、同じ陣営な筈だ。

しかし今の状況は、聖連と三河の自動人形と、武蔵の生徒の三つ巴だ。

否。

少年が教導院の幹部という点を考えれば、この場では武蔵の代表として考えるのが妥当だ。

意図はどうあれ、互いが戦闘行動にあるということは、向こうにも政治的要素が含まれている可能性もある。

だとすれば、少年が鹿角と戦っているというのは、

……武蔵が、三河と敵対している？

そうでなければ、今の状況は説明できない。

鹿角と戦っている以上、この少年も地脈炉の暴走を阻止したいという思いがある筈だ。

しかし、

……だとしたら、同じ目的を持っているこちらを抑える理由がない――――――。

こうして考えている間にも、三者のバランスは崩れつつある。

二人に抑えられていた武神が、前に押し出せなくなっている。

このままではジリ貧だ、地脈炉の臨界点到達までの時間が迫っている中、誰が味方か敵か判断している余裕はない。

ならば、

……ここは、両方とも敵として捉えるのが得策……！

「「……！！」」

三度目の大気加速を行った武神の動きに、結城と鹿角がそちらに視線を向ける。

二人とも、身体のあちこちに掠り傷があるが、それ以外に目立った外傷はない。

そして、突撃してくる武神に対して、鹿角が後ろ向きに走りながら叫んだ。

「――――――剣を指運に！」

跳ぶように走りながら叫び、左右の手を下に振った。

同時。

重力制御によって地面がめくれ上がる。

そして出来上がるのは、路面をベースとした全長七メートルは下らない二双の大剣だ。

双剣は一瞬で鹿角の両腕の動きを追うように浮き上がり、彼女はそのまま、二本の剣を前方へと突き出す。

だが、対する二人が動いていた。

武神は、速度を緩めることなく長銃を掲げ、直後に射撃。

狙うは武装的に脅威度の高い鹿角。

砲弾とも言える一発の弾丸が、剣を上げた中央、鹿角胸に向かって一発飛んだ。

射撃音が響いて、契約書の破片が大気に散った。

目の前に一直線に走る弾丸は、しかし、

「――――――盾を視線に！」

鹿角の顎を上げる動きに応じ、彼女と武神の間にある地面が跳ね上がった。

盾だ。

だが、路面の構造材は砂利が基礎で打撃に弱い。

厚さ十センチで宙に浮いた盾壁は、鉄の弾丸に砕かれ通す。

貫通弾がそのまま来た。

通用しない。

ならば対処は簡単だ。

鹿角は振り上げていた視線を勢いよく下ろし、

「――――――追加発注！！」

一気に七枚が連なり立ち上がり、武神と鹿角の間に飛んだ。

鉄弾が宙に浮いた七枚の盾に激突する。

そして当たる。

砕く。

突き抜ける。

貫通する。

破砕し、壊し、抜き、そのまま穿ち、しかし――――――、

「止まったと判断します！！」

声と共に、鹿角は盾の連続で止めた砲弾を背後に弾いた。

両腕を羽ばたくように振り下ろし、宙にあった双剣を半壊した盾群の左右から武神へと叩きつける。

剣は、振り下ろされる間に厚みを半減した。

ローラーに潰されるように根本から先端へと。

重力制御による圧縮だ。

そうすることによって硬度を増す。

そして斬撃した。

その矢先が目指すのは、何時の間にか自分と武神の間、その直線上に並んだ結城だ。

対する結城は、地面を蹴って身を翻し、後方にいる武神の懐に跳んだ。

武神が鹿角の攻撃に備えて、構えていた長銃を背のハードポイントへ接続した瞬間を狙ったのだ。

結城と武神の考えは同じ。

それは武神の腰に差していた短剣だ。

近接戦に備え、銃を背後に収納したことで、両手がフリーになった武神は、その両脇にスペースが開く。

その隙を縫うように、結城は武神が短剣に手を延ばすより早く、その腰にある短剣をそのまま鹿角の大剣へと勢い良く蹴り出した。

「――――――――!!」

ぶち抜く。

黒染まりの砂利の破片を宙に散らし、強引な足技で鞘から滑り出すように撃ちだされた短剣が、鹿角の両剣と激突する。

金属音が二つ響き、咄嗟の判断に三者の動きが緩めた。

そして結城と鹿角は、武神を後ろに連れたまま疾走する。

強烈な衝撃によって、短剣と双剣が火花を散らしながら弾かれる。

しかしその直後。

後方の武神が身を低くし、

「――――――！」

その背後で、大気の爆発が生じた。

四度目の加速機動だ。

来る。

やや溜めたその動きを前に、結城は身構える。

わずかな間を持って、全身の力をもって、武神はその瞬間加速で目の前にいる結城と鹿角を大きく突き飛ばした。

「……甘い！」

しかし結城には効かない。

タックルの姿勢から来る突進を、彼は武神と同じ速度で後ろ向きに跳んで緩衝したのだ。

そして今のダッシュで鹿角を追い抜いた結城は、そのまま突進する

武神を鹿角にぶつける。

武神と向かい合う形になった鹿角だが、宙で両の剣を振りかぶるように引いた。

だが遅い。

長剣は振るために大きく引かねばならず、そこから振り切るのには時間が掛かる。

長剣を引く間に、武神がもう片方の腰から引き抜いた短剣を鹿角に突き出す。

だがそのとき、快音が響いた。

鹿角の長剣が自ら割れた音だ。

それも中央から前後真っ二つに。

しかし、

「――――――作り直します！」

二分された左右の長剣は、重力制御によって再整形される。

形の行く先は短剣。

その数は四本。

同時に、鹿角が背後へと疾走しながら両の腕を振るって四剣を重力制御下に捉える。

そして四剣の内、二つが背後へと振り向き、その切っ先を結城に向ける。

「両方を同時に相手するつもりか、……器用だな！！」

「後ろ向きで失礼致します！」

後は振るだけだ。

長剣よりもコンパクトな動きで扱える武器は、今や四という数を持って武神と結城に真っ向勝負を仕掛ける。

対するのは、短剣と白い長棒。

迎撃した結城と武神は、しかし前に加速した。

そして一回目の刃がそれぞれ激突し、

「っ……！」

一拍の後、連撃が開始され、四つの剣戟の激音と火花が連続した。

「ぉおおお……！」

攻撃が攻撃を喰らう。

四の短剣が、円を描くように障壁となり、鹿角を包む。

そしてそれを主食とするかのように、武神と結城の攻撃が削りにかかる。

しかし一方的ではない、高速の斬り合いもまた三つ巴。

円を囲んだように、三人は自分以外の両者を牽制しながら斬撃の奪い合いを開始した。

装甲が削ぎ取られ、衣服が引き裂かれ、皮膚と肉が齧られる。

弾ける火花が三者の被害と戦果を照らして消えた。

そして結城は見た。

鹿角の散った衣服の破片の奥にある身体を。

陶器のような素材の肌には、包帯にも見えるものが巻きつけられている。

それは、

……神道術式の、冷却用布符か……！

自分の得物を封じている白布と似たようなものだ。

鹿角は、重力制御で身に掛かる多大な負担を、冷却によって強引に抑えている。

身を熱くせず、そして鹿角が更に加速する。

だが、

「……っ！」

鎌鼬のように空間を引き裂く四の短剣。

その内、結城は自分に向けられた内の一本を、空いた左手で掴み取

った。

刹那の応酬の中、滑るような手つき、掌で挟むように武器を奪ったのだ。

これでこちらも二刀となった。

武器を減らしたことで、斬撃の障壁に空いた隙間を掻い潜るように、結城は左の一刀で武神の短剣を上に弾き、鹿角の残り三刀を長棒で砕いた。

「……！？」

狙ったのは刀身の構造的に一番脆い側面。

衝撃を通すのではなく、短剣の内側で破裂させるように強く殴る。

対峙する両者の攻撃は瞬時に瓦解した。

しかしその瞬間で動いたのは、先に攻撃を弾かれた武神だ。

彼は、腕が上に弾かれた反動を利用して、背の長銃をホールドした。

既に十字型の仮想銃身は展開している。

結城が鹿角の武装を全て叩き割った事が幸いして、これからの動きに邪魔は無い。

距離は近い。

必中の位置だ。

前に突き込んだ長銃の先端が鹿角と結城を捕らえる。

眉を顰めた二人の顔を、武神の視覚素子は確かに見た。

行ける。

そしてコンマの後、武神と自動人形の間の地面が盾のときと同様に跳ね上がる。

しかし遅い。

絞られるトリガー。

排紙口から契約書の破片が飛び散り、

『――――――穿て！！』

／※／

対角線上に、砲弾が来るのを結城は見た。

三者の構図は一直線。

武神と結城が鹿角を挟んでいる形だ。

自動人形の身体では砲弾を防ぎきれない、貫通されたら次は自分だ。

だが、飛来する弾頭に対し、結城と鹿角が選んだのは回避でも何でもなかった。

それは、二重の攻撃だ。

結城は、鹿角と擦れ違うように身を乗り出し、砲弾へと突っ込む。

彼は、鹿角から奪った短剣の切っ先を砲弾の弾頭に激突した。

型は刃を地面と水平して置く平刺突き。

視線と同じ高さで構えた刃を、一瞬の溜めと同時に前方へ突き出す。

突きによる突進は、足が地面についた状態での踏み込みと突貫力が強いが、宙ではそうにもいかない。

故に空中にいる結城は、背筋と腕力、そして腰の回し方と上半身の旋回で加速を増幅し、空気抵抗を突破することで初速を上げた。

音の障壁を穿ちながら進む黒の尖端。

全身の筋肉繊維が千切れそうな負荷の中、限界に達した魔技が咆える。

しかし結城は、水平の突きと同時に刀身を斜め上に回した。

「通す！！」

激突する。

爆発による大気の破裂が生まれ、突き出した刃が砕かれた。

まだ砲弾は生きている。

しかし、角度を強引に上げた短剣によって、砲弾の軌道が斜め上にずれた。

右。

やや傾いた結城の顔の横を、砲弾がギリギリの位置で掠りながら飛んでいく。

結城の黒い髪を結んでいたゴムがそれによって解け、長い髪が虚空に靡く。

弾丸は当たらなかった。

しかし砲撃は一度では終わらない。

弾倉に弾丸は残っており、武神の長銃は秒間六連射が可能だ。

眼前で、二発目が発射されようとした。

そこに、結城の後ろにいる鹿角が重ねた攻撃をぶち込んだ。

剣による攻撃ではない。

使用するのは、たった今立ち上げた路面の破片だ。

そして作られるのは一つの武装。

宙に投げ出すように打ち上げるのは、

『これは――――――――!?』

武神と鹿角の間。

位置的に結城の左下から、路面の構造材を用いた砲が作られていた。

その砲口は武神の腹を向いている。

砲の尻には、弾丸が用意されていた。

それはたった今、結城が力業で背後に弾いた一発だ。

それが今ここにあるということは、

『――――――まさか、弾かれた弾丸を、重力制御で手元に保持したのか！』

「Ｊｕｄ．。物は大切に致しますので！」

薄い短剣一枚で弾かれた弾丸は、その形状を大きく変化させていない。

装填する。

砲の底が閉じられ、鹿角の右手が振り下ろされる。

次の瞬間。

砲の尻から先端に向かって、波打つような揺らめきが生じた。

加速だ。

重力制御による加速を高速に連続で発生させ、鹿角は砲弾を幾度も跳ね飛ばした。

対する武神が、

『――――――――!!』

トリガーを絞るより早く、

「――――――――視線にて穿ちなさい!!」

直撃した。

第九話～昇る日に注ぐ情熱～（後書き）

既に川の向こう側が見えてきたクロです。

鹿角戦、如何でしょう。

原作の自己アレンジなため、結城にでしゃばって貰いました。

クロは戦闘描写を考えるのは得意ですが、書くのは苦手なんで。

燃えるような戦いを期待していた読者には大変申し訳ありません。

さて、次回でいよいよ元信先生ですね。

この先、殆ど結城のターンになってしまうかもです。

二次創作でも、宗茂には噛ませ犬になって貰わんとな（キリっ

第十話～始まりの終わり～

強い、確かな手応えと共に、武神の巨体が崩れ落ちた。

腹部装甲の破壊と、骨格系への深刻なダメージは完全にその動きを止め、それを確認した結城と鹿角は、視線を武神から離し、改めて互いに向き合う。

しかしその一瞬の隙を、倒れ行く武神は見逃さなかった。

視覚素子を両者に集中して、放たれる言葉は、

『撃て……！！』

声と同時。

武神の背後に現れたものがあった。

後続のもう一機。

後方の地上部隊の護衛に回っていたａ２が、何時の間にか追いついていたのだ。

ａ２は、膝をついた武神の背後から、立ち上がるようにして長銃を構えた。

身を落とした半身の姿勢。

腰に溜めて構えた長銃は、結城と鹿角を正確に捉えている。

背後には地上部隊も来ている。

総員七十一名。

身体強化用の旧派聖術を用いて後続中だ。

距離は開いてしまったが、ａ１の前進もあり、ここまでの敵はほぼ掃討している。

「……」

「ん？」

しかし、圧倒的な数と質量の部隊を前に、結城と鹿角は動じない。

何故ならば、

「三征西班牙製重武神〝猛鷲（エル・アゾウル）〟か。で、向こうには陸上部隊がいる。

と、鹿角、若、動くなよ？　――――――結ぶ」

背後。

新名古屋城の方から、男の声が聞こえた。

結城が視線だけそこに向けると、一本の長槍を手にした男が立っている。

男は、こちらが見たことを悟ったかのように、槍を右に振りぬいた。

空を切った動きだ。

そして、その先に起きたことを、結城は確かに見た。

自分の背後にいるａ２の動きが、突然止まったのだ。

動かない。

長砲のトリガーに掛かった指を絞らず、まるで時間が止まったかのように停止した。

しかしそれだけではない。

更に背後。

今まで接近していた突撃部隊の足音も止まっている。

その現象に応じるかのように、結城は長槍を持った男の方を見る。

視線の先、男の振り抜いた槍の穂先周辺に、幾つもの文字を表示する細型表紙枠が展開している。

そしてそのときにもう一度、声がした。

「――――――結べ、蜻蛉切」

直後。

結城の背後で、ａ２の右腕と右足が割裂した。

『――――――!?』

三人の視界の中、既に膝をついて動かないａ１の向こうで、もう一機のａ２が倒れていく。

切断面から判断して、正面から半ばまでを一閃するという一撃。

三征西班牙製重武神特有の細いワイヤーをシリンダーに束ねて通す人工腱はその半分以上が切断され、巻取りの駆動器が笛のような乾

いた音を立てるだけだ。

ワイヤーの潤滑油が血のように二肢をこぼれ、倒れるａ２の外部音声素子から漏れる声は、

『これは……』

解らないだろうな、と結城は思った。

蜻蛉切。

本多・忠勝が持つと聖譜記述で示された武器だ。

穂先に止まった蜻蛉が、そのまま二つに割断されたことからその名がついたとされるが、忠勝の持つ蜻蛉切も同様の能力を持つ。

「穂先に載せた名称を。割断する」

ありとあらゆるものは、存在と同時に名を持つ。

不定名であろうと、無であろうと、それは名前であり、名前を持つ本体を示すものだ。

蜻蛉切は、名称を断ち切る事で、本体を割断する。

名前を斬るため、斬る名称が本体を直接示すものでない場合や、多人数化すると、効果が減衰する。

武神が身体ではなく二肢を割断されたのは、斬ったのが乗っている者の名ではなく武神の名称だったことと、武神としての個体名を確定出来なかったためだろう。

……しかし――――――。

結城は、ａ２の後ろを見る。

道路上に、多くの影が倒れていた。

こちらに駆けつけてきた陸上部隊の七十一名だ。

そこにいる誰もが、片方の膝を切り割られている。

膝を抱え、立とうとして立てずにうめき、藻掻く。

誰として例外は無い。

陸上部隊、という名称を一気に割断した結果だ。

そして背後、忠勝の声が聞こえた。

「――――――ま、こんなもんか。阻止臨界時間まで残り六分、相手が残り若と考えても、随分と余裕がある状態だな」

「随分と遅かったですね。非常に迷惑をいたしました」

「遅れて悪かったな。――――――殿がようやく最後の準備とやらを終えて中央に入ったからな。

これから我は殿の守りにつこうと思う。まだ悪い虫が来るかもしれんしな。鹿角、お前はどうする？　――――――仲間達の魂を拾って圏外に逃れるなら、これが最後の機会になるぞ」

忠勝の声に、鹿角は姿勢を直し、振り向いた。

蜻蛉切を携えた忠勝に、彼女は会釈を送り、

「忠勝様、……私どもは三河へ預けられた身。三河の主たる元信様の意向に準じるだけです。そして元信様は――――――」

「城を守れと言ったな。まあ、見事にやったもんだ。それとついでに聞くと、お前、我と殿、どっちの言うこと聞くんだ？　我の家に

ついてるくせに、あまり言うことときかんしなあ」

「忠勝様の言うことを聞いておりましたら自動人形の身が磨り減ります。片付けはしない。洗濯はしない。余計な武具や本や夕食の予定にない肉とか買ってくるしすぐに犬とか猫とか拾ってきて”可哀想だろ！？　今日からこの子はうちの子だ！”とか駄目人間炸裂されますし」

「だって可哀想じゃねえかよ！　お前は鬼か！？」

「ハイハイＪｕｄ．Ｊｕｄ．。――――――今の、忠勝様が私によく行う返答ですが、どうでしょうか？」

「この女は……」

忠勝の言葉に、鹿角は首を傾げた。

千切れ、乱れた服を、裾だけでも直しながら、

「しかし私ども、地脈炉暴走でドカンされた経験が御座いませんので明確なことは言えませんが、もし元信様の元にこれから駆けつけるならば――――――」

「生きてはいられんだろうなあ」

「……全く理解できない思考です。忠勝様、貴方人間ですか？　実は自動人形では？」

うるせえよ、と忠勝が言って、蜻蛉切を肩に担い直した。

そして彼は視線を辺りに見回し、それを鹿角も合わせて周囲を確認する。

周囲に異状がないと判断し、二人はややあって、目の前にいる結城に向き直る。

忠勝は、気さくな笑みを浮かべながら、

「黙ってないで、何か喋ってもいいのによお」

「いや、なんか邪魔しちゃ悪い雰囲気だったので……」

「は？　こっちは寧ろ邪魔して欲しいね。こいつとの会話はマジで疲れるから」

忠勝の言葉に、結城が半目で答える。

それに対して、鹿角が一礼し、

「結城様は空気読める律儀な方ですから。――――――忠勝様にもその1%くらいは見習わせたいものです」

「空気読めたら律儀なのかよ？――――――てか鹿角、お前って本当に我には厳しいな！？」

二人の会話に結城は髪を掻きつつ、得物を腰に携える。

そんな彼に、忠勝は担いだ蜻蛉切を軽く揺らし、

「まさか単独でここまで来れるとはな。流石と言ったところか。――――二代を退かせた腕前、伊達ではなかった。お見事」

「社交儀礼はいい。聖連の邪魔が殆ど片付いた今、オレの先を阻むのはお前か？　本多・忠勝」

「……さっき言ったとおり、殿には城を守れと言われたのでな。その上、若には決して名古屋に近づかせてはならないと厳命されておる。……まあ、二つ目はしくじったようだがな」

「申し訳ありません。結城様の実力が予想以上だったので」

頭を下げる鹿角に対し、気にするな、と忠勝が宥める。

そして改めて結城に振り向き、

「若。どうか御引取り願おう。今更新名古屋城まで駆けつけたところで、若の望む結果は手に入れられはしない」

「その口の聞き方、やはりアンタも……」

「ああ、知ってるとも。――――――十年前、酒井の馬鹿が左遷と共に武蔵につれていった少年。あの結城家の生き残りのことを、松平四天王が知らねえわけがない」

言葉と共に、忠勝の表情が真剣なものになる。

彼は槍を担いだまま、片膝を地面に落とし、まるで主君に跪くかのように頭を下げた。

その行動に、結城と鹿角は目を見開く。

そして忠勝が口を開き、

「この本多・忠勝。遅れた侘びを差し入れ申す」

「っ……、おい、待て」

結城が止める。

しかし忠勝は止めない、その続きを言葉にし、

「我らが松平家の……」

その先を言おうとした矢先に、横が動いた。

「――――――」

鹿角だ。

その足音を、結城と忠勝は聞いた。

横にいる鹿角が、不意に左を向く足音だ。

それ自体は構わない、しかし妙なのは、彼女が北西の方角を向いたまま、動かない。

視線を向けてみれば、鹿角は左手を挙げていた。

水平に、西の方へと。

「鹿角？」

どうした、と忠勝が疑問に思った。

すると、鹿角が動いた。

右手を挙げ、こちらに来るなと制する動きを表し、しかし、

「ん？　……っ！」

鹿角のやや左後ろに立った結城が、それを見た。

視線を覗き込むように見えたそれ、鹿角の胸元、侍女服と、その下の陶器製の肌に指先大の穴が開いていた。

その姿に、鹿角を確かめるように見た忠勝が、もう一つの事実を理解する。

鹿角が掲げた左の手の平中央に、小さな黒い穴が穿たれているのを。

更には、鹿角の首が小さく動き、二人を向いた。

そして、

「敵です」

そこで言葉が止まった。

直後。

鹿角の胸部から腹にかけてが、巨大な爪の一撃を食らったかのように断ち砕かれた。

更に、

「――――――！」

鹿角の正面。

三河の土地が、長大な範囲に渡って無数に削ぎ落とされた。

／※／

削ぎ落としの力は、群で三河を襲った。

範囲は長さ三キロ、幅百メートルに渡るもの。

切削の数は多重で持続は数秒。

効果としては地脈、地表、市街、水路、大気、夜空と、それらが含む全てのものが、数秒を掛けて等しく削がれ裂かれた。

彫るように削ぎ、深く切れ込みながら捻り切る。

涼しささえ感じる削ぎの短音と、千切る割音が範囲内の全てから響く。

削ぎ跡は、削がれるものの大きさによって変化した。

地殻や地表は大地から数メートルに渡って彫り抜かれ、家屋は柱や壁などにそれぞれ対角線を描く爪痕に似た削ぎ跡が走った。

町の全てが、彫り抜かれる。

その一瞬の光景を、結城は感じた。

……空間が、掻き毟られている!?

悲鳴を上げるような、無数の斬撃が走る。

そしてそれは大気も同様。

布を裂くような音と共に、数メートル範囲で空中に白い線が突っ走り、次の瞬間にその線が破裂した。

「――――――!!」

鳴り爆ぜる。

大気の裂音は拍手にも似て満場を埋め、起こる風群は歓声のように反響した。

削ぎ跡は、ありとあらゆるものを襲い、削ぎの欠片は風に巻かれて空を舞う。

削られた町の部品は、大気の激突によって捻り潰され割れ爆ぜて、そして風に揉まれて吹き飛んだ。

しかし、破壊の嵐はそこで終わらない。

弾けた空気は、それぞれがうねりを帯びながらもそれぞれの真空を埋めることを義務とした。

真空の周囲の空気が、引きちぎられるように伸ばされ、流れ込む。

しかしそれも一瞬。

動きを伴った空気は冷え、霧にも似た氷の微細を纏い、次の瞬間に、四方に向かって爆発した。

轟音が響く。

削ぎ落としの空間が、冷気によって白く染まる。

染まりは風に吹かれて四方へと消え薄え、三河西部に薄い乳白色の

霧を作った。

そしてその足下。

霧の漂う町の中に、人影があった。

未だ風が鳴り、大気が震えている中にある影は三つ。

残骸のようになった鹿角を抱きかかえた忠勝。

その横に白い得物を腰に構えた結城。

そして二人に対峙する若者の影だった。

「……」

結城は、空間の削ぎ落としを避けて庄内川の方へと下がった忠勝を一瞥した。

彼は蜻蛉切を携え、左には上半身だけとなった鹿角を抱えていた。

対して結城は無傷。

事前に鹿角と相対したときに負った掠り傷を除けば、今の削ぎ落としの空間によって受けたダメージはゼロだ。

方法は簡単。

削ぎ落としの嵐が来る直前に、神風の術式で、爪痕の斬撃の隙間をすり抜けたのだ。

御蔭でかなりの内燃拝気を消費したが、今年で総拝気量を五十まで超えた今としては、まだまだ余裕はある。

……やれやれ、まさか今の一瞬で”三歩”を使うことになるとは……

結城は、服についた埃を払いながら、視線を目の前にある若者に向ける。

長身に、短い金髪。

風に靡く衣服には三征西班牙の主教導院であるアルカラ・デ・エナレスの校章が刺繍されている。

そして彼は、右の腕に一つの武器を携えていた。

全長一メートル強の、黒と白の金属で出来た剣だ。

剣の尻側には砲がついており、両者の接合部にあるアナログメーターはその針がゼロから五割ほど上の位置を指している。

剣が下、砲口が上に構えられていた。

だが、一つ、その剣砲には特徴があった。

砲口側、上になっている方へと光の線が無数に走り、一つの立体図を見せているのだ。

それは、全長五メートルほどの砲筒だ。

若者は、消えゆく光の向こうにある剣砲のメーターを確認すると、わずかに目を伏せ、

「……」

彼は剣を右下に下げ直し、背後を見せた。

彼の後ろ、先ほど忠勝と鹿角、そして結城が倒した者達が、撤収部隊と思しき者達に担がれ、撤退の動きを見せる。

彼らの指揮を執っているのは両の義腕の少女だ。

少女が両腕にそれぞれ武神の乗り手と突撃隊の一人を担いで、若者に会釈した。

去っていく彼女に、若者は会釈を返し、改めてこちらを見た。

悠然と佇む結城と、自動人形を抱き、蜻蛉切を構えている忠勝に対し、若者は口を開いた。

「お初にお目に掛かります」

息を吸い、ハッキリと聞こえる声で、

「――――――三征西班牙所属”神速”ガルシア・デ・セヴァリョス（ヴェロシダード・デ・デイオス）を襲名しました、立花・宗茂、戦種は近接武術師（ストライクフォーサー）です」

告げられた名前。

それに対し、結城が頷いた。

「西国一の武者と呼ばれた立花・宗茂の襲名者か……」

「Ｔｅｓ．、――――――メッセンジャーで名を売った”神速”ガルシアの二重襲名です。そして――――――」

彼、立花は、剣砲の中心、十字状のシールドを持つ柄を眼前に掲げ、

こう言った。

「――――――三征西班牙に預けられた大罪武装の一つ”悲嘆（リピ・カタスリ）の怠惰（プシ）”を預かる者、八大竜王と呼ばれる者の一人でもあります」

その言葉に、おお、と結城と忠勝が同時に頷いた。

「「ノリノリだなお前！！」」

Ｔｅｓ．、と宗茂は二人の言葉を否定せずに頷いた。

わずかに伏せた目で、

「――――――参じるのが遅れて申し訳御座いません」

彼の言葉に、対する忠勝が口を開く、頬の削ぎ痕から歪みの血をこぼしながら、

「申し訳ないと思うならすぐ帰れ、こっちは若と少々お取り込み中だ」

言った直後だ。

忠勝と結城の背後に、宗茂が立った。

一瞬の移動だ。

風はある。

高速で移動したことを告げる荒れた風だ。

足音も、震えに似た低い足音が強く響いていた。

それらの風と音を持って、宗茂が言う、

「投降を御願いいたしま――――――」

す、という言葉は生まれなかった。

宗茂の鼻先に、蜻蛉切と白布に包まれた長棒が突き出されていたか

らだ。

勢いを持ち、速度を落とさずに迫り来る長棒の後に続いて、既に表示枠を空中に多重展開している蜻蛉切の向こうで、忠勝の声が響いた。

「――――――結べ、蜻蛉切」

直後。

立花・宗茂へと、打撃と割断の力が突っ走った。

／※／

長棒を振りかぶった結城の視界の隅。

忠勝に抱きかかえられていた鹿角は、胴体を上下に分断されながらも、まだ生きていた。

しかし身体は、自動人形の心臓が有する流体抽出機能を失い、動作不能になりつつある。

先は短いが、鹿角の目は、まだ全てを見ることが出来た。

忠勝と結城の前、距離五メートルの位置に、膝をついて荒い息を吐く宗茂がいる。

今、先ほどまで、背後で割断と打撃の力を受けた筈だ。

しかし、彼は、真っ二つにされていなかった。

……これは――――――。

どういうことですか、と思ったこちらの身が揺れる。

忠勝が身体を起こす動きによるものだ。

そしてその横から声が聞こえた。

声は、結城によるものだ。

彼は、手にある長棒を握り直しながら宗茂を一瞥し、

「オレと同じ方法を使ったな……」

「――――――Ｔｅｓ．」

荒れた息を整いつつ、宗茂が答える。

「神格武装である蜻蛉切の起動システムは、蜻蛉切の刃に対象が映ることで名を収得し、割断がなされます。有効射程距離は約三十メートル」

ならば、

「蜻蛉切の刃に映らぬ位置、またはその距離まで一瞬で退避すればいい。――――――丁度貴方が先ほど、私の攻撃を無傷で避けて見せた方法と同一です」

宗茂の言葉に、結城は得物の切っ先を下に降ろし、鹿角は力なく眉を顰めた。

「どうして、それを……」

彼女が唇を動かすと、忠勝が肩から力を抜いた。

「――――――何だ鹿角、お前、生きてたのか」

「何と、死体を抱きかかえる趣味のある人とは思いませんでした」

「いや、それはお前……」

問われた忠勝は、宗茂から視線を外さず、

「――――――鎧のつもり」

「……鎧でしたら抱えている必要もないかと判断します。それに、鎧とするならば、どちらかといえばこのようにした方が」

と、鹿角は身を動かした。

両の腕を忠勝の首に回し、己の身で彼の身体をカバーするようにす

がりつく。

左手は芯を先ほど何かによって貫通されている。

だから右手を回して、左手首をつかむ形だ。

その光景に、結城は半目だけで視線を送り、そして忠勝は鹿角に視線を向けもせず、

「お前さあ……」

「何でしょうか」

「後で”うわあ可愛い”とか言ってからかってやんぞ」

「もう少し捻ったらどうですか」

言って、結城にも聞こえるくらいの声でささやく。

「先ほど、飛来した弾丸のような力場を左手から入れ、重力制御の連続操作で何とか横に逃がしました。あれは一体――――――」

質問に、結城は宗茂を見ながら答えた。

「大罪武装”悲嘆の怠惰”の超過駆動だ。――――――立花・宗茂。見たところ、今のアンタの適応力では、一度に五割程度が限界か」

「――――――Ｔｅｓ．、よく解りましたね、結城君。武蔵アリアダスト教導院所属、総長連合及び生徒会直轄の臨時相談役である貴方がここにいることは想定外ですが……」

言いながら、宗茂がゆっくりと立ち上がる。

彼は、荒れた息を落ち着かせながら、

「貴方の行動が政治的要因か、あるいは個人の意志に基づいたものなのか確証できない以上、ここでの相対に意味はありません。武器を納めてください」

「悪いが先客はオレの方だ。こっちは元信公に用がある。――――――そこを退け、立花・宗茂。でなければ、次は裂くぞ」

「先ほどの回避と反撃は見事でしたが、それだけでは私を倒せません。――――――貴方が本多・忠勝と協働するのなら話は別ですが、如何でしょう」

宗茂の発言に、結城は視線を忠勝に向ける。

そして、

「断る。このオヤジとは仲間ではない、邪魔をするなら一緒に打っ飛ばすだけだ」

「フラれてしまいましたね、忠勝様」

「最近の若者は気性が荒いからな、うちの二代がよく育ってくれたものだ」

横で相槌交わしている二人に、やかましい、と言いつつ、結城は視線を宗茂に向き直る。

対して向こうは剣砲を構え直し、真っ直ぐな視線でこう言った。

「ならば致し方ありません。――――――もう一度言います。二人とも、投降を御願い致します」

「お前、それだけ息切らしておいてよく言えるなあ」

「今のは、準備が甘かっただけです。かわすことが出来るのは解りました」

宗茂は言った。

「投降してください。そして地脈炉の暴走停止に御助力を。そうでなければ――――――」

右手、”悲嘆の怠惰”の剣を下段に構え、

「次には私もこれを用います。そうすれば貴方達の負けです。――――意味は、解るはずです」

「だろうなあ」

忠勝の声を、鹿角と結城が聞いた。

「蜻蛉切は、三征西班牙に渡された大罪武装”悲嘆の怠惰”と”怠惰な嫌気”の試作品だからな。――――――どっちも我がテストしたんだっけか」

「Ｔｅｓ．、蜻蛉切は通常駆動では名を結ぶことによって対象を割断し、上位駆動では物体ではなく、事象を結び割るそうですね。……この反乱が始まる前、山側の番屋が警備していたのに何も気付かず攻略されたと聞きましたが、あれは――――――”警備”という事象を割断したのですね」

宗茂が、蜻蛉切を見た。

蜻蛉切の刃の基部、蜻蛉型の燃料メーターには、赤の色が半分程しか残っていない。

忠勝もそれを見て、

「まあ、気付かれずにやるには必要だったからな。あと一回くらいは同じこと出来るだろうが、――――――通常駆動の方が物体割れるからいいんだぜ？」

その台詞に鹿角は頷き、口を開いていた。

忠勝の首に回した腕に力を入れ、

「忠勝様。つまり向こうは新品、こちらは試作なのですね？」

「ああ、一応クラスは神格武装で、コンバットプルーフは取れてるがな。それが何だ？」

「――――――負けですね。どうも有り難う御座いました。いろいろと下らないことも多い人生でしたが、経験的にはかなり幅広いものだったと判断できます。主に上下のアップダウン幅として」

「おい、いきなり悲観的な鎧だな」

最後の結城の言葉に、鹿角は、では、と前置きして、

「勝てる要因を仰って下さい」

そうだな、と忠勝は、宗茂を見つつ言った。

「あの小僧より我の方が年上」

「老けてるだけだろうが」

「では、あの小僧より我の方が偉い」

「将来ある若者と出世打ち止め親父のどちらが意味ある存在とお思いですか」

「では、――――――――我の方が格好いい」

「「ハイハイＪｕｄ．Ｊｕｄ．」」

「……お前ら、どっちかと言うと腹立つやつであるなあ」

あのな、と忠勝は言った。

いいか？　とまで前置きして、

「我はな、あの大罪武装の特徴を知っておるんだぞ」

「「たとえば？」」

「デザインがダセえ」

「駄目だコイツ。時間の無駄だから先にオレが殺ヤっちゃっていい？」

その言葉に、鹿角は頷き、そして宗茂を見た。

「申し訳御座いません。別に油断させようという意図とか皆無で、
――――――単に素で」

「しかし、時間稼ぎでしょう？」

宗茂の問いに、鹿角は息を詰めた。

彼女は忠勝の首を腕で揺らし、首を結城に向け、

「お二人とも、――――――あの若者、ポジティブシンキングの使い手です。まだこちらのメンツ保ててるので今後はミスらないようにして頂けると幸いです」

「「お前、目につくもの全部ナメてるだろ」」

その言葉をシメに、忠勝と結城が武器を構える。

その動きに会わせ、地面に湿った音が幾つも落ちる。

雨だ。

周囲の流体光によって赤黒く見えるそれに構わず、忠勝は言った。

「”悲嘆の怠惰”には三つの機能があるわな。一つは普通の剣砲としての機能。もう一つは、通常駆動として、蜻蛉切と同じように名を刃に載せた相手を削ぐ機能。そして最後が大規模破壊武装である大罪武装としての、超過駆動」

それは、

「刃に映り憶えた射程距離上のものを削ぎ落とす」

「ええ、発動させたら悲嘆（リピ）を示す”掻き毟り”が走ります」

だよな、と忠勝が言った。

「５０％出力だと、約三キロが有効射程か。見たところあと一発。それだけ溜めるのに随分と使ったろ？」

「エナレスの流体槽エルタンギュにて、一ヶ月を」

「後一発。どう使うか教えてやろうか」

その言葉は、宗茂だけでなく、結城にも向けられたものだ。

右と左、北と南を顎で示しながら、あのな、と忠勝は言い、

「ここからだと、北西と南東の地脈炉がギリギリ射程に入る。だから、残り一発でどちらかを破壊する。破壊によって、地脈の大規模な乱れは生じるかもしれないが――――――」

「――――――三基の地脈炉が抽出した流体は逃げ場を得て、爆発は回避される。三河は当分、流体の飽和による怪異の多発現場になるが、それでも三河が失われるよりいい、と言うことか」

「そうだ」

結城の説明に、忠勝が笑った。

「だがよ」

彼は言う。

背後を顎で示し、

「三河の持ち主はそう思ってねえみてえだぜ。――――――見ろよ」

……何？

と思った結城は、手に持つ得物を強く握った。

忠勝の肩越しに、彼の背後にある新名古屋城を見る。

すると、一直線の街道の先。

幅二十メートルほどの、神木を使った新名古屋城の西側門が完全に開き切っていた。

そしてその向こう。

新名古屋城の西側外殻にある正面口と、その奥に存在する多重隔壁扉も開いていた。

一直線に、数キロに渡って開かれた穴の向こうにあるのは、光と、

「……地脈統括炉」

果たして誰が呟いたのか。

その声が示すものは、数キロ先の新名古屋城中心に存在する壁のような木壁塊だ。

直系一キロほどの、金属内殻と木製外殻に覆われた統括炉は、

「既に四方の抽出炉の暴走が完成して、流体を蓄積中……」

光を前に、鹿角が言った通りに、統括炉の木製外殻は、鼓動に合わせて外殻材の隙間から光を放ち、また、時折わずかに膨張し、ふるえさえ生んでいる。

まるで巨大な心臓のようだと、結城と宗茂は思った。

しかし異変はそれだけではない。

既に統括炉の周辺には、流体が光の霧状に変異し、天球図を描くように線円の無数列を重ねて作って回っている。

その巨大な光の天球図の中央、新名古屋城の中心からは、空に向かって穏やかに光の塔が立ちつつあった。

光の塔は、逆漏斗状に出来ている。

鼓動と共に高くなりながら、しかし崩れてもいた。

塔の最上部。

重なって高くなってゆく部分が、ゆっくりと内側にこぼれ落ちているのだ。

その落下は、段々と速くなり、塔の積み重ねの速度を上回ろうとしている。

「――――――あの光の塔が全部内側に落ちたとき、統括炉ですらも許容出来なくなった流体がオーバーロードを起こす、ってわけだな」

すると、忠勝の声に答える言葉があった。

それは、新名古屋城の外部拡声器から発しられ、

『その通りその通り。何とかここまで来たよ。止めるも逃げるもあと五分くらいじゃないか？　一体そこの立花君と結城君はどうするつもりかな？　時間は有効に使っていかないとな』

聞き覚えのある声に、結城がその主の名を叫ぶ。

「元信公……！！」

ああ、と応じる姿は、統括炉の前に立っていた。

三河の主。

松平家当主の、元信だ。

学帽付きの彼は衣服の上に白衣を纏い、小指を立てた右手でマイクを握っている。

そして彼は、マイクに対して口を開くと、

『ようし、じゃあ全国の皆！　こんばんはあ――――――――！！』

息をつき、指を鳴らす。

その仕草と共に、彼の横から撮影機材を持った自動人形が現れる。

元信は、前に回った撮影の自動人形に対し、マイクを口元に当ててポーズを取り、

『この放送！　共通通神帯（ネット）で全国に放送中だからね！　よい子の皆、ちゃんと先生の一挙手一投足を油断せずに見ていなければいけないよ！　ではチャンネルはそのままで！』

息を吸い、

『今日、先生は、地脈炉が良い感じに暴走しつつある三河に来ていまあ――――――す！！』

／※／

武蔵の艦上、花火目当てに集まった皆は、宙に出現した表示枠から、

元信の嬉しそうな顔と声を見て聞いていた。

『おやおや！　そこにいる立花君と結城君。遠路はるばる見学かい！？』

『見学と、言いますと……』

『ああ、――――――地脈炉の暴走による三河の消滅だよ』

皆の注視の先、元信はしれっと答えた。

『どうだい？　課外授業としては最高だろう？』

／※／

中央後艦奥多摩の左舷では、教導院の面々が神肖筐体（モニタ）に映る一連の会話を見聞きしていた。

元信公のみならず、画面には彼に相対する宗茂と、その横に立っている結城をも映している。

その姿に、

「結城……君？」

画面を見た浅間は、信じられないかのように呟いた。

その疑念を増長させるかのように、いつの間にか周りに集まっていた他の生徒達がざわめく。

「おい、あれ結城先輩じゃね？」

「なんで画面に……、てかあそこって三河？」

「地脈炉暴走って……、なんの冗談だ」

「三征西班牙の立花・宗茂もいるぞ。……これ、本当なんだよな？」

聞こえてくる会話に、浅間の不安が膨れ上がる。

……なんで？　どうして結城君が、名古屋に……？

解らない。

結城が酒井学長の護衛として三河に行ったのは知っているが、それがどうして名古屋に、しかも今爆発寸前の地脈炉の前にいるのかが解らない。

鼓動が高くなり、冷や汗が滲み出る。

さっきまで曖昧だった不安が、急に現実的な恐怖として心を押しつぶそうとする。

このままではいられないという本能に従い、浅間がその場を離れようと走り出した。

しかし次の瞬間に、目の前を立ちふさがる影があった。

喜美を始とする、梅組の皆だ。

「どいて下さい、喜美」

「出来ないわ。――――――浅間、ここからでは三河に間に合わない、諦めなさい」

「諦めなさい？　……結城君が、仲間があそこにいるのに、見殺しにしろって言うんですか！？」

吼えるような浅間の叫びに、喜美は首を横に重く振り、

「そうじゃないわ。いい？　よく聞きなさい、浅間。今私達が駆けつけたところで、見るのは結果だけよ。何も出来はしない。――――だったら、結城が無事に帰ってこられることを信じなさい」

「しかし……！！」

「浅間！」

浅間の言葉を、喜美が止める。

そして彼女は、困ったような笑顔を浅間に向けて、こう言った。

「武蔵アリアダスト教導院最強の男を、最後まで信じなさい。――――彼は今、自分の過去にケジメをつけなければならないの」

「……え？」

／※／

「あれは、結城様ですね」

「……」

右舷二番艦多摩の上で、正純とＰ－０１ｓもまた、映像に映された人物達を見ていた。

Ｐ－０１ｓの呟きに似た言葉に、正純は止まった思考を無理やり回しながら、見つからない答えを探っていた。

……結城が、名古屋に？　どうしてだ？　結城は、酒井学長との約束で、三河の中心部に入れない筈。それに、護衛である結城がそこにいると言うことは、まさか酒井学長も……？

考えても、出てくるのは更なる疑問ばかり。

見開いた正純の視線の先で、元信公の明るい笑顔が、酷く不気味に見えた。

／※／

世界の各地、人々は、身分などに関係なく、神肖筐体（モニタ）や神啓筐体（レディオ）から、元信の言動を見聞きしていた。

彼は光に満ちた地脈統括炉を背景に笑顔を作ると、

『どうだい地脈炉暴走、さあ、三河の消滅を見てみたい人は元気良く手を挙げなさい』

そのセリフに対し、元信は一回軽くジャンプして左手を挙げ、こう叫んだ。

『……は――――――い！！　ぼぉく見たいで――――――――す！！』

／※／

そして現場では、元信の動きに、誰も反応出来なかった。

彼を見る者。

宗茂も、忠勝も、鹿角も、結城も、全く動きがとれない。

しかし、彼ら以外に動ける者達が、新しくその場に加わった。

それは新名古屋城内部にいる者たち。

入り口から元信に至る無数の隔壁扉の左右から、右手を挙げた自動人形がぞろりと現れた。

数は数百はくだらない。

その光景に、宗茂と結城が浅く身構える。

しかし彼女達は、それぞれ通路の左右に現れるが、ずっと右手を挙げたままだ。

そして上げられた手群の間を、元信が踊るように身をシェイクさせつつ、こちらへと歩き出す。

さあ、と小首を振るその姿は逆光、顔の造作は解るが、表情は解らない。

しかし、

『――――――さあ、さあさあ！』

歩いてくる元信の背後。

自動人形の侍女達が、その背後に並んでいく。

右手を挙げて左右に並ぶ自動人形は、彼の背後に続くと、それぞれの持ち物を構えた。

「……？」

怪訝そうな表情を浮かべる結城の前で、彼女達が持ち上げたのは楽器だった。

笙、篳篥（ひちりき）、横笛、琵琶、胡琴、太鼓、そして三ノ鼓に箏に和琴、他、吹き物、弾き物、打ち物における無数の種類の楽器が、それぞれの

加圧器（アンプ）と共に構えられ、

「――――――」

笏拍子（しゃく）の打ち音が、一つ高く鳴った。

直後。

それに合わせて、楽器を構えていた侍女達が調律を行う。

「――――――！」

度重なる音圧は、中央に立って歩く元信の上げた左手に沿って変えていく。

その音色はときに高く、ときには巻いて低くなり、握られる手の動きに合わせて小さくなる。

「……この曲は」

奏でられる旋律に、結城は目を見開きながら奥歯を噛む。

その身体は微かに震えており、耐えかねていた激動が震えとなって現れる。

直後、楽器を構えていた自動人形がそれぞれの動作を行う中で、無手の者達は口を開き、

「――――――」

唄い始めた。

それは拍子を変え、鼓を効かせた、

「――――――通りませ――――――」

通し道歌だ。

通りませ　通りませ
行かば　何処が細道なれば
天神元へと　至る細道
御意見御無用　通れぬとても
この子の十の　御祝いに
両のお札を納めに参ず
行きはよいなぎ　帰りはこわき
我が中こわきの　通しかな――――――

唄われる曲が、結城の記憶と思い出を刺激する。
白い髪の自動人形と、青い瞳をした黒髪の少女。
不確かな推測の中で、ハッキリと結び付けられる二つの存在。
そして自分の心身を燃やし尽くした、あの怨念の業火。
唄い終わった歌に、しかし結城は俯く。
元信は歩み終わらない。

宗茂は警戒したまま。

忠勝と鹿角は行く末を待ち侘びている。

地面の鼓動は伴奏の一部となり、時間はゆっくりとだが、確実に進んでいる。

その中で、結城は自分の立場が酷く不安定に思えてきた。

地脈炉の暴走や、結城家の崩壊、そして自分が長年抱えていた葛藤や疑問よりも、遠くにいるあの男に、どうしてあのとき、あの少女を死なせてしまったという疑問が湧き上がる。

だが、同時に理性が呼びかける。

大義名分を捨てるな、と。

あの男には、今の状況に対する責任を問い詰めるべきだ、と。

三河の消失と、過去の清算。

通し道歌の旋律が、今までの結城を二分する。

その中で、新名古屋城の入り口まで歩んだ元信は、マイクに向かって口を開く、

『ハイハイ、いいですかあ!?　この歌、これから末世を掛けた全てのテストにでます［配点：世界の命運］。じゃあ皆さん。先生に

何か質問はありますかー？』

その問いかけに、声が応じた。

それは新名古屋城の外、白布に包まれた得物を握る結城の声だ。

「元信公……！」

彼は息を吸い、

「――――――アンタはどうして、地脈炉の暴走を行い、三河を消滅させようとする！！？」

天秤のように揺れる心を欺く為の質問だ。

それを結城は自覚している。

しかし何かを言わなければ、自分は何も出来ないと感じてしまう。

なんという矛盾だ。

今まで、どれだけこの男と対面できる瞬間を待ち望んできたか。

しかし、いざ本人を前にしてみると、あれだけ固めていた決意が今にもボロボロになって行く。

そんな結城に、元信は答えた、

『極東武蔵、アリアダスト教導院の結城君。質問のときは手を挙げましょう』

言われたその言葉に、結城は青筋を立てながら、奥歯をまた噛み締める。

……この期に及んで、まだ教師を気取るか……！？

クラスの担任とは違うベクトルで癪に障る元信に苛立つ。

しかし横にいる宗茂が、”悲嘆の怠惰”を右上段に掲げて構えることで返答した。

すでに彼の視線は正面の忠勝を通し、元信を見つめている。

鋭い眼光を新名古屋城に注ぎ、宗茂が言った。

「松平元信公！　此度の、貴方が自分の国である極東を危機に陥れる真意は一体何です！？」

その質問に、元信はただ静かに、よろしい、と一言を告げた。

『では宗茂君。良い質問だったので、先生は逆に一つ問います』

少し息を吸い、元信がこう問うた。

『危機って、面白いよね？』

第十一話～負けてはならない、負け戦～

『危機って、面白いよね？』

松平元信の言葉に、結城と宗茂が息を詰める。

そしてそんな二人を、元信は相変わらずの笑顔で見ながら言う。

『先生、よく言うよね？　考えることは面白いって。じゃあ、やっぱり、どう考えたって、――――危機って、面白いよね？』

だって、

『考えないと、死んじゃったり、滅びちゃったりするんだもんなあ。――――すっごくすっごく考えないと解決出来ないと思うんだけど、それってつまり、――――最大級の面白さだよね？』

「――――」

その言葉に、誰もが息を飲み、何も言えない。

しかし、元信はマイクを片手に、言葉を繋げた。

『危機ってのはとても面白いものだ。だけど、もっと面白いものがあるよね？　ハイ、じゃあそこの宗茂君。もっともっと考える必要があるもの、答えて御覧？』

直後、宗茂が、大きな声でこう答えた。

「――――――解りません！　いきなり時間稼ぎの問答ですか！？」

『うん、いい答えだ』

元信は、拒絶とも言える宗茂の回答に、満面の笑みでそう言った。

『解らない。そうだよな、解らない。その通りだ。――――――何故か？　答えは簡単だよ宗茂君。君は考えなかったんだ。危機より

も恐ろしいものがあるのかと、君は考えるのを避けた。人間として当然の行為だよな。悪いことなんざ考えたくないんだから』

だが、

『今の君は危機より恐ろしいものを前にしたとき、目を背けて死ぬ人間だ』

「――――――」

『嫌だったら考えなさい。恐怖を克服するとはそういうことだ。そして本多君。危機より恐ろしい、もっともっと考えなければいけないものとは何ですか？　さあ、本多君？』

「はーい、我は解りませえーん」

『ハイ、じゃあ罰として首から自動人形ぶら提げて街道に立ってろ』

「おいおい先生、扱い違いすぎねえかよ！？」

先生は無視した。

しかしその問いかけの真意を、結城は悟った、

俯いた顔を上げ、青い瞳が元信に注がれる。

その視線を前に、元信は、

『じゃあ、最後に残った結城君。挽回のチャンスとして、答えられるかな？　この質問に』

その問いに、結城は考えた。

元信の質問は、先ほどの宗茂の”極東の危機”に対しての問い返しだ。

今の質問と合わせて解釈すれば、”極東の危機より恐ろしいものはなんだ？”ということになる。

つまり、

「極東の危機より恐ろしいものは、一つしかない」

うんうん、と元信は左の手の平を耳に当てる。

その続きを聞きたいと、結城を促し、

「末世だ。――――――この世の滅び。そう言いたいんだな？」

紡がれた答えに、元信は逆光の中で笑顔を晒し、

『大正解だ！！　そう！　その通り！！　末世、それこそが全世界の生徒に対する最高のエンターテインメントだ！！』

宗茂は、元信の言葉に再び息を飲んだ。

末世の話は色々な場所で聞いている。

この世の終わりが、本当に起きそうであり、対策など何も打てないということを。

それをエンターテインメントと呼ぶ元信に、宗茂は、

「面白いとは、不謹慎な……！」

『宗茂君、先生は真面目な話をしているんだよ。いいかい？　――――末世という、この莫大な終業の時間は、放課後を持たない。君達は現役の学生だからこう言うべきか。……この”卒業”は、以後の未来を持たない、と』

解るかい？　と元信は前置きし、

『今、末世を前にした君達にとっては、そこまでの全てが授業の時間だ。今、この時間も、明日も、明後日も、如何なるときでも、末世という未来の無い卒業に向けた貴重な授業時間だ。この時間が終わり、末世が来たら、――――――もう教導院には戻れず、友達達と話をすることも出来なくなる』

「――――――」

『面白いよな？　何しろ、世界が末世という卒業を迎えるとしたら、もはや貴重な時間を必死に過さなければ損だ。そして末世を迎えたくないのだとした、考えて、末世を覆してその先に進まないと駄目だ』

続けられる元信の言葉に対し、宗茂は答えた。

反抗心のようだと、自分でも思いながら、

「しかし、末世を前にした人間は、無力を感じ、自暴自棄になる者も多いと思いますが――――――」

『いいじゃないか。――――――毎日教導院に来て、詰まらない詰まらないと愚痴を吐くより、末世を前に家に籠もって部屋の中で震えていた方が、〝自分は怯えられる人間なんだ〟と理解できる。少なくとも、末世で死ぬ前に、自分がどんな人間だったかを少しは解る意味が出る。そしてもし君が末世という卒業を前に何もしないなら――――――』

言った。

『君は、世界をつまらなくするために力を貸すことが出来る人間だ。言い換えるなら、――――――世界を面白くしようとする者達は、君を倒そうと必死になるから、君は叫んで戦って〟世界は詰まらない〟そして〟悔しかったら面白くしてみろ〟と。――――――きっ

とその声に応える誰かが出てくる。ならば充分、詰まらない人間にも、観客としての存在価値があるとも』

さあ、と元信は手を大きく広げ、

『君達はどちらだ。世界を揶揄して喜ぶだけの批評家か、それとも、楽しむ者か。それとも、世界を作りに行く者か』

元信が足を止めた。

新名古屋城の内部、中央から入り口までの中盤域。

楽器の侍女を背後に、彼はマイクを片手に言う。

『そして答えを考えた者、大変よく出来ました的な人には御褒美をあげよう。それは末世を覆せるかもしれないものだ』

それは、

『――――――大罪武装（ロイズモイ・オブロ）だ』

元信は、宗茂の右手にある”悲嘆の怠惰”を見た。

彼は、目の前にいる二人の若者を視界に納めつつ、

『それだけではないが、今のところ、それが最も解り易い。だからこう言おう。いいですか皆さん、大罪武装を全て手に入れたならば――――――その者は、末世を左右できる力を手に入れる！』

「「っ……、訳の解らないことを！！」」

その言葉に、結城と宗茂が同時に叫んだ。

そして、

「大罪武装を各国に配ったのは貴方です！　それが、末世を払うために大罪武装を全て手に入れろと言うのは……」

「元信公！　アンタは、大罪武装を与えられた六つの国に戦争を巻き起こすつもりか！？」

『六つの国？　違うよ？　七つだよ？』

元信の告げた言葉に、宗茂と結城が動きを止めた。

……七つ……！？

眉を顰め、二人は疑問を露にする。

結城は、首を横に振り、宗茂は、馬鹿な、と前置きして、

「七つの大罪の基礎、八つの想念をモチーフに大罪武装は存在した筈です。それらは六つの国に全て分配されています。七つ目の国があるとしたら――――――」

『おやおやいいかい二人とも。大罪武装は八つの想念がモチーフというのは確かだけど、でも、どうなんだろうね？』

「何……？」

結城の疑問に、元信は笑みを持って言った。

『その八つの想念にも、原盤とも言えるものがあり、――――――実は九大罪だったらどうする？』

／※／

”栄光丸（レーニョ・ユニート）”艦橋の中央に立つ教皇総長インノケンティウスは、歯を剥きながら三河の光に目をとめた。

彼は激情の宿った視線をそこに向け、

「元信！　まさか貴様あ――――――――！！」

『八つの想念が七つの大罪にまとまるとき、まず、想念は六つに改変され、そこに新しく”嫉妬（フノートス）”が追加された。ゆえに”嫉妬”は新参の大罪というイメージが強い』

だが、

『八つの想念を論じたエウアグリオスは、実は、友人に対する書簡で九つの悪について述べているんだ。八つの想念に含まれない、その九つ目が”嫉妬”だ。

エウアグリオスは、何故、嫉妬の大罪を八つの想念に追加しておかなかったのだろう？　そして後に、グレゴリウス一世は何故に嫉妬を大罪に数えたのだろう？　解るかい？　知ってるかい？　大罪にはそれぞれ神世の時代の魔獣が当てられているけど――――――それがなんなのか、知ってる？』

元信が、そこまで言って、耳に手を当てて見せた。

まるでこちらの答えを聞きたいように。

だからと言うように、インノケンティウスは叫んだ。

「”嫉妬”に当てられた魔獣は、――――――全竜（レヴァイアサン）だ！！」

叫ぶ先で、表示枠に映った元信が頷く。

だが、インノケンティウスは歯を噛み締め、

「――――――全竜とは、全ての化け物の様相を持つ史上最大の竜！　つまり貴様はこう言いたいのだな!?　九つ目、嫉妬の大罪こそが、全ての大罪をまとめたものであり、最高の悪徳なのだと！」

『そうそう、暴食（ガストリマルボルネイア）も淫蕩（フィラルジア）も強欲（リピ）も悲嘆（オルジィ）も憤怒（アーケディア）も嫌気（ケノドクシア）も虚栄（ハイペリファニア）も驕りも、何かを嫉み、何かになりたいと願う思いの行き過ぎや、その反動によるものだよな。――――――先生が思うに、エウアグリオスは、その大悪の存在を露にするのを恐れて大罪に含めなかった。そしてグレゴリウス一世は、嫉妬に新参のイメージを与えるように追加することで、その存在を卑小化して伝えようとしたが、――――――やはり人々はそこに全竜を見たよね』

「ならば……、俺の大罪武装の追加発注が無駄だったとして……、その”嫉妬”はどこにある!!?」

インノケンティウスの叫びに、元信は少しの間を置いた。

彼は、必死の様相で自分を見る結城に向き直り、まるで彼に囁くようにこう言った。

『今、全竜は既に存在している』

それは、

『噂を聞いたことがないかい？』

「……噂？」

ああ、と元信が頷いた。

『噂はこういうものだ。――――――大罪武装は、その材料として、人間を使用している。ゆえに、人間の原罪をモチーフとした能力を使用出来るのだ、と』

そして、

『それは本当だよ?』

／※／

多摩にいる正純は、横にＰ－０１ｓを置きながら、その言葉を聞いた。

その内容は、昼間に、酒井と結城で話したものとほぼ同じ内容だった。

だが、先があった。

元信の声が、息継ぎの音と共に発せられる。

『噂は、事実だよ。……大罪武装は、人間の感情を部品としている』

それは、

『その人間の名は、ホライゾン・アリアダストという』

「え……？」

聞いた名だった。

トーリが殺したと、そう言われた少女の名。

それは、

『ホライゾン。十年前に私が事故に遭わせ、大罪武装と化した子の名だ。そして去年、彼女の魂に嫉妬の感情の込めて九つ目の大罪武装とし、――――――自動人形の身を与えて武蔵に送った』

その自動人形とは、

『Ｐ－０１ｓという名を持って、武蔵の上で生活をしている』

腹の底、冷えて何かが崩れ落ちる感覚を覚えながら、正純はＰ－０１ｓに振り返った。

そして、武蔵にいる誰もが、次の言葉を聞いた。

『自動人形、Ｐ－０１ｓ。その子の魂が、――――――”嫉妬”の大罪武装”焦がれの全域（オロス・フノートス）”そのものだ』

／※／

酒井は、暗闇の山道を、背後の光に追いかけられるようにしながら走っていた。

山の中、谷の底へと、元信の声が響いてくる。

『これが大罪武装の正体と、九つ目の大罪武装の在所だよ』

「やはり……」

酒井は、わずかに顔を伏せ、奥歯を噛んだ口の奥から唸るようにして言った。

「……この十年、一体、何が変わったっていうんだろうねえ。――――なあ、結城」

／※／

正純は、ゆっくりと横に振り向いた。

二つの月に照らされた街道の上で、風の中に立っている無表情な自動人形を。

彼女は今の放送を聞いていた筈だ。

しかしＰ－０１ｓは無言のままで、まるで事態が解っていないようなで、自分に振り返った正純に対して、

「どうかなさいましたか？　正純様」

そして、

「今、Ｐ－０１ｓの名と、その正体を示すような放送を聞きましたが……」

しかし、首は傾げられる。

当然だ。

彼女には記憶が無い。

この放送を聞いて、自分のことだと解っても実感が無いだろう。

だが、正純は心に言葉を作り、それを口にすることで思いを溢した。

それは、震えるような、堪えるような声で、

「……どうしてだ？」

何故。

「どうして、魂ある自動人形を、――――――大罪武装にした！！

？」

しかし、その叫びに答えは無い。

表示枠の向こうで流れる言葉は、

『今日、ホライゾンを見たよ。……手を振ってくれていた』

／※／

『ホライゾンは、元気なようで、……何よりだ』

聞こえた声に、武蔵上を走り出した者がいた。

装飾用の金の鎖を鳴らしたそれは、

「――――――愚弟！？」

トーリが、彼の全力を持って走り出したのだ。

聞こえた事実に誰もが息を飲み、顔を見合わせていた中だった。

停止と戸惑いの雰囲気を断ち切るように、トーリは走る。

教導院前の怪談を駆け下り、その背後から喜美の声が響く。

「愚弟！　アンタ、何処行くの！？」

しかしトーリは答えない。

振り向きもしない。

ただ走り、息をつき、後悔通りの前に辿り着く。

皆の見る前で、彼は僅かに迷い、そして、

「――――――っ！！」

勢いつけて暗い道へと飛び込んだ。

身を大きく振りながら、彼なりに速度を出来るだけ上げながら駆け走る。

そして、必死に走っていくトーリの動きに、皆の中から応じる者がいた。

出る人影は三つ、ネシンバラとウルキアガ、そしてノリキの三人だ。

一気にトーリに追いついていく三人に、数歩を踏んだ喜美が叫ぶ。

「追って！　お願い……！」

そして、その先を見詰めた喜美の横で、誰かが言った。

「ねえ、皆……あれ」

指を表示枠に指し示し、言葉を発したのはナイトだ。

彼女の言葉に釣られて、皆が視線を後悔通りから表示枠に戻す。

喜美もやや遅れてそれに従い、そしてそこで見た。

「……え？」

それは、もう一つの解放の合図だ。

／※／

『噂は、事実だよ。……大罪武装は、人間の感情を部品としている』

その言葉に、結城は今までの自分を思い返していた。

親に見捨てられた自分。

結城家に売られた自分。

武蔵に逃げ込んだ自分。

あの少女（ホライゾン）を失った自分。

放浪の時を送っていた自分の人生は、決して満足と言えるものではなかった。

投げ出したい、逃げ出したい、諦めたいと感じたときが幾度もあった。

しかし十年前のあの日、幼い自分は余りにも残酷なものを見た。

親に見捨てられた絶望感。

結城家に売られた焦燥感。

武蔵に逃げた恐怖感よりも、今までの人生の中で最も自分を苛ましたのは、ホライゾン・アリアダストを救えなかった後悔。

この身を焼き焦がしたいという無力感だ。

否、それだけではない。

初めて彼女に会ったとき、結城は互いの素性を知っていた。

誰かに教えられたものでもなく、信じて疑わない本能が、自分にそれを告げた。

『その人間の名は、ホライゾン・アリアダストという』

しかしあの時、何もかも失った自分と比べて、ホライゾンは周りに満たされていた。

家族がいなくても、それを補って余りある仲間達が彼女の周りにいた。

あの時の自分は、それで良かったと思っていた。

このままでいいと、互いの事を隠し続けて、これ以上、自分達の出自が彼女を縛らないことが、この先の平穏になれると信じて。

なのに、

……お前が死なせた……

未だに淡々と語る元信の顔を見詰め、結城の中で何かが目覚めた。

……オレは、ずっと後悔していた……

十年前、馬車に轢かれ死んだ彼女を前に、自分は何も出来なかった。

トーリがずっと後悔を抱いていたのと同じように、結城もまた、ホライゾンの死に責任を感じていた。

もし、彼女に自分の事を話していたら、例え信じてもらわなくても、あの時、何かが変わっていたかもしれないと。

そうでなくても、あのときの自分は何かをしなければいけなかったと、そう自分を責めていた。

あの日以来、結城は二度と自分の不幸を嘆くことは無かった。

当然だ。

未だに生き続けている自分が、幼い人生を、あんな惨めな形で終わってしまった少女の前で、更なる不幸を語ることは赦されないと。

何もしてやれなかった自分がそれをするのは、ホライゾン・アリアダストの人生に対する侮辱だと、そう自戒していた。

だが、

『今日、ホライゾンを見たよ。……手を振ってくれていた』

ああ、知っている。

奥多摩の艦首で、自分もそこにいた。

彼女が何に対して手を振っていたのも知っている。

トーリと同じように、結城もまた、ホライゾンと出会ったときと同じように、Ｐ－０１ｓの正体を確信していた。

しかしだからこそ、結城には赦せなかった。

……どうして、そっとしてあげなかった……

だが、同時に、また彼女に巡り合せてくれたことに感謝もしていた。

例え心の何処かで恨んでいても、自分は、本当は松平元信という人間を理解しようとしていた。

しかしその考えも、今の説明で消え失せた。

葛藤も、苦悩も、迷いも、焦燥も、哀愁も無い。

残ったのは、自分の原点である赤。

余分な感情と激動の残滓が脳内から排除され、結城は思考がクリアになって行くのが解る。

世界が停滞しているかのようだ。

地面の鼓動も、宗茂の声も、雨の滴る快音も聞こえない。

……ああ、真喜子の言ってたのと同じだ、本当に周りの声が聞こえないんだな……

腹の底から熱が燻り上がる。

知っている、これが何なのかを。

トーリを殺しそうに為ったときも感じたものだ。

しかしあの時は色々と参ってたから、微妙にノイズが耳に走ってた。

だが今度は違う、決してしくじらない。

本当に人を殺せる感情を、今の自分は持っている。

視界を赤く染まるのは、結城家の邸宅が焼かれたときと同じ色だ。

炎の赤、血の赤、呪詛の赤。

養父が叫んだ断末魔と同じように、目の前のこの男は、また再び自分の大切なものを奪い取った。

その怨敵をどうして赦せる。

どうして今までの自分は、彼と分かり合えるという妥協をしたのだ。

……ああ、そうだ。オレでも、トーリでもない。――――――――あの日、あの子を殺したのはお前だ!!　松平元信!!

収束する地脈と同じように、結城の感情も臨界に達した。

膨れ上がった感情の名は憎悪。

動機は復讐。

代表する色は赤だが、染まりすぎてもはや黒と化している。

駆り出す際のエネルギーは満タン。何せ十八年間溜め込んできた怨念だ、捨てるほどある。

そしてストッパーはいらない、働き出すための力もある。

あと一歩で、あの目障りな眼鏡を叩き割れる。

そして、

『ホライゾンは、元気なようで、……何よりだ』

その言葉と共に、正真正銘の最後の魔獣が目覚めた。

／※／

「元信ぁああ〝っ――――――――！！」

それは、元信の放送を見ていた全ての人間の心身を強く震わせた咆哮だった。

限界に達した結城の叫びが、神風の術式に乗って大気と大地を弾き出した。

「――――――!!?」

強烈な言霊だ。

アメノカクとの上位契約によって、結城は今の一瞬で、空間における停滞と障害、そして時間と距離を禊いだ。

発せられた音響は、空気中に充満する湿気と地面にエネルギーを１００％伝導され、衝撃波となって周囲の空間を薙ぎ払う。

コンクリートの大地が罅割れ、結城の周囲の空間が微かに歪んだ。

身近にいた忠勝と宗茂は咄嗟に蜻蛉切と神速で防御と回避を行ったが、全国の視聴者の鼓膜はそうはいかない。

文字通り、身体を打ち震える爆音に、元信を含む誰もが耳を防いだが、結城の激動はまだ終わらない。

彼は、殺気の籠もった視線で元信を睨み、そして叫ぶ。

「あれから十年、……アンタはどれ程までに自分勝手なんだ!!?
あの子を死なせ、自動人形にし、そして今は大罪武装だと!!?
ふざけるのも大概にしろ!!」

結城の声に、元信は目をやや細めながら言った。

『結城君、突然の大声は感心できないな。――――――それに今の質問、目の前にあるものだけで人を判断しちゃいかんな。先生はふざけてないし、何時も真面目だよ？　何しろ十年、世界に多くの教材を送ることが出来たんだ。それは君ら次第では――――――』

一息。

『世界大戦が起きるかもしれないし、責任所在の問題で、今度こそ極東は完全支配かもな。そしてもしそうなったら、手引きは先生のせいにされるんだろうなあ』

逆光を置いて、元信がマイクを持ってこう言った。

『だが、見たいよなあ。――――――史上初の、聖譜記述にも無い世界大戦ってのを』

元信の言葉に、結城は唸りを上げた。

奥歯を強く噛んだ口元からは、激情の赤い血が流れ出しており、

「……止める！」

『いいなあ！　そうだよ結城君！！　実にいい答えだ！！』

未だに構えを取ってない結城に、元信が仰け反って声を大きく上げた。

『結城君！　それが君の”考えた結果”だな！！　そう。そうだ、

実に素晴らしい時間の使い方だ”考えた結果”で動くのは！　何しろ君は自分で考えた結果によって学級崩壊を起こそうとしている！！　私達が作った教材配布を受け入れながら、末世を止める授業を否定し――――――』

「話を履き違えるな！！　勘違いするなよ、元信……」

結城は、腹の底から這い出るような、重く濁った声を出した。

「オレは別に何も考えていねえよ。――――――ただ、どうしようもなく我慢ならないだけだ」

その言葉に続けて、結城は動いた。

手に握る長棒を包んだ白い布、その結びであるベルトを親指で弾き開いたのだ。

「――――――っ！！？　若！！」

その動きに、忠勝が叫ぶ。

しかし、結城は言葉を続けた。

今の彼の目には、元信しかない。

「アンタは、決して赦されないことをした。――――――自分の子に責任を持たずに、彼女のささやかな平穏を奪い去り、長い時間の中で何も言わず、その上――――――」

一息。

「二度も、ホライゾンを殺そうとしたな!!?」

吹き抜ける風によって、白布が解けて行く。

そして現れたのは、一振りの刀。

拵えの色は黒漆、金具の色は白銀。

科学的ではない、最先端でもない、神々の時代から伝えられていた最も実用的で簡素な外見をしているそれは、まるで図鑑に記された

古い時代の刀をそのまま持ってきたようだ。

そして結城がゆっくりとそれ引きを抜く。

現れたのは、メジャーな鎬造りの刀身。

長さは打刀以上大太刀未満。

流体光に照らされ、黒く揺らめく刃文は直刃（すぐは）に湾（のた）れを基調としている。

その刀を見て、横にいる宗茂が言った。

「揺れる炎のような黒の刃文。……それはまさか――――――――！？」

『十数年前、当時の常陸（ひたち）結城家当主である結城晴朝（はるとも）が、結城家の自前の工房で鍛え上げた、極東で唯一、三河の手によらない神格武装だ。――――――刀の名は”勢州黒断刀・妙法千子村正”。歴史再現に置いて、極東に”不要”と憚れていた妖刀だ』

宗茂の疑問に、元信が素早く答えた。

そして刀を抜いた結城を前に、宗茂は目を見張った。

噂では、結城家は、最後の当主である晴朝公の代で、妖刀を”再現

”したがゆえに、三河の松平元信の命によって滅んだ。

そしてその神格武装もまた、結城家と運命を共にした筈だった。

千子村正は、聖譜記述において松平家に仇名す刀だ。

歴史再現においてオカルト的な迷信や要素は認められず、わざわざ歴史人物の死に、曰くつきの武器を再現する必要性はないと、聖連がそう判断した。

村正は、それを手にした者を操り、魅了し、人を凶悪な人斬りの悪魔に化すと言われている。しかし歴史上では、村正に限らず、様々な妖刀魔剣が存在する。

しかしそれらは一本たりとも再現されておらず、その全てが聖連によって禁じられていた。

そして、その理由は簡単だ。

聖連の運営は、歴史再現を信仰の対象とする各国の教譜が預かっている。

そして今の教譜の殆どが、Ｔｓｉｒｈｃ教譜だ。

旧派（カトリック）、改派（プロテスタント）に限らず、現存する強国の殆どが聖譜Ｔｓｉｒｈｃ系の流れを汲んでいる。

戒律に縛られ、七つの枢要徳をモデルにした聖譜顕装を持つ列強どもにとって、天壌を乱す妖刀魔剣の存在を認めるわけにはいかない。

そしてそれが原因で、妖刀村正を再現した結城家が滅ぼされたが、しかし村正が今、ここにいるとなると、

『村正は、禁忌とされていた、唯一再現に成功した妖刀だ。そして村正を持つ結城君が、この世界でたった一人の妖刀使いとなる。――――結城家の生き残りが、松平家を仇名す妖刀を持ってここに来たというのは、結城君、君の復讐は何に対するものだい？』

元信の問いに、結城は答えた。

更なる怨念を吐き出すかのように、

「言った筈だ、お前はホライゾンを二度も殺そうとした。――――――アンタには、この二十年近い間、逃げてきた責任を背負ってもらう！」

『そうか。――――――先生はてっきり、君が自分のために此処へ来たのかと思っていたよ』

「何？」

結城の疑問に、元信はマイクを握っていない左手を腰に当ててこう言った。

『結城君。君の生まれは、P．A．ODAだったな』

「……！！」

『血筋は極東の三河だが、君は三歳まで、当時三河と暫定契約していたP．A．ODAで育ち、四歳の誕生日を迎える直前で、織田家の政略によって三河の結城家に売られた。

――――――結城家での扱いは養子で、結城の姓を名乗ったのも当時からだったね？　その前は、ちゃんと三河で授かった本名を使っていた。君の名は〝結城秀朝（ひでとも）〟。それは結城家が当主である晴朝にちなんで変えたものだが、三河で与えられた本名は……』

言った。

結城の怨恨を打ち砕くかのような声が、全国に響いた。

『〝松平秀康（ひでやす）〟。織田家では、幼いながらも剣客としての才能を見込まれて、次期五大頂候補の一人として目された逸材。――――――

―そして同時に、三河当主である松平家の長男にして』

一息。

『ホライゾン・アリアダストの生別れの兄だ』

／※／

元信の言葉に、放送を聞いた誰もが息を飲んだ。

松平家の長男、少女ホライゾンの兄。

その言葉が意味するのは、

『三河当主の松平元信公には、内縁の妻と子がいる』

しかし、

『生まれた子が、ホライゾン一人とは限らない……』

元信の囁きに似た声が、目の前で語られた事が、武蔵にいる全員を震わせた。

『松平の嫡子が、松平家を滅ぼす刀で、その父に刃向かう……』

それは、

『秀康君。……感動の親子の再会にしては、些か刺激的とは思わないかい？』

／※／

結城は、あれだけ燃え盛っていた炎が一気に冷めたのを感じた。

そして来るのはただの空虚だ。

解らない。

目の前の男が語っているのは真実だが、どうしてこの男が自らそれを言うのが理解できない。

……自分から投げ捨てておいて、どうしてそんな平然とした顔でいられる？

自分は、一度も自負したことが無い。

織田家にいた頃も。

結城家の養子としても。

松平の者としても。

今まで、結城秀朝が”結城”として武蔵に暮らしていたのは、政治や家系に縛られないことが心地いいものだったからだ。

しかし、平穏に繋がる最後の糸もたった今消えた。

初めて向かい会った、自分の父によって、この先の結城は、自分とホライゾンの人生を滅茶苦茶にした世界（せいじ）に足を踏み入れなければならない。

その結果を前に、結城は構えた村正を下ろした。

顔は俯いており、表情は見えない。

しかし、ややあってから、彼はゆっくりと首を持ち上げ、

「……はっ」

小さく、吐くように笑った。

「は、はは……っ！　愉快だな、本当に愉快だな！！？」

激情とは違う、心底楽しいかのような笑みとともに、結城は再び村正を持ち上げた。

片手で水平に掲げられた剣の切っ先は、微動せずに元信を指している。

そして、

「気が変わった。――――――――松平元信。ここで地脈炉を破壊し、

三河消滅を食い止め、アンタを皆の前に連れて行く！！」

『ほう、いいのかい？』

結城の一喝に、元信が答えた。

何故なら、

『この地脈暴走による三河の消失も、末世を左右するために必要だとしたら？』

「末世なんか知ったこっちゃねえよ。今はテメエと親子喧嘩をしたいだけだ。――――――それに、オレが勝った際には、テメエに別の教材を出して貰おう。テーマは”正しい家庭関係の築き方”だ！！」

そっか、と元信が言った。

『先生の言うことが聞けない生徒は本来だったら体罰ものだが、最

近は生徒殴ると教員が悪いってなるんだよな。……だからおい、そこの副長、ちょっとどうにかしなさい』

直後。

結城と宗茂は風を感じた。

押すような、吹き飛ばすような威圧を持った風。

それは、

「やはり来るか！！？　本多・忠勝……！！」

「おうよ」

首から自動人形の身を提げた百戦錬磨の武者が、一直線にこちらに突っ込んできた。

逆光の中、忠勝が口を笑いの形に開き、

「止めるぜ学級崩壊！！」

／※／

音が聞こえる。

刃がぶつかり、足が地面を踏み、息を放つ音だ。

その音は、通神を通し、各地へ、世界へと響いていた。

「立花・宗茂！　聖連と手を組むのは癪だが、今は目的が一致だ！　手を貸してやる！！」

「他人の家庭事情に巻き込まれるのは御免被りますが、致し方ありませんね！！」

「お前ら！　我と戦ってる最中に余裕こいてんじゃねえよ！！」

三人の武者。

西の者と東の者。

若い者と老いた者。

新しい武器と古い武器。

どちらも多くの違いはあるが、

「――――――――！」

共に奏でる戦闘の響きは、互角の高鳴りを放送に乗せて、あらゆる場所へとそれを届けた。

音は動き、流れ、経過し、旋律や物語のように全てを伝えて止まらない。

聞く者、見る者達。

放送の先にいる人々の中で、誰かが言った。

「どうなるんだ……」

結果によって、三河は、そして末世を後に控える世界はどうなるの

か。

そして、

「どっちが勝つんだ……？」

しかし、誰一人として、言わなかった言葉がある。

どうにかしてくれ、と。

救いを請うような言葉だけは誰も言えない。

何故ならば、この戦いは、何かの救いになるものではない。

その理由の一つ。

元信の声が、こう言った。

『そう。この戦いが終わっても、もはや、それだけではどうにかなるものではないんだ。この戦いが終わった後、世界に対し、もはや誰もが、どうにかしなければいけなくなる』

だから、

『この戦いが始まりだ。――――――行け、本多・忠勝。人々が、末世という課題をどうにかせざるをえないようにするために……！』

言葉が響いた。

『――――――お前の忠義は偏差値どのくらいか、全国レベルで見せてみろ！！』

第十二話～戦える力と、戦いたい意志～

『本多・忠勝。――――――お前の忠義は偏差値どのくらいか、全国レベルで見せてみろ！！』

「応……！！」

元信の叫びに、忠勝が吠えるのを、結城と宗茂は聞いた。

直後。

宗茂は一瞬のうちに忠勝の背後に回り込む。

旧派一般聖術（クラシカルフィルマ）による高速動作だ。

それに対して、結城は神風の術式で忠勝の右側面に挑む。

両者の挟み撃ちに、しかし忠勝は既に動いており、背後の宗茂に回り込むような一撃を放つ。

……流石に楽にはいきませんね！

宗茂は動いた。

速度を上げ、

「――――――！」

”悲嘆の怠惰”の刃をぶつけ、距離を取って射撃を連続する。

だが、忠勝はそのことごとくを跳ね返し、

「なかなか速いな！　もっと速度は上がるか！？」

「上がりますとも！！　聖術（テスタメントフィルマ）には限界がありませんから！！」

故に上げた。

宗茂の速度は聖術による加速を、身体で制御する方法だ。

聖術は、基本的に聖堂で得る術式契約書を使うことによって行使される。

旧派に対する献身行為や拝気の献納と交換して手に入れる術式契約書は、書かれた承認印を押すことで発動し、そして消える。

旧派の契約書は使い捨てだが、その分、効果は高く、使用時に術者が拝気を消費しない利点がある。

宗茂の術式契約書は、切手大に圧縮され、数万書という量で背部放熱機の下にカートリッジで納められている。

その術式の内容は、二つ。

一つは、肉体の速度を上げるもの。

もう一つは、

……足裏に、足場を同時多重展開する。

走るために地面を踏んだとき、その足場を同時に幾つも踏んだことにする。

摩擦係数の応用だ。

展開が五つ同時ならば、速度は五倍に。

十個同時ならば速度が十倍になる。

どちらも本来なら強力な術式なので、数万書などという単位で所有出来るものではない。

だが宗茂は、それを襲名した生業で得た資産と、術の加工によって

可能としていた。

術の設定を、反動を考慮しないものにしているのだ。

反動軽減を入れれば術は高価になり、出力が低く、複雑になる。

だからそれを入れないことで単価を下げる。

そして発動時間を短く、瞬間加速用にすることで、更に単価を安くして量を稼いだ。

そうすることで安価に、一瞬で多量の加速を重ねて高速に至ることが出来るが、しかし負担はそのまま全身に来る。

内臓はもとより、視覚や、手足の痺れも併発する。

だが、

……それが必要な相手だ……！

行く。

背部の術式契約書のカートリッジが振動し、本体の排出部から使用済みになった圧縮契約書の破片が飛び散る。

灰のような光の屑だ。

それは首の後ろにある身体用冷却装置の十字ラジエーターから噴出

す陽炎にまかれ、光の煙となってたなびいていく。

光が散るたびに、こちらは速度を上げていく。

そしてその先で、宗茂は信じられないものを二つ見た。

一つは、相対する忠勝がこちらと対等以上に立ち回っていること。

速度は無く、身体に負傷している彼は、穏やかとも言える足捌きでこちらの行く先に身を振り、蜻蛉切を叩き込んでくる。

そしてもう一つは、側面で攻めている結城が、加速状態の宗茂の先を歩いていることだ。

……なんと!?

それは、悠然としているかのような動きだ。

走るための踏み込みはなく、空力抵抗に抗う姿勢もない。

あくまでゆったりとした歩調で進み、小さい動きで自分の先に続き、忠勝の攻撃を捌いて行く。

速度で勝っている宗茂に、結城はそれよりも遅い動きで追い抜いている。

矛盾している言い方だが、それは事実だ。

……術式!?　しかし一体どうやって……!?

宗茂の疑問に、二人の刃を同時に相手している忠勝が答えた。

「神風の術式か……！　若、もしかしなくても、契約の相手はアメノカクか!?」

「……Ｊｕｄ.」

問いかけに、結城は静かに答えた。

そして、

「アメノカクは鹿島神の御使いである鹿の神様だ。その役割は伝令。元はアマテラスの命令をタケミカヅチに伝えたことで鹿島の使いとされたが、今ではその逸話によって鹿は神の御使いとして認識されている。――――――そしてアメノカクと上位契約を結んだオレの得意技は二つある」

一つは、

「オレの字名（アーパンネーム）そのものである”神風”。純粋な脚力と眼力を鍛えることで、伝令の移動の際に、最適な足場や障害を見切る能力だ。例え速度が変わらずとも、目的地に至るまでの最短ルートや、もっとも速度を維持しやすい道が解れば、それがそのまま”速さ”に繋がる。そしてもう一つは――――――」

一息。

「”踏破”だ。物理的な障害に限らず、事象や矛盾によって形成されたあらゆる足場を道とみなして踏破する。今、オレが身体速度を上昇せずに物理スピードを上げているのは……」

その言葉に、宗茂が息を飲んだ。

彼は、自分の背後に未だに飛び散る契約書の破片を見ながら、

「私の、加速術式の残滓を踏んだのですか！？」

「Ｊｕｄ．。しかし正確には、契約書の破片以外にも、お前の走った軌道と、その周囲の気流を踏み越している。――――――お蔭で体力を節約して、速度の中で本多・忠勝の動きに合わせることが出来たよ」

足場を作って速度を得る自分に対し、こちらの速度を更に足場に使って加速していると、結城は言っている。

神速、郵政のガルシアである自分に対する、神風を誇る伝令の鹿島使いだ。

速度を得るのではなく、速度を追い越す業に宗茂は瞠目し、同時に思った。

……あの狭い武蔵の中で、こんな化け物が眠っていたとは……！

宗茂は見た。

交差する三人の中で、結城が忠勝のテンポに合わせているのを。

必死に攻撃を捌き返す自分と違って、結城は堅牢確実な太刀筋で、自分と忠勝の動きを、自分の動きの中に加えている。

宗茂が攻めに、忠勝は受け流す。

その隙を、結城が刺突で突く。

それを忠勝が防げば、また宗茂が攻めるという構図だ。

全体的な動作としては、攻める結城と宗茂に対して、忠勝がゆっくりと下がり続けている。

しかし忠勝の動きは、こちらが背後に回ることを誘い、それを逆側に返すことでＳ字を連続で描く下がり方だ。

「……っ」

Ｓ字の移動軌道は円運動の連続であるため、こちらが回り込む動きは、逆に返されれば向こうがこちらを回り込む動きになる。

つまりそれは、

……常に密着している！

しかし問題なのは、背後の取り合いで牽制されて、決め手を取れない宗茂と違って、宗茂の軌道を踏み越えた結城だ。

Ｓ字移動を強いられた宗茂は、忠勝と密着した状態にある。

つまり宗茂は忠勝に牽引されているのだ。

牽引された宗茂の軌道を踏む結城、そんな彼の歩む軌道の先にあるものとは、

「今度は、我の軌道を踏み越えるか！！？」

「いい感じで踊っているな。――――――本多・忠勝、お前の先を貰うぞ！」

踏んだ。

絡みつく蛇の先を、鹿の蹄（ひづめ）が踏み荒らす。

結城が行くのは、忠勝のS字運動を囲むO字運動だ。

宗茂と忠勝の動きが結城の足場となって、彼にこちらの周囲を自在に走らせる軌道を作っている。

その中で、結城が始めて走る動きに入った。

神速が、本格的に吹き始める。

「……！！」

速度を踏んだ上で、更に結城が加速した。

障害と停滞を禊ぎ、”神風”の術式によって最適な足場を読む。

一連の動きの無駄な部分を極限まで排除し、神道術式をあくまで補助として走る。

その動きに、忠勝が奥歯を噛む。

宗茂の動きはS字運動の牽制でどうにかなるが、こちらの動きの軌道すら利用している結城にはそうもいかない。

個別で動くのならば、まとめて自分の動きに引き込ませばどうにかなるうが、相手している二人目が風ならばどうしようもない。

加えて、結城の剣術は刃を交えない剣術だ。

忠勝の槍捌きを目で追い、得物を交差させる動きを捨てることで確実な反撃を繰り出す。

見切りの回避と攻撃。

それが結城の剣だ。

速度を踏み越えた、隙を潜る必殺剣に、忠勝が冷や汗をかく。

「速いな!!　円運動で捕捉できねえから、蜻蛉切で結ぼうにも見えねえ!!　攻撃を受け流すのが限界だぜ!!」

それはつまり、円運動を解除すれば、蜻蛉切の割断を当てることが出来るということだ。

しかしそれは逆に、相対している宗茂に攻撃の隙を与えることとなる。

そしてそれは、宗茂も同感だった。

決め手に入るための、”悲嘆の怠惰”の超過駆動の発動は、やや遅い。

ただ引き金を絞り、仮想砲台の展開をするのに三秒は必要だ。

発してしまえば、あとは十数秒後に結果が出るが、それはもう避けられないものだ。

ゆえに最初の三秒が問題になる。

三秒、今は絶対に得られぬ時間だ。

どうにかしたい。

だが、

「”悲嘆の怠惰”！――――――通常駆動！」

通常駆動。

その刃に名を載せた者を削ぎ落とす小発動だ。

蜻蛉切と同じシステムで、刃が写す以上は回避不可能。

蜻蛉切の割断に対し、宗茂は速度で刃の写実範囲から逃れて避けることが出来る。

しかし、対する忠勝は高速の移動力を持ってないので、回避が出来ない。

その筈だった。

だが、

「結べ！　”悲嘆の怠惰”！！」

「っ！　馬鹿！　やめろ！！」

宗茂の攻撃に、結城が叫ぶ。

しかし間に合わない。

発動された能力に対し、同じ瞬間で蜻蛉切が動いた。

……これは――――――――。

”悲嘆の怠惰”の刃に対し、忠勝が悠然とした動きで蜻蛉切を向ける。

それだけで、

「――――――――!!」

硝子を引っ掻くような鳴音と共に、”悲嘆の怠惰”の刃から光が散った。

”悲嘆の怠惰”の通常駆動が無効化されたのだ。

その理由は、

「鏡だ！　”悲嘆の怠惰”の刃に、蜻蛉切の刃を写したんだ！」

結城の言葉に、宗茂が息を飲む。

蜻蛉切の刃を鏡とし、”悲嘆の怠惰”が通常駆動を発生させる際、その姿を写し込む。

そうすることによって、”悲嘆の怠惰”は目標を失うと同時に、己に自分をぶつけそうになって通常駆動の効果を破棄する。

……簡単そうに見える行為だが――――――。

自分には出来ない、と宗茂は思った。

何しろ、こちらが振り回している刃を、槍の穂先に写し込むのだ。

こちらの息を完全に読む必要があるし、角度が少しでも間違えれば技を食らうことになる。

だが、忠勝はそれを行った。

「く……！」

結城の神風に続いて、実力という言葉を、宗茂は再び思い知った。

……速度などでは叶えられぬ技……！

宗茂は、三征西班牙では一番の戦闘速度を持つ。

彼が元々襲名していたガルシア・デ・セヴァリョスは、聖譜記述に拠れば郵政の雄だ。

その力を高速の移動と動作と捉えた彼は、武道を修めつつも、メッセンジャーを生業とし、その手を広げることで聖譜記述に支えられた資産を有していた。

だが、紆余曲折の末、彼は己を武者として鍛え、立花・宗茂の名を二重襲名している。

だから、宗茂にとって、速度の二文字は、自分が戦う以前から持っていた力だ。

速度があれば、有利な位置に移動できる。

速度があれば、攻撃の威力が増す。

速度があれば、瞬間的な回避が出来る。

速度と戦技を重ねるために修行を積み重ね、幾度となく戦場に出て、身体が壊れるような瞬速を制御できるようになった。

西国最強という聖譜記述に対し、相応しい戦果を得つつもある。

……だが――――――。

自分の目の前にいる二人は、その悉くを凌駕した。

術式に頼らず、依存せず、あくまで己の力のみを発揮する。

だとしたら、

……どうなのですか！？

西国最強を叶えるために自分が得たものは、

「く……！」

更に速度を上げた。

ラジエーターが揺らめかせる陽炎が厚くなり、圧縮契約書の破片量

が増えた。

今の加速を読んだのか、戦闘のリズムが狂ったと判断した結城が、踏破を破棄する。

しかしそれでも、彼の動きの流れは停滞しない。

その瞬間、宗茂が走りだす。

足裏、分厚い書物を踏んでいるような感覚がある。

まるで粘るような、沈むような、染み付くような感触だ。

多重化された足場がそれぞれ干渉して震え、しかし効果を確実に発揮する。

金属音に似た響きが、両の足裏から連続し、速度となり、

「――――――っ！」

弾かれたような高速移動に骨が軋む。

全身の肉という肉が、全て背後に引っ張られるような感覚。

しかし、それが速度の証拠だ。

凄まじい瞬速で忠勝の背後に左から回りこみ、剣を叩き込む、しかし、

「……！！」

S字軌道で旋回する忠勝が、右肩から入るようにして蜻蛉切のバックハンドを叩き込んできた。

回り込むこちらを背後から追うような一撃だ。

しかも丁寧に、旋回と同時に左足で結城を捌き、そちらの反撃を牽制している。

繰り出された足技に結城は村正の刃で受け止めたが、それが逆に自分の両手を塞いでいる。

今までと同じパターン。

掬い取られそうな、柔らかくも力強い振りだ。

ギアを上げたこちらに対し、それでも忠勝は二人を牽制する。

その上こちらの背後を取ろうとしている。

そうなったら、またS字軌道の始まりだ。

取り込まれたら、また自分の速度が二人に喰われる。

繰り返してはならない。

そうなってしまえば、時間が奪われる。

忠勝の狙いは一つだ、と宗茂は思う。

こちらに時間を消費させ、

……地脈の暴走を完成させる。

だから、この流れを止めなければならない。

結城もそれを理解しており、今までのO字運動の中で忠勝を宗茂から引き離そうとしていた。

繰り返される動きを止める術、その対処方に、宗茂が結城と目を合わせる。

そして次の瞬間。

バックハンドで叩き込まれてくる蜻蛉切に対し、宗茂は動いた。

／※／

「ぉおお――――――――！！」

結城は悟った、宗茂の考えに。

それは彼の速度を封殺するために忠勝がとった足運びを断ち切る、宗茂の新しい動きだ。

それは、宗茂が足場を作る動きだった。

加速のための足場。

瞬速を極める足場。

それは、

……蜻蛉切か！？

バンクハンドで振り込んだ蜻蛉切の刃を、宗茂が踏んだ。

軽いステップだ。

結城から見えるその動きは、槍の先端に羽を一つ載せたようなものだ。

しかしそれは、宗茂にとっては百倍以上の反力を持った足場となる。

そして響く一瞬の鳴音。

加速聖術の発動音が、宗茂の足下から発した。

その音が鳴っている間に、結城は思った。

……いい判断だ。

結城は思う。

このまま忠勝の背後に回るつもりだろう、と。

しかし、それと同時に忠勝は叫んだ。

蜻蛉切の伸縮機構のソケット部分をグリップし、

「そんなよくある方法が今の時代に通じるかあ――――――――!!」

忠勝はそのまま、右に振り返る身体を、力任せに下へと落とした。

同時に重心を強く落とすことで、足蹴りで牽制していた結城を横に突き飛ばす。

「――――――！」

距離を開かれた結城は、しかし視線を宗茂から放さない。

宗茂の加速聖術は、踏み込む足に対して足場が返す反力を倍加するものだ。

ならば、踏む速度より早く、足場が下に落ちたならば、足場は消える。

忠勝はその通りにした。

直後。

宗茂の足と蜻蛉切の間に空間が生まれ、

「――――――！」

宗茂の足裏に、硝子が割れた音と共に光が走って飛び散った。

加速の術式が無効化された証拠だ。

ゆえに、忠勝は叫んだ。

「結べ！　……蜻蛉切！！」

その言葉と共に、蜻蛉切の刃周辺に細長い表示枠が連続で開く。

そして生まれるのは割断の力。

狙いは宙に浮いた状態の宗茂。

行く。

しかしその決定的な瞬間を、結城は見逃さなかった。

決め手をかける忠勝に対して、結城が取った行動は、

「させるか……！！」

叫びと同時に、腰に帯びた鞘を投げ出した。

回転しながら飛ぶ鞘の行き先は、宗茂の足裏と蜻蛉切の間。

「――――――！」

斬りかかる蜻蛉切の刃を遮り、投げ出した鞘が直立の角度で宗茂の真下に飛んだ瞬間、

「踏め！　宗茂！！」

結城の叫びと同時に、金属音が響いた。

それは、旧派聖術の、加速術の音だ。

そしてその音と同時に、結城が村正を構えて突進する。

「……！？」

そして次の瞬間、宗茂の足の底から轟音が響いた。

結城の投げ出した鞘を、空中で新たな足場として支え、彼が行ったのは、

「こやつめ、空中を足場にしたのか！？」

／※／

宗茂は、宙を踏んだ。

刃を踏もうとしたのはフェイントではない。

あの段階で加速が行けるならば、行こうと思っていた。

忠勝が、そんなレベルの戦い方を赦す相手ではなかっただけだ。

故に、宗茂は視線を合わせることで結城に合図を送った。

……足場が無いなら作ってやる……

結城の神風は、何も有利な足場を見切るだけではない。

足りない足場を探すことも可能だ。

故に結城は、忠勝が槍を下げることを事前に見切り、鞘を新たな足場として提供した。

その結果、宙に浮いた宗茂は虚空を蹴ったのだ。

それは宗茂にとって、今まで思いついたこともない加速法。

宙を踏むことで、空中加速する方法だ。

やり方は簡単だ。

空中には、何も無い訳ではない。

湿度としての水分はあるし、微細な埃も存在する。

今は雨や、地脈の表出、そして先ほどの”悲嘆の怠惰”の超過駆動によって、水分や塵にはことかかない状態だ。

だが、それらだけを踏んで足場にするとなると、話は別だ。

塵を踏んで加速するなど、何千、何万回の加速を一瞬で行うことになるのか。

宗茂の加速術式は、符を使用したものだ。

一瞬で莫大な効果を得ると同時に、身体への負担も大きい。

無理をすれば、体に返る。

しかし、

……やらねば……！

幸い、結城が投げた鞘のお蔭で、空中の重みが増えた。

しかし鞘も地面についていないため、気休め程度の足場にしか出来ないが、それでもないよりましだ。

なにより、鞘の投擲によって、忠勝の攻撃が一瞬遅れたのは大きなチャンスだ。

そして宗茂は飛んだ。

その勘は、空中で必要な加速量を、こう見積もった。

「一万七千倍加速……！！」

踏んだ足一本に、一万七千歩分の負担が一瞬で掛かる。

同時に、宗茂の顔の横に、十字状のの表示枠が現れては、負荷超過の危険を知らせる。

しかしその注意表示を、宗茂は無視した。

「――――――!!」

断裂の音が、右足から聞こえる。

骨や腱が持っていかれ、筋肉が弾ける。

しかし、割断されたわけではない。

その証拠に、宗茂は空中で加速した。

「おおお……!!」

／※／

一瞬の連続の中で、結城はその隙を見た。

宗茂の行く先は斜め下前方、忠勝の背後の地面に、激突して削る勢いで行く。

着地は左足一本のみだ。

踵を地面に食い込ませ、身を仰け反るようにして忠勝に振り向く。

対して、忠勝は宗茂に半身の背を向けている。

蜻蛉切の穂先はこちらに向いているが、構わない。

刃がどちらに映ろうと、割断できるのは一人だけだ。

故に結城は行く。

村正を中段上の突きの構えで掲げ、アスファルトの地面を踏破した。

忠勝の、がら空きの胴体、鹿角に覆われていない右の脇下を狙って、結城が進む。

しかし、

「「……！？」」

両者の挟み撃ちに対して、忠勝は同時に反撃した。

宝蔵院のブランドが実戦用に開発した石突きが、速射砲の勢いで宗茂の顔面めがけて飛んで行く。

そして同時に、蜻蛉切の伸縮機構ソケットを操り、蜻蛉切の長さを全長６メートルまで一気に伸ばす。

伸びた槍の先は、勿論突撃してきた結城の顔面だ。

「っ！？　ぉおお……！！！」

相対速度で撃ちだされた穂先に対して、結城は強引に上半身を捻った。

腰を落とし、首を傾け、身体を右側に回すことで、槍の尖端をギリギリの位置で避ける。

そして同時に、村正の刀身で攻撃を受け止める。

刃と刃の激しい交差で火花が散り、結城は力任せで押し返すことで、槍全体の軌道を逸らした。

しかし完全に捌き切れてはいない。

高速の突きは結城の右肩と腕の腱を確かに削り、赤い血が空中に飛び散る。

「くっ……！！」

強引に回した姿勢で受けたダメージに、結城は背を地面に向けて滑り止まる。

そして忠勝は、宗茂に振り向いていない。

こちらの奇襲に感づいて、本命を自分に絞ったのだ。

ならば石突きによる攻撃は経験と予測によるものだ。

正確な狙いだが、結城にも出来ないわけではない、ただ長物は手に馴染まないだけだ。

しかし、

……虚空を踏破するオレはともかく、普通は空中加速など見たことがない筈だ。なのに、宗茂の着地姿勢を完全に見切った上で、オレの神風に対処しただと……!?

年季の恐ろしさに結城は実感したが、その間に状況は進んでいく。

槍の軌道を変えた結城に対し、宗茂が身を沈めて石突きをかわす。

しかし、伏せるように腰と上半身を沈めても、身体が完全に下がらない。

その原因は、

……右足！？

砕いた右足が動かない。

感覚が消え、もはや膝と爪先が地面に触れているのかどうかも解らない。

遅れた右足に押され、身体がつんのめりになる。

軌道を逸らされても、石突きの攻撃は額直撃コースだ。

だから宗茂は判断した。

「――――――更に加速する！！」

伏せる姿勢に、腰は上がっている。

曲がった左膝に対して、宗茂は左足での加速を用いた。

クラウチングスタートの姿勢で、身体を前に飛ばす。

石突きが眼前に突き込まれてくるより早く、その下を潜った。

同時に石突きが左耳上を、後頭部の方まで空気もろとも一気に抉った。

豪快な空気の摩擦音と共に、宗茂は必殺の攻撃を抜ける。

そして忠勝の半身に対し、その懐に飛び込んだ。

目の前、三メートル先には槍を捌いた結城がおり、右横には忠勝を控えている。

今がチャンスだ。

”悲嘆の怠惰”の切っ先を構え、一気に忠勝の腹を貫く。

しかし、

「結び割れ。――――――蜻蛉切」

……何!?

その声に、結城と宗茂が同時に息を飲んだ。

蜻蛉切の刃はどちらも見ていない。

では、忠勝は何を切ったのか。

その答えは、

「く……、宗茂！！　横だ！！」

結城の叫びに、宗茂が気付いた。

右横にいた筈の忠勝の姿が消えていたのだ。

どうやって、と思い、目を見開いた宗茂は、逆の方向に気配を感じた。

北側、そこからこちらに突っ込んでくるのは、左腕に自動人形を抱いて、右脇に蜻蛉切を手挟んだ忠勝だ。

いつの間に、という問いかけの答えは、

……まさか――――――。

「自分にとっての”北側”を割断したのか！？　”悲嘆の怠惰”の削ぎ落としには出来ない、蜻蛉切の上位駆動にしか出来ない技！」

結城の説明どおりだ。

蜻蛉切の有効射程は三十メートル。

忠勝にとって北の方角を断ち切れば、十五メートル分を北に移動したことになる。

「――――――事象を斬るのはかなり出力喰らうんだけどな。まあ、必要だからしょうがねえよな。……二人とも、ここで退場してもらうわ！！」

無茶苦茶だが、事実だ。

蜻蛉切の側面、刃の基部にある蜻蛉型の燃料系は殆ど空の状態だ。

通常駆動でも、あと数回が限度だろう。

しかし、やられた。

互いの武器の特性を見切った上で、蜻蛉切の上位駆動を理解して用いた技だ。

そして今、忠勝は一直線にこちらへと突っ込み、

「蜻蛉切！」

蜻蛉切の刃は、既に表示枠を纏っている。

表示された狙いは”剣士”。

この場で忠勝と相対する剣士は宗茂と結城の二人を意味する。

直接名前を指しているわけではないので、割断の威力は減衰するが、あたり所によっては二人とも致命傷になりかねない。

この状況下でのこれ以上の負傷はマズイ。

だが、こちらは二人ともスピード重視だ、片足でも、全力で踏めば蜻蛉切の割断を逃れることが出来る。

だが、

「させません！！」

聞こえたのは鹿角の声。

忠勝に抱かれることで腕をフリーにした彼女が、その右手をこちらに向けている。

力は重力制御。

作るのは、

「囲みます！」

その叫びと同時に、結城と宗茂はドーム状の壁に囲まれた。

逃げ場のない縦長の閉鎖空間。

空までも塞ぐその壁面を貫いて来るのは、

……蜻蛉切の刃！？

瞠目と共に、声がした。

それは壁の向こうから来る、忠勝の、

「結べ――――――――！！」

／※／

忠勝は、縦長のドーム状となった壁に突き立てた蜻蛉切を、

「……」

無言で、一度だけ強く押し込んだ。

刃物を物体から抜く前に必要な動作だ。

強く押し込むことで差した物体の穴を広げ、その後で抜く。

そうすることで、引き抜く際に刃が曲がったり、差した物体がついてこないようにする。

肉や骨を貫いたときは、刺した骨肉が緊張で収縮するため、特に必要な行為だ。

忠勝はしかし、蜻蛉切を引き抜く前に首を傾げた。

腕の中、鹿角がわずかに会釈し、

「申し訳御座いません。差し出がましい真似を」

「鎧の特殊機能だろ、気にすんな。向こうは完成品と妖刀を振り回してたんだしな」

「Ｊｕｄ．、――――――にしても、片方が妖刀を使っている割には、結城様は一度もその能力を使ってませんね」

「我が強いからな、どんな能力かは知らんが、使わせる隙は与えんよ」

と、忠勝がつぶやいた。

そのときだった。

二人の眼前に、光が生まれた。

「！？」

それは、蜻蛉切と相対するように壁の中から突き出されたもの。

鹿角が、眉を顰めて声を上げた。

「”悲嘆の怠惰”超過駆動の仮想砲塔!?　……蜻蛉切の割断をどうやって生き延びたと!?　やはり忠勝様がしくじりましたか!?」

「”やはり”って何だ”やはり”ってのは!!」

言葉に応じるように、壁が崩れた。

上から下に剥がれ落ち、力を失うように崩れた壁の向こう。

そこに結城と宗茂が立っていた。

だが、二人の五体はどこも割断されていない。

しかし、

「どう言うこった……」

忠勝と鹿角の視線の先。

突き出された刃の尖端は、前に立つ結城の右腹に刺さっていた。

血は零れ落ちて、結城の顔に苦悶の表情が浮かぶ。

しかし、腱を切った結城の右手は槍の柄を握っており、左手には村正を握り、その刃は下を向いたまま蜻蛉切の刃に当たっている。

そしてその背後で、宗茂が結城の肩越しに、”悲嘆の怠惰を”構えていた。

「割断は確かに発動した筈だ。――――――若、何をやった？」

能力は発動したし、刃も届かせた。

しかし二人は割断されていない。

忠勝の問いかけに、結城は血を流しながら答えた。

「村正の通常駆動さ……」

結城の言葉に、忠勝が息を飲む。

それは、

「妖刀村正は、松平家に仇名す刀だが、それに纏わる逸話の最も一般的な解釈は、妖刀という単語にある。それは、〝心の弱い者が妖刀を握ったとき、その者は妖刀の力に喰われて己を傷つける〟。そして、その特性に則った村正の通常駆動は……」

一息。

「村正と刃を交わした、相手の能力をコピーする」

「何……！？」

その言葉に、忠勝と鹿角の息が詰む。

先ほど、村正と刃を激突したのは一度きりしかない。

空中加速で着地した宗茂に石突きを叩き込んだのと同時に、蜻蛉切の伸縮機能で結城にカウンターを刺したときだ。

つまり、

「その際に拝借して貰ったよ。――――――本多・忠勝ご自慢の、蜻蛉切の割断能力をな」

「それで自分を盾にして、我の割断を正面から相殺したのか……！？」

「場所が狭くて暗いから、傷は負ってしまったが、結果は上々だ。――――――コピーした能力は一度使えば、次にはコピーし直す必要があるが、コピー対象に関係なくオリジナルと同等の性能を発揮できる。汎用性が高い分、使いどころには細心の注意を払わなければならないがな……」

「成程。通常駆動でこれか……。――――――妖刀の名に相応しい化け物だ」

そう言った忠勝の視線の先、宗茂は掲げた右手の先にある”悲嘆の怠惰”を超過駆動している。

右足を砕いた彼は、結城の肩と背を借りて立っている。
彼は、血の気の引いた顔で結城に振り向き、
「話は、終わりましたか？」
「ああ、結構だ」
結城が頷いたのと同時に、仮想砲塔の光が更に強さを増す。
「忠勝様」
鹿角の声に、ああ、と忠勝が頷いた。
そして、
「――――――”悲嘆の怠惰”は発射されました。まだ収束していないだけで」

／※／

Ｊｕｄ．、と結城が言った。

「既に狙いは定まっている、数秒後にはアンタとその後ろにいる地脈炉がぶっ飛んで、地脈の暴走が止まる。そしたら後はオレの時間だ」

「だろうな、その上こっちはもう上位駆動は撃てねえから、さっきのように方角の割断も出来ねえ」

「Ｊｕｄ．、――――――ホントに駄目な人間ですね、忠勝様」

「この期に及んで、貴方達は相変わらずですね」

四者それぞれの言葉に、誰かが笑みを浮かんだ。

そしてその中で、鹿角が忠勝を見上げてこう言った。

「ならばお急ぎ下さい、忠勝様。私の重力制御もこの状態だと完全ではなく、前回と同じ方法が使えません。よくて腕から胸に通すくらいで、方向転換は無理でしょう。だから――――――」

鹿角が、目を細めた。

「どうするかは、お解かりですね？」

言った鹿角が、忠勝の返事を待たずに目を閉じた。

口を開き、

「ん」

彼女は舌を、下歯を越えて忠勝の顔へと差し出す。

そして露にされた人工の舌房には、一つの青珠が埋め込まれていた。

忠勝はちらりと青の珠を見て、結城と宗茂に言った。

「……ったく。女房の指輪を魂にしてみたら、……まあ口の悪さがそのまんまでよ」

「でも……、悪い気はしないのだろ？」

「へっ。……若にそう言われると、そうかも知れねえな」

言って、彼は鹿角を抱き寄せた。

引き寄せた彼女と唇を重ね、彼女の下を上下の歯でしごき、引き、

「――――――」

その湿りを己の唇の裏に満たしながら、千切るように鹿角の珠を噛み取った。

「……ん」

繊維を断つような音と共に、眉を小さく動かした鹿角の顔がゆっくりと引く。

そして彼女は目を細め、視線を忠勝と合わし、

「現在、当自動人形は余力状態で節約動作しております。御用などがありましたら急ぎ御願いいたします」

「じゃ、簡単だ。――――――鹿角が残した命令通りに一丁頼むわ」

「Ｊｕｄ.」

自動人形は、首を後ろに向けた。

深手を負い、立ったまま動けない結城と宗茂がそこにいる。

しかし仮想砲塔の光は強くなり、

「……来ます！」

一度体験した自動人形が、発動の気配を読んだ。

「止めなくて良いんですか!?　結城君!!」

「どうせもう撃ってんだろ!!?　するだけ無駄だ!!それに――――」

宗茂が問う。

そして結城が叫ぶ。

直後。

自動人形が忠勝の首から腕の縛めを解いた。

同時に結城が言った。

「あの二人の忠義だ!!　最後まで見ておけ!!」

そして同じタイミングで、忠勝が動いた。

抱いていた自動人形の身を、宙に置くように投じ、

「蜻蛉切……！！」

「っ！！……いきます！！」

言葉と同時に、それが来た。

それは、全てを収束した無音だった。

あるのは、”悲嘆の怠惰”の砲口から生まれた、微かな闇。

泣き叫び、掻き毟る直前の、俯いた沈黙だ。

だが、自動人形は動いていた。

彼女は右手を仮想砲台の砲口へと掲げ、

「――――――――！！」

次の瞬間、その右手の平に穴が開いた。

自動人形が眉を顰め、身体に軋みを上げながら宙で身を捻る。

そして、

「忠勝様……！」

自動人形の呼び掛けに、忠勝が蜻蛉切を短く縮めて振り抜いた。

「――――――結べ！！」

その声に、自動人形が目を細め、小さく笑った。

そして蜻蛉切が割断する。

狙いは一つ。

「自動人形に弾体を取り込ませた上で、……その弾体を自動人形の一部として、自動人形ごと割断する！！」

直後。

割断の力が生まれ、自動人形が二つに分かれた。

そして、

「……っ！！」

”悲嘆の怠惰”の超過駆動。

掻き毟りの砲撃が、大範囲に渡って発動した。

その轟音を前に、結城は思った。

これは、あの少女の叫びであると……。

第十三話～葵三葉の渡る苦悩～

夜の下。

山の底に停泊している武蔵の上には、人の群れがあった。

巨大都市を構築する八艦の上、人々はそれぞれの艦首や、艦を結ぶ長大な太縄の上に立っている。

船にいる誰もが、南にある三河を見ていた。

そして誰もが、三河に起きた大きな変化を見ていた。

それは、

「光が……、消えた……」

ざわめきの中で告げられた言葉の通り、山の向こうで大地から空に放出されていた光が消えた。

そして同時に、遠く、天地を越えて響いていた鼓動もない。

「……どうなった？」

問いかけが次々と周りに伝播するが、答えはない。

そんなざわめきの中、正純は一人の自動人形と一緒に歩いていた。

Ｐ－０１ｓ。

その手を引く正純の背後で、Ｐ－０１ｓは頭から正純の上着を被っている。

彼女は上着の裾を背で揺らしながら、

「正純様、寒くはありませんか」

「いいから」

言いながら、正純は商店街に至る道を歩いていた。

艦首から離れるような急ぎ足で、そして思った、

……参ったな。

正純は思う。

どうしたらいいのか全く解らない、と。

今日一日で、多くのことを知った。

”後悔通り”のこと。

大罪武装のこと。

Ｐ－０１ｓの正体。

そして、

……結城が、松平家の嫡子にして、ホライゾンの兄……

色んなことが、頭の中でごっちゃになっている。

ホライゾンという、松平・元信の娘の魂を基礎とした、自動人形の身体を持つ人間。

世界中に預けられた大罪武装は、彼女の感情を利用して作られている。

そしてそんな彼女の兄が、政治的要因で浮浪し、その上、兄妹の素性を隠して、武蔵で隠遁していた。

どうしてこんなことをしたのか、こんなことになってしまったのかは解らないが、ただ解るのは、

……世界が動く。

今、沈黙した三河の当主、元信公は、先ほど通神でこう言った。

”大罪武装を手に入れれば末世を左右出来る力を得られる”、と。

だとすれば、自分が今手を引いている彼女は、世界の命運を左右する。

そして今、自分は、彼女をどうしたらいいか解らない。

元信の通神を聞いた後、反射的に彼女に上着をかぶせ、隠してここまで連れてきたはしたものの。

……ホライゾン、か。

元信公の子、そして、

……父達が言っていたな、葵が殺したんだ、って。

更に、

……結城の妹。このことを、皆は知っているのだろうか？

先ほど、放送を通して感じた結城の怒りが、今でも頭から離れない。

アレは、殺気だけで人を殺せるほどに強烈な、感情の迸りだ。

この一年の中で、正純は結城の機嫌を何度も見てきたが、本格的に起こった彼を見たことがない。

しかし、

……あのような結城は、見たくない……

なまじ普段から交流が良好であるが故に、正純は友人の知らない顔に怖気づいたのだろう。

それを誰かに相談できるわけもなく、当の結城本人は今、爆心地である三河のど真ん中だ。

生きて返ってくることを祈るしかない。

そして、

「正純様」

「え？」

呼びかけられ、正純は足を止めた。

そろそろ目的の商店街に入ろうという位置だ。

企業区画であるために人も少ない場所だ。

振り返ると、被った上着と前髪で顔を隠したＰ－０１ｓがいる。

「――――――Ｐ－０１ｓは、Ｐ－０１ｓではないのですね」

振り向いた先、彼女が、呆然とも言える無表情で、こちらをじっと見ていた。

「解りません」

それは、

「Ｐ－０１ｓは、ホライゾンだと言われました。ですが……」

言われた。

「だとしたら、ホライゾンとして、Ｐ－０１ｓはどうすべきなのでしょうか」

彼女の言葉に、正純は言葉を失った。

どう答えればいい。

きっと彼女は、これから聖連や極東によって一生を左右される。

それがどういうものになるかは解らないが、三河の嫡女と大罪武装という身柄は一生の自由を奪うのに充分な内容だ。

だが、と正純は思う。

彼女は、その未来を望んでいるのだろうか、と。

正純の知っているＰ－０１ｓは、いつもカウンターに立っているが、店の表や墓所を掃除している自動人形だ。

彼女の出自を店主達と共に探ったこともあるが、結果としてＰ－０１ｓは平和な日常を選んだし、自分達もそれを望んだ。

しかし、これから、その全ては奪われる。

「君は――――――」

心の中で、正純は何かを言おうとした。

しかし解らない。

正純の知る目の前の人物は、単なる軽食屋の自動人形だ。

何をどう言えば、彼女を正確に示すことになるのか。

或いは、

……結城、お前なら、彼女を導いてやれるのか……

その思いと共に、不意に、町の向こうからざわめきが走った。

「！？」

空に上がる声は、離れた居住区画から響いてくる。

その声に引かれるように、正純は空を見上げた。

上空、真上にさいかかる夜空に巨大な影がある。

「あれは――――――」

航空船の艦影。

三河から出た警護隊の先行艦だ。

そして、宵闇の空に浮かぶ艦影を前に、新たな音が響いてくる。

武蔵の艦外放送だ。

拡声器を通じた自動人形の声が、空に対して言葉を告げる。

『武蔵艦橋より先行警護艦へ。貴艦の航行は予定を無視した運航だと判断します。また、船舶間の上下交通は６００ヤード以上離れることが義務付けられているはずです。――――――以上』

自動人形の呼び掛けに、警護艦は接近を止めない。

代わりに、微かなノイズを含んだ声が返ってきた。

『三河発武蔵先行警護艦から武蔵へ。――――――現在、本艦は、当地聖連代表による非常特務によって航行中。意見などは当地聖連代表であるＫ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａ派遣団に御願い致します』

警護艦は、速度を下げつつ、企業区画の上空へとやってくる。

そして側部、甲板から幾つもの縄が下へと落ちてきた。

縄の上、艦の縁には人影がいる。

武装した極東の制服姿だ。

『これより本艦は、当地聖連代表の要請により、大罪武装の確保に向かいます。武蔵側の協力を要請します』

警護艦の艦外放送と共に、艦から無数の人影が舞い降りた。

「――――――――！」

来た。

降りてくる降下部隊は、揚陸船の投下を加えても百人は下らない。

そして、

『村山上に存在した、大罪武装が有する共通流体震動パターンの一致を入感！Ｋ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａ本部から得たデータと九割合致、――――――――視認出来ます！』

叫んだ声は頭上。

通りに立つ正純とＰ－０１ｓの頭上を通過しようとした揚陸船から、武装した生徒達が飛び降りてきた。

数は十六。

地面に降りた彼らは、半径十メートルの円を組んで正純とＰ－０１ｓを囲む。

それに対し、正純は、

「――――――」

息を吸い、握っている手を強く引いた。

走ろうとする。

ここから逃げようとする意味は自分でも解らない。

ただ、

……違う。

何が”違う”のかは解らない。

それが正しいのかどうかも。

だが、

「正純様」

引いた手が、動かなかった。

空から確保部隊が降りる気配の底で、上着と髪によって顔を見せない彼女が問う。

「正純様も、……私が誰なのか、どうすればいいのか、答えられませんか」

／※／

Ｐ－０１ｓ、ホライゾンは、こう思った。

……ああ。

思う。

先ほどの放送に拠れば、自分には大部分の感情が無いことになります、と。

……そして自分は今、何をどうすればいいのか解りません。

記憶もなく、知識も浅い。

……だから――――――。

出来れば、自分の正体が、理解出来るものであればよかった。

たとえば、軽食屋で働く自動人形など。

完璧ではないが、理解が出来る。

しかし、現実は違った。

三河という国の君主の娘で、大罪武装という大規模破壊武装だという。

そして、

……そんな存在は、どうすべきなのか、全く解りません。

もし彼がいたら、答えてくれるだろうか。

……結城様は、本当は私の兄だと、さっきの放送が言ってました。
――――――だとしたら、同じ三河君主の子である結城様なら、答えを出してくれるのでしょうか。

自分には記憶がない。

結城が兄だとしても、実感がない。

毎朝、店に朝食を済ませに来る黒髪の少年は、一体どんな気持ちで自分を見ていたのだろう。

彼がここにいない以上、それも望めない。

自分には感情がない。

感情があえば、拒否や肯定という反応があった気もする。

だが今は、それすらも、自分には無い。

だから彼女は思い、それを口にする。

「Ｐ－０１ｓ、ホライゾンは……」

言う。

「自分を、どうにでも出来ないのかもしれません」

／※／

告げられた言葉に、正純は何かを言おうとした。

しかし周囲、確保部隊が着地の響きを作るのと同時に、男の声が響いた。

「――――――政治家として言うならば過つな、正純」

声は正面。

通りの向こうから歩いてくる。
西洋風の長衣に身を包んだ姿は、

「――――――父上」

その間に、確保部隊が動いた。
武装の音と、堅い靴の音。
動く人影は、周囲を一瞬で警戒しながらも自分と彼女の間に割り込んでくる。
だが父は歩みを停めずに、

「正純、見事な協力だ」

彼の言葉に、こちらと彼女を隔てていた確保部隊の数名が振り返る。
ＩＺＵＭＯ製、白い鉢金型の頭部防具を目深に下げ、

「協力、有難う御座います」

言って、こちらの手に触れた。

彼女の手を掴んでいる、こちらの手指を。

離される。

「あ」

というこちらの声の先、自動人形は離された手を宙に泳がせ、しかし、

「……」

引いた。

後に残されたのは、手を差し出したままの自分だけで、

「……く」

「……お別れだな、次に会うときがあるならば、違う身分だろう。今の内に、挨拶くらいしておいたらどうだ。将来のためになるぞ」

己の手をゆっくりと引き、視線の先に棒立ちとなった自動人形がいる。

しかし正純は、自分の背後に回った父のセリフに奥歯を噛んだ。

……将来!?

自分には、襲名の未来がない。

しかし、そんな自分に対する彼女にも、未来があると言えるのか。

多くの者の心に陰を落としたその悲運を、自分は糧にすることが出来るわけが無い。

かつて彼女の死に後悔した葵と、それを知って耐えてきた結城はどうなる。

心の激情を、口に出して言い返そうとしたとき、

「つまり、――――――これが、私のあるべき姿なのですね」

振り向いた先、彼女は言葉を続けた。

「自分を解らない。正体を知ってもどうすべきか解らず、感情に任せることすら出来ない。ならば――――――私の、歴史の望むままに従い、そして間違いが無い、誰にも迷惑をかけない、最善の判断は」

一息。

「ホライゾン・アリアダストという名を受け入れ、そのあるべきに従うことが」

告げられたセリフに、自動人形が己の名を喋ったことに、その場にいる皆が視線を返した。

そして彼女は、髪の下に隠されて見えない顔で、

「誰であるのか解らないホライゾンに、どうあるべきかを与えてくれる状況があると理解出来ます。先ほど告げられた通り、ホライゾンが三河君主の娘であるならば――――――」

皆の、正純の前で、彼女が顔を上げた。

上着が肩に落ち、露になったのはいつもの顔。

感情を持たない自動人形の、無表情な顔だ。

据えたような瞳で、感情のない彼女が言う。

「知識として知っています。――――――国を治めるものは、有事の際、その命を払って責任を取り、民を生かすこともあると」

その言葉に、正純は目を見開く。

何かが間違っていると、そんなことは無いと、そう伝えようと口を開く。

しかし、

……一体、どのように、何を言えば、彼女への慰めになる？

自分には、彼女に道を指し示すほどの力は無い。

それに今は戦国の世だ。

引退や除籍というやり方も含め、責任者が”自害”をすることは稀ではない。

寧ろ腹切や介錯は極東の伝統の一つでもある。

今までも、実際に自害をする者だっている。

元信公の嫡子を襲名した信康公のように、それを強制された者もいる。

解らない。

否定しようにも、否定できない客観で政治的な自分がいる。

沈黙している間にも、確保部隊の隊員が彼女の手を取って行く。

連れて行かれる。

そのときだ。

艦尾の方、商店街の方角から、声が届いた。

「ホライゾン！！」

少年の声。

その持ち主へと、正純が振り返って叫んだ。

「葵……！？」

視線の先に、幾つもの影が駆け寄ってくる。

そんな彼らの先頭に立つのは、

「……ホライゾン！！」

転ぶように走ってくる少年、葵・トーリだ。

「待ってくれ！！」

来る。

決して速くは無い、しかし姿勢が乱れながらも、彼は必死に前に進もうとする。

そして葵の後ろ、縦町の照明に照らされて、その後を追っているのは、自分の同級生だ。

ウルキアガ、ネシンバラにノリキ。

そんな彼らを見て、正純は気付いた。

それは、

……葵、お前、気付いていたのか！？

Ｐ－０１ｓがホライゾンだという事実は、先の放送で武蔵の全員に知らされたばかりだ。

なのに、目の前の少年はどうしてその呼び名をすぐに使える。

まるで、最初から彼女がホライゾンだと知っていたような呼び方だ。

……何故？

しかし、その疑問を掻き消すように、付近にいる警護隊の隊員が慌てて葵達の前に立ちふさがった。

「待て！　近寄るな！！」

瞬間。

葵の背後にいるネシンバラが叫ぶ。

「武蔵総長、そして生徒会長が三河の眷属に挨拶に来ただけだよ！！」

その言葉に、隊員達は戸惑う。

たとえ役立たずとか無能などと言われても、葵には総長兼生徒会長

の権限がある。

制止の歩みを緩めた隊員達に対し、一歩先に出たウルキアガとノリキが割って入る。

二人は、左右にいる警備を押しのけ、道を作る。

葵がこちらとの距離を十メートル切った。

前のめりになりながらも、こちらに手を伸ばしたとき。

「――――――!!」

葵達四人が、空から降ってきた影に一斉に叩き潰された。

／※／

それは、Ｋ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａの隊員達だった。

身に付ける装備も、防具の奥から覗き込める顔も、誰も彼も二十代から三十代はある。

体格も身のこなしも、自分達とは格が違う。

屈強な体格と筋力を持つウルキアガですら、四人がかりで押さえ込まれては身動きが取れない。

その中で唯一動けたノリキは、即座に縛めを外し、

「っ――――――――!!」

左右の腕に鳥居型の紋章を表示し、Ｋ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａの隊長格に打撃を叩き込んだ。

快音を二度鳴らしたジャブとストレートのコンボだ。

しかし、

「……軽い打撃だな！」

相手は動じない。

ややあってから首を傾げた相手は、即座に反撃をノリキに返す。

腹を正面から突き上げるボディブローだ。

強い衝撃に、ノリキの体がくの字に折れる。

ふ、という息を漏らしたのと同時に、その頭を上から殴られ、その細いからだが地面に叩き伏せられる。

そして隊長格は、近くの隊員に指示を出し、

「来て良かった。――――――聖連の指示により、場の権限を移譲して貰いたい。そして――――――」

「ホライゾンを連れて行こうってのかよ!!?」

トーリの叫びに、彼を押さえていた隊員が動いた。

彼はトーリの腕を背の側に曲げ、軋ませ、押して行く。

動きに躊躇いが無い。

肩をそのまま抜く気だ。

脱臼による痛みは、即座にトーリの口を黙らせることが可能だろう。

治療が比較的簡単な分、効率的だが性質が悪い口止めだ。

そして、腕を外されそうになったその直後。

「無意味なことだと判断できます」

ホライゾンの声に、全ての動きが止まった。

その先に、正純は彼女を見た。

しかし彼女は、いつも通りの無表情で、抱えていた本をこちらへと差し出す。

それは最近貸した、指導者や政治家に関する本だ。

正純がそれを受け取ると、ホライゾンはこう言った。

「つまり、そこに書いてあるようにすれば、宜しいのですね。過去のパターンに学んで」

「――――――」

「率直に申しまして、指導者として、ホライゾンが急ぎ確保されれ

ばこの騒動は生じなかったと推測出来ます。そのような騒動で、ことを長引かせるのが得策とは思えませんが？」

「では、この騒動は何故起きたと？　この男と知り合いではないのか？」

隊長の問いに、ホライゾンは真っ直ぐ見据え返し、

「ホライゾンが確保されれば、無関係となります。――――――それ以外に何かありますか。

それとも、――――――ホライゾンの確保を遅らせて武蔵の乗員を傷つけるのが貴方達の希望とするものでしょうか。それは最善の判断ではないと、正直に申し上げます」

正純は知っている。

今彼女は、”本に書いてある最善の判断”を、君主としてどうあるべきかを、過去から得た知識を、必死に用いている。

そんな彼女の言葉に、隊長格はややあってから、

「――――――Ｔｅｓ．」

応じた。

そのときだった。

「ホライゾン……！！」

震えるような、低い唸りのような葵の声が響く。

抵抗して上げられていく頭を、隊員達が直ぐに抑え直すが、

「聞けよホライゾン、俺は――――――」

と、その時。

正純の視界の隅。

Ｋ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａの隊長が、舌打ちと共に右手を掲げた。

その動きに正純は、

……まずい！

そう思った。

今の状況は、過去のケースとは意味が違いすぎる。

もし葵が言葉を続けて肩を抜かれれば、彼の負傷と同時に、聖連の決定に対して、極東側が逆らった証拠が傷として残されてしまうことになる。

葵は過去にホライゾンを失った。

そして十年、今再び彼女の前に来て、しかし、また届かない。

誰かを救おうとして、しかしそれがまた後悔になるかもしれない。

だが、例えそれでも、長（おさ）の軽挙一つで、国を脅かすことは赦されない。

そして今も、

「俺はオマエに……！」

彼の言葉が生まれたのと同時に、正純は飛び出した。
その判断は迅速なもので、警備の間に開いたスペースに身を走らせ、

「黙ってろ馬鹿！」

言葉を作ろうとした葵の頭部を、正純は蹴りを入れてヒットした。
その動きに、Ｋ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａの隊長が指示を停めた。
この判断があっているかどうかは解らないが、

……お前のやり方では、今は誰も救えない！

自分の方法が最善だとは思わないが、少なくとも、葵と極東は救える。
だから蹴り抜き、

「！」

当たった。

直後。

葵の首が揺れ、ややあってから、

「――――――」

がくりと、その身体から力が抜けた。

気を失い、何の反応も示さない彼に、押さえていた機動殻の隊員が全身から力を抜く。

そして訪れる沈黙。

しかし、

「おい」

艦首側から発せられたざわめきが、再び静寂を突き破る。

そして続くのは、光と揺れ、大気の動き。

そしてその中で、誰かが言う。

息を吸うような声で、

「三河が――――――」

／※／

「動きを止めましたね」

という少女の声が、割れた町の中から響いた。

破壊の噴流に蹂躙された市街は、暗闇と静けさだけを生み。

薄い霧に包まれた大地を、天に浮かぶ二つの月が照らす。

そして町中、月光を反射するものがあった。

立ったまま不動となった若者二人、その内一人を支える少女の義腕と、その三人に向き合う形で立つ男の構えた槍だ。

少女が、砲撃の反動で気を失った金髪の若者の背を支え直しながら、目の前の男二人に問うた。

「どちらが勝利を？　結城様、忠勝様」

「我の勝ちに決まってんじゃねえか、立花・？」

と、ややかすれた声で忠勝が言う。

その前では、腹に傷を負い、血を流した結城が、村正を地面に支えて跪いている。

息を切らした彼は、苦悶の表情で忠勝の背後にある地脈炉を見据え、

「自動人形に掻き雀りを飲ませて、それを割ったのか。……砲撃を消すことが出来なくとも、威力と軌道を削ることは出来る。――――ちっ、５０％の出力が命運を決したか」

結城の言葉に、忠勝が小さく頷く。
彼は槍を肩に担ぎ、月の光に照らされながら言う。

「まあ、気の毒だが、そう言う事だ。――――――今は崩壊の直前のわずかな静けさってヤツだが、すぐにここは消える。お前さん達は、早くここから脱出しな。全速力ならギリギリ間に合うぞ」

「では忠勝様も避難を……」

「止めとけ、今の我は、これで精一杯じゃ……」

その言葉に、結城は彼は足下を見た。
そこに、赤黒い溜まりが出来ている。
その先、忠勝の足が大きく抉られていたのが見えた。
”悲嘆の怠惰”の掻き毟りを上下に割断した際、脚部を一気に持っていかれたのだ。

「忠勝。お前……」

「抉られた分は、若と立花の勝ちにしてやるよ。――――――ま、これも仕事の範疇だ。結果的に我がよくやったから、三河はもうじき消える。それだけのことだ」

「……何故、地脈暴走による三河消失にそこまでこだわるのですか？　元信公は」

「さっき殿が言ったろ？　”創世計画”ってやつだ。大罪武装を始めとする幾つもの教材にって解かれる”創世の試験問題”。もしそれをズルして人より有利に行こうってんなら――――――」

一息。

「――――――何なら、若も含めて、今度はお嬢ちゃんと一戦やったっていいぜ」

「御冗談を。私は――――――」

「立花・？。……立花・宗茂の師匠である立花・道雪の嫡女。戦闘能力に優れるがゆえに道雪が跡取りにせざるを得なかったってのは

聖譜記述にもある」

忠勝の台詞に、？が目を半ば伏せた。

それに対して、結城が言う。

「おい、いい年こいて若い娘を困らせるのは止めろ。みっともない」

「ぬはっ。ここに来て若に説教されるとは。――――――にしても若、案外デリカシーなんだな」

「こんにゃろう……」

ゆっくりと身を起こして立つ結城が、立花夫妻を背に隠す。

彼は地面に落ちた鞘を拾い上げ、村正の刀身を納めた。

その後ろ姿に、？はややあってから、

「残念ですが、上のほうから、交戦を禁じられています」

そう告げた。

そして、

「戦闘は、宗茂様と結城様の分で充分でしょう。――――――戦うのが好きな子供ですから」

「いや、オレは違うぞ。単にムカついただけだから」

「Ｔｅｓ．、ムカついて戦うことが好きな御方なんですね」

「おい、何だこのどっかの毒舌自動人形と話しているかのようなデジャヴは」

結城の言葉に、？は首を傾げながら、制服の脇腹にある操作器の紋章を義腕で操作する。

軽い空気の音と共に、制服の各部を感圧硬化式に変更し、

「――――――――！」

両の義腕で、？は宗茂と結城を肩に担いだ。

「――――――――っ。おい、何の真似だ？」

「？　もうじき三河は消滅します、早くここから避難しませんと」

「つーか、何でオレまで抱えんの？」

「宗茂様に御協力して頂いた礼として、結城様の安全を最後まで保障することは正しい判断だよ思います。つまり仁義というものです。――――――――それに、結城様は出血多量で立っているのが限界だと思います。どうですか？」

「ちっ……」

？の言葉に、結城は舌打ちを返す。

確かに、今の自分は色々と限界だ。

村正の副次効果のせいで、これ以上の無茶は命に関る。

元信の件があるが、ここで意地を張ったら、間違いなく地脈炉暴走に巻き込まれて死ぬだろう。

……納得は出来ないが。

悔しさはある。

怒りも完全に消えたわけではない。

しかし自分が本多・忠勝に届かず、その先にいる元信にも届かなかったのは事実だ。

燻る憎悪を腹の底に落とし、これが自分と奴との距離だと納得するしかない。

それに、

……ホライゾンのこともある……

元信の放送で、聖連は動き出しているだろう。

今頃、武蔵では騒ぎになっているはずだ。

簡単に想像出来てしまう最悪の状況に、結城は奥歯を噛み、

「にしても、結城様って意外と軽いですね。――――――日頃ちゃんと御飯を食べています？」

「やかましいわ！！　……っ！？」

「大声を出さないで下さい。傷に響きますよ？」

もう響いてるが、その先を結城は言わない。

血の気が引いて、意識が朦朧になって行くのが解る。

暫くは、まともに身体を動かせないだろう。

そして肩に少年二名を担ぎ、？は制服の感圧硬化機能で身体を支える。

しかし、ゆっくりと半身を振り向いたその直後。

いきなり忠勝が動いた。

蜻蛉切は構えたまま不動だ。

が、彼は確かに視線を動かし、三人の若者を捉え、

「――――――」

しかし忠勝の動きは、そこで止まった。

両の肩に宗茂と結城を担いだ？と忠勝の間に、一つの砲が現れていたからだ。

十字架を模った二メートルほどの大砲は、宙に浮いており、

「私の義腕が有する二奏空間。そこから取り出す”十字砲火（アルカプス・クルス）”ですけど……」

一息。

「上は交戦を認めておりません。もし忠勝様がそれを求めるならば、私はこれを盾として撤退致します」

「Ｊｕｄ．」

と、忠勝は身を引いた。

その動き合わせて、？が言う。

「ここで、――――――忠勝様は中退ですね」

「勝ち逃げって言わねえ？」

「忠勝様がここで中退されても、世襲のルールがありますからね。宗茂様と、二代目の忠勝様が戦われる機会はあるかと思います」

「……随分と負けず嫌いだな」

「鏡見ますか？　私の手鏡になりますが」

言って、？が一歩を下がった。

それに対して、忠勝が小さく笑った。

「あばよ、勝負は次に預けておいてやる。――――――それと、若をよろしく頼むわ」

「治療したらそのまま武蔵に送り返しますけど、いいですね？」

「それで十分だ。あとは、若がどうにかするだろう……、それと――――――」

言って、忠勝が、手にした蜻蛉切を？の目の前の地面に放り投げた。

その行動に、？は眉を歪め、

「これは――――――」

「再戦したいなら、三河消失で吹っ飛ばしたら駄目だろうが。――――大罪武装とまでいかずとも、神格武装だ。このくらい無くちゃあ、そっちのボウズと対等の勝負になるめえよ」

Ｔｅｓ．と言って。

？が蜻蛉切を見据える。

そして彼女は二奏空間を展開し、その中に蜻蛉切を納める。

「――――――――よい再戦を」

言葉を最後に、？の姿が消えた。

加速して、一気に距離を空ける。

やがて残されたのは、

「さて」

忠勝は、背後に振り向いた。

新名古屋城の西側正門前。

そこに、座を囲んで座っている群衆がいた。

松平・元信と、自動人形達だ。

／※／

「おうい、先生よ」

本多・忠勝は、全身から血をこぼしながら、新名古屋城へと歩き出した。

歩くたびに、地面に赤黒い湿った点を落とし、しかしその歩みは止まらない。

そして、無手となった両腕のうち、左手を口に寄せた。

「我と、こいつも中に入れてくっか？」

「未成年は飲酒禁止だぞー」

元信の返事と、自動人形の笑みに、忠勝は肩の力を抜いた。

静かな、無人の闇の町を歩き、

「なあ先生よ、我、中退だってよ」

「安心しなさい。井伊と榊原もそんな感じだから」

「じゃあ、残ったのは酒井の馬鹿だけかよ。――――――馬鹿のくせにいつも上手いことやりやがる」

だよなあ、と元信が天上の月を仰いだ。

空にある二つの月に、忠勝も釣られて見上げる。

「月見酒にはいい夜か」

「国語の授業なら一句詠ませるところだな。見ろ、猪口の中に月が浮いている。まるで、月の水面だな。――――――っと先生格好いいこと言ったなあ、おい」

だがまあ、と元信が言葉を作った。

こちらを見て、

「創世を叶えるのは、誰だと思う？」

「知るかよ。我ぁ頭悪いんだからよ。大体、教材配った先生が解ってんじゃねえのかよ」

「それはまた心外だな。先生は教材を用意したけど、しかしその教材だけで大丈夫かどうかは解らないし、別に、創世を叶える道を造ったわけでもない。――――――用意したのは、先生なりの教材だ。後はそれを使うか、使わないかも含めて、皆が好きにやればいい。大事なのは、誰もが末世に対して何かを考えることで、先生はそのヒントを出したに過ぎない」

「おいおい三河が消えるってのに説教タイムかよ。我、一人残り損じゃね？」

「先生の有り難い話を一人で聞いてるんだから、他の皆は超嫉妬するぞ絶対に」

「じゃあ、有り難い話のついでに聞いてみたいことがあるんじゃが……」

「言ってみなさい」

元信の返事に、忠勝が月を見上げながら言った。

「若は、あのままでいいのかね？」

その問いかけに、元信は目を軽く伏せた。

そして、ややあってから、

「三河が消えるこの先の極東に、私達は不要だ。――――――これからは、彼らの、生き残った皆の時代になる」

そして、

「彼が松平・秀康か、それとも結城・秀朝として生きるかは彼が選ぶことだ。その先の選択肢に、松平・元信は必要ないのだよ。――――だからあの時捨ててきた。彼が、何時か私を含めた松平を不要とするためにね」

「……やっぱりわかんねえな。先生の言葉は難しくてちんぷんかんぷんだ。――――――でもよお、一つだけ解ったことがあるわ」

「ほう、それはなんだね？」

忠勝が、笑みを浮かべた。

小さく息を吸って、そして答える。

「先生の愛情表現って、根本から腐ってるね」

笑うような言葉に、元信が忠勝を見た。

彼に釣られて、笑みの歯を見せ、

「――――――構わないよ。始の一歩は先生とお前らで十分だ。傍観より参加、観察より実験、見学より実戦、それだったら一番乗りは外せない。これからの世界で、まだまだ色んなことを見てみたい。そしていいかあ――――――」

元信は、マイクを構えて言った。

『――――――これより、授業を始めます！』

次の瞬間。

新名古屋城が爆発した。

／※／

広がる消滅の光を前に捉えて、忠勝は笑った。

……全く。

視線の先で、流体光の圧力と光の壁が、元信を先に喰った。

その瞬間、彼がこちらに手を軽く振るのを忠勝は見た。

ゆえに、

「おい」

自分にも聞こえない声を放ち、

「酒、貰ってねえぞ」

言ったときだった。

ふと、忠勝は左手の方に気配を感じた。

ゆっくりと視線をそこに向けると、一人の女性がいた。

知っている女性。

口が悪く、何時も口論に似た遣り取りを楽しんでいた仲だ。

酒の入った猪口をこちらに差し出す彼女の笑みに、忠勝は苦笑し、

「まだ出るの早いだろ、お前」

と、軽く猪口を受け取った。

見れば、猪口の中に月が映っている。

先ほど元信が言っていたことに、忠勝は自然と笑みを浮かべる。

月見酒。

昔は多くの友人達と酌み交わしていたものだ。

しかし今は、忠勝は、水面に浮いた月に、左手に持っていた珠を入れた。

これが今の自分に出来る、

「最大限の風流……、ってほど、雅を理解しているわけじゃねえけどな」

言って、猪口に口をつけた。

すると、血の味がした。

その感触に、忠勝は意識を醒ます。

その先、自分は今、無人の町中におり、眼前に光の圧壁が迫っている。

そして、猪口を掲げるように構えた左手の指先に、血のついた青い珠がある。

忠勝はそれに気付くと、笑みを口に作り、空の月に掲げた。

「昔、こう言ったら笑ったよなあ。――――――見ろよ、月は既に二つに割断されてんだぜ、って」

そして、

「そしたら答えたよな。――――――一緒になりたいというプロポーズですか、って」

忠勝は笑った。

大きく笑って、そして、月に掲げた珠を見て、彼女の名を大きく叫び、

「もう、分かれるこたあねえよ」

次の瞬間。

その全てが光に飲み込まれた。

／※／

そして三河は、新名古屋城を中心として消滅した。

消滅には、光と闇、莫大の大気の消滅運動が付随した。

その大きさは直系約十数キロに及ぶもので、爆発の光は奥州、九州からも確認された。

地殻を抉り、大気が雪崩れてぶつかり合い、圧縮された地殻と残骸と町並みは、吸い上げられるように空へと破裂した。

爆発の粉塵は大気運動によって生じた局地的な雨と雲によって押しとどめられたが、代わりに狭い範囲へ汚れを含んだ大雨が降ることとなった。

郊外の町や、陸港はそこまで届く小型落下物の防御や粉塵を含んだ重い雨の対処に手間取ったが、夜明け前には幾つかの被害を残しつつ、回復の方向性を確かにしていた。

そして翌朝。

各国が動き出し、武蔵が緊張に包まれる中、三河に来訪していた教皇総長インノケンティウスが、聖連の臨時代表として一つの判断を行った。

それは、今回の事件によって中東向けの貿易港である三河を失わせた松平家に対し、責任を追及するというものであった。

内容としては、松平家の取り潰しと、傍家の代理襲名の決定と、三河が隠し持っていた大罪武装を聖連に奉還するというものであった。

三河君主の子である自動人形の魂と同化した、九つ目の大罪武装の奉還。

方法は、彼女の魂を三征西班牙の審問艦に分解し、大罪武装を取り出すことだが、しかし自動人形は魂を壊されれば死ぬため、これは彼女の自害を意味した。

そして午前六時。

略式相続確認を行って三河嫡女と認知された自動人形が、指導者である己の役目として引責自害を了承。

”自害”は、諸処の妨害を避けるため、三河当地において、即日行われる判断が下された。

予定時刻は本日午後六時。

それが、自動人形となったホライゾン・アリアダストの”自害”の時間だった。

第十三話～葵三葉の渡る苦悩～（後書き）

どうも皆さん。クロです。

週末を迎えた連続更新で、少々バテ気味です。そのせいで後書きやコメント返信に気が回らなくて、ここで一言残したいと思います。

先ずはこの一週間、本作を応援していただいた皆さんに感謝です。

自分の周りは現実主義な人が多いせいで、なかなか二次創作の趣味を解ってくれる人がいません。

ゆえに皆さんの応援が、自分の作品における全てです。

今まで言ってたように、本作は原作見てない人に、もっと境ホラの奥深いところを知って欲しい、楽しんで欲しいと言う思いで書いています。

ゆえにオリジナル要素を挟んでも、やはり原作と同一になるのは、作者である自分の不手際です。

気を悪くしたらすみません。

しかし此処まで来て中途半端に終わらせる気も無いので、これからは自分なりに精進して行きたいと思います。

二次創作は自由に書けることが醍醐味。

例え駄文でも、書き出したいのは、原作に対する愛情表現の一つだ

と、そう思っています。

第十四話～目覚めの結城～

白い寝室がある。

聖術照明の白い光の下、結城は白いカーテンに囲まれた薄いベッドの上で横になっていた。

場所は三征西班牙の艦内治療室。

三河消滅の後、結城は結局、宗茂と共に立花・?に抱えられて、聖連へと渡った。

宗茂の治療を優先させたいという?の独断によって、一緒に連れて来られたが、

……オレ、明らかについでだよな……

付属品扱いされたことに不満を感じつつも、他国の船内にいることから安静にしていた。

戦闘で傷んでしまった制服は処分されてしまい、今は患者用の白い服を着せられている。

唯一の持ち物である村正も回収された。

他国の人間が艦内に武器を持ち込むのは禁止されていると言って、武蔵に帰る際には返してくれるといっていたが、研究用に持ってい

かれたのは明白だろう。

……今頃、武蔵は大変なことになっているだろうな……

とその時だった。

カーテンの外、隣りのベッドの方から大きな声が聞こえた。

「御免なさい!!　済みません!!　し、心配掛けてすいませんでしたっ!!　だからこれ以上義腕で足を絞らないで下さいっ、?さん!!」

「だったら、他にも何か言うことがおありですよね?」

視界の横、カーテンの隙間から見える隣りのベッドには、立花夫妻がいた。

何かと色々とイチャイチャ（?）している二人に、結城は溜息を小さく吐きながら、身体を反対側に向く。

しかし、

「副団長！　起きられたでありますか！？」

治療室の扉が、複数の声と騒ぎと共にいきなり開かれた。

入ってきたのは、アルカラ・デ・エナレスの制服を着た生徒達で、、

「あ――――――！　いっ、くああ、だ、駄目です？さん、が、我慢、我慢の限界があ――――――――！！？」

彼らは宗茂の叫びと共に、光速でドアを閉めた。

そして直後、廊下を遠ざかる足音の群れと共に、結城は男女のぶつぶつとした会話が聞こえた。

「何だよ何だよ、副団長、俺達心配してたのに、また激しくお楽しみかよ」

「副団長ったら、いつも？さんにあんなことさせて……、宗茂ウケなんて不潔よね……」

「まあ、人間、誰しも一つは欠点があるって言うしな……」

生徒達の物言いに、結城は半目にした視線で横のベッドを見る。

身体は背を隣りのベッドに向いたままだが、宗茂の正気度と命の安全が既にマリアナ海溝の八割近くに潜った事は見る間でもない。

しかし、

……コイツらの会話ってなんか、そこら中にあるもんだよな……

アリアダスト教導院の面々が外道過ぎることにワザと意識せず、結城は視線を前に戻す。

しかし、先ほどの生徒達の会話を続けるように、隣りの？が両腕で足を折り曲げる角度を変えながら、二度三度と頷き、

「つまり、こういうのが世間一般で言うお楽しみなわけですね」

「ちげえよ！！　そっち方面で楽しむならせめてマシな道具揃えろ！！　義腕で捻ってもいてえだけだ！！　つか騒がしいわ！！」

?の言葉に、結城が勢いよくカーテンを開いて叫ぶ。
その姿に?は首だけ振り向き、

「おや?　結城様、起きられておられましたか」

「おや?　じゃねえよ!　最初から起きてたわい!　立花・?。お前ワザとだろ?　昨夜治療するとか言ってたら包帯でミーラ巻きした後一晩放置して、しかし夫とは今朝からイチャラブのＳＭプレイ!?　どんなギャップの差だ!!?」

「結城様には昨夜の三河の協働で感謝していますけど、それとこれとは話は別で」

「本当に別だよ!」

青筋立てている結城に対し、?は自分のペースを乱さずに対処する。
そして其処に横でもがいている宗茂が加わった。

「あの、結城君。出来れば助けて貰えると嬉しいんだけ……あひっ！　ちょっ！　？さん！？　そこだめ、曲がらない、そこ曲がらない！！」

「騒がしいですね、宗茂様、カルシュウム足りませんか？」

「やめとけ、立花妻。拷問するにしても、これでは後で変な性癖に目覚めかねない。どうせなら足ではなく其処の注射器使え、デカイ奴で……」

「ふむ、なるほど」

「ちょっと！？　二人とも！！？」

結局、結城も加わって、ギャアギャア騒いでいる三人を、後で治療室に入ってきた看護長が制裁して止めた。

そして静かになった病室の中で、虫の息となった宗茂は身体を起こし、座っている？に向き直って、こう言った。

「あ、あのっ、言い忘れていたことが」

「Ｔｅｓ．、なんでしょう？」

問われ、宗茂が答えた。

「――――――ただいま。……って、御免、言い忘れました」

「Ｔｅｓ．、――――――お帰りなさいませ。いつ言うかと待っておりました」

？は笑みを浮かべると、宗茂の身体を右腕で包むように抱いた。

「死地に赴くのは結構ですが、戻ってこられないのでは私が困ります。他人にとって宗茂様の代わりを見つけるのは超簡単なことですが、私はそうも行きませんので」

と、？は安堵の息とともに宗茂を改めて抱いた。

暫くそうしている二人に対し、結城はややあってから、

「おい、目障りなハートマーク垂れ流しているところ済まないのだが、少し真面目な話をしないか？」

「何です？　さっきから御邪魔虫な結城様。い・ち・お・う・賓客扱いされている身であっても、私と宗茂様との間の空気を乱すことは感心なりませんね」

「何勝手に良い空気吸ってんの？　この女。感謝の気持ち以前に本当はオレのこと嫌いなんじゃねえの？」

再び青筋を立て、青い瞳を真紅色にギラつかせる結城を、宗茂が慌てて宥める。

「まあまあ、結城君。そう怒らずに……、？さんもどうしたんです？　普段の貴方らしくないようなことして」

「いえ……」

ややそっぽを向く？に、宗茂は苦笑しながら結城に振り返る。
そして、

「では改まって、真面目な話とは何です？」

「決まっているだろう……」

一息。

「外の状況についてだ」

／※／

「そうですね、私も目が覚めたばかりですし、……？さん、御願いできますか？」

Ｔｅｓ．と、？が頷く。

彼女は姿勢を正し、結城と宗茂を見てから、口を開いた。

「昨夜の新名古屋城の爆発で三河は消滅。三征西班牙三河派遣団はＫ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａ三河派遣団と協働し、聖連代表として当地での実働をとることが決まりました。武蔵側は反乱を考慮した武蔵王によって生徒会と総長連合の大半の権限が王の預かりとなり、聖連寄りの暫定議会は消失した三河の町の代わりに武蔵を聖連に移譲するつもりです」

「やるな麻呂。個人的には癪だが、臨時相談役としては的確な判断だ。色々と厄介なこの次期に、あのクラスの連中が黙っていられる訳がない。権限の預かりで、少しはトーリ達も頭を冷やせるだろう」

「待ってください」

二人の言葉に、宗茂が顔を上げた。

彼は、あのさ、と前置きし、

「今、三河の代わり、って言ったよね？　武蔵の移譲を」

じゃあ、と宗茂が続けた。

「……Ｐ．Ａ．ＯＤＡの情報を得たり、更には新名古屋城による武装開発などを行っていた中立国としての三河を消滅させた行為責任の所在はどこへ？」

「それは……」

宗茂の問い掛けに、？が口篭る。

彼女は、横にいる結城に視線を小さく向ける。

その窺うような行動に、結城は何があったのかを瞬時に悟った。

彼は苦虫を噛み締めたような表情で言う。

「ホライゾンだな？」

「……Ｔｅｓ．」

？の返事に、宗茂も状況を理解した。

その上で、？は言葉を続き、

「今日の午後六時に、アリアダストの姫ホライゾンが、この艦の”刑場”にて分解されます。――――――先ほど略式相続確認をK・P・A・Ｉｔａｌｉａの連れている神道宮司が行い、嫡子として宣言した上で、本人の許可が出ました」

一息。

？の説明を、結城は静かに聞く。

度々、？がこちらの表情を読もうとするが、あえて無視する。

今は、武蔵の臨時相談役として、色んな情報が欲しい。

「姫ホライゾンは自動人形ですが、魂の部分に大罪武装を同化させています。大罪武装は大量破壊武装であり、武装解除した極東が所有することは違法。ゆえに、――――――三河消失の責任と大罪武装の聖連への譲渡のために姫ホライゾンは自害するのです」

／※／

告げられた言葉に、結城は目を半ばに伏せる。

思うところはたくさんあるが、その中で解ったこともある。

……自動人形になっても、相変わらずマイペースな奴だ。

この船の何処かにいる、姿形の変わった妹に苦笑し、結城は微かに笑った。

その微笑に、宗茂と?が目を見開いた。

そしてややあって、

「どうして笑えるんですか？　私がこんな事を言うのは不謹慎ですけど、妹が死のうとしているんですよ?」

「ん?　ああ、そうじゃねえよ」

?の疑問に、結城は手を横に振った。

そして、

「例え記憶と感情を失くしても、ホライゾンはやっぱり、ホライゾンだなあ、と思って……」

「あ……」

結城の浮かべた表情に、?は言葉を失った。

困った妹を持ったことだ、とそんな感じをした結城の目は、まだ何も諦めていなかった。

小さな微笑を持ったその顔は、何時も無茶をしている宗茂を見守る時の自分に似ている。

……私と、同じなんですね……

心から愛した、大切にしたい誰かのために、全てを懸ける事の出来る者。

そんな結城に、？は改めて思った。

……貴方が今のところ、宗茂様の敵になっていないことに感謝します……

そんな考えの中、ベッドに座っていた宗茂が言った。

「しかし、この状況下ではどうなるんでしょうね？　姫ホライゾンのことはともかく、……結城君、貴方も三河君主の子であることも、世界中に知られたのでしょう。責任問題だけを言うのであれば、貴方にもある筈です」

宗茂の疑問に、結城が少し考えてから答えた。

それは、

「それは……ないね」

「どうしてです？　結城君が松平・元信の嫡子であることは、昨日の元信公の放送でも証明されたのでは？」

「宗茂、もう答えを言ってるぞ、お前」

「え？」

結城の言葉に、宗茂はまた疑問を上げた。

眉を小さく寄せた彼に対して、？が右の義腕を拳にして、左の義腕の手の平にポンっ、と叩いた。

そして、

「解りました。答えはズバリ、養子ですね」

「正解だ」

その声に、宗茂がはっ、と気付く。

そしてその上で、結城が説明をした。

「オレの本名は松平・秀康で、血統上は確かに元三河君主である松平・元信の嫡子だが、相続確認もせず、家譜に名前が乗っていないオレは、正式な松平家の人間として認められてはいない」

「その上、結城様の最後の身分は常陸結城家の当主である結城・晴朝様の養子であり、必然的にも、今の結城様の身分もそこに準じます」

？の補足に結城は頷き、

「つまり、例えオレが松平の嫡子だと証明できても、既に結城家の養子であるオレを、聖連は認めないだろう。良くて名は認めても、権限はないということだ。――――――比べてホライゾンは略式だが、既に相続確認を出来ている。身分の改変も無いし、身体は自動人形にされたが、まあ聖連が今更気にすることはないだろう。自動人形だって襲名は出来るし、なにより大罪武装という最大の要素が、聖連にとっては喉から手が出るほど欲しいからな」

言葉の内容に、宗茂はやや俯いた。

彼は少し考えた後で、顔を上げて言う。

「K．P．A．Ｉｔａｌｉａの教皇総長はノリノリでしょうね。来てみたら、何もせずにに大罪武装が見つかり、その持ち主が引責自害するに相応しい状況が生まれてしまったんですから。……更には三河の町の代わりとして、武蔵を移譲させることも出来るわけです」

「武蔵住人は、江戸の松平別領となっている清内極東居留地に移送されるそうです。水戸の松平家を本家にし、聖譜記述の再現を保つのだとか」

？の説明に、成程なあ、と結城と宗茂が溜息をついた。

そして結城は、右手で己の黒い髪を掻きながら、

「水戸の松平って、ネイトんとこが預かっているとこかあ。あの狼の下についたら、毎日肉食わせろって食料部にパシリさせられるかも知んねえ。アレは流石にヤダね、うん」

「結城様。手櫛はお止め下さい、折角綺麗な髪が傷んでしまいます。――――――するのなら私にお任せを」

「へ？　いや……」

「さあ、こちらにお座りを。宗茂様は髪が短くてパーマですので、余り整理する必要はありませんが、折角結城様が黒髪セミロングという良い機会なので、是非梳かせて下さい」

「結局お前が梳きたいだけじゃないか！？」

Ｔｅｓ．、と言う返事と共に、？は何時の間にか髪櫛を取り出している。

そして強引に結城を自分の席を座らせ、？はその後ろに回って彼の髪を梳いていく。

そして何度か髪を梳いていくうちに、三人はまた話を続けた。

先ずは宗茂が、

「まあ、今の状況は武蔵が全面的に不利ですね。極東が聖連に認められた唯一の土地である武蔵が移譲されるとなると、極東は各国の居留地だけとなり、……実質の領土を失いますね。Ｋ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａもかつての雪辱を果たせるわけです」

「酒井学長が現役だった頃のことか。旧派進出を目論んだ今の教皇

総長をコケにしたって話は聞いてたけど、あの白服親父、今でも根に持ってんのか」

「Ｔｅｓ．、丁度私達が生まれるちょっと前の話ですね。まあ、その事によって、今のＫ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａの間接的な衰退が招かれたんですし、教皇総長は是非とも今回の事件を利用して武蔵を落としたいんでしょう」

二人の会話に、？が結城の髪を梳きながら頷く。

義腕の腕を巧みに操り、ゆったりとした動きで彼女が言った。

「対し、私達三征西班牙の主力部隊は疲弊していますから、無事な宗茂様をＫ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａに見せ付ける必要があります。大罪武装の使用者が三征西班牙にいるならば、Ｋ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａも力任せた動きはとれませんから」

「そう言えばアンタら、本国の方はアルマダ海戦に備えて無敵艦隊である”超祝福艦隊（グランデ・フェリシズマ・アルマダ）”の建造で手一杯なんだよな？」

「Ｔｅｓ．、ゆえに今回の三河行きに宗茂が派遣なされたのです。私はその御供で」

「戦うことしか出来ないのになあ、私は」

一連の出来事に、三人はほんわりとした雰囲気で会話を続けている。

そして、ふと結城がこう尋ねた。

「そう言えば、武蔵は今どうなってんの？」

その問いに、？が反対側の髪を梳きながら答えた。

彼女は何時の間にか藍染のリボンを取り出し、

「Ｔｅｓ．、Ｋ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａの指揮下に入った武蔵先行艦の警護隊約三百名、本多・忠勝様の御息女である本多・二代様の部隊が、武蔵の各所を警備しており、状況は比較的緩やかなようです。地脈の二次崩壊も無いと判断されたため、先ほど、武蔵内における非常事態の解除が為されました」

「二代……、あのポニーテールのことか。実戦経験があり、尚且つ極東側である三河警備隊となると、武蔵の乗員も納得せざるおえな

いだろう。聖連の部隊と違って、三河警備隊は身内に近いからなあ。……だったら、うちの馬鹿総長は今頃どんな感じ？」

結城の更なる問い掛けに、？は彼の後ろ髪を両の義腕で弄りながら、口にリボンを咥えたまま答えた。

「Ｔｅｓ．、先ほど言ってたように、暫定議会と武蔵王の決定により、権限をヨシナオ様が預かっております。初めはＫ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａがその権限を預かろうとしたのですが、六護式仏蘭西出身の王が赦しませんで」

だよなあ、と結城が頷いた。

彼は何時の間にか手に治療用の旧派聖術符を一箱分持っており、それを丁寧な手つきで宗茂の足に張って行く。

そして、

「麻呂は弱者の味方だからな。元々ピレネーで三征西班牙と交渉しつつ、領民のために祖国ともやりあってたと聞いている。武蔵では皆にからかわれてばかりだけど……」

「結城様、終わりました。宗茂様の治療は私の専門なので勝手に始めないで下さい」

「おお、わりぃわりぃ、てか何これ？　三つ編のハーフアップに加えてポニーテール？　なんでそのゴツイ手でこんな曲芸出来んの？」

「Ｔｅｓ．、私は完璧主義者なので。――――――ところで結城様。今の話の続きなんですが、どうしてヨシナオ王は地方領主から武蔵に？」

？の繊細な作業に、結城は手鏡で自分の髪を見ながら答えた。

「土地を奪われたのさ。昔、三征西班牙と六護式仏蘭西が中立商業都市を作る際に、六護式仏蘭西は聖連を通じて麻呂を武蔵に派遣した。そのせいで領土の抵抗勢力は骨抜きにされ、結果は今の通りさ」

「その話なら知っている。――――――あの王様は、有事の際に、平和な中立の場を守る能と意思があると、父が言っていました。六護式仏蘭西もそれを理解して、彼を武蔵に派遣したのですね」

宗茂の言葉に、Ｊｕｄ．、と結城が答えた。

そしてその続きを、？が言った。

「そして今、それがＫ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａの手から武蔵を守ったわけですね。六護式仏蘭西からしてみれば、聖連を通じて派遣させた王が中立を保つことでＫ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａを封じたわけです」

？の説明に、結城は考えた。

確かにヨシナオの判断は、政治的に考えても武蔵にとって被害が一番少ない方法だが、それは時間稼ぎに等しい予防線に過ぎない。

Ｋ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａに権限を渡さないのと同時に、ヨシナオから何か出来るわけでもないのだ。

今頃聖連寄りの暫定評議会と揉めながら、事態がどう進展していくのかを観察しているのだろう。

……簡単に妥協したら、武蔵が前の領地の二の舞になるかもしれないしな……

そのことがきっと、ヨシナオの行動理念だと、結城は思った。

武蔵内でも、結城はヨシナオとは比較的良好な関係を築いている。
順位的には、多分東よりしただが、それでも結城はヨシナオの人格を理解しているつもりだ。

……麻呂は、きっと今でも心配しているのだろう……

そう思ったときだった。

宗茂の治療に専念していた?が、不意にこちらを向いた。
その表情は真剣味を持っており、彼女の横にいる宗茂を見ると、彼も同じ顔をしている。

どうしたのかと、結城が怪訝そうな表情を浮かべたのと同時に、?が口を開いた。

「結城様」

「?　なんだ?」

「結城様は、これからどうするおつもりですか?」

／※／

？の質問に、結城は少し考えた。

その問い掛けは、多分こういう意味だろう、と。

……さっきまでの話は、表では誰でも知っている情報だ。それを知った上で、武蔵の臨時相談役がどう動くのかを知りたいのだろう。

つまりここからは政治的な話だ。

しかし、今の状況から見ては、自分は目の前の二人とは立場が異なっているし、簡単に武蔵側の判断を教えられるわけもない。

だとしたら、

……個人的な考えしか出せないよな。

ゆえに、

「そうだなあ。とりあえず、武蔵に戻るのが先か……、あとのことは帰ってから皆と考えるさ。――――――そう言えば、オレの下船時間って何時？」

「Ｔｅｓ．、朝の九時半くらいですので、時間は余り残っていないかと。――――――結城様はホライゾン様と違って、昨夜の件で三征西班牙側で賓客扱いになっています、ゆえに下船の際にもこちらが護衛を務めます」

「そうか、じゃあ、ホライゾンに一目会うのも無理か……」

その台詞に、？が俯いた。

そしてややあってから、

「Ｔｅｓ．、申し訳ありません」

「気にするな、駄目元で言ってみただけだ」

律儀な奴だ、と結城が言いながら苦笑する。
そして、それと同時に奇妙なことだと思った。

……立場的は敵対してもおかしくないってのに、随分と馴染んでしまったものだ……

そう思いつつ、向こうも同じ考えをしていたのか、不意に？が義腕で何かを操作していた。
そして次の瞬間、？の右義腕の横から、一つの物体が宙に現れた。
それは、

「村正です。地域限定の封印処置を施しておいたので、武蔵に戻るまでは解除出来ません。上の方で解析を済ませたので、携帯許可が下りました」

「ふ～ん。サンキュー」

右の義腕で手渡された村正は、昔のように白い布で包まれていた。
それを軽く受け取り、結城はその重さを確かめるように、両手で腹

の前に掲げた。

そんな彼に対し、？はやや俯いてから口を開いた。

それは、少し戸惑うような口調で、

「結城様……。――――――結城様は、これからもその刀を使い続ける御つもりですか？」

「……？さん？」

？の問い掛けに、宗茂も疑問を上げる。

そしてそんな二人に対して、結城は視線を村正に向けたまま問い返した。

「どうしてそう聞く？」

「……研究部から聞きました。――――――村正の能力の詳細を」

?の返事に、宗茂はやや目を見開いた。

そして結城は視線を変えずに、俯いたように村正を見ている。

そして?の言葉が、静かになった治療室で続いた。

「妖刀村正。正式名称は、勢州黒断刀・妙法千子村正。神格武装の一種で、能力の発動に通常駆動と上位駆動を持っています。その内、通常駆動の能力は、刃を交わした相手の能力を一回分だけコピーする。――――――つまり、”相手の力をそのまま相手に返す力”。しかし――――――」

一息。

「妖刀魔剣は、強大な能力を持つと同時に、使用者にも同等の負担を課すことになる。――――――そして、村正の持つ、妖刀としての”呪い”は三つあります……」

一見。

「一つ目は、抜刀状態では、使用者自身の能力を除く、あらゆる術的・物理的効果を持つ加護を外部と第三者から受け付けないこと。これはつまり、村正が抜き身の状態では、仲間の援護を全く受け入れないことです。――――――二つ目は、抜刀状態、その間に受けた全ての傷の治療を不可能にする。治療は止血も含まれて降りますので、もし重傷を負ったら命に関わります。そして……」

三つ目は、

「前述の二つの呪いは悪化します。村正を使用し続け、呪いが発動するたびに、その呪いの効力が増し、最終的には刀を抜かなくとも、呪いがついて回るようになります。――――――体の概念と構造を書き換える呪いなため、神社や聖堂でもそれを消去することは出来ません。つまり――――――」

？の言葉の続きを、結城が奪うように言った。

それは、

「つまり、最終的には、不幸が付き纏い、傷も治らぬ身体になり、一人戦って死んでいくことになる、だろ？　そんなの、十二年前に知っていたさ」

「だったらどうして！？」

？の叫びに、結城は首を横に振った。

俯いた顔を上げ、そこにある表情は、何処か儚い苦笑だった。

その上で、彼は言う。

右手で、布に包まれた村正を軽く撫でながら、

「コイツは、オレと同じなのさ。折角この世に生まれたのに、何の役目も果たせぬまま、捨てられてしまった。そのまま暗闇の中で時間が過ぎるのを待って、絶望も希望もない空虚を彷徨う……」

一息。

「認めたくなかったのさ。晴朝の養父（おじ）が命を懸けて鍛え上げた刀が、聖譜記述の解釈で廃れるのを。――――――立派な父親とは言い難い人だったけど、あの人の極東を愛する気持ちだけは本物だった。オレは、それを無駄にしたくない」

一見。

「元信の馬鹿野郎も、結局何も言わずに消えちまった。今でも恨んではいるけど、それでも、アイツには親としての何かを期待していたかもな、……結局、何も解らなかったけど……」

だから、と言うように、結城は笑みを浮かべた。

苦笑とは違う、彼なりの最高の微笑で、

「悔しいだろ？　そんな結果じゃ。だから決めたのさ、オレ。――――もし、松平に……、極東に仇名す刀で、極東を守れるのなら、きっと村正（こいつ）も養父（おじ）も報われるだろうよ」

「……」

その答えに、？と宗茂は言葉を失った。

それが結城・秀朝という人間の覚悟だと、そう思ったのだ。

本多・忠勝の忠義とは違う、この男だけの、命を懸けるに値する矜持だと。

ゆえに、？は言った。

言わなければ、ならないと思った。

それは、

「だったら、証明して見て下さい」

息を吸い、

「貴方の信じる力で、貴方の国を救って見せてください」

／※／

それは、宣戦布告にも取れる一言だった。

支配関係を目前にした武蔵の臨時相談役に、その難局を乗り越えて見せろと言う発言だ。

それは暗に、Ｋ．Ｐ．Ａ．Ｉｔａｌｉａと三征西班牙を下し、ホライゾンを助け出せと言ってるのと同じだ。

その言葉に、宗茂が息を飲んだ。

……？さん。流石にそれはマズイって！

そして、対する結城が、きょとんとした顔をして、しかしややあってから、それを笑みに変えた。

そして、

「オレ、売られた喧嘩は十倍に返すタイプだよ？　ウチの守銭奴コンビも度し難いって判を押すほどのドＳなんだけど……、それでもいい？」

「ええ、構いません。ウチの宗茂様は”超”がつくほどのドＭですから、寧ろばっち来い！的な感じです。プラマイゼロです」

「ちょっと？さん。治療終わる直前にそれ言われてもシャレになら

ないですよ?!」

宗茂のツッコミに、?は真剣な表情で見返す。

唇をやや尖らせ、両の義腕を、胸の前で拳に握りながら言った。

「宗茂様は自信がないのですか？　御自分が結城様に負けるとでも？」

「そういう問題じゃないと思いますが、やれやれ……」

?の問い詰めに、宗茂は髪を掻きながら溜息を吐く。

しかたないな、と前置きしながら、彼は?と共に、視線を結城に向けた。

「?さんがそこまで言うのであれば、私も本気を出さなければなりませんね。――――――そういうことです、結城君」

「西国最強と、その妻か……どうやら十倍じゃあ足りないらしいな」

結城の言葉に、？が彼を見据える。

数瞬の沈黙の後に、彼女は立ち上がり、

「では約束ですね？　恨みっこ無しです。――――――貴方の武士としての覚悟と決意を見定めるために、この立花・？が、夫の立花・宗茂様と共に、貴方と武蔵の障害になります」

そして結城が答える。

見下す彼女に対して、村正を肩に担ぎ、

「ああ、受けて立つよ」

応えた。

そして、開戦の合図とも言えるように、治療室の扉が開いた。

そして入ってきたのは、制服を着た一人の生徒。

彼は部屋にいる三人に一礼し、

「副団長、第三特務。予定にあった、情報交換会の時間です。一旦三河に降りるため、客人である結城・秀朝様共々、準備を御願いいたします」

その言葉と同時に、結城・秀朝と立花・?の長い因縁が始まった。

第十四話～目覚めの結城～（後書き）

短めの第十四話です～。

クロです～。

準備運動的な感じで始まりましたね、ホライゾン救出篇。

色々とコメント見てきた中、クロ的に思うところがあったので、これから結城視点を増やしつつ、物語を進めて行きたいと思います。

ゆえに更新のペースが遅れるかも知れません。

ただしストーリーは原作基準（笑

あくまで趣旨は原作未読の方に楽しんでもらうためですので、あしからず。

では皆さん、また次回。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6081x/

葵三葉の渡る苦悩

2011年10月26日23時34分発行